

花を咲かせましょう

輝く羊モドキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この世界中に花を咲かせましょう。

そして花を着に皆と酒を呑みたい。

ただし風見幽香、テメーはダメだ。

# 目次

東方偉世界くbeautiful Kingdom.

一話にして最終話。あとは全部蛇足。

理沙 | 101

阿求のメモ書き | 22

長生きの秘訣は光合成だつてるに教

えたら蹴られた | 26

「点」とか「P」つてあるだろ？あれも

花だからね。 | 31

何かあつたらすぐ「また花の王か」つて

言うの止めろよ！ | 58

誰も俺の事を「風と共に歩むもの」と呼

んでくれへん．．． | 74

の席つてことでby妹紅 | 157

死力を尽くす……なんて、私らしくな

いわね。by霊夢 | 204

あの頃に戻りたいと思う気持ちは俺に

もあるよ。 | 264

時間制限は今日が終わるまで。残機は

自分の決意の分だけ。ルールはこれだけ

だ。 | 291

さて問題です。今日、何回目？

323

決意の果てに

347

お前等ちったあ協力プレイしろや・

彼女の花言葉。

過去、未来、或いは別の世界線のお話

410 376

メイドやめますか？人間やめますか？

もう歌しかうたえない

みんなー！花の王式クリスマス、はじ

まるよー！

十六夜月が沈むころに

490 477

452 421

505 花の王に学ぶモテ男の作り方

一話にして最終話。あとは全部蛇足。

青い。

青い空がある。

ふと気が付けば此処に居た。

海と陸の境界線。空と大地の境界線。

そんな場所に俺は居た。

身体を起こす。

同時に、初めて横たわっていた事に気が付いた。

まるで土から生まれ出たかのように。

まるで地に根差していたかのように。

身体が動く事自体に違和感を覚えるようで。

身体が動く事自体が当たり前前の感覚で。

海を見る。

何処までも続くその青を見て、先祖がいるようで。

陸を見る。

「何処までも続くその灰を見て、子孫がいるようで、立ち上がる。」

先程よりも近づいた空の青。煌々と輝く光。良い、気持ち。歩き出そう。

その足取りは真つすぐに。過去の青には戻らない。その足取りは淀みなく。未来の灰を突き進む。

後には、新しい命が一つ芽吹いていた。

く偉大なる大地の支配者にして花の王の手記よりく



「なによこの頭の悪そうな前書きは」

そうやって目の前の女は暖炉に我が傑作を投げ込んだ。

「おおおまえこの野郎このボケ何しやがってるごらああ!!」

全100頁にも及ぶ我が自伝が一瞬にして燃えカスにクラスチェンジしてしまった。ああ諸行無常。人間の手に掛かってしまえば創地の神すらこのざまである。

「貴男が神だなんて世も末ね。まあ、今は本当に世の末なのだけど」

「その末をどうにか出来ないかとこうしてわざわざ直談判しに来てるんじゃねえか何とかしやがれください!」

「無理ね」

「高々1000も生きてねえ小娘にこうして頭を下げてやってる上にこの大地に生命をどれだけ与えたかを分つつかりやすいように纏めてきたっていうのに返す言葉が『無理ね』の3文字だとお!!」

「貴男煩いわ」

そう言つて女は耳を塞ぐ。大地の上に生きる生命のクセに地神に向かつて何たる態度か。

「妖精並の地神（爆笑）」

「神に対する態度じゃねえよなああ!!」

「はいはい。おーいだいなるかみよーしずまりましたまえーおさまりましたまえー」

「なお荒ぶるわ!!」

「(つち) じゃあどうすればいいのよ？」

「舌打ち!? お前今舌打ちしたよな!? お前マジで神罰的なサムシング下すぞ!」

「下しやいいじゃない。どーぞ(こ)勝手に」

「ぐ、ぬぬ……」

今の俺には目の前の女に神罰を下す処か殴る蹴る等の行動すらできない。

なんとかって言った紐に縛られた俺はドカリと座布団に座り、目の前の女を睨み付けた。

そうしながら俺は今までの出来事を思い返す。

小さな人間たちの集落が気が付けば巨大都市に変わって幾星霜。都市はなお肥大し続け、世界の一枚岩たる大陸パンゲアの大半を侵略し支配地とした。

だが人間たちは、原生生物の逆襲を受けて数を大きく減らした。原生生物は人間の味を覚え、魂を効率的に喰らうように進化した。

巨大都市が原生生物の狩り場と化するのに時間はそう掛からなかった。

しかし人間たちもただ数を減らしていくだけでは無かった。そもそも、この大陸パンゲアすら人間たちにとって狭すぎたのだろう。あつさりと都市を捨て、原生生物が生む『穢れ』なる存在の無い月に移住する事を決めた。



月に『穢れ』が来ない様に、大地の全てを焼き払う兵器を置き土産にして。俺がそれを知ったのは偶然だった。

そもそも俺は気の向くままに花を育てていただけの存在だった。

原生生物の様に何かを襲い、ソレを喰らう訳でもなく。

妖精の様にその地にとどまり続ける訳でもなく。

人間の様に短い時間の中で生まれ死に朽ちる訳でもなく。

神の様に生命の信仰で存在を保っているでもなく。

永い、永い時をただ花を育ててはパンゲア中を移ろっていた。

『神』に日輪の花を奪われるまでは……

日輪の花は、我が力を振り絞り創り出した傑作だ。

その名の通り、天空に輝き続ける日の珠の如き生命力を持ち周囲に優しくも煌々とし

たエネルギーを振りまきながら成長する万物の母であった。

その身許には動物も、植物も、原生生物すら身を寄せて久遠の時を穏やかに過ごす。

欲の塊である人間の信仰から生まれた神を除いて。

神は自らを信仰する人間たちの為だけに安寧の地から日輪の花を奪い去り、かの地で

穏やかに過ごしていた全てを日輪の花の力で焼き付くした。

俺がその事を知ったのは遙か後、パンゲアの果てで黄泉の花を育てていた時に花の声

が聞こえるようになってからだった。

よもや日輪の花に手を出す者が現れるなど思わなかった俺は育てていた黄泉の花を置き、日輪の花があつた場所に駆けた。

其処に在つたのは、神が言う『穢れ』を焼き付くす巨大な兵器と、都市に住んでいた筈の神々が集う『国』だった。

「そうして兵器と化した日輪の花を取り戻すべく神に変装して潜入した方がいいが花に話しかける寂しい女に見つかり今に至る、と」

「誰が寂しい女よ。言っておくけど貴男が『地浄草』と同じ力の波動を持っているから生かしてただけであつて、解析が済めば他の穢れと同じ未来よ。分かっているの?」

「ふん、そう言つてなんだかんだで助けてくれるんだろ?」

「はあ?」

「花が好きなら奴に悪い奴は居ねえからな。例え寂しい奴でも」

「……何処まで呑気な奴なんだか。呆れて物も言えないとはこの事ね」

「ところでシャレのつもりか分かんが『地浄草』ってクソダセエネーミングセンスだな」

「自己紹介のつもりで馬鹿らしい自伝(笑)渡す方が酷いセンスだと思ふのだけど?」

「和解の始まりは相互理解からだよ友達いないネキ」

「弓の的になりたいのなら素直にそう言いなさい」

即座に発射される矢。一般兵が撃つ銃弾以上の威力を持ったソレは、俺に当たる直前に桜の花の様にばらばらと散っていった。

否、より正確に言うのなら『矢が桜の花になつて』散っていった。

「はあ、やつぱりまるで理解出来ない現象ね。霊力でも、神力でもないナニカの力。この頭脳をもつてしても解析不能な事があるなんて腹立たしいわ」

「とりあえず当たったら死ぬんでヤメテネ！」

「死んでもすぐ復活するんでしよう？妖精みたいに」

「しねえよ！死んだら死ぬわ！」

「で、そもそも貴男何でこんな所に来たの？こんな神都のド真ん中の、それもセキュリティ万全の私の研究所に潜り込むなんて神でも不可能だと思っていたのだけど」

「今更それ聞くか普通……とりあえず日輪の花を返してくれ。あれは穢れなんつーもんを焼き払うために作り出したわけじゃねえんだ」

「無理ね。地浄草……貴男の言う日輪の花は私達の計画に必要な不可欠なモノよ」

「ソレの所為でお前等人間と神達が地上の生物全てと争うことになつてもか？」

「……もう関係なくなるわ。既に計画は最終段階。明日、この神都の住人が月に向けて

飛び立った瞬間に地上は穢れと共に消え去るのだから」

「……ここじやない都市に住む人間を見捨てるのか？」

「彼らは既に穢れきっている。月に穢れを持ち込むわけにはいかないの」

「ふざける。お前等の言う穢れってモンが俺には解らん。そいつは同族を殺してでも消さなきゃならねえモンなのか？ そいつはこの地上で平穩無事に生きている世界を壊してでも消さなきゃならねえモンなのか？」

「……ッ！」

「原生生物たちは生きるために他を殺す。人間たちは死にたくないから他を殺す。似てるようで違う、だが俺が思うに正しいのは「判ってるわよそんな事はッ!!」

「貴男の様な永い時間を生きる者には分からないでしょうね！ 寿命が有る生命の気持ちが一！ 親しい人ともう会話出来ない恐怖が一！ 暖かかった手が冷たく変わっていく感覚がッ！」

「死にたくないッ！ 死なせたくないッツ!!」

「いつか死ぬ、そんな絶望から逃れられるんだったら何を犠牲にしても良いわ！ それで皆が生きられるのならッ！」

「たとえそれが絶対に間違っている事だとしても!!」

「……」

「……花はな、そりゃあ短い一生だよ。それこそ人間なんかと比べるまでもなくな。」

「……？」

「芽吹いて、莖が育ち、葉を広げ、蕾を作り、花を咲かせ、そして枯れ朽ちる。季節が廻りきる前に消えゆく物が殆どだ。日輪の花の様に何十年も生きて花を咲かせ続けるヤツなんて片手で数えるほどしかない。」

「それでも花は咲くんのだ。俺からすりゃ須臾の間、ただ一時咲くんのだ。何故だか分かるか？」

「……」

「『次へ繋ぐ為』その為に咲くんのだ」

「花は実を結び、種を残して朽ちていく。そしてその種が芽吹き、育ち、花を咲かせ、また実を結ぶ。その須臾のサイクルは永遠に繋がるんだ。だから花は誇り高く咲く。何よりも美しく咲き誇る。」

「それが次の世代へ繋がるのだから。」

「人間、お前達が死んだら、何も残らないのか？ 違うだろう。死んでも、子孫は残る。思いは残る。」

「死んだものを土に還せば、そこから新たに草花が生まれる。草花は草食動物に食べられ、草食動物は肉食動物に食べられ、肉食動物は他の肉食動物に食べられ、そして死ん

「だらまた土に還る。」

「延々と続くサイクルは、死んだらそれまでじゃないって事を教えてくれる。」

「人間、死ぬって事は避けなくてはならない事じゃない。死んでも終わりじゃない、別の何かに変わるだけの身近なモノなんだ。」

「……見解の相違ね。私達にとって『死』は忌まわしく、そしてもはや避けられる程度のモノになるのよ。『死ねば終わり』なの」

「……人間、お前も花は好きだろう。その鉢植えにある小さな花に向ける愛情を、他の地上の花々に向けることは出来ないか……？」

「出来ないわ。この花と他の花は全く違う物よ。それこそ地浄草と他の花と同じくらいに」

「……」

「明日、私達は月に向けて飛び立ち、地上の全ては焼き払われるわ。貴方の言う日輪の花の力を利用してね」

「その焼き払われる存在の中には、限られた命を仲間と共に生きていく者もいるはずだ。いつか死ぬ。それでもただ生き物として生きていく者を焼き払ってでも「諄いわ！もう計画は最終段階！永遠の生が目の前にあるのよ！なら……なら犠牲を出してでもつかみ取るだけよ!!」

「……そうかよ。花を愛する者同士理解し合えると思っただがなあ」

「貴男が寿命に囚われない存在の時点で理解し合えないわ。貴男と私は全く違う存在なんだから」

「お互いが理解し合おうとすれば相手が誰だろうが不可能じゃねえな」

「詭弁よ。そんなもの」

「そうかい、お前がそう思ってるうちはそうなんだろうよ。お前の中ではな」

「そして、永遠なんてモノに幻想抱いてるお前は何時か後悔する」

「地上に咲く我が子等共々燃やし尽くすというのなら」

「花を愛する者が間違えた道を往くというのなら」

「俺は花の王として守らなければならない義務がある!!」

「今の貴男に何が出来るといふの？腕も、脚もフェムトファイバーで縛られている上この部屋は私以外の霊力や神力を抑える結果が張ってあるのよ。何にせよ今はおとなしく捕まっけてくれないかしら？」

『月で俺を解剖するその時まで』か？それでおとなしくしている奴が居る訳ねえだろ。それと、今の俺に何が出来るかだつて？」

「何も出来ねえ!!」

「ええ……貴男……あれだけ啖呵切つて……ええ……」

「俺が出来る事は花を育み見守る事だけだ。戦闘なんて不得意なんてもんじゃねえし、空も飛ぶどころか光弾一つまともに飛ばせん」

「……ならおとなしくしてなさい。貴男自身には穢れが無いみたいだし、月に連れていってもそれなりの待遇での生活を保障するわ」

「お断りだね。大地の支配者を空に引き摺り出すなんて人間には無理だ。神にも無理だ。勿論妖精にも、原生生物にも不可能だ。この大地が全て海に沈まない限り、俺は永遠に地上に居る！」

大地が揺れる

「っ!?!この揺れは……!?!」

「俺は花を生み育てるだけだ。永い事続けてきたお陰か、花と意思疎通出来るようになった」

「有り得ないわ!この部屋で神力や霊力の類を使えないハズなのに!どうやってこんな地震を起こせるのよ!?!」

「特別な力なんて要らない。鳥の群れが一齐に飛び立てば空鳴りが起きるように、原生生物の群れが一齐に駆け出せば地鳴りが起きるように、花が一齐に此処に向かって移動しているだけだ」

「花……が……?それこそ有り得ないわ!花が動く訳が無い!!それこそ神の偉業でしか



……」

「動くさ、花も生きているんだ。俺がやれることはその手助けみたいな事だ」

揺れは更に大きくなっていく

「くっ!?花が来るといふのなら焼くまでよ!」

「おいおい、花に火をつけるとか鬼畜の所業かよ」

すると突然別の人間の声が出た。

『先生、緊急事態です!!』

「分かってるわ!今すぐ対植物兵器を『神都に原生生物共が大量に向かってきてます!!』  
何ですって!?映像を繋ぎなさい、早く!!」

今まで只の壁だった所が切り替わり、恐らく外だと思われる場所を映し出した。

其処には確かに地平線を埋め尽くすほどの原生生物の群れが此方に向かって来ているのが映っていた。

「つ……都市の第二防護結界を発動しなさい!」

『し、しかしそれでは明日のロケット用のエネルギーが!』

「このままなら明日が来る前に滅びるわよ!早くしなさい!死にたいの!?!」

『は、はいいいい!!』

ブツンと音を立てて映像が途切れ、通信は終了した。

「……ふ、フフフ。やってくれたわね貴男。自分を囿に、まさかこの神都を攻め滅ぼすつもりなんて思ってもみななかったわ。まさかこの私が出し抜かれるなんて……」

「……」

「でも残念だったわね。第二防護結界が発動すればもはや神都に原生生物共が入る事は叶わないわ。そして、時間は私達人間側の味方よ。5日もあればロケット用のエネルギーは再補填される。第二防護結界はひと月は持つでしょう。その間、悠々と私達は月へ飛ぶ準備をさせてもらおうわ」

「……そうか」

「……それと、貴男の様な不穏分子には消えてもらおうわ。貴男にあらゆる攻撃が効かなくとも、何とかする手立てはあるもの」

「一つ」

「……?」

「一つ、大きな勘違いをしている」

「……何よ。私が何を勘違いしてるって言うの?」

「なんか俺、一連の流れの首謀者みたいに扱われてるけど全くそんな事無いからね?むしろ被害者側じゃね俺」

「……はあ？」

「いやいや、俺言ったじゃん。俺が出来る事なんて花を育てる事だけだから。あんな花の美しさを理解出来ねえようなナマモノ共を俺がドーコー出来る訳ねえじゃん。アレだからね。原生生物ってボカして言ってるけど要はアレ恐竜だからね。なんとかザウルス的なアレだからね。恐竜相手に話し通じる訳ねえだろ。というかそもそも話を理解できる脳みそ持つてんのかあいつ等。絶対ないだろ脳みそ。あいつ等アレだよ。今日と明日の区別がつく様な上等な判断できやしねーから。ドーせあらゆる物は『仲間』『食物』『食えない物』のどれかにしか分類出来ないアレだから絶対」

「ちよ、何よ貴男急にキヤラ変わり過ぎじやない？」

「ほら。そりゃあねえ、俺も大人だし。俺が育てた花達が草食の恐竜共に食われるのはまあしょうがないかなーとは思うよ？でも最近はいつ等俺が態々面倒見た花畑から俺が離れた瞬間を狙って食い荒らしに来るわけよ。これは流石の俺でも腹立つわけよ。激おこポンポン丸なわけよ。」

「……え、私今何聞かされてるのコレ。愚痴？私より何倍も生きてるヤツの愚痴聞かされてるの？」

「草食恐竜が花畑食い荒らすんならともかく、肉食恐竜まで俺の花畑荒らすたあどうい

う了見なのかねえほんと。あいつ等花畑を見かけたら態々踏み荒らしていくんだぞ？  
何度その場でぶっコロコロしてやろうと思つた事か。何度生きながら花の養分にして  
やろうかと思つた事か」

「いや知らないわよそんな事……何なの貴男本当に」

「うるせええええええ!!! 大体お前等人間も人間だよなあ!!! お前等が好き勝手に都市を広  
げるせいで住処を追われたクソ恐竜共が俺の花畑を荒らしに来るんだよオオオ!!! 何な  
んだよお前等マジで!? 繁殖力だけは一級品だよなオイ!!! 股間に脳みそ付いてんのか!!!  
ネズミより増えてるってレベルじゃねえんだよオオオ!!!」

「知らないわよ……私が生まれた時には既にパンゲアの大半分が都市だったんだから」

「碌に管理出来もしねえのに自分ン家広げてんじゃねえよ!!! ゴキブリの如く恐竜共が巢  
くつてるじゃねえか!!! 何なんだよ人間マジで! お前等何がしたいのかさっぱり解かん  
ねえんだけどー!」

「だから知らないってば……それにそもそも私の生まれはこの神都だし」

「しかもお前等自分ン家広げるだけ広げておいて、『管理出来なくなった上ゴキブリ共が  
増えたのでゴキブリが居ない所に引つ越します。ついでに不老不死ゲツト♪』って  
かア!? ザケンなボケエ!! 引つ越す前にバルサン焚いておくのがマナーだろうがあ!!!」  
「バルサンって何!? 貴男原生生物をゴキブリと同列に扱つてるの!?!」

「ジャカアシャア!! あんなん世界崩壊してもしぶとく生き残ってそんなナマモノなんてゴキブリと同列だんももん!! あーもうキレた。切れました。お兄さんね、もうム力着火ファイヤーしました。この地上をカム着火インフェルノオオオウします」

「ちよ、ちよつと落ち着きなさいよ。貴男自分で何言ってるかももう分かってないでしよう?」

「知った事じゃあねえんだよ!! ああそうとも!! こんな世界なんて知った事がオラアア!!」

B e e p!! B e e p!!

《警告、地浄草管理ルーム内の温度が危険域に突入しました。》

B e e p!! B e e p!!

「ちよ、オイイイイイ!! 貴男、何をしたアアアア!!」

「フハハハハ!! 言っただろ! 花が一齐に此方に移動していると! 中には俺が力を込めて生み出した超凶暴な火吹き花や溶岩花、爆熱花があっただけの事! そしてソレらを日輪の花の救助に向かわせた!!」

「なんてモン造りだしてんだアアア!! 馬鹿でしょ馬鹿だな馬鹿野郎!! 地浄草の管理ルームにはこの神都のエネルギー全てを賄う3重融合炉と直結のエネルギーパイプが張り巡らされてるのよ!?! 万が一暴走したら地浄草とのエネルギーと相まってパンゲア

全てを消し飛ばしてもお釣りが出るわよ!! そんなところに如何にも危険なモノ送り込むなんて」

Beep!! Beep!!

《地浄草のエネルギの逆流を確認。1番融合炉制御不能。》

Beep!! Beep!!

「ギヤアアア!! 終わる!! 人類史どころか地球史が終わる!! どうしてくれんのよばかあああ!!」

《2番融合炉制御不能。》

「……」

「結果オーライ!!」

「馬鹿ヤロオオオオオオオオ!!」

《3番融合炉制御不能。間もなく自爆します》

...

...

...

\*チヨドーン\*



く 永遠亭く

「そう、それが俺とえーりんとの出会いだった……」

「えええええ……」

俺の昔話に4人の少女が聞き入っている。

「なんかシレつと地球滅んでるウサ……」

一人は薄桃色のワンピースを身に纏った黒髪の少女。頭には白い兔耳が揺れている。

「いやいや、嘘でしょ？嘘ですよね師匠!？」

一人はブレザーを身に纏った薄紫の長髪をした少うどんげ。赤い目が特徴的。

「まあ、あの時は月夜見様の秘術でどうにかなったのよねえ（遠い目）」「月夜見様すげえ」

一人は青と赤のツートンカラーのよく分からない服を纏った銀髪の少女。俺がおにーさんな以上彼女は少女だ。（断言）

「永琳にも子供っぽい時代もあったのね」

一人はもはや洋服なんだか和服なんだかわからん妙ちきりんな恰好をした長い黒髪の少女。これといった特徴は……無い（断言）

「貴男に妙ちきりんだなんて言われたくはないわよ」

「と言うかアンタ、地上の花を守るって言っておきながら地上消し飛ばしたウサね……」

「有言実行、花はちゃんと守ったぞ。なんかこう……ぶわわくって」

「永生きの癖に語彙力皆無過ぎて悲しいわね」

「うわあ……」

「助けてえーりん年下の少女が俺の心を責め立てる」

「貴男は何時も若々しくていいわねえ」

「……コレがバブみって奴か」↑推定ン億歳。幻想郷最長寿。

「待ちなさい。何かもう色々おかしいわよ」

「おかしいのはそのつけ耳ではないだろうか？」

「いや、おかしいのは貴男の頭よ。あとこれは本物だから」

「本物のつけ耳？うわあ……ちよつとカグヤさん？お宅のペット随分猟奇的なシユミしてるじゃないの？」

「駄目じゃない鈴仙そんな事しちや。『めっ』よ？『めっ！』」



「(ええ、何で私が悪い事になつてるの?)」

ここは忘れられた者達が集う楽園、幻想郷。

パンゲアよりも遙かに狭いが、一癖も二癖もある此処の住人達はパンゲア以上に見えて飽きない。

そんな世界を歩き、花を育て回る俺は変わり者の中の変わり者である。

いずれ幻想郷中に花を咲かせ、多くの花愛好家達と一緒に呑みたいと思う。

ただし風見優香、テメーはダメだ。

## 阿求のメモ書き

紙切れが落ちている・・・

未分類

<幻想の最長老>

偉大なる大地の支配者にして花の王 風と共に歩むもの (※1)

能力 あらゆる花を育てる程度の能力? (※2)

危険度 高

人間友好度 低 (※3)

主な活動場所 いかなる場所にも

神でも妖怪でも妖精でもないが、性質的には妖精に最も近いとされる。(※4) 幻想郷の賢者の一人であり、最も出会いやすい相手である。幻想郷に住まうどの神や妖怪よりも遙かに長生きであると言われるが、真相は定かではない。(※5)

・ 性格



背が高く、常に温和な表情を浮かべている所から優しいお兄さんといった雰囲気を感じるだろう。しかしそれは全くの誤りである。超優しいお兄さんである。

幻想郷一の花好きと公言し、同じ花好きには気さくで、相手を思いやる優しい気を見せるが、そうでない相手には良く言えばノリの良い、悪く言えば傍若無人な態度を見せるどころか、真剣な空気を意図的にぶち壊したり、逆に急に真剣な空気にしたりと幻想郷の住人をして自由奔放と言わしめる。(※6)

彼の花畑を荒らす者には一切の容赦が無く、長く生きてだけの実力をもって排除に当たる。そこに神・妖怪・人間の区別はない。

同じ花を愛する者である風見優香を何故か嫌っている。(※7) あいつが悪い

#### ・能力

彼の力は既知の草花を育てるだけでなく、どの図鑑にも載っていない未知の草花も育てることが出来るらしく、幻想郷が出来る遥か昔から様々な花を育て、世界中(※8)にその種子を広げたいらしい。

そして花と意思疎通が出来るらしく、時折花と会話してその日起きた出来事等の情報交換している。(※9)

#### ・目撃報告例

・魔法の森の中でキノコ妖怪に花を生やしていたぜ。(白黒魔女)

花に危害を加えた者に対する制裁であると同時に新しい花の品種を創りだしていたのだろう。

・里の酒屋に酒を売っていた。(匿名)

彼ご自慢の花酒だろう。呑兵衛達がその後こそって酒屋に押し掛けたのは想像に難くない。

・天狗達相手に大立ち回りしました。(守谷の巫女)

彼が気まぐれに妖怪の山に向かえば日常茶飯事である。

・うちの神社の敷地いっぱいにとりカブトを咲かせるのはやめなさい。せめて食べられるのにして。(博麗の巫女)

そういう問題ではないと思う。巫女はしっかり花を育てなさいよ

・花を植えて地獄にまで来ないでください。(閻魔)

彼曰く「元あつた場所に戻しただけ」

黄泉の花を咲かせた場所に戻しただけで滅茶苦茶怒られる。理不尽。

・対策

彼に対する根本的な対策は無いに等しいが、もし出会ったならば花の話題を出すと良いだろう。彼に顔を覚えてもらえれば、万が一の危機的状况に助けに来ってくれるかもしれない。

なんにせよ、幻想郷で長生きしたいのならば無暗に花を傷つける行為は絶対に避けるべきである。(※10)

- ※1 驚くべきことに自称である。
- ※2 詳細は分からない。
- ※3 花好きならば極高。
- ※4 妖怪の賢者談。
- ※5 長生きしている神妖は女性が多いのでこの話題に触れられない。
- ※6 殆どが口をそろえて言う。
- ※7 何があつたのかは当人のみぞ知る。
- ※8 魔界・冥界・地獄・月・海の底にまで及ぶらしい。
- ※9 傍から見れば只の寂しいおっさんである。お兄さんな？
- ※10 花の妖怪、風見優香まで怒らせる危険が極めて高い。

原本に勝手に書き加えないでください。次やったら怒りますよ。あきゅーん書き加えんって言ってるんだろ。書いてるんだよなあ

## 長生きの秘訣は光合成だつてゐに教えたら蹴られた

迷いの竹林と呼ばれている場所をふらふらと歩き回る男が一人。

俺だ。

ああ竹。なんと美しく真つすぐ育つ花なのだろうか。

花じゃないじゃんと思つたあなた。竹は花ですよ。滅多に咲かないけど。滅多というか1000年近く咲かないけど。

だが、竹の花が咲くときは全ての竹が同じタイミングで花を咲かすからそれはそれが見ものなのだ。そういう風につた斐があると云う物だ。

特に、この竹林の竹は俺自らが手塩にかけて育てた竹だから美しく咲く。変に力を込め過ぎたせいで地脈がおかしくなつてるけど、まあ世界全体で見たら誤差だよ誤差。

少し前に、竹の花が見たいからちよつと気合い入れて咲かせたらやばい事になった。当時の博麗の巫女に封印されかけたのはいい思い出としておこう。ただしネズミは赦さん。

さて、なんで今迷いの竹林に居るのかというちよつとした野暮用である。どんな野暮用かという少し前に月の何かがどうたらこうたらと幻想郷中の花が騒がしかった

ので気まぐれに月まで小旅行に出かける事にした。まあ、案の定というかこの地上から離れると怠くなるからすぐ帰ってきたけど。ついでに表の月環境でも育つ花を幾つか植えてきたり、あとへ、へ……へカトンケイルとかいう新たな花愛好家と友達になつたりしたな。

そう、それで月からさあ帰ろうと思つた時に『そーいや永琳達は月に住んでたな』と思ひ出し、『あ、八雲も月に行つたつて言つてたな』と考えた結果、奴らにお土産でも持つて行こうと思つたのだ。そこで月の都内を歩き回りながら何を持つて行こうかなと考えていたのだ。俺は何とかつて言つた神……神かアレ？ 変な奴に追いかけれながら月の都まんじゅうか月餅か蓬萊の珠の枝かその辺の石のどれにしようかと悩み消え物の方が邪魔にならないだろうとかいやどうせ家広いし置く所なんて幾らでもあるから形に残る物の方が良いとか考えてイミテーションにしようか色々考察し……え、長い？

まあ結局永琳にはその辺にあつた邸宅に侵入し、花と交換で持つて来た酒を。

輝夜には少し前、態々男を使つてまで探していたらしい蓬萊の珠の枝を2く30本程。

他のウサギ共には月火草餅げっかくさもちを。

八雲には石でいいや。

それとついでに八雲の式に合いそうな簪を見繕つて地上に帰つてきたのが昨日。そ

の足で八雲んトコに行き、お土産を渡してきた。八雲の嬉しそうに引き攣つた顔をみてこつちまで嬉しくなつたぜ。

そして今日。永遠亭に行つてきてお土産を渡してきた帰りである。永遠亭にお土産を届けたらお土産を貰つた。何を（略）

「……お？ 白い長髪、赤モンペ。あれに見えるはモコモコではないか」

「誰がモコモコだよ。妹紅だつつの」

彼女は藤原モコモコ「聞けよ」花愛好家の一人であり、何をトチ狂つたか迷いの竹林を根城にしている大変奇特な人間である。きつと竹の花が開花する瞬間を見たいに違いない。

「なにをトチ狂つたか月まで行つてきたアンタが言うセリフじゃないね」

「それほどでもない」「褒めてねえよ」

口は悪いが俺は知つている。ワザと汚い口調を使つて気を引こうとしているのだ。

「止める馬鹿」

モコモコと始めて出会つたのは幻想郷のげの字くらいはあつた時の事。どつかの都中を花だらけにしていた最中に出会つたのがきつかけだった。あれからまあ色々であつてあにうえしやまあにうえしやまと慕つてき「止めるつて言つてんだろ!!」

そりやあもうあにうえしやまと結婚するつて「あああああ!!」



今では若白髪が目立つくらいに苦勞しているモコモコ。さぞ苦勞を積み重ねているに違いない。

「……私の苦勞の発端はだいたいアンタが切っ掛けだったんだけど？あと妹紅だつての」

「昔みたいに兄上様つて言つてくれれば考える」

「クツソ……これほど過去を消し去りたいと思つたのは初めてだ」

「はて、思えば俺の事を兄上様つて呼ばなくなつたのはなんかの薬を飲んだ時からだつたっけか」

「蓬萊の薬だよ馬鹿……アンタが作つたやつじゃないか……」

「え？」

「え？」

「なにそれ初耳学」

「え、いやだつて輝夜の奴がそう言つてて」

「薬草ならともかく、薬なんて俺が作れると思つてんの？」

「そういえば料理すらマトモなの出来ないアンタが薬なんて物作れる訳無かつたわ」

「泣きそう」

「いや……なんでアンタ焼く、煮るところか切るすら出来ないのよ……不器用つてレベ

ルじゃないわ」

「ほら俺つて大地の王じゃん？料理なんて勝手に献上されるもんだし」

「勝手につまみ食いの間違いでしょ。なによ腹が減つたら光合成つて。意味分らない上に人間にできるかそんなん」

「えーイマドキ葉緑素もないのー？だつさー」

「フジヤマヴォルケイ」オーケー話し合おう。火はアカン」

その後、なんだかんだ駄弁りながら夜雀の屋台に流れ込んだ俺等は積もる話を崩すため、永遠亭で貰つたお土産を食いながら呑んでいた。八目鰻食えよ。

夜明けまで呑んでいたら風見幽香が襲撃してきたので妹紅を置いて逃げた。妹紅と夜雀には悪いが犠牲になつて貰つた。これも全部花妖怪つてヤツが悪いんだ。

ツケ払いが効く上に風見優香からの盾になつてくれる。夜雀つて滅茶苦茶良い奴だな！

「点」とか「P」ってあるだろ？あれも花だからね。

（紅霧異変）

「霊夢ー霊夢ー！出番だ働けぐーたら巫女オラア!!」

「あ“ あ“ ん“ 朝から煩いのよゴミクス無能クソオヤジ！花粉臭ハンパないんだけど  
!?!」

「黙れ反抗期怠惰脇出し巫女！外見ろボケエ異変じゃ異変！」

「脇出してるのは私の趣味じゃないですー！森近さんの趣味ですー！そういうアンタは  
若作り花塗れ男じゃない！人の事言えた義理!?!」

「若作りじゃないですー！いつまでも若いだけですー！心はいつでも旧石器時代ですー  
!!」

「……いや古くない？しかも旧って付いてるわよ……」

「あらやだ本当。やだねー、歳は取りたくないもんだぜ全く」

「はあー……じゃ、ご飯の仕度するから」

「おー」

「いやいや、お前等朝からテンションの上げ下げ激しすぎだぜ……」

「あら、魔理沙じゃない」

「よー白黒の………あー………えーっと………アリサ!!」

「マリサだぜ。てか霊夢がさっき名前言っただろ」

「あれ、そうだっけか」

「それで?何でアンタ朝から来てんの?」

「おいおい、外見ろよ。異変だぜ?だからこの魔理沙様の力を貸してやろうと思つてな」

「要らないわ」

「そういうなつて。きつと役に立つぜ?」

「あー………足手纏いは要らないつて意味なんだけど」

「辛辣!この巫女辛辣!なんて奴だ育ての親の顔が見てみたいぜ!」

「右見なさい」「It's ME!!」

「うわうぜえ。可哀想にこんな奴でも生きてるのか」

「うわ辛辣!この魔女辛辣!なんて奴だコイツを育てた先生の顔が見てみたいぜ!」

「鏡なら帽子に入つてゐるぜ?」

「わあイケメン。きつとこの男は数々の素晴らしい生徒を育て上げたに違いない!」

「……ハッ!」「鼻で笑いおつた」

◇

「で、だ。本当にこの異変解決に行くのかマリア？」

「マリサだけ、誰が聖女だ。勿論だろ？アンタが言ったじゃないか、『誰かの協力ありきでも、異変を解決できるようなら里の外で暮らす事を認める』ってな」

「ありやあ里の外で最低限以上の自分を守る力を持つてればそれで良いって意味だったんだがなあ。そもそも今更俺の許可なんて要らないだろマイナー」

「マリサだけ、誰が無名だ。まあそれでも、だ。私は、アンタに認められる。それで初めてスタートラインに立つんだ。……そんな気がするつてだけ」

「そうかい。ならパパツと行って解決してくれや。こう霧が濃いと花に悪影響だからな。頼んだぜガイア」

「アンタは二言目には花、花だな。変わんないというか成長してないというか。あとマリサだけ」

「そりやもう……ねえ？花は俺みたいなのあるし？」

「はいはい、お喋りはその辺にしてご飯よご飯。運ぶの手伝いなさい」

「はい霊夢カッチャマ」

「誰がカッチャマよ誰が。アンタももう少し年上らしい事しなさいよ」

「いやあ今の霊夢は控えめに行ってもお母さんって感じだけ？」

「うーん、霊夢が小さかった時の事をまるで昨日のように覚えてるなあ。あの頃はそ

りやあもうゴマ粒かってくくらい小さくて」

「あーそーうんすごいわねー」

「なんて棒読み。そこは『小さい時の話すんな!』ってキレル所だろ」

「ちいさいときはなしすんな。これで良いでしょ?ほらご飯よ」

「霊夢が成長したようで嬉しいよ俺は……」

「霊夢、コイツあしらうの上手だな」

「……じゃ、ご飯も食べたしさつきと行ってくるわ」

「お、じゃ私もついてくぜ」

「後片付けはしとくよ。じゃ、いてらー」

「軽いなおい」

「……あ、ちよい待ち霊夢一行」

「何よ」「二行って一括りにされたぜ……」

「霊夢、お前がこの異変を解決出来たらなら、俺はお前を一人前の博麗の巫女として認め  
るぞ」

「っ……そう」

「それと……魔理沙、怪我すんなよ?」

「!.....あつたりまえだぜ!!」

「じゃー行つてこい。ま、あんまり解決すんのが遅くなるんだつたら俺が解決しちまうぞっ。」

「そりやヤベエな。アンタが動くとかそれこそ異変だぜ!」

「勘弁してよね。アンタを退治するなんて面倒なんてもんじゃないわ」



く春雪異変く

「雪荒ぶ銀世界に場違いな館は此処かア!!」

「はあえへ!?!ね、寝てませんよ私は!?!寝てたんじやなくて雪の中に春を感じようとしてただけですよ!?!」

「.....」

「.....」

「誰だお前!?!」

「いや此方の台詞ですよね!? 何ですか貴男は……この紅魔館に何の御用で?」

「少なくとも眠っている門番を叩き起こしに来ただけじゃねえわな」

「むしろそれだけの用事だったら困惑なんてもんじゃないんですが……」

「とりあえず辺り一面真っ白しろすけなのに真っ赤な館があったからつい襲撃を仕掛けよう」と

「理不尽!? ついで襲撃掛けられてるの!」

「あとこのままだと春の花が死滅しそうだからこの異変の黒幕ぶつ飛ばす前にちよつと八つ当たりを……」

「追い理不尽!! 八つ当たりで何をしてるんですか貴男!」

「いやあね? どうもこの前の紅い霧の所為で花の一部が枯れちゃってねえ……思い出したら腹立って来たんで」

「っ、ということとは貴男が噂の……それで、主犯たるここの主にケジメでもつけさせよう」と?」

「そうだな。この異変を何とかする前にちよつとばかしオハナシでもしようか」

「……それを許すとお思いで?」

「ふん、許す? 誰にモノを言ってるんだお前。お前の前にいるのは偉大なる大地の支配者にして花の王だぞ?」



「貴男が誰であろうと関係ない。この門を押し通るといふのなら、私を倒してからにしないさー！」

◇

「あら、咲夜じゃない」

「咲夜か、珍しいな。お前も異変解決か？」

「ええ。紅魔館の燃料が尽きそうになっちゃったからね」

「……」

「……」

「………何よ」

「なんでもないわ(ぜ)」

「(頭に花咲いてる……)」

「(絶対あのアホがなんかしたわね)」

「しゃくやー!しゃくやー!頭に変な花があゝ!」

「クシユン!クシユン!ク……ゲホツゴホツ!!ヒュー……カヒュー……」

「パチュリー様アアア!?喘息の上に花粉症の症状まで……どうすればいいんですかチク

シヨー!!」

「ア“ア“ア“ア“ 目が痒いイイイイ!!!破壊の目も痒いイイイイ!!!」

「紅魔館とか言ったなこの館。今日から花魔館に変えてやるべ」

「うおおおおお止めろくくださいいいいい!!!」

「メイド妖精隊!このクサレ植物を片っ端から焼き払え!!」

「有りったけの火を付けろ!根っこの一片まで残すなああ!!!」

「咲夜さああああん!!!早く……早く異変解決してええええ!!!」



く三日置きの百鬼夜行く

「よお、探したよ花の。こんな辺鄙な所でなにしてんだ?」

「どう見ても花を育ててるんだが・・お前には家でも建ててるように見えるのか?」

「変わりやしないじゃないか。アンタは花が家みたいなものだって昔言っただろ?」

「言っただか?」

「言ったださ」

「そうか……それで？俺になんのようだ？えーと、あー……」

「……」

「いやちよつと待て、思い出す。えーつと……その角は……鬼、かあ？で、鬼のちつこいのつつたら……」

「……おい」

「いやまてまて、今喉まで出かかつてるから。……あ、思い出した！ユウギカセンだろー」

「全然違う！伊吹だ！イ・ブ・キ・ス・イ・カ！」

「イブキスイカ？誰だ？」

「鬼の四天王！山の支配者！お前の作った花酒を奪い合つただろー」

「いや、昔は花酒の奪い合いとか茶飯事だし。八雲とか八雲とか八雲とか」

「ああ……」

「あ、思い出した！お前あれか！俺が作った靄花食つた阿呆か！」

「食わされたんだよお前に！後お前だけには阿呆と呼ばれたくない！」

「オーオー思い出した思い出した。頭に花咲かせてたし、酒と醤油の区別つかないし、鬼喰花に半分食われてた伊吹かあ！久しぶりやん」

「覚え方雑かお前エ！私の知ってるなかで、鬼全員頭に花咲かせられたし、お前が酒だと

言って渡された醤油一気飲みしたのは勇義の奴だし、花に食われたのは半分じゃなくて手だけだし!!」

「後10秒もせずに手だけじゃなく体全部持つてかれるのは半分って言わねえか?」

「うっせ!」

「で、なんのようだ?」

「お前が宴会に來ない理由を調べに來たんだが、嘗ての恨みを丁度今ここで晴らすのも悪くはないって思ってた所さ……!」

「宴会イ?何で俺が態々出向かなきゃいけないんだ?お前らが來いよ」

「……フン、その凶々しい所も變わんないねアンタ。まあいいや、折角だ。お前を宴会に引き連れていくついでに一丁私と喧嘩でもしようじゃないか!」

「えー。今は花育てるのに忙し!返事は聞かない!そおら『ミッシングパワー』!!」

「……俺の前で花畑を荒らすなんざ良い度胸だな。死ね」

◇

「……なんだコレ」

「またアイツうちの神社に變な花生やして……」

「な、なんだかこの花不自然に動いてますよ……!」

「あら、お化けの仕業かしら?」

「お!?! おおおおばけなんて居る訳無いでしょう常識的に考えて!？」

「うおー! ここから出せコノヤロー!!」

「何やってんのは萃香……」

「あらー。今日はこの変なお花で花見酒かしらねー」



く 永夜異変く

「満月が欠けてんだけどアンタ何か知らない?」

「すまん。その質問するために退治されかけたのだとしたら全俺が浮かばれないんだか」

「あら、花の王による超一流の英才教育の賜物じゃないの。誇っていいわよ」

「対話の前に殴れ、何て教えた記憶ねえよ。むしろそういうのは藍の分野だろコノヤロー」

「あらいやだわ。まるで私の式が脳筋みたいな言い方して」

「アレ自分では頭良いつて思ってるみたいだがやる事成す事筋肉式みたいなトコあるじゃん」

「……そういえばそうね」

「ちよつと、話逸れてつてるわよ。で?どうせアンタの事だからこの異変についてなんか知ってるんでしょ?」

「さてなあ……あ、霊夢が昔みたいに俺の事をおとーさんつて呼ぶんなら思い出さんでも……」

「……………」

「オーケー本気の実想封印の構えを解こうか。とはいってもなあ、俺妖怪じゃねえから月が欠けてようが殆ど影響なんて無いんだが?」

「それでも手がかり位持つてんでしょ?出しなさいよ」

「針振り回すなあぶねえな。手がかりつて言われてもなあ……………」

「何よ」

「そういえば月輪の花の様子がおかしかった、と思つてな」

「がちりんのはな?」

「また貴男変な花を育ててるのかしら?幻想郷のパワーバランスを崩すような化け物花を作るのは止めてつて何度も……」

「失礼な！八雲の言う危険な花はちやんと幻想郷じゃなく天界で育ててるぞ!!」

「幻想郷で育てるなって言つたんじゃないやなくてそもそも作るなって意味だったのですけど!!?」  
「!?」  
「というか天界ってまた半端に私の手の出しにくい所に……」

「だから話が逸れてるって言つてんでしようが!!その月輪の花がどうしたつて言うのよー」

「いやまあ、月輪の花は常に月のある方向を見続けるつー花なんだが、今は上じゃなくほぼ真横を向いているんだそうさ。つまり月輪の花が向いてる方に本物の月が隠されてるんじゃないやねえか?」

「それでどっち向いてるつて!?!」

「迷いの竹林の方角だな。あそこにはまー古い知り合いがいてなあ。そいつは……」

「今はアンタの昔話なんて聞いている暇はないわ。迷いの竹林ね、ここからだつたらそれほど離れていないわね」

「あら霊夢、彼の交友関係に興味ないの? 私はまだ知らない彼の交友関係に興味あるのだけど」

「どうでもいいわそんなこと。ほらさつきと行くわよ」

「仮にも親の過去くらい興味もてよ」

「霊夢つたら最近貴男が神社に全然来ないから拗ねてるのよ」

「はあ!? 誰が拗ねてるって!!?」

「そっかー、ゴメンな霊夢。だけどこれも一人立ちした博麗の試練でもあり宿命なんだよ」

「……嘘ね。どうせアンタの事だから花育てるのに忙しいとか、そういう理由でしょ」  
「バレたか」

「やっぱり!」

「ハハハ、分かった分かった。これからはもつと神社に寄るから許せ」

「ツ!! あ、頭撫でるなコラ!!」

「霊夢は変わらんなあ……色々と」

「誰の何処が変わらないって!」

「おおっと、こりや退治される前に逃げようか。それじゃ、また今度な!」

「待ちなさい! 待て!」

「くつ、逃げ足だけは速いんだから……」

「霊夢、霊夢。」

「何よ紫」

「顔、緩んでるわよ?」「うるさい!」「ちよ!? 陰陽玉投げるの止めなさい!」





「はあ、これでようやく永い夜も終わりね。疲れたわ」

「後はこの秘術とやらを解除させるだけね」

「ところがどっこい！まだこの異変は終わりません!!」

「ツ!? アンタ・・・何でまたここに!?!」

「いやあさつきぶりだな霊夢一行。」

「質問に答えなさい。まだ異変は終わってないってどういう意味かしら?」

「言葉通りさ。ここからはEXステージすつ飛ばしてPHステージが始まるんだよオ

！」

「意味わかんないんだけど!?!」

「うるせえええええ!!この数時間で2対1の弾幕ごっこ何度もさせるんじゃねえよ!!吸血

鬼イ!亡霊イ!魔女オ!オマエラ何度も何度もしっこいんじやボケエ!!」

「いや私達に言われても・・・」

「だまらっしやい!!元はと言えばお前から結界組がしつかりせんから迷惑被ってるんやな

いか!しやんとせえ!!」

「理不尽!?!ちよつと紫!得意のスキマでアレの相手しなさいよ!」

「嫌よ!アイツ隙あらばスキマに花咲かせてくるのよ!?!手に負えないわ!」

「ぶるアアア!! 濃厚な俺でも今日という今日は我慢ならん! 全員まとめて薔薇<sup>バラ</sup>してやらア!! 召喚『迎え花』!」

「きゃ!?」「うわ!?」「っ!?」「何が起きたの!?」「痛っ!?」「!?ここは?!」

「えっ!? 幽々子、妖夢?!

「レミリア、咲夜! 魔理沙、アリスまで?」

「Welcome 諸君鬱陶しいクソザコナメクジども! 竹林で迷い続けた所からようこそー!」  
「ここが地獄の一丁目だ!」

「ちよつと!? 永遠亭を勝手に地獄扱いしないでちようだい!!」

「アンタまだ居たの?」

「ラ〜ス〜ボ〜ス〜で〜す〜!! 居るに決まってるじゃない! ちよつと花の王! かぐや姫の印象が霞んじやったじゃない!」

「知るかボケ! 家具屋だかニトリだか知らんが俺の邪魔をするなら等しく花壇にすつぞ!」

「なにその脅し方!? 斬新奇抜過ぎて反応に困るわ!」

「ハナキライハナコワイ」

「お嬢様アアア?!!」

「脅し通じちゃったよ!」

「永夜異変はこれにて終了！月は元通りのハッピーエンド！だが残念！！異変の解決に乗り出した奴らとついでに異変の首謀者は揃って花壇と化すのだ！！」

「ついで扱いされた!?!」

「残機無限、時間制限無し、敗北条件はお前らの心が折れるまで!! 9体1の変則弾幕ごっこでお前等全員花塗れにしたるよオ!!」

「クソー。完全に見下しやがって」

「私達を何度も退けたくらいで調子乗ってるわね……」

「アリス！今こそ本気を出す時だぜ！」

「いやあそれは……」

「今度こそ私が斬ってみせます！」

「あのヒト私の能力が及ばないから苦手だわ〜」

「ふん、わわわ私にかきやればヤツを倒すうう運命くらいわえないあ」

「お嬢様、言えてません！」

「あーもー！何でこうなるのよ!!」

「アレの奔放さは今に始まった事じゃないわ……思えば幻想郷を作り始めた時も……」

「ちよつと！過去回想なんてしないで現実見なさい!!」

「ちなみに普通の俺はLunaシューターレベルだが全力の俺は究極反則生命体並かそ

れ以上だぞ」

「ちよ、時間軸的にそりやないぜ」

◇

♪月見草♪

「いやー、花の王は強敵でしたね」

「一言で片づけられる大変さかと小一時間」

「戦った時間は一時間じゃすまなかつたですがね」

「何アレ……意味わかんない……竹林全体に弾幕とか……」

「マスパって真ん中安置なのね初めて知ったわ」

「そんな訳無いだろ」

「花が……花が……」

「お嬢様、お気を確かに」

「ああ……スキマに花が溢れてる……」

「歩いて帰りましょうね……」

「……なんで私にまで頭に花が咲いてるのかしら」

「大塚が花は嫌! ってしつこいから代わりに永琳が」

「家具屋じゃない輝夜だつてば! あんたそればっかでしつこいわ!」

「スマンな。億年生きてるとヒトの名前を憶えておく容量なんて無エんで」

「結局あんな大がかりな異変なんて起こさなくてよかったウサねえ」

「俺に一言相談すりゃよかったのにねー」

「ええ……！そうすれば頭に花咲かす事も無かったでしょうしね……っ!!」

「少女がしちやいけない顔してらあ」



〜稗田亭〜

「……あの」

「なんじやい阿求、人が過去の大きな異変を順繰りに回想してる途中に」

「いや、もう……なんとというか……長いわア!!」

「ええ〜」

「大体なんですか！全部会話文で！描写力皆無かオノレはア!!」

「阿求が異変の様子聞かせてーって頼むからこうして話してるのに失礼な奴だ」

「せめて誰の会話かぐらい分かり易く説明してくれませんかねエ!!」

花「こ、うか?」

阿「そうだけどそうじゃない!」

「阿求はワガママだなあ。というか俺的に山場である六十年周期の大結界異変とか博麗神社の間欠泉騒動とかまだ話してないんだけど」

「も、もう勘弁してください。聞いてるだけでものすごく疲れてきました……」

「お、じゃあ疲れに効くハーブティーでも淹れてやろうか?」

「……お気持ちはもの凄くありがたいですが貴男が台所に立つと碌な物作らないので遠慮しておきます」

「本当にワガママな奴め」

「貴男に言われたくない……」

「折角花酒使ったレシピ考えたんだけどなあ……」

「……え?」

「ま、阿求も一応は病弱設定だし今日はここいらでお暇しようかね」

「誰が病弱『設定』ですか!じゃなくて……いま花酒って言いました?」

「言った」

「花酒と聞いて」

「うわビックリした!!て、八雲紫に伊吹萃香!?てか臭つ!?花臭つ!!」

「まだスキマに花詰めてんのお前。草生える」

「貴男の所為でしょうが!!何なのこの花!!捨てるそばから増殖していくんだけど!」

「よつぽどスキマ空間が気に入ったんだなあ。良きかな良きかな」「良くないわ!!」

「おい花の!花酒くれよ!」

「お前は何時もド直球だな」

「回りくどく話して花酒くれるんなら幾らでもするけど」

「回りくどく話しても花酒はやらん」

「おーしお前そこになおれ鬼に酒を渡さないなんて悪行に罰を与えてやる」

「花壇荒らした悪行の罰はまだ足りないようだな?」

「ごめんなさい」

「弱っ!鬼弱っ!」

「うるせえ稗田!お前そんな事言うんならいつペン花に食われてみる!アレは地獄より

地獄だぞ?」

「ここに花の王様が居るって聞いて来たのだけど」

「やべえ奴が来たそれでは此処でさようなら」

「待ちなさい。何処かに行くというのなら花酒を置いて行きなさい」「そうだ置いてけ

!」

「馬鹿お前等放せ!逃げるんだよ俺は此処から!!」

「ちよ!家で暴れないでください!」

「あは♪ようやく会えましたわね。偉大なる大地の支配者にして花の王様。風と共に歩むもの……」

「お、おう久しぶり風見……元気してる?」

「……なんですかアレ。アレがまさか風見幽香だと?」

「恐ろしい事にアレがまさかの風見優香なのよ」

「完全に恋する乙女だよなアレ」

「いやあ恋する乙女って言うにはいささか顔に殺意溢れてませんか?」

「えっ?恋ってそういうもんじゃねえの?」

「えっ」

「えっ」

「悲しい事にコレでも鬼なのよね……」

「いやー、折角会えたけど今ちよつと忙しいからまた今度な風見「幽香」……え」

「幽香と呼んでください……♥」

「ゴメンちよつと急ぎで地底の地獄鴉に会いに行く予定でしたんで」

「でしたらお供しますわ」



「あー！その後天界行つて花畑の様子身にいかんとならんから！超特急で!!」

「貴男の為なら何処までもついて行きますわ」

「更にちよつと地獄に行かないとなー！ちよつと閻魔に会いに行かないとなー！」

「貴男の為なら死ぬ事すら厭いませんわ」

「」

「ですから私と愛殺し合ひましょう♥」

「ギャアアア助けてゆかりん！いぶきん！」

「誰がゆかりんよ」「誰がいぶきんだ」

「あ、あの……家でそういう事するの勘弁してくださいほんとマジで」

「知るか！てかマジで何とかして！花酒あげるから!!」

「そういう事早く言えよ。おい風見幽香！私が相手だ！」

「勿論一升瓶なんてケチ言わないわよね？ほら幽香、その辺にしときなさい」

「花酒ヤベエエエ!!大妖怪が一瞬で手のひら返しを！」

「……貴方達……今……愛称で呼ばれた……？私は呼んでくれないのに……？」

「ヒイツ!?!」

稗田阿求は普通の人間の少女である。死後転生し、記憶を引き継いだまま新たな生を受けることが確定しているがそれでも肉体は普通の少女である。

そんな普通の少女が大妖怪の、しかも風見幽香の殺気に等しい怒気にててられ、未だに命を繋ぎ止めているのは御阿礼の子だからに他ならない。

だがしかし風見幽香の怒気を前に、所詮人間でしかない彼女は氷より凍めたい海の底に裸で横たわっているに等しい。既に彼女の心臓は活動を止め、呼吸も出来ず、手足は凍り付いたかのように微塵も動かない。脳機能も一つずつシャットダウンしていくように、目の前が暗くなっていき、眠るように息を引き取った……

かに思えた。

「大丈夫か阿求!しっかりしろ!!」

斃れていく身体を支え耳元で力強く放たれた言葉に、稗田阿求は躰全体に熱が戻っていくのを感じた。

風見幽香の怒気が凍てつく海であるなら、コレは麗かな春の日差しだった。冬に凍り付いた生命を芽吹かす、世界の温もりだった。

心臓は元通り、否、今まで以上に活力ある鼓動を開始した。

呼吸は元通り、否、今まで以上に熱い息を吐き出した。

凍り付いていた手足は熱を求めるように彼にしがみつく。

死んでいたはずの脳機能も完全に蘇生し、熱を吐き出すように動き出した。

「阿求!しっかりしろ!阿求!!」

耳元で名前を呼ばれるたびに身体に熱が駆け巡っていく。

この熱を放したくない。

この熱から離れたくない。

手足に力を入れ、さらに強く彼にしがみついた阿求は熱により溶け出た心の声を言った。言ってしまった。

「結婚……」

「ああ!?なんて!」

「ふああああ何でもない!何でもないですよ!」

「お、おう。元氣そうだな……」

「思えばそうね。貴女達が出てきてから花の王様はワタシを見てくれなくなった。避けるようになった」

「いやあ元々じゃないかな」

「アノヒトの愛は私が受けるはずなのに、私だけが受けるはずだったのに!!」

「あ、だめだこりや聞いてちやいねえ」

「それよりも流石に里の中で暴れられたらマズいわ。場所移すわよ」

「花塗れのスキマでか?勘弁してくれよ……」

「何時も花に飲まれてる貴女が言う?」

「また……またワタシの知らない所で花を咲かせて!!どうして!?ワタシじゃ駄目なの!?!」

「やべーよ、アイツ紫のスキマ見て発狂しだしたぞ」

「私も私のスキマの中見るたびに発狂しそうよ……」

「ワタシは……ワタシが!!誰よりも!!何よりも!!強く!!美しい!!花なのよ!!!それなのに

……それなの「はいはい、花酒の為にスキマツアーしましょうね」

「まあ、風見のヤツ相手にすんのは骨が折れるが、花酒の為だからなあ。オイ花の、当然

報酬は樽一杯だろうなあ?」

「用意しとつからマジで頼んだぜ!!」

「……ふうー。マジでどう育て間違ったかなあ……」

「えと、し、式はいつにしますか!?!」

「え、急に何言ってるんのお前」

「ああああ違います!!なんだもにいです!!」

「は?なんて?」

「にやあああ!!そうじゃなくて!こ、これからどうするんですか!?!」

「そうだなあ、とりあえずほとぼりが冷めるまで……」

「……」

「外の世界でぶらぶらしてようか」

「ええ!？」

その後博麗神社から外の世界へ抜け出そうとした俺だが、八雲と伊吹に捕まり花酒を殆ど搾り取られた。その上、風見幽香にまた追っかけまわされ散々な一日だった。

俺に心休まる日は来ないのか!?



「出来れば苦勞しないんですけどねえ……!」

諸君、俺だ。

俺は今地獄の一丁目に来ている。勿論死んだわけじゃない、歩いてここまで来たのだ。

幻想郷つてのは本当に凄いの所だよ。なんせ現世から地獄まで歩いていけるんだもんね。

「それ貴男だけですから。どこの世界に三途の川を歩いて渡る奴がいますか」

「(こ・こ・こ・に)」

「死ね」

「閻魔にあるまじき発言」

そして我が目の前にいるのは夏季A期シャバダドウその人である。

「四季映姫・ヤマザナドウです」

「そうそれ」

「この秋定期山田等あきとしきやまだなどとは地蔵の頃からの知り合いで

「四季映姫・ヤマザナドウです」

「そうそれ」

地蔵のクセにあつちこつち歩き回るふてえ奴だった。

「ただの地蔵だった私をあちこち動き回らせたのは貴男の所為でしょう」

「行く先々で説教しまわってるからってつきり喜んで動いていたのかと思ったがね」

「う、まあ……それは……」

「へいへーい、閻魔がそんな曖昧な返事で良いのかよー。YOU白黒つけちゃいなYO  
!」

「死ね」

「ハッキリ言うじゃねえか……」

まあ何で俺が地蔵なんて引き連れて歩き回っていたのかは語ればそりやあもう辞書並の厚さの小説が上・中・下巻書けるくらいの長い話になるんだが、その話はおいところう。

「当時の貴男が『地蔵連れてるとかパンクじゃね?』って言っていた記憶が」

「おいとこうつつつてんだから置いとけ」

### 閑話休題

なんでわざわざ地獄まで来たかというと、要はいつも通りである。

「いい加減にしてくれませんか? もう地獄は貴男が植えに来た花でいっばいなんですけど」

「何を言う。まだ植えるスペースがあるではないか」



「あの……阿鼻地獄が花で埋まったのにまだあるとでも?」

「あるではないか」「マジかお前」

説明しよう!阿鼻地獄とは地獄の最下層にある滅茶苦茶広い地獄で、縦横高さが2万由旬だの8万由旬だのといったくらいあるぞ!由旬ってなにかって?知るかそんなもんググれ。

「とりあえず貴男の所為で地獄が引越す羽目になったということを見習って自覚してください」

「なんでさ。よく考えてみ?花には見るだけでリラクゼーション効果がある上に殺伐とした地獄の労働環境に一抹の清涼感を提供するベストインテリアだろ?」

「地獄は殺伐としてナンボでしょうが。それ以上に量を考えろって言うてるのです」「お前、そんなんだから地獄はブラック企業よりブラックとか言われて就職率下がりにくるんじゃないの?」「ぐっ……」

そう、俺はこの地獄の地獄化を何とかするためにこうして花を咲かせに来るのだ。なんて地獄思いの優しい王様なのでしょいか。きっと死後は地獄に銅像が建てられ、悠々と天国で暮らしていけるに違いない!

「貴男の像が建つなんてまかり間違っても無いですよ」

「そんな馬鹿な!」

「ただでさえ貴男が咲かせた花が増え続けるのに、その上貴男の像なんて置くスペースなんて有る訳無いじゃないですか馬鹿ですか」

「つまりそれは花で俺の像を作れっていう……?」「止めろ馬鹿」

諸君、君も地獄で働こう!今なら優しい鬼の先輩が手取り足取り仕事を教えてくれるぞ!

それはともかく。

「黄泉の花の調子どう?」

「……アレですか、えーえー元気ですよ腹立つくらいに。どうやって前任が引き抜いて地上に捨て置いたのか知りたいくらいですよ」

「その引き抜いた前任とやらがどうなったか知りたいなら教えてあげるけど」

「……遠慮しておきます」

黄泉の花とは、我が力を込めた花の一つであり、現存する最古の花の一つである。花でありながら枯れず、朽ちず、そして子孫を残さず、ただそこに在るだけの花である。つまり生きながらにして死んでいて、死にながらにして生き永らえる故に今まで残つて来れたのだ。

エサは死んだ生命の魂。

「あの花の所為で新たに『花地獄』を作ろうかって議題に上がるくらいですからね……」

「作ればいいじゃん」

「阿鼻地獄がすでに花地獄なんですけどそれは」

「良いじゃん」

「良くないじゃん?!」

とまあ、B記はツツコミ属性持ちであるのだ。

「映姫イ!というか貴男の前でツツコミ属性発揮しないヤツなんて居るんですかねエ  
!!」

「おー、昔の口調に戻ったな。好きだよ」

「ふう?!」

「堅っ苦しい口調よりそっちの方がいいよね、うん。なんか距離が縮んだ感じがしてさ  
「っく!!」

「閻魔然とした映姫よりそっちの方が可愛いぞ」

「しよ、其処になおれえ!!」

「あ、あ、貴男はかわつ、可愛いなんてそんな事、き、気軽に言い過ぎるっ!!」

「そうか?」

「そうです!どうせ誰にでもそんな事言ってるんでしようこのスケコマシ!大体何時も  
人の名前間違う癖に急に正しい名前で呼ぶなんて不埒です!」

「……待って、その何が悪いん?」

「悪いに決まってるでしょう!!」「ええ……」

「いいですか!そもそも貴男はそう……人との関係を疎かにし過ぎる!新しい出会いも大事ですがもつと古くからの付き合いを大切にしなさい!」

「具体的には?」

「もつと私に会いに来なさい……じゃない!」

「映姫様ー。裁判の時間だよーつと」「小町イ!!今良い所ですから邪魔しない!!」……ええ?」

「小町!何時もサボってるくせに何で今日に限って働いてるんですか!」

「ええ、いや。ちよ……えええ!?何でアタイ怒られてるの!?!」

「折角二人つきり……いえ、そうじゃなく!そもそも小町、貴女がキチンと仕事をしていれば花の王が歩いて此処に来ることも無く私が化粧する時間も出来たのに!」

「え、映姫様。あんなんに会う前に態々化粧してるんですか?」

「あんなんとは何ですか!確かに彼は少々……いやかなりアレですがそれでも余りある魅力と包容力は他の誰にもない素晴らしい美点です!なにより、花に向けるあの優しい表情は彼の魅力が全て詰まっています!私に向けてください!」

「映姫様、なんかもう色々出てます……」

「出ますよそりやあ！畜生！何で私の初恋が彼なんですか！色々と攻略難度高過ぎじゃないですか！！周りに他の女の影も多いですし！！やってやりますよコノヤロー！！」

「……で、映姫様」

「何ですか小町！！」

「その肝心の花の王は何処に……？」

「何言ってるんですか其処に」

「H o u d y !!」

「何コレ……」

「喋る花ですね……」

「クソハナあ!!!」



「地獄はもう説教地獄っての作った方が良くと思うのだけれどもそこんどこどう思う？」

「うにゅ?」

所変わって灼熱地獄跡。地獄から旧地獄に行くのもはやお手の物である。あんまり地底に来ると八雲が五月蠅いが正直知ったこっちゃない。

そして目の前には地獄鴉兼八咫鳥という火属性マシマシの少女、霊何とか空がいる。彼女とはまあ何やかんやあつて仲が良いのである。

「だ、誰だお前?! いつの間にか此処に来たの!?!」

……仲が良いのである。

「つーなんだかよく分かんないけど……侵入者は討つ!! 七星「セプテントリオン」!!」  
ちよつと待ってろ。

少女祈祷中…

「なんだかんだ言つて久しぶりだなお空」

「久しぶりだね、頭に花生えるのも!」

「どうだ? 間欠泉センターとかで働きっぱなしの様だけど元気してつか?」

「元気だよー! 今絶賛頭の花に元気吸われてるけど!」

「なら良い」「良くなくない?」

さてさて、灼熱地獄跡地である。熱い。

そして熱いと言えば、花である。

灼熱地獄跡地には熱に強い花がそこその数咲いている。俺がコツコツ育て上げた物だ。それこそ灼熱地獄跡が現役で動いてた頃から。

「ねえ、いい加減ここの花捨てていい？この花の所為で時々火力が上がり過ぎちゃうんだけど」

「それを 捨てるなんて とんでもない！」

もはやどれも地上では適応できない珍しい品種であるというのに。

爆炎草。高熱を糧として育ち、花が咲くと同時にインド象も焼き殺す爆炎も咲く。

竜吹草。燃えるように朱い花が咲き、実を結ぶとインド象も焼き貫く勢いで種を飛ばす。

焦炎花。焼けた空気を吸い煤を吐く黒々と煌めく花。インド象もビククリして心臓が止まる。

「インド象が何したって言うのよ」

そのどれもが地上で育てようとすると、何処からともなく八雲が現れては根っこごと消し飛ばしてしまうから地上で育つ事は無いのだ。

生存競争って、悲しい。

「という訳でお空にプレゼントやるぞー」

「わーいどうせ花なんでしょー」

「外の世界のお土産『重水素水』」

「えっ」

「えっ」

「花じゃない?」

『『重水素水』』

「えっ」

「えっ」

「水?」

『『重水素水』』

「なにそれこわい」

「飲むと有毒らしい」

「すごいこわい」

「妖怪には効果ないよ」

「安心した」

「でも重水素では魚類は死ぬよ」

「不安になった」



「飲んで」

「えっ」

「えっ」

「有毒なのにな？」

「妖怪には効果ないよ」

「魚類は死ぬんでしょ？」

「魚類じゃないでしょ」

「そっかー」

「そうだよ」

「じゃあ頂きます」

「ちよつと待てエエエ!!!」

「お、お前は！地霊殿の主にして何時も偉そうに椅子にふんぞり返ってるけど見た目幼女でしかも友達いない歴〓年齢で妖怪どころか怨霊にすら近づかれない上に寂しさ紛らわすためにペットを飼ったら増えすぎてもはや自分で管理出来なくなつたからペットにペットの管理をさせて、しかもその所為でペットに舐められまくって『あれ？これもう主人要らなくね？』とか思われてる事を知ってガチ凹みしているコミュ症クソダサオシヤレ目ん玉少女カトリ!!」

「長い!! 上になんてガチ凹みしてるって知ってるの!! 後私のサードアイ別にダサくないし!! 最後カトリじやなくてサトリだし!! お空に何飲ませようとしてんのよ!!」

「ツツコミまで長いとか……一つに絞れよ」

「憐れんだ目で私を見るなアアアア!!」

「うにゆ、さと子様うるさい……」

「お空!?! お、お空までそんな事言うの……?」

「どうかさと子様カメモムシ臭いですー」

「お憐まで!?! そ……そんな……」

「あ、今の俺の声真似だわ」「ブツ殺す」

「と言うかお前スペック的に妹に勝ってる部分ないよな(笑)」「ブツ殺オオオオス!!!」

「うにゆ……アンタさと子様は何の恨みがあんのよ」

「強いて言えば花の恨み」「ああ……さと子様ゴメン。私じやどうにもならないや……」

「お空どいて!?! そいつ殺せない!!」

「お空居なくても殺せないに1円」

「馬鹿にしてんのかテメエ!! トラウマに溺れて死ぬ!! 想起「……………」」

「は、吐きそう……」

「覚妖怪のさとり様相手に精神攻撃なんて何してんのあなた……」

「むしろ億年生きた俺のトラウマなんて俺が知りたい」

「イアエア系かな？」

「ふ、フフフ……思った以上にチカラを奪われたけど、お前をぶつ殺す算段がついたわ！

想起『風見 幽香』！」

なんと、俺の目の前には寸分違わぬ風見幽香が！

「さあ行きなさい！ヤツを蹂躪するのよ!!」

「誰にモノを言っているのかしら？」

「はあへ？」

「愚図で、惨めな弱小妖怪風情が、記憶とはいえ私を使役しようなんて……愚かで、哀れね」

「すげー、マジで風見幽香だわ。99%風見幽香だわ」

「待っててくださいいね王様……今この生意気で低能なゴミ虫を教育しますから……♥」

「ゆ、ゆつくりでいいよ？」

「はあい」

「あ、あれれー？おーかしいぞー？何で私の能力で出来た存在が私に牙を剥いてるんだー？」

「それは貴方が間抜けで、愚図で、雑魚だからよ」

「あの、えつと……私の言う事を聞く気って……有ります?」

「羽虫の鳴き声なんて聞こえないわ」

「ちよ、ちよつといいですかほんと。マジで。あの、土下座なら自信あるんで。一回見てもらっていいですか?」

「ほんと!マジで土下座しますんで!無言で近づくのを出れば止めて頂きたいのですが!!」

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”!!!お空!!お憐!!この際だから花の王でもいいから!!助けて、助けてええええええええ!!!」

「さとり様、うわあさとり様……首が曲がっちゃいけない方向に……うわあ……」

「すげえー。妖怪ってあんな出来そこないの人形を更に車で轢いたみたいになっても生きてるんだな」

その後、満足したのか想起された風見幽香は消えて、後に残ったのは辛うじて息をしている覚妖怪の何かだけだった。

俺はお空の要望によってこの何かを元の姿に寄せて形作つた後、花を植える事で花の

根が何やかんやして何やかんやで結果的に一見すると無事な様に見えるかもしれない状況を作りだしたような雰囲気にした。

代償として古明地妹の頭に大きなハイビスカスの花が咲いた。

良い事をした後は気持ちがいいなあ!!

誰も俺の事を「風と共に歩むもの」と呼んでくれへん…

「ええと、アレ買ったこれ買った…あ、餡子買ってないや」

「こんにちはヨムー！皆大好き魂魄妖々夢だヨムー！」

「ここは人里だヨムー！いまは買い物帰りだヨムー！」

「今日も今日とて大食い妖怪の為にせっせと買い物をしているキリー！毎日の食費で家計のエンゲル係数がマツハでヤバいヨムー！」

「いい加減あの妖怪は我慢を覚えるキリー！」

「……あ、それと茶葉も買わなきゃ」

「特にここ最近の大食い妖怪の大食いっぷりは手がつけられないキリー！もはや妖怪じゃなくて悪魔だキリー！暴食の悪魔だヨムー！」

「あのお腹を捌いたら宇宙が広がってるに違いないヨムー！」

「……さて、必要なものは全部揃ったかな」

「もはや買い物袋で両手処か背中まで塞がったヨムー！毎日こんなにもって帰るのはちよー大変だヨムー！服で隠しているけど内側は筋肉ムキムキマツチョウーマンだキリー！」

もうすぐ家の財産が尽きるヨムー！いい加減あの悪魔は働くということ覚えて

「業風神閃斬！」

「スペカですらねえ!？」

殺意籠った弾幕の嵐になすすべもなく吹き飛ばされるのだった。

「うわーやられたヨムー」

「……色々言いたいですがまず一つ……そのヨムーつてのを止めて下さい!!」

「分かったキリー」

「そっちも止めろ!!」

「断るツ!!」

「なんでそっちだけ!？」

そんなもん只のノリだクビー。

「だから止めろ！新しいの出来てる?!」

クビー。

「……で、何の用ですか」

「いきなり斬りかかったのはそっちだキリー」

「貴方が変なモノローグつけるからでしょ……なんでこんな変なのがお爺ちゃんの友達

なんだろ」

「同じ花愛好家だからクビー」

「そのクビーって言うの止めてくれませんか？意味わからないので」

「意味わかれば良いのかマクロコスモス」

「わかれば良いって話じゃないですウルトラソウル」

「HEY!!」「やめい」

ハロー。お察しの通り、俺である。

今日も今日とて花を咲かせながら無闇矢鱈と歩き回っていると古い顔馴染みを見つけたのでちよっかいかけてみた。

「言うほど古い仲じゃ無いですよ。この前の宴会でも会いましたし」

「三番！何でも斬ります!!」

「その話は止めて下さい。お願いですから」

「キレたのはお前の主人だけとか爆笑」

「止めろって言ってるんだろ」

考えなしの一発芸はやめよう（教訓）

「だけど実際古い仲だろ？誰が産まれたばかりのお前を抱き上げたと思ってるんだよ」

「えっ……？まさか……」



「お前のジーちゃんだよ」

「やっぱなあ！どうせそうだと思ったよド畜生!!」

ジーちゃんが産まれた赤子を取り上げた時、俺はこいつのカーちゃんの手を握っていたから抱くのは無理だった。

「えっ」

そんなことより今日は折角だから冥界にお邪魔するキリー。

「邪魔するなら帰って……じゃなくて……えっ？立ち会ったんですか……？」

「何が？」

「私が産まれた瞬間に……」

「……あ、これ内緒にしとけて言われた奴だった」

「は、はあ!!えっ、マジで!!」

「はっはっは」

「誤魔化し方へタクソかオノレは!!ちよつと！詳しく詳細プリーズ!!お母さんってどんな人だったんですか!!お父さんは!!」

「お前お父さんに似なくて良かったな」

「それどういう意味!!私お母さんもお父さんにも知らずに今まで生きてきたんですから少しだけでも教えてください!!」

「ところで話は変わるけど、自己申告で記憶無くすのか、記憶を糧にする花を育てるのか  
だったらどっちにする？」

「はい！ここ数分の記憶無くしました!!」



と言うわけで着いたぜ冥界。この幽明結界はいつになったら直るんだ？

「直す気無いんじゃないですか？」

「全く、だらしねえな八雲。人にアレやれコレやれ五月蠅い癖に自分は何もしてないの  
かよ」

『貴方以上には色々頑張ってるわよ!!』（幻聴）

『幻聴にされた?!』

「あ、花の王だ」

「おー、花の王じゃん。暇なら練習でも聴いてかない？」

「聴かなくてもいいけど……」

冥界の住人1号はプラスバンド三兄弟だった。

「プリズムリバーなんですけど!!」

「三姉妹なんですけど!!」

「まだここは冥界じゃないんですけど……」

「結界が見えたらもうそこは冥界で良いやん?」

「門で区切ってる意味が無い『ミヨン』語尾足すな」

そうは言うが実際ここに生者が来るより死者が居る割合の方が高いだろ絶対。

「「確かに」「」」「納得するな」

「ところで、練習風景は気になりもするが、俺はライブ派なんだ。聴いてくのは今度にするわ」

「そっかー。残念だなー」

「また来てねー」

「次のライブは一緒にセッションしよう……」

俺は手を振り上げて返答した。

「貴方って音楽も出来るんですね……」

「意外か?」

「まあ、有り体に言っつて」

「長く生きてれば感性は自然と身に付くさ。後は……暇潰しのな?」

「そうですか……今度聞かせてくださいね」

「気が向いたらな」

「ちなみに得意な楽器って何ですか？花の王だけに草笛とか？」

「ボーパ」

「楽器じゃねえ!？」



長い階段を登ると其処は白玉楼でしたとき。

いや本当に長すぎないあの階段。俺が天界まで上った以上に時間掛かったんだけど。

そこんところどうなの悪夢ちゃん？

「妖夢です。私に言われてもどうしようもないですよ」

「じゃあ適当にショートカット作って良い脳無ちゃん」

「だから妖夢ですってば。貴方の適当は雑って意味の適当なので駄目です」

つまらん、それでも怒夢か。

「よ・う・む!!どういう意味ですかそれ!!」

だいたい、こんな長い階段を一段一段上るのはめんどくさいだろ？毎日人里に買い物に出る巖墮夢ちゃんの為に楽できるショートカット作ってやろうってのに。

「誰が巖墮夢ちやんだコノヤロー!!それに毎日人里に買い物に行ってる訳じゃねーし!?!」

「2日に一回?」

「あんまり変わってねえじやろがい!!」

「耳元で叫ぶなよ。マナー違反だぞ?」

「人の名前間違えまくるお前がマナー語んなあ!!」

「あらやだこの子口わるいわあ。きつと身近にろくでもないお手本のような存在がいたんだらうね」

「お前以外に居ねえよ!!」

「やだ……つまりそれって俺以外の誰とも添い遂げる気はないって言う宣言……?」

「今のがどう聞こえたらそうなるんだ!!」

「そんな目で見つめられると照れちやう」

「あゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

「妖夢ー?帰ってきたのー?」

「はっ!ゆ、幽々子様!ただいま帰りました!」

白玉楼のデカい門から聞き覚えのある声が聞こえた。先ほどまで顔面崩壊するくらいに激昂していたザクも一瞬で取り繕い、その声に返答する。

「ザクじやない妖夢!!もう夢すら残らなかつたぞオイ!!!」

「妖夢?誰かいるのかしら?」

「幽々子様、今花の王が」「お邪魔しまーす!!」

ドガアン!

とデカい門を蹴り開ける。

「お前何してんの!?!」

「王の前で堂々と閉まつてる門が悪い」

「普通門つてそう言う物じやないんですかねえ!?幽々子様!ご無事ですか!?!」

「うう〜ん……亡霊生も長いけど、走馬灯を見たのは初めてだわあ……」

「幽々子様ー!!」

蹴り開けた門が掠めたのか、尻もちをついてるドリキヤス子は只でさえ死にそうな顔色を更に白くさせてそう呟いた。

「幽・々・子!!お前幽々子様にまでそういう態度かコラア!!ドリキヤス子つて何だア!!」

「取り敢えず来客には茶でもだせや。菓子は適当にシヨートケーキで良いよ」

「清々しいまでに凶々しい!!白玉楼にシヨートケーキねえよ!!!」

◇

「今日もお茶が旨い」

「そりゃよーござんしたね……あれだけ自由に振る舞って……」

白玉楼に上がり込んで早一時間程、俺は縁側に座って緑茶を啜っていた。うーむ、これは玉露か……

「出廻らしですけどね」

「客に出廻らし出すなや」

「それとぶぶづけもいかがです花の王様？」

「ユツコさん……お上品に失礼だよなそれ……」

幻想郷は京都に在った…？

「そもそも手土産も無しに来ておいて」

「おっと、忘れてた。here you are」

「なんて？……なんですコレ？」

「花酒」

「あらあらまあまあ、こんなに良いものを。妖夢！新しいお茶淹れてきなさい！あら……しかも二本も!!妖夢ー！お饅頭も持つてくるのよ!!」

「ええ……幽々子様、手のひらくるつくるじゃないですか……」

「はっはっは」

こんなにも喜んでくれるとは、造った甲斐があると言うものさね。

洩々といった表情でお茶汲みに行った妖夢。出廻らしのお茶を啜りながら、庭の桜の木々を眺める。

「……………さて……………それで、白玉楼に訪れたのは物凄く久しぶりですね、花の王様」

しかしやべーな俺の舌、玉露と出廻らし間違えるとか。やっぱ神社に居たときからずっと安つ葉使つてたから舌が貧乏になつたんかねえ。

「宴会なり異変なりで時々会つてたけど、態々白玉楼まで足を運ぶなんて何時以来？」

いや待てよ……………？よく考えたら俺そもそも玉露なんて飲んだことないんじゃないか？

「幻想郷の容が出来始めた〜って紫が言つてた時くらいだから……………ざっと1000年位前かしら？」

そうか……………俺いい年して玉露飲んだことないのか……………紅茶ならロンネフェルトとかいうのを飲んだことあるけど。

「貴方の事だからきつとココまで歩いて来たんでしよう？ちよつと気まぐれに……………なんて距離じゃないわあ」

花茶ならあの紅い館のメイドにも負けなない…いや、圧倒的に振じ伏せるレベルだと自



負してるけどな。

「そう、1000年ぶりに、態々ココまで来て、それに珍しく手土産なんてらしくない事して……目的はなあに？」

ん……？何の話だっけ？まあいいや。そう、俺が緑茶を淹れようとすると何故か泥水になるって霊夢が言ってたな、不思議だ。

「ねえ、聞いてる？」

不思議と言えば昔、妹紅といた時も俺は野ウサギを焼いていた筈が何故か火山活動に巻き込まれていた事もあった。

「無視はとつても辛いわあ……」

さてよ……八雲を拾った時も、何食わしたらいいかまるで分かんなかったから適当に米や食べる花を混ぜてたら大爆発も起きたな……

「ほら、見て見てー。私の頬ってこんなに伸びるのよー」うによー

んん？爆発と言えば……高天原に居た時も八坂に握り飯握ってやった時も結果的に島一つ沈んだなあ。

「そろそろ泣くわよー？泣く前に耳にふうーってしても良いのー？」

嘘だろ……。うわ…俺の料理力、低すぎ…？

「……ふうー」

低すぎというかもはや最低値オーバーフローして天元突破してね？そりや霊夢も台所立つなって言う訳だわ。

「……」

料理してるつもりが天地創造してたわwwってか？やかましいわ！

「かぷ」

いやちがうんだよ。ちゃんと花が材料に有ればちゃんと出来るんだよ。ほんとほんと。

「……」

「れろれろ」

「なーにしとんでござんすか幽々子様」

「おっふ!?ちちち違うのよ妖夢!これはちよつとしたスキンシップよスキンシップ!!なんか美味しそうな耳だなんて思ってた無いわよ!」

やつと来たな玉露汲み係。

「私そんな限定的な役割を請け負った事は無いんですが」

それよりなんか耳がヌルヌルして気持ち悪いんだけど拭くモン持ってない?

「あう、ドストレートにそんな気持ち悪いって……」

「残念ですがそんなきつたねえヌルヌル拭くモンは無いですね」

「妖夢ー。私の心はもうボロボロよー？」

「それで、手土産なんて持って何の用かしら……」

縁側に腰掛けながらも、猫の様にぐてつてるキャスク「幽々子」。生きる気力を無くした人間がしそうな顔しとるぞで。

「既に死んでるから問題ないわー」

「それで良いのですか幽々子様……」

「用というか……もう春だしな。ゲルググ見つけた時にふ、と此処の桜が見たくなつたからよお」

「ゲルググ……妖夢!!私の名前は妖夢だから!もう原型一つも残ってないから!!」

「そういえば妖夢知ってる?実は妖夢の名付け親は花の王様なのよ?」

「いやいや……幾らエイプリル Fool が近いと言つてもそんな嘘引つかかる訳無いじゃないですか……」

「うふふ」

「……え。何ですかその意味深な笑いは……嘘、嘘ですよね?」

「あー、そうだそうだ。妖夢、妖夢だったわ。女の子だったし、母親みたいにならん様に色々考えたんだぜ?」

「……………え？えっ??」

「妖は妖ようあやかし。人を惑わせる女の化け物を指すが、転じて魅力的な女性を意味する字だ。夢は夢ゆめ。はつきりとした物だが同時に、実現させたい願いを意味する。つまり妖夢って名前は魅力のある女になり、願いを実現する強さを持つ子になってほしいって意味なんだ。」

「えあ……………へえあ？ほ、本当なんですか……………」

「結構考えたんだぜ？なんせ花愛好家の頼みなんだからな、無碍にはできねえ」

「その割には妖夢の名前を間違えてたわねえ」

「仕方ねえだろ……………名付けなんて今まで何億何万とやってんだから……………しかも人の名前とかもう覚えておく容量なんて頭に無えから！」

「何億年も生きるつてのも大変ねえ……………」

「えう……………ほ、本当に……………花の王が……………名付け親なんです……………か？」

「そう言ってるじゃない」

「パパーつて甘えてもいいぞ？」

「いえ、それはないです」キツパリ

「挫けそう」

「はいはい、妖夢は反抗期なだけよ？」ナデナデ

「……コレがバブみって奴か。あれ、デジャヴユ」

「ところで私を産んでくれた両親の話は」

「あ、妖夢見て見て、あそこに反魂蝶が飛んでるわ」

「お、ありや死桜じゃねえか。まだ生えてたんかアレ」

「お前等答える気ゼロか！」



「さてさてさてと？こんの死桜……まあ俺の知らん所でデカくなりやがってまあまあ」

「死桜……西行妖の事ですか？」

「西行妖？」

「この桜の事よー。とつても昔から生えてる桜で、私が亡霊になる前からここに在るらしいわ」

「あー。成程……成程？だが俺は少なくとも冥界に死桜を植えた記憶なんてないぞ？」

「どうも元々あった場所から移植してきたらしいわ」

「ほー」

「ところで……死桜って呼んでるくらいですから何か曰く付きだったり……？」

「んー？別に何のこたあねえぞ？俺あ一時期桜にハマってた時期があつてな。滅茶苦茶育てまくったんだが、何故かこの桜の下にだけ色んな生き物の死骸が落ちてるんだよ。それで死桜と名付けただけだ。」

「へえ……興味深いわね？」

「そんでまあ、なーんで死骸が集まる桜から妖気が感じられるんだ？」

「うーん……紫が言うには昔この桜の下で色々な人が死んだみたいなのよねー」

「ははあ……てか今更だけどさ」

「どうかしたんですか？」

「いやあ、1000年位前にも白玉楼に来たんだが……この西行妖？有ったっけ……」

「そりやあずつとあるでしょう。こんな大きな桜の木をあっちこっちに気軽に動かせるとしたら、そりやあもう貴方くらいいしか居ないですし」

「だよなあ……」

「あ、そうだ。ねえ、花の王様？この西行妖……」

満開にさせることって出来るかしら？

「ゆ、幽々子様……それって嘗ての異変をまた起こすって事ですか……？」

「春雪異変か。お前、アレ大変だったんだぞ？春に咲く筈だった花が凍り付いて死に掛

けてたから、幻想郷の片っ端から歩き回って花に命を分け与えて……思い出しただけでイライラしてきた」

「もー、あれだけ酷い折檻受けたんだからもう許してよお。そうじゃなくて、貴方の力でこの桜を満開に出来ない？」

「ふうん……出来ない事は無い……無いが……これも花とはいえ妖怪だしなあ……どれどれ？」

まずは西行妖の周りをぐるつとゆっくり回ってみる。成程ね、桜の妖怪なだけはある。

だが所詮は妖怪。王たる俺には決して敵わない。睨かせる事自体は出来そうだ。

ふんふん……満開に近づくにつれ、この桜は強くなっていくのか。能力はちとキツイ気がするが何とかなるかな？

ん？

「なんだ？桜の根元に……」

んん？

んんん?!

「気が付いたかしら？どうも西行妖に『何者か』が封印されているみたいなの。そして、この桜が満開になった時に封印が解ける……」

「ほほう。封印術にはあんまり明るくないが、どうにも愉快的状況だなあ」

「そうでしよう？自分の身体を鍵にしてまで西行妖を封印してるらしいの。つまり、その『何者か』ってきつと凄い花愛好家だと思うの」

「そりやあいいいな！是非とも会いたい！」

「でしよう？きつと私とも良いお友達になつてくれるわ！」

「ゆ、幽々子様あ……西行妖が封印されたのつて1000年以上前ですよ……封印が解かれたらその『何者か』つてすぐに死んじやいますよう……」

「大丈夫よ、ここは冥界だもの。死んでもすぐに遭えるわ」

「そういう問題なんですか……？」

新しい花愛好家！ならば是非共に酒を呑もう！死桜も満開になって一石二鳥つてな  
！

調査は中止！とつと咲かせつか！

ヤメロ

「……」

「……花の王様？」



「どうしたんですか？ま、まさかお化けの仕業!!」「ちよつと妖夢黙ってて」「いや、うん……そう、だな……もう少し調査すつか」

死桜

西行妖

死に誘う程度の能力

八雲も手出しできない

何者かの手によって封印された

死骸が集まる性質

多くの人がこの桜の下で死んだ

殺された？

否

自尽したのだ

何故

死は救い？

死の魅力？

否

誘われた

死霊は？

死霊を操る程度の能力

西行寺

「……」

「……」

「……」

「なあ、幽々子」

「っ……なあに、花の王様？」

「俺は……まあ、そうだな。この西行妖を満開にすることは……出来る」

「ふふ、なら「だが只では満開にしてやらん」……どういう事？」

「めっちゃクソ面倒くさい」

「……ええ……」

「花の王様……そんな事言わずに……ね？」

「だからそうだな……対価、対価をくれるんなら満開にしてやる」

「対価？何を出せばいいの？」

「さて……ね。きつとそれは幽々子。お前次第になるな」

「……」

「何言ってるんですか花の王。馬鹿ですか？」「黙ってる馬鹿」

「私次第の対価は、どうやって払うのかしら？」

「俺がこの化け物桜を満開にした瞬間、勝手に払われるだろうよ」

「……その対価を払うと、どうなるの？」

「……」

「幽々子、お前は新しい『お友達』に出会えるだろう」「……!!」

「そして代わりに、親しき者を全て、永遠に奪われるだろう」「!!」

「どういう……事……?」

「奪われる……いや、違うな。奪う、そう。奪うんだ。全部」

「俺が」

「さあ決めろ幽々子。新しいお友達に出会って、八雲を、妖夢を、霊夢、魔理沙、その他大勢と二度と会えない世界で永年過ごすかどうか！」

「…………ふふ」

「幽々子様…………」

「大丈夫よ妖夢。一度諦めたことだもの、もう一度諦めるくらいなんてことないわ」

「幽々子様！」

「ごめんなさいね花の王様。やらなくても良い悪役演じて貰った様で」

「…………」

「…………いやほんとにな。マジでも勘弁しろやあ…………俺ってばほら、ギャグキャラだし。こういうの性に合わんねーほんと」

「でもそうねー。折角西行妖の満開が見られると思って楽しみにしてたんだけど…………この期待感ってどうすればいいかしら？」

「ほう、ほうほう、ほうほうほう？つまりその御言葉は……………万年生きてない小娘の挑

発と受け取つても宜しいですね!」

「ふふふ」

「良いでしょう良いだろう。デカさにやあ死桜に劣るが、その圧巻さは全世界一の景色を見せてやろう!!」

と、その前にだ。折角の大騒ぎ、皆で楽しもうじゃねえの?」

「勿論」

「オツケエイ!!そういうわけで……全員黄泉送りじゃあ!死ねえ!!!」

「何その掛け声!」

『黄泉送りの献花——ラフレシアワープ——』

「きゃっ?!」「うわっ?!」「久しぶりな感覚……」「あっ?!」「またかよ……」「痛っ!ちよつと、レディの扱いがなつてな「いやああ!!」ギヤアア!!」「全く何の騒ぎよ」「また花の王か!!」「ああ……」「この瞬間移動解明できないかな……」「うわぁ……こつて天国かな」「まだ生きてるぞミスチー!!」\／いてえ／「こんな扱いに慣れてきた自分が悲しい……」「おつと!花の王の急な招集か!」「演奏するぞー!」「まだ早いよ……」

「よおつす諸君!と言う訳で今から宴会すつから!」

「どういうわけだよ!!」

「ちよつと!? 私は貴男程暇ではないのだけど!」

「大体いきなり連れて来て宴会だあ!? ふぎけんなゴラア!!」

「……」

「はい、他に文句ある奴いたら出てこい」

「「「「「宴会大好き!!!」」」」」

「スゲエ……妖怪ってあんな……なんだあの状態」

「生きてるのかしら……」

「まあ、いきなり連れて来られて『はい、宴会な』で気分が上がらんのも解かる」

「分かってんなら最初からやらなけりゃいいじゃない」

「……」

「……えつ、あ、ちよ、ご、ごめんなさい! 悪気はないの! わるぐアはあああああああ

あ!!!」

「さらば、アリス」

「フォーエバー」

「と言う訳でまああれだ。いきなり呼びつけたから……花酒一人一升振る舞うぞ!」

「「「「「オオオオオオオオオオオ!!」「」「」「」」」」」

「マジかよ……明日は槍の雨だぜ!」

「槍だろ何が何でもいいわ!花酒なんて久しぶりね!」

「おおし!紫!紫イ!!お前世界中から酒持つてこい!!ひっさびさの大宴会じゃあ!!」

「あーもー!人使い荒い鬼ねえ本当に!」

「だけど肴がねえぞ?」

「流石に仕込み無しに料理は……」

「心配ご無用!流石に料理は用意できねえが「ていうかお前が用意するな!」うつせえ!肴なら用意してやるよ!さあさあお立会い!偉大なる大地の支配者にして花の王の強さ、美しさ、全てを称えるが良い!!」

大地讃頌『三千世界真白染メイヨシノ』威風突風『パンゲア大地凶墨染桜』彩色明媚『舞風枝垂に八重桜』世界一色『二百由旬満開前線』『幻想彩風』

それぞれが本気のラストワードに匹敵する超濃密のスペルカードを5枚同時に発動し、しかも一つとして操作を間違える事無く美しく展開する様に、それを見た全員が寒気を覚える。だが、すぐにそれを忘れる事になる。

世界が、桜に染まった。

力強く咲き誇るソメイヨシノ。凜と靡く墨染桜。舞い踊る枝垂桜に、歌う様に揺れる

八重桜。様々な種類の桜が優しい風に煽られ、不可能弾幕の桜吹雪となり見る者の心を撃ち抜いて行く。

「す、げえ……」

息を吸うことを忘れ、漏れ出るように出たため息は美しい弾幕に流されていった。僅か一分にも満たない弾幕で、人間、妖怪、幽霊、亡霊、神、全てを等しく下したのだ。

弾幕は終わった。しかし、世界の変化はまだ終わっていなかった。

まだ季節は春の初め、冥界に植えられた桜も3分咲き、良くて5分咲き位だったのが、先ほどの弾幕に中てられたのか、全ての桜が生命力に満ち満ちて満開に咲き誇っているではないか。

風が吹き、桜の花が散っていく。

風の音と共に、先の光景に心奪われていた者達の意識が戻っていく。

最後の余韻を惜しむようにゆっくりと時間が動き出した。



東方偉世界く beautiful Kingdom.

## 幻想郷は今めっちゃ春なんだぜ by 魔理沙

冥界の花見大会が終わった次の日、幻想郷全体が春真っ盛りになった。大方、例の花見で、というか花の王のせいで春度が飽和状態にでもなったのだろう。

実害らしい実害は春を告げる妖精リリーホワイトが僅か1日で幻想郷全てを周り、デカイ声で春の到来を知らせた位である。神社で見た時は、春告げ妖精に生まれなくて良かったと心から思う程に疲れきった顔をしていた。そして今度は異界にまで飛んでいかなければならない春告げ妖精に同情を隠し得ない霧雨魔理沙であった。

さて、季節は春の始めである。しかし、幻想郷全体は春爛漫。つまりは異変である。「別に春がちよつと早く来たくらいどうってことないでしょ?」

とは霊夢の言である。だが異変は異変である。昨日の花見大会に参加してなかった人妖にとつてこの気候の突然の変化は混乱に値する。つまり、幻想郷に無用な混乱を与えた元凶は成敗しなければならぬ。

断じて昨日の花の王の不可能弾幕を攻略してやりたいとかそういう気概ではない事をここに記しておく。

「と、言うわけでは異変解決頑張るぜ!!」

霧雨魔理沙はいつも通りの異変解決の格好に、普段以上にマジックアイテムで武装した姿で神社から飛び立った。

異変の元凶である花の王を探しに、特に当ても無く。

時間制限は春が終わるまで。残機は自分の決意の分だけ。

霧雨魔理沙の気楽な異変解決の旅が始まった。

◇

STAGE1 遙か春へ張る声

幻想郷及びその近界で生活しているとそれなりの頻度で花の王に会うことができる。

例えば何処に住んでいても。例えば望まなくとも。

だがしかし、その行動範囲の広さからいざ会おうとすると途端に難しい。更に難しくしているのは花の王のその性格である。彼は風の噂でも聞いているのか、自身を探している者の居る場所から離れる様に動き出す。そこに大した意味はなく、只嫌がらせの為にそうしているにすぎない（飽きたら普通に会いに来るが）。

つまり、幻想郷で花の王に会おうとして会うためには花の王の情報収集力を上回る速

度で見つけるか、花の王の情報源を封じるか、或いは類稀なる奇跡に恵まれるかが最低条件となる。

故に霧雨魔理沙は全速力で博麗神社から飛び立った。制限時間は春が終わるまでとはいえ、肝心要の花の王に逃げに徹されては一年経つても捕まえる事など出来はしない。

花の王が追跡者ハンターに気付く前に勝負を決めに掛かる霧雨魔理沙だった。

「お、もう帰るのか？」

「おう、ちよつくら探し物をな！」

博麗神社のそこそこ長い階段の脇で、妖精に囲まれながら土いじりをしている花の王を一瞥して高速で飛んで行った。

彗星『ブレイジングスター』

「探し物おめえだよ!!!」

「どわあああ!!!」

霧雨魔理沙は花の王を轢き飛ばしながら大声を張り上げる。理不尽。

「いきなり何しやがるポケエ!?!」

「五月蠅いぜ!長丁場になると思ってた私の決意返せ!」

「知るかよ!？」

「というかお前のような1ボスが居るか!!」

「いきなり何言ってるのお前!? 確かに俺のスペック的にラスボスどころか裏ボスまでこなせますけども!!」

### 閑話休題

—春風と花を統べる絶対王者—

偉大なる大地の支配者にして花の王

「かくかくしかじかで私はアンタと弾幕ごっこがしたいぜ」

「り」

花の王は親指を立てて答えた。

「自分から言い出して何だが理解早すぎじゃね……?？」

「いやあマリサ、遂にお前も戦闘狂の気が出て来たんだなあって」

「戦闘狂で。私はアンタを攻略したいだけだぜ」

「人をギャルゲのキャラみたいにお前……」

「良いからほら、早速勝負しようぜ!」

「元氣キャラかよ。というかそうだな……このままいきなりやるのは俺がつまんないし」

……よし、こうしよう」

「？」

花の王は勿体ぶる様に懐から一枚のスペルカードを取り出した。

「此処に一枚の耐久スペルがある。コイツを取得出来たら本格的にゲームを始めるとしよう」

「……つまりどういう事だ？」

「俺が一ボス兼ラスボスになるって事だよ察しろ」

「アツハイ」

「さあ行くぞマリサア！魔力の充填は十分か！」

「よし！やっつてやるぜ!!」

咲符『風に舞う花咲灰』

花の王から超小粒の弾幕がばら撒かれる。時間差で超小粒の弾幕から小粒弾幕が現れ、更に時間と共に大玉へと変化していき、ある程度大きくなったところで大玉弾幕が弾けて花びら型の弾幕に変化する。

言ってしまうえばその繰り返しだが、花びら弾幕が風に舞う様な不規則な動きで残り続けるのに対し、超小粒弾幕は更にばら撒かれ続ける。あつという間に視界のほぼ全てが弾幕で埋まってしまった。

「うおっ、見とれてる場合じゃないぜ！」

視界一杯に弾幕が広がっても慌てない。霧雨魔理沙は弾幕の当たらない場所を一瞬で見分けて其処に身を潜らせる。

カリカリと自身の身に纏う魔力と花の王の気がぶつかり合う音を聞きながら、花の王を探す。

……だが、

「!?居ない……だど?」

スペルカードが空中に浮遊し、そこから弾幕がばら撒かれ続けるが既にそこには花の王は居なかった。

目を放したつもりは無い。だが事実、其処に花の王は存在しなかった。

タネは簡単である。大玉弾幕で霧雨魔理沙の視界を奪ったほんの僅か、刹那の時間で移動しただけだった。

「んにやろ!逃げやがったな!!」

軽く焦る魔理沙だが、感情を置いておき目の前の弾幕に集中する。

目まぐるしく動き弾幕を躲していくが、後ろから嫌な気配を感じ振り返る。

「つや、ば」

目の前に大玉弾幕が迫っていた。

魔理沙は懐からミニ八卦炉を取り出し……ふと先程の花の王の言葉がよぎった。

『コイツを取得出来たら本格的にゲームを始めるとしよう』

(つまり取得出来なかつたら遊びでも戦うまでも無いってか？上等だ……!!)

「う、オオオオオオオオ!!」

無茶苦茶な飛行。無理矢理なバレルロール。弾幕の熱量が自分の身を焼きそうなほどにギリギリではあったが避け切った。

しかし代償としてバランスを崩し、乗っていた筈から落ちかける。既に筈にぶら下がっている状態だ。

それでも弾幕は止まらない。容赦なく魔理沙に迫っていく。

「まだ、まだアアアア!!」

霧雨魔理沙は恐ろしい事に筈からぶら下がっている状態のまま回避行動を شدした。そして、左右に揺れる反動を用いて筈に戻ったのだった。

制限時間が近いのか、弾幕が咲くサイクルが早くなっていく。

最後の集中。霧雨魔理沙は高速で弾幕の嵐を突っ切る。

カリカリと纏う魔力が削られていく。

制限時間が

終わった。

スペルカードに込められた力を出し切ったのかヒラリヒラリと中空に舞落ちていくカードを取り、勝鬨を上げる。

「うおおっしやあああ!!」

スペルカードの裏には『城で待つ』と短く書かれていた。

STAGEL CLEAR!!

◇

STAGE 2 ↓ 凍てつく王国への道筋 ↓

スペルカードを取得した魔理沙は、気力を消耗こそしたものの魔力は十全に残っている。そのまま先へと進むことにした。

行き先は花の王国。幻想郷1の危険地帯だが行かない訳にはいかなかった。

何より花の王が「城で待つ」とわざわざスペルカードに書いているのだ。ここで一度家に帰る等という暴挙に出た場合の報復行為を考えただけで恐ろしい。

霧雨魔理沙は王国に向かって真っ直ぐに飛んでいった。



—凍れる花の偉大な氷精—

花が咲いたチルノ

「あ、魔理沙」

「チルノか、悪いな今急いでるんだ。また今度な」

霧雨魔理沙は王国へ向かうため、南に向かつて飛行していた。その途中に、頭に大きな花を咲かせたチルノに行く手を塞がれた。

何だか嫌な予感がしつつも、チルノから離れようとする魔理沙だが、そうは問屋がよろさないようだ。

「残念だったね！ここから先に行きたかったら花の王さまの第一のせんべいなアタイに勝つてから進むんだな!!」

「せんべいじゃなくて尖兵じゃねえの？」

「そうともいう！」

「へっ！チルノ程度余裕だぜ」

「ふふん！今日のアタイはひとあしもふたあしも速いってところ、見せてあげるわ!!」

「それを言うならひと味もふた味も違うだぜ」

「そうともいう！」

冷符『アイスフラワーボール』

チルノから氷の弾が重力に従い、バウンドするような軌跡で打ち出される。

「うおう、軌道が読みづらいぜ！」

始めこそ笑いながら回避していた魔理沙だったが、次第に弾速が速くなっていき、弾幕の密度まで上がってきた辺りから冷や汗が止まらなくなってきた。

Break!!

「まだまだいくよー！」

残雪『アイスクライム』

チルノが手を上空に翳すと地面から氷の塊……否、もはや冰山とでも言うべき塊が生み出された。

そしてその氷山の頂点から氷の弾幕が噴き出した。

勢いよく噴出した弾幕は、次第に重力に引かれるように上空から降り注ぐ氷の礫となり魔理沙に襲い掛かる。

更に冰山から時折発射されるレーザーが、冰山にも注意を向けなければならない様に作られている。

「くそつ、チルノの癖に厄介な弾幕を作りやがる！」

「ふふん！花の王さまといっしょに作ったサイキョーだんまくにやられちゃえ!!」

「へっ、この意地悪さはやっぱアイツか！なら意地でも攻略したくなつたぜ!!」

霧雨魔理沙も長年伊達に異変に首を突っ込んではいない。自身の経験と直感を頼りに弾幕をすいすい避けていく

途中、危ないところは多少あつたが弾幕を避けきることに成功した。

Break!!

「ムキー!!じゃあ次よ次!!」

氷花『パーフェクトブルーム』

瞬間、世界が凍りついた。

「っ!?寒っ!!」

あまりにも寒く、手足が震えて動きが遅くなつた魔理沙は、次の瞬間、驚きで凍りついた。

凍える世界の中で氷の花が視界一杯に咲きだした。

ヤバい、と思つたのもつかの間。氷の花の花びらが一枚、また一枚と風に舞い上げられ、ゆつくりと此方に向かつてくる。

弾幕はゆつくりと動くが、避けようにも弾幕以上の遅さでしか動けない魔理沙は既に全方位囲まれ、詰んでいた。

「くっそー!」

魔理沙は悴む手で懐からミニ八卦炉を取り出した。

恋符『マスタースパーク』

ボムを撃つことで現状を打破する一手とした。ついでに厄介なスペルをすぐにも終わらせる魂胆をもって。

チルノは閃光に飲まれた。

「やったか!!」

「ふっふーん！そんな目眩ましなんて効かないわ!!アタイったら最強ね!!」

「嘘だろ?!」

マスタースパークは魔理沙の十八番にして必殺技、代名詞とも呼べる代物である。幾つか派生技が有るとはいえ、シンプルにして豪快なレーザーは大抵の存在を倒すに至る大火力だ。

規格外れの強さを持っているとはいえ、一妖精が耐えられる、ましてや煤一つ付かずにいるなんてあり得ない。

チルノの頭に咲いた花が煌々と光っていた。

「っ！あの花か!!」

「アタイは最強だけど、花の王さまのおかげで更に最強になったわ！さあ魔理沙！春の凍てつく風に凍え死ね!!」

「くそつ、チルノの癖に生意気だぜ!!!」

目の前のチルノは今までとは遥かに格が違う。だが、それでも勝つのは自分だと奮起し、回避ではなく攻撃を優先に動き出す。

相変わらず寒さで震える身体を何とかするために、秘蔵の魔法薬を取り出し一気に煽る。本来なら花の王用に取っておきたかった虎の子だが、温存して勝てる相手ではないと認識を改めた。

ヒートエンチャント!!

身体に魔法の火が灯り、熱さ・寒さに対する抵抗力が高くなった。

ゆつくりと襲い掛かる弾幕はもはや脅威ではない。魔理沙にとつて止まっているに等しい弾幕の間をすり抜けていって、チルノに魔法弾を至近距離で叩き込んだ!

「う、わわっ!」

「コレでも食らえ!ミサ魔理通常弾!!」

次々と弾をチルノに叩き込む。チルノの弾幕展開に合せ距離をとり、収まったところを近付いて撃ちまくる。

もちろんチルノも黙って撃たれるだけではない。スペルカードをコントロールしな

がらも、避けられる弾は避け、直撃しそうな弾は頭の花を使って弾いている。しかしス  
ペルカードの制限時間が終わってしまった。

Break!!

「っ、やってくれたわね……次が最後よ!」

「つていうかお前どんどんキャラ変わってつてねえか!」

満開『アブソリュートゼロ』

チルノの後ろに雪の結晶の様な巨大な花が咲き、その先端から冷気を放つレーザーが  
大量に撃ち出される。

「グレイズすら許さない絶対零度の弾幕よ! 貴女に攻略できるかしら!」

「もう原型残つてねえよ……なっ!」

レーザーの嵐を避ける魔理沙だったが、レーザーに箒の先を掠めてしまった。

「終わりよ魔理沙」

「……!! あつぶね!」

箒の先をほんの僅かに掠めた程度だというのに、魔理沙の乗っていた箒は掠めた部分  
から凍り付いていく。とっさの判断で箒を乗り捨てたが、あと少しでもその判断が遅れ  
ていたら箒を支えていた腕ごと全部凍り付いただろう。

「掠るだけでアウトだとお……なんて弾幕使いやがる……おっと!」

「ふん！ちっぽけな魔法の炎程度で偉大なアタイの花に抵抗しようなんて無駄よ無駄！」

「へえ！ならばコイツならどうだ？私のとっておきだぜ!!」

恋符『マスタースパーク』

魔理沙は自身の信頼する技を撃つ。

「さつき見たでしよ！そんな物アタイには木漏れ日程度でしかないわ!」

「まだまだ！花の王がやってみせたんだ。私に出来ないなんて道理はないぜ!!」

恋符『マスタースパーク』

「スペルカードの複数起動ですって!?!」

「ぶち抜けエエエエエエ!!」

『デュアルマスタースパーク』

マスタースパークをただ2回撃つただけではない。全く同じ軌道でほぼ同時に撃ちました。

一つ目の砲撃の最中に二つ目の砲撃を撃ち出すのだ。見る者が見れば余りの無駄茶茶加減に度肝を抜かれるだろう。

それをやる事に意味など無いのかもしれない。同じ魔力を使うのだつたら一撃に込めた方が良いのかもしれない。無駄茶な運用をして暴発するかもしれない。

だがそれでも魔理沙は実行した。躊躇いなど無く実行した。

「く、あああああああ!!!」

「うおおおおお!!!」

チルノは叫ぶ。あの閃光は喰らってはいけないと。花による防御では防ぎきれないと。

魔理沙は叫ぶ。此処が正念場だと。此処で倒せなければジリ貧だと。

故に両者は叫ぶ。

弾幕に全霊を込めて。

「収束……Freeze・at・MOMENT!!」

花のレーザーを一つに束ね、超低温の極太レーザーで迎え撃つ。

「全力……フルパワーだぜええ!!!」

二つの完全に重なり合った超高温のレーザーを撃つミニ八卦炉にさらに魔力を込める。

二人のレーザーは互いを打ち消し合い、喰らい、弾き合う。

超低温と超高温、最後に勝ったのは

超高温だった。



魔理沙のマスタースパークは、チルノの後ろに大きく咲いた結晶の花の中心を撃ち抜き、崩壊させた。

「……アタイの負けね」

「ああ、私の勝ちだぜ」

花は、散り際こそが華。氷の花は粉々に散り、春風に吹かれ空気に融けていった。

「全く……チルノにここまで苦戦するなんてな」

「ああ、花の王さまの力を借りたのにこんなのに負けるなんて、花の王さまに会わせる顔がないわ」

「つーか……チルノお前よく見たら成長してね?」

魔理沙の目の前には、恐らくチルノであろう存在がいた。

その姿は、先ほどまでの子供のような姿ではなく、魔理沙以上に大人の姿に変化していた。着ている服装から、恐らくチルノであろうとは予測がつくが、チルノにしては言動に知性が伺える。

「ああ……多分頭のこの『魔吸氷晶の花』のせいね。アンタの魔力を吸収して自然エネルギーに変換したんでしょう」

「言ってる意味はわからんが、それがあれば私も大人のレディになれる可能性が……？」  
「欲しいならあげるわよ」

チルノ（推定）は頭の花の花びらを数枚ちぎって魔理沙に投げ渡した。

ドゥルルチューン

「人間にはエクステンドの効果があるみたいね」

「ちくしょう！嬉しいけど嬉しくないぜ!!」

STAGE CLEAR!!



STAGE 3 麗しき城門を守るフェアリーレギオン

チルノから受け取った魔吸氷晶の花をモサモサと食べながら凍った箒を解凍している魔理沙だが『まあ、飛んでるうちに春の陽気で溶けるだろ』と移動を再開した。

春の陽気に活気づいている（調子に乗っているともいえる）妖精や毛玉を撃ち落としながら飛行を続けていると、幻想郷の南の果て、花の王国へと繋がる世界樹が見えてきた。

「いやー、いつ見てもありやあ壯観だぜ」

あの世界樹は幻と実体の境界の支点の一つであり、普通の方法では世界樹の裏側にまわる事は出来ない。普通じゃない方法でも、世界樹が持つ自然エネルギーに太刀打ちする事は不可能だ。

花の王が言うには「世界樹を破壊出来る奴は俺以外だと一人しか居ない」らしい。

そうこうしているうちに世界樹の下にたどり着いた。世界樹は、木と言うには余りにも巨大であり、その太さは妖怪の山よりも遥かに広く、高さは大気圏より遥かに高い。そして世界樹其の物が幻と実体の境界の元となる『幻の結界』を作ることと遠くからは視認することが出来ない為、今まで誰も正確な大きさを測った事が無い。（花の王なら測ることは出来るだろうが面倒くさがってやらないだろう）

魔理沙はふと好奇心で世界樹の素材を研究したらどうなるか試してみたくなったが、手持ちの道具では世界樹を傷つけることすら出来ず、近くに落ち葉や枝が落ちてないか探すも、その生命力のせいか一切そういうったモノが落ちていなかったため澁々本来の目的に移る事にした。

世界樹の下にある小さな洞。だが、人間からすれば大きすぎる巨大な穴を潜ると、其処には別世界が存在していた。

樹の中だというのに明るく、爽やかな風と煌々と輝く日輪、豊かな草花に遠くに見える

る城はまるで此処が幻想郷ではない様にも思える。

只この場に立っているだけで穏やかな気持ちになり、それでいて身体に元気が満ちていくこの場所は正しくもう一つの楽園だった。

ここらで昼寝でもしたくなかった魔理沙だが、目的を思い出して箒にまたがり、飛行を再開した。

高々と空を飛ぶも、天井に頭をぶつけるどころか果てが見えないその広さに感動を覚えたが、目の前の光景に気を引き締めた。

「さあ、ここからが本番だぜー」

目の前には妖精、妖精、妖精。妖精の群れが現れた。

少し話が変わるが、妖精というのはその殆どが掌に乗る程度、或いは人間の幼児程度の大きさがぐらいである。稀にもっと大きい個体も居るが、それは自然から発生した妖精の絶対数が少ない場合、その自然エネルギーをより多く受け取っているからと考えられる。

さて、今度は目の前の状況を見てみよう。ここは世界樹の中、自然エネルギーが潤沢に溢れかえり、かつ内部には雄大な緑の環境が整っている。

つまり……

「お前等デカすぎねえ!？」

そういう事である。

目の前の妖精の群れの大きさは異常だ。小さい者でも160cm。大きい者は2mを超えているだろう。

まだ王国に入っていないのにコレである。そして、王国に近づけば近づくほど、より多くの妖精たちがお出迎えしてくれる事だろう。

「全く、人気者は辛いぜ!!」

魔理沙は片っ端から妖精を撃ち落としていく。妖精にしては異常に硬く、弾幕量もとんでもない密度ではあるがそれでも妖精。強烈なのを御見舞いしてやれば倒せる。

更にはかなりの確率で「B」を落としていくからボムをバンバン撃って突破できた。だが次第に城に近づくにつれ妖精の硬さも格段に上がっていき、弾幕の密度も各個体が5ボス並の量を吐き出し続ける正に地獄であった。ボムを撃ちおわる端から再度ボムを撃たねば魔理沙でもすぐに撃墜されるだろう。

高火力のマスタースパークでも撃ち落とせない程の硬さを持った妖精も現れ出した。

「マジで常識外れ過ぎるだろ!!」

恋符『ワイドマスター』恋符『ワイドマスター』

恋情『ワイドマシンガンマスタースパーク』

既にマスタースパークでも撃ち漏らしが出てくる現状、スペルカードの同時起動に躊

躊躇いは無かった。しかしそれでも妖精たちは隊列を組み、魔理沙のボムに対して被害を減らしている。

「有り得ねえ……いや、花の王が直々に指導してりやあある種当然かもしれねえって思うだけ本当に常識外れだよな……と！」

幸いな事にボムは既に余るほど持っている。問題は魔道具とこの身体が持つかどうかだが……その程度で止まる魔理沙では無かった。

魔砲『ファイナルマスタースパーク』魔砲『ファイナルマスタースパーク』魔砲『ファイナルマスタースパーク』

『満開のマスタースパーク』

身体が弾けそうな反動を受けるが、持ち前の気合いで意識を繋いで極光を放ち続ける。

魔理沙は今、全力以上の技を放っている。自身が放ったとはいえ、目を閉じても瞳の奥を焼かんとする閃光の強さに意識がホワイトアウトし掛けるが、身体を貫く痛みに強制的に覚醒させられる。

持っていたボム分全てを放出し終わった魔理沙は、閉じていた目を開けると視界一杯にいた妖精の群れは全て消え去っていた。

「はっ……はっ……はあ……うわあ……マジか私。スゲエな私。こりや花の王をぶちの

めす時も近いな」

口ではそう言う魔理沙だが、切り札の中の切り札であるファイナルマスターパークを3つ同時に放つ離れ業を成し遂げられたのはひとえに世界樹より溢れる生命力のお陰である。

過剰なまでに溢れる生命力が魔理沙に流れ込み、反動で瀕死になる筈だった魔理沙が潤沢な生命力を消費し続ける事で最後までスペルカードを制御しきれたのだ。仮に博麗神社で同じ事をしろと言われるても魔理沙は3つと言わず2つでも死ねる自信があった。

魔理沙は懐から魔力回復薬を取り出し飲み込む。動く気力は先ほど尽きかけたが、世界樹の中の為か少し休めば元気が戻ってくる。

本音を言えばもつと休みたい魔理沙であったが、先ほどやつつけた妖精たちが何時一回休みから復活するのか分からない以上すぐにでも移動するべきだ。

幸いなことに城はかなり近くに近くに見える。まだ花の王国に足を踏み入れてない事実には愕然としかけるが、落ち込んでいても始まらない。再度箒にまたがって移動を始めた。

「はあ………デカイ門だぜ………」

妖精に襲われる事無く王国への入り口である門にたどり着いた魔理沙。思わず口に

出してしまおう程の門は、高さは2000〜3000m、幅は7000〜8000m位はあるのではないかと思われる超巨大なものだった。

「紅魔館が小屋に思える程だぜ」

紅魔館が小さいのではない。この門が無駄に巨大すぎるだけだ。

門は巨大だが、細部に施されている意匠は実に手のかかっている物であり、かつ普段から手入れがされているようでピカピカと輝いていた。

更にはよく見れば意匠一つ一つが魔法陣としての機能を持っていることが見て取れた。魔理沙は専門ではないとはいえ、これだけの魔法陣を作り上げるだけの魔術師が居る事に驚きを持っていた。もしこの門を七曜の魔女か人形遣いが見たらその魔法陣の緻密さに驚き、意匠一つ一つに魔法陣がリンクしている事に目を見開き、門全体が敢えて歪められて作られている魔法陣であることに驚愕の声をあげ、それが起動待機状態である事に絶叫を上げながら怯え逃げるだろう。

しかし魔理沙はそんな事に気が付かない。「どんな効果があるんだこれ？」とか言いながら門をバシバシ叩いたり、持っているキノコを投げつけたりして何とか魔法陣を起動させようとしている。

見る者が見れば、核ミサイル発射スイッチで遊んでいる子供を見るような目で魔理沙を見るだろう。しかし幸いな(?)ことに此処に魔理沙以外は居ない。否、もう一匹い



た。

ゾワツ!!

魔理沙は自身の直感に従い、飛ぶようにして門から離れた。

その直感は正しかった。

先程まで魔理沙が居た所に巨大な鉄塊が降ってきた。

「ちっ、仕留め損ねたか……。その色と言いすばしっこさと言い、まるで夏場の不快害虫だな」

「誰がゴキブリだっ……て……で、デケエエエエエ!!!??」

巨大な鉄塊は只の鉄塊では無かった。ソレは恐らくブロードソードと呼ばれるような西洋剣だった。だが、ソレをブロードソードと呼ぶには余りにも巨大すぎた。刀身の厚みだけで人間一人分はあり、その刀身の長さは持ち手を視認する事が難しい程に高い位置にある程度の長さだった。

そして何より、その大きなブロードソードを片手で軽々と扱えるほどの大きさを持つ存在がいつの間にか其処に居た。

ソレからはそこそこ離れていても、背中を反らさねば顔を見ることすら出来ない程の巨体は、紅魔館でレミリアがオシャレのつもりで飾っている西洋鎧をより実用的に改装したような、有体に言って騎士の姿をしていた。

「み、み、見越し入道見越した!!」

「……何を言ってるんだ？我はそんなチンケな妖怪じゃない」

「やっぱか！背中の中の羽を見てまさかと思ったが……そのデカさで妖精はねえだろ!!!」

——太古に息づく雄大にして偉大な妖精大隊長——

風間・グラウンドドラゴンテイル・ジャイアント・ソーラーナイト・フルプレートアーマーキングガード・弐番大隊隊長・グラスティティア・ド・パンゲア

「名前クソなげえ!!」

「ふん、貴様等ゴキブリと我等では命名文化が違う」

「ゴキ言うな。それにしても名前が異常すぎるだろ」

「我等が名前を授かる時とは生まれた時ではない、偉業を成した時に我等が王から賜る。そして何度も偉業を成せばそれだけ新たな名前が賜るのだ」

「つまりそれだけ凄いいことしたって自慢か」

「自慢ではない。王より下賜された名を名乗らぬ不敬者ではないだけだ」

「お前それ花の王は授けた名前覚えてんのかよ」

「……」

「……」

「貴様の様なゴキブリが我等の国に入る事など許されぬ。直ちに去れ」

「(思いつきり話反らしやがった)」

「去らぬと言うのなら此処で花の養分と成るが良い!!」

「はっ! 当たり前判定の塊みたいな図体で私に勝てると思ってるのか!」

地天『大地竜の天地創造プレス』

グラスティティアは剣を地面に叩き付けた。ただそれだけで世界が震えたかのように轟音が鳴る。仮に地面の上に立っていたらそれだけで1ミスになっていただろう威力の地震は、空を飛んでいた魔理沙にも空震という形で影響を与える。ビリビリと腹の奥が痺れるような震えに魔理沙は真つすく飛ぶことが出来なくなった。

それだけにとどまらない。砕けた大地から口を開けたドラゴンの頭の様な岩がせり出してきた。

そして、その口から爆発するかののような勢いで火砕岩と溶岩、噴煙が飛び出した。

「ばっ!?! こんなん食らったら一発でお陀仏だぜ!!」

「構わん、むしろゴキブリにはちようどいいだろう」

「ゴキブリには熱湯じゃなく洗剤って相場が決まってるだろ!!」

「洗剤は環境を荒らすからこの国では禁じられている」

「火山噴火させる方が環境荒れねえか!!」

空震の所為で真つすぐ飛ぶことも出来ない魔理沙はフラフラになりながらも必死で火山弾を回避する。直撃すれば死。もはや弾幕“ごっこ”とは呼べない戦闘に魔理沙は息を荒げるが、朦々と立ち上がる噴煙を吸うリスクに気が付き、息を止める。しかし息を止めたまま火山弾を回避し続けるほどの集中力を保つことは魔理沙には出来ない。魔理沙は咄嗟に懐から魔法薬を取り出し、自身に振りかけた。

ウオーターエンCHANT!!

魔力で出来た水の膜が魔理沙を包む。

本来なら水の膜は相手の弾幕を反らす事で避けやすくする効果を持たせる予定だったが、自身の視界を遮り弾幕ごっこにはあまり向かなかった事で改良予定のシロモノだった。だが今ばかりは噴煙と溶岩の熱から自身を守る盾となり、世の中何が幸いするか分からんもんだなと改めて思う魔理沙だった。

だが、事態はまだ好転していない。自身の視界を遮っているのは変わらないし、この程度の水の膜では噴煙はともかく、火山弾の直撃は防げない。精々直撃したら骨すら残らない程度の威力から挽肉になる程度に威力減退するくらいだろう。人間なら死ぬ。妖怪なら90%死ぬ。

噴煙と水の膜で殆ど何も見えない視界を何とかするため、さらに高度を上げて飛行する事にした魔理沙。相変わらずフラフラと飛ぶが噴煙から無事に抜けることが出来た

……が。

「読めているぞー！」

「はあ!?!まてまてまて!!！」

グラスティティアはその巨体から想像だに出来ない俊敏さを見せ、魔理沙より先に遙か上空で跳躍して待ち構えていた。そして重力に従う様に降下し、その手に持つ超重量の剣を魔理沙に向けて振り下ろす。

「死つ……マス……彗星『ブレイジングスター』アアア!!!」

魔理沙は咄嗟の判断で一気に加速し、振り下ろされた剣とすれ違うようにして避ける。ギリギリを避けた所為か、剣圧で身体が吹き飛びそうになり、乗ってる箒もメキメキと嫌な音を立てるが無傷で切り抜けることが出来

「まだだ!!」

グラスティティアが地面に着地した瞬間、振り下ろしていた剣を反転させ、一気に斬り上げた。

移動方向に対して後方に噴射しているとはいえ、マスタースパークの閃光を切り裂きながら魔理沙に追いつかんとする剣を見て肝を冷やした魔理沙だったが、辛うじて剣の届く範囲から逃れられた。

魔理沙にとって幸運だったのは咄嗟の判断でマスタースパークによる迎撃では無く、

ブレイジングスターによる回避を選んだことだ。仮にマスターズパークで迎撃していた場合、巨大なブロードソードによってマスターズパークごと魔王／里沙になっていただろう。

だが魔理沙にとって不幸だったのは、ブレイジングスターの後方噴射を受けても傷がつくどころか一切怯みもなかったグラスステイティアを見たことだろう。

「はあ……マジか。アレで怯みもしないとかどうやって倒せばいいんだぜ……」

「……ふん、飛んで制空権を得たつもりか？無駄だ。我が前にゴキブリも鳥も同じ事だ。地に這いつくばれ!!」

落天隆起『大地神の空中散歩』

「もう本当に何でも有りか!!ぐえっ!」

天が落ちて来た。否、大地が魔理沙の居る高さまで盛り上がったのだ。結果的に魔理沙は地面に叩き落とされることになった。

「大地のある所に神が立つのではない。大地の神が立つ所その位置こそが大地のあるべき所だ」

「ざけんな!お前妖精だろ!!そんなバカげた話聞いた事無いぜ!!」

「愚かな……私は許可なく大地の化身を名乗るトカゲを殺し、一時的に大地の神と同じ権限を持つ誉を我等が王から賜った」

「それマジモンの大地の化身じゃねえの!?勝手に名乗ってるの花の王じゃねえの!」  
「貴様、先ほどから我等が王に無礼であるぞ!」

グラスティティアは持っている剣を横薙ぎに振るった。

大地を一掃する魔理沙は今度こそ魔王／里沙になると思われたが

「くっ!?緊急脱出だぜ!!」

スカートの中から赤と白のまだら模様のキノコと魔法薬を取り出し、その二つを地面に叩き付けた。するとキノコは急成長し、魔理沙ごと高く高く伸びていった。

余りにも急に成長したせいで、グラスティティアは勢い余って剣を強く地面に突き刺してしまった。

「チャンスだぜ!私の本気だ、喰らえ!!」

ファイナルスパーク

魔理沙の弾幕“ごっこ”ではない本気の一撃。しかしそれでも“この程度”なら目の前の存在には所詮遊びに過ぎないであろう威力だが、相手は自身の得物を地面に突き刺して隙だらけ。今なら、今なら通ると確信して

あっさり防がれた。

「……ふん、我にこの盾を使わせるとは。人間にしてはよくやった方だ」

「……マジ……かよ」

何処から取り出したのか、グラステイティアはその身の丈と同じくらいの大盾を装備していた。その大盾は剣より遥かに分厚く、鬼ですら持てない程の重厚感を放っていた。

大地に突き刺さっていた剣を引き抜き、装備しなおす。剣と盾を持ったその姿は様になつていくことから、この姿こそが本来の戦闘スタイルだったのだろう。

スperlカードの制限時間が過ぎたのか、隆起した地面が元に戻っていく。

「……む？傷が……ほう、人間が日輪の盾に傷を着けたのはお前で2人目だ。光栄に思え」

「は、はは……笑うしかないってこういう事なんだな……」

魔理沙の本気の攻撃。それが相手にとつて多少脅威程度でしか無い上に何度撃つても同じように防がれる未来しか見えない。

何度も、何度も命の危機に瀕した魔理沙は、心が折れる音が聞こえた。こんなどうしようもない相手に命を掛けるなんてばかばかしい。命あつての物種じゃあないか。そもそも私が命を掛ける必要なんて無いじゃないか。

アドレナリンが切れたのか、朝から身体を無茶苦茶に酷使した代償で全身から痛みを



感じる。

そうだ。もういいじゃないか。頑張らなくても、すべていつも通り。今まで何度も才能や種族の壁を前に挫折を味わった。今日もまた挫折するだけだ。いつも通り。結局はいつも通りだった。

「さて、とはいえだ。この盾は我等が王から下賜された物。傷を着けた代償は高くつくぞ……！」

「ひっ……！」

満開『開闢以来の偉大大陸最硬の花』

剣を地面に突き刺し、気を送る。大地から壁の様な弾やレーザーの嵐が立ち上った。それはまるで魔理沙の逃げ道を塞ぐように展開された。

「ハハハハハ!! さあ抵抗してみろ!! さもなくば無様に死ぬだけだ!!!」

地面に剣を突き刺したまま魔理沙に向かって突進するグラスティティア。構えた盾で弾幕を防ぎつつ押しつぶす心積りの様だ。

「ひ、あ、うわ、ああああ!!!」

魔理沙は眼前に迫った死の恐怖に遂に精神が限界を迎えた。

「ああああああ!!!」

恋符『マスタースパーク』

恐怖のあまり錯乱しながらマスタースパークを放つ。死にたくない。もう駄目だ。諦めろ。逃げられない。怖い。

思考がぐるぐると回転するも一向に進まない。だが身体に染みついた動きは混乱しながらも正確無比な射撃を可能にした。例えその攻撃が通用する訳無いとしても……

しかし魔理沙の放ったマスタースパークは突進してくるグラスティティアの盾の防御を抜け、その兜に直撃した。

「ガアッ!? な、なんだ!!」

今まで魔理沙のブレイジングスターの噴射や本気のファイナルスパークでも怯みもしなかったグラスティティアだが、マスタースパークが兜に直撃した事により留め具が弾け頭部が露出してしまった。

そして兜が飛んで行ってしまったことで思わず動きを止めてしまったグラスティティア。その頭には花が咲いていた。

「つーく、マズい……我が花が露出してしまった……! 兜、兜は何処だ!!」

グラスティティアは攻撃を中断してまで兜を探している。

魔理沙はその様子を……見ていることしか出来ない。

「う、ああ……うう……」

錯乱状態に陥ってる魔理沙では現状に対してただただ縮こまることしか出来ない。

戦わなければと身体は思う。

逃げなくてはと精神は思う。

誰か助けてと脳は思う。

魂と魄がてんでバラバラ。

動かなくては死ぬというのに、戦わなくては死ぬというのに、勝たなければ死ぬというのに。

身体と精神がついて行かない。

今でも脳は都合のいいヒーローが現れてくれることを期待している。

幼い時の様にぼろぼろと涙がこぼれた。

また泣いてんのかお前、しょうがない奴だぜ。

ほら、座り込んでも何も始まらねえだろ。しっかり立てつての。

あーもー、泣きながらで良いがただつつ立つてると妖怪に食われるぜ。ほれ。

いつか幻想郷中を飛び回りたいんだろ？だったら自分の身は自分で守れるようにならなきゃな。

全く、そんな調子じゃ何時まで立つても里の外で暮らす事なんて許可できねえぜ？ほら、常に頭を動かさせて言ってるだろ。

怖い時でも、泣きたい時でも、最後まで頭を動かしてる奴だけが生き残ることが出来るんだぜ。

はあー。わかったわかった。こう見えて俺は子供をあやすの上手いんだぜ？必殺ナデポ神拳を喰らわせてやるぜ。

落ち着いたか？じゃあもう家まで帰れるな。

……んだよ。本当にしようがねえなあ。わかったわかったよ全く……。

ほれ、おまじないだ。お前がまたベソかいてる時にこうして撫でてやるよ。

ああ？俺が居ない時だあ？自分でなんとかしろ。

ああ、泣くなつつの。しゃーねえー。居ない時でもまあ、大丈夫だ。俺はいつでもどこにでも居るからな。

「だが撫でるだけだ。困り事は自分で何とかするんだぜ。分かったなアイカ。」

ああ、マリナ。え、あ、そうそれ。

「う……………ぐずつ……………嘘……………つき……………」

嘗ての記憶がフラッシュバックする。まだ自分が誰かに守られてなければ生きることが出来なかった時の記憶。

無鉄砲で弱かった自分は何時も決まって座り込んで泣いていた頃の記憶。

もう、もう自分は弱くない。過去の弱かった自分とは決別した。

だというのに。

「私は……………変わっちゃいない……………何も……………」

立たなければ。立てない。

動かなければ。動けない。

涙が止まらない。

止めなければ戦えないのに。  
頭が動かない。

「ちくしょう……チクシヨウツ……！」

あれから成長した気でいた。

あれから強くなった気でいた。

強くなった自分を見て欲しかった。

なのに。

なのに。

本当にしようがねえ奴だなあ。お前の泣き虫はいつになったら治るんだ？

「っ!？」

俺のナデポ神拳が炸裂するのは、さて、どれくらいぶりかな？俺からすりやあつい昨日の様に思えるんだが。

「あ……………う……………」

……………あ、昨日ケロ子にやったばっかだったわ。そりやあ昨日だわな！

「は……………なの……………お」

ほれ、前も言っただろ？最後までちゃんと頭動かせ、生き残る奴つてのは最後まで頭

動かしてんだから。

「う……………ん……………」

さあ、落ち着いたら。気張ってこいや魔理沙。

「……………あ、待って！」

「……………居ない……………」

振り向いてもそこには誰も居ない。だが確かに頭に余韻は残っている。温もりも感じられる。

死の直前にみる走馬燈ではない。幻覚でもない。夢のようだったが、幻想のようだったが、確かに其処に居たのだ。

「……………へへっ」

花の王は嘘つきじゃなかった。今はただそれだけでいい。

バラバラだった身体と精神はしっかりと繋がっている。

傍に落ちていた箒を握りしめる。

脚に力を入れ立ち上がる。

今度こそ一人で立ち上がる。

前を見据える。未だに視界は涙で歪んでいるが、もう大丈夫。頭は動いているから。



目を閉じて涙を軽く絞る。目を開けばそこには巨大な妖精が此方を見据えている。

「よくも我が兜を……その命をもって償え!!」

「はっ! デカいのはその身体だけにしとけよ! 口までデカいとはしたないぜ?」

「貴様あ!!」

魔理沙に向かって飛びかかるグラスティティア。剣を振り弾幕を放ち動きをけん制してくる。怒りに任せるようで頭は回っているようだ。

魔理沙は縫うようにその弾幕を潜り抜け相手の顔に近づいていく。だが今度は盾が振り回され、危うくグレイズするところだった。あの超質量でグレイズしたらまずもってかれる”のは目に見えている。だから……”と言う訳ではないが、

「これでも喰らいな!」

爆薬『マジカルマジックマッシュルーム』

魔理沙はスカートの中からキノコと液体が入ったフラスコを大量に取り出し投げつける。

如何にも”危険です”と主張せんばかりのキノコと液体の色に眉を顰めたグラスティティアは剣を振り払いフラスコを斬り落とした……が

「FIRE★」

「なっ!? 猪口才なっ……!」

剣に当たった瞬間フラスコが爆発を起こし辺りに白い煙を大量に撒き散らす。

「煙幕かつ!?ぐつ、ゴホツ」

「卑怯なんて言うなよ! お前も同じ事したんだからな!」

「不愉快つ……!だがこの程度の煙など!!」

グラスティティアは剣を地面に突き刺し、気を送り込んだ。すると先程の焼き増しの様に地面から大量の弾とレーザーが撃ちだされた。その際の爆風で煙幕は吹き飛んだ。

「ゲホツ、フン! 大したことは無いな!」

「そいつはどうかな!」

僅かな隙を突いて死角に移動した魔理沙は留め具の外れた兜を至近距離で爆撃する。

「喰らえ、ミサ魔理通常弾!」

「なっ?!? 貴様またっ!!」

すると兜が吹き飛び、頭の花が再び露出した。

「ぐつ 貴様あ!! 離れろ!!」

「おいおい! そんなに頭の花に触れられるのは嫌か? 安心しな! 人の嫌がる事は進んでしなさいって教わってるもんでな!!」

「安心する要素一つも無いぞ?!」

「よそ見してていいのか? ガンガンいくぜ!」

魔符『スターダストレヴァリエ』

星の弾幕をまき散らしながら移動する魔理沙。

グラスティティアは頭の花に直撃する物を盾で防ぎながらも魔理沙を眼で追い続ける。

「其処だ!!」

魔理沙に向かって剣を振るう。剣は魔理沙を切り裂いた。

「はっ！生意気な人間め！」

「おいおい！何処に剣を振ってるんだ？私はこつちだぜ？」

恋符『マスタートースパーク』

「何い！ぐあああああ!!」

遂に魔理沙の強力な一撃がグラスティティアの鉄壁の防御を抜いて叩き込まれた。

「あああああ……ぐつ、馬鹿な……確かに先程切り裂いたはずだ！」

「へっ！世界樹に引きこもりきってる妖精のお前に良い事を教えてやるぜ！私が住んでる魔法の森にはあるキノコが生息しているんだが、そいつの胞子を吸うと耐性のないヤツは幻覚を見るというシロモノなんだぜ！」

「それが如何した！ゴホッ」

「まだ分からないか？お前がさつき吹き飛ばした煙幕だが、その中にはそのキノコの胞

子がたあつぷり入ってたんだよ！」

「何っ!!？」

「お前はそうとも知らずがつつり胞子を吸い込んだんだ！耐性が無ければ妖精にも効く事は実証済み！流石にお前ほどデカいやツには試したことは無いが、十分効果があるみたいだな!!」

「ゴボツ、貴様……卑怯だとは思わないのか!!」

「全身フル装備で弾幕弾く奴に言われたくないぜ！さあこれでお終いだ!!」

恋符『マスタースパーク』 恋符『マスタースパーク』

『デュアルマスタースパーク』

魔理沙は威力と貫通力を特化させたスペルカードの同時起動、否、スペルカードの“合成”でトドメを刺すべく魔力を溜める。

「ゴボツ、ゴホツ……ふ、幻覚に惑わされるなど二流に過ぎない……一流は心眼で敵を射抜く物よ」

グラスティティアは目を閉じ、音、熱、気配、そう言った類のもので魔理沙の居場所を割り出すつものり様だ。

魔理沙のデュアルマスタースパークが発射された。

「……見切ったっ!!」

一閃。

重く、硬い剣による神速の一閃はデュアルマスタースパークだけでなく、その太刀筋上の全てを切り裂き、世界樹の内壁に当たり止まった。

「ゴボツ……ふう、人間、貴様もまた強敵どもだった……」

「そりゃ結構な事だぜ」

「……!!? 何故貴様がそこに居る!!」

「さっきのは囮、本命はコイツだぜ!!!」

魔砲『ファイナルマスタースパーク』

「ぐああああああああああ!!!」

巨体の騎士が地面に倒れた。あまりの重量に地面が軽く沈み込んだ。

「……コンティニューとか言い出さないよな?」

「ゴボツ……ふん、此処まで完膚無き負け具合でリトライなど言えるか」

「そりゃよかつたぜ……流石にもう続ける気力は無いぜ……」

「人間、貴様の名前を教えろ」

「あー? 私は霧雨魔理沙だぜ」

「そうか、霧雨魔理沙。霧雨魔理沙か」

「ゴボツ……霧雨魔理沙。貴様は見事我に勝ち、王国に入る資格を得た」

「これでまだ駄目って言われたらもうどうすりやいいもんか……」

「言うか………とりたいが、事情が変わった」

「何イ!？」

「……うむ、我も不本意と言えば不本意なのだがな……」

「体験版は此処までとなります。続きは製品版をお待ちください」

「いやどういう事だよ!!?」

「だから言っただろう!不本意だとな!だが仕方ないだろう!我は我等が王の直々の命令に逆らえぬ!!」

「おま!?!もう王国まで目と鼻の先だつてのに此処で帰れつてか!!?」

「喧しい！貴様は此処まで時間と文字数掛け過ぎなんだよ！！今もう1万8千字過ぎて  
るんだよ！長すぎて辛いんだよ色々！！」

「時間はともかく文字数って何！？1万8千字過ぎてるってどういう事！？お前なに目線  
の台詞なのソレ！？」

「喧しい！貴様の出番はこれで終わりだ！さっさと神社にでも帰って次の伏線でも  
張って来い！！」

「クソツ！！やっぱ花の王が関わると色々理不尽過ぎるぜ！！」

「分かってた事だろう！！」

「イエス！！」

STAGE CLEAR！！



～博麗神社～

「くそな感じの冒険だったぜ……」

「何その消化不良。斬新すぎるわ」

「世界樹ねえ。そんな面白い場所があるならもつと早く言いなさいよ」

「あー……レミリア、アンタは行かない方が良いわよ。あそこは太陽が二つあるみたいな所だし、生命力が満ち溢れてるから不死者には滅茶苦茶相性悪いわよ？」

「フフン。そんな程度で怯む私じゃないわ。パチエの力も借りれば簡単でしょ？」

「あそこよく花の王が出没するぜ？」

「パチエばかりに無理させるのも悪いからね。仕方ないから止めといてあげましよう」

「素晴らしい掌クルー」

「ですがその妖精……妖精？には興味ありますね。仕事を仕込めば館の雑務が楽になる可能性が……？」

「そう言えばアンタントコ植物園になってるんだっけ。掃除大変そうね」

「大変……ええ、大変よ、そう。なんだかよくわからないしよくぶつがからだんからにげるしどろだらけになるしめいりんはやくにたたないしきをつけないとぼくはつするし」

「OK。咲夜、落ち着け。今度手伝いにいてやるから……な？」

「本当!?!本気なの!?!言質取ったわよ魔理沙!!!」

「キャラ崩壊著しいぜ……」

「世界樹ですか……ゲームで言えば絶対レアアイテムが置いてあるところですよね！」



「ゲームってな分からんけど……あそこは幻と実体の境界の支点の一つだからかよく外の世界の物が流れて来る……らしいぜ」

「らしい……？」

「正直、今日みたいな事が無い限り誰も近づかないぜ。なんせあの辺は凶悪な妖精以外にも風見幽香がよく出没するからな」

「幽香さんがですか？なんで幽香さんがいると危険なんですか？」

「あ……わりい、言葉が足りなかったな。あそこに出没する風見幽香は滅茶苦茶気が立ってる時の風見幽香だからな」

「ああ……」

「……しかしもしかしたらやばい事しちゃったかもねえ」

「ん？何がやばいんだ萃香？」

「考えてもみなよ。今回魔理沙が異変解決って名目で城に乗り込もうとしただろ？」

「失敗したけどな」

「つまり、このめっちゃ春な状態は異変なんだよ」

「言ってる意味が解らないです」

「だからあく、今のアイツはこのめっちゃ春な状態を異変って事にして、その黒幕って事なんだよ」

「あゝ」

「え、ええ？ちよつとなんで納得してるんですか？」

「つまりね、魔理沙がこの……めっちゃ春な状態を異変って事で異変解決に赴いて、花の王を黒幕に置いたから誰かが花の王を倒すまでこのめっちゃ春な状態がずっと続くって事よ」

「異変解決に向かう！今異変が起きてるって事なのよ」

「え、ええええ……そんな屁理屈みたいな……」

「「花の王だからよ（な）（ね）」「アツハイ」

「は……面倒な事になっちゃったわねえ……」

「スマンな！」

「もう魔理沙退治して異変解決って事にしちゃおうかしら。花の王異変って事で」

「それだと毎年と言わず毎月異変解決で誰かしら退治せなあかんことになるぞ」

「それもそうだった……」

「貴方達の中で花の王様はどういう扱い何ですか……」

「「自由奔放」」「えええ」

「自由というか……何でも有り？」

「頭のネジ100本単位で取れてるわよ」

「永く生きてるからか、正気じゃないなあれは」

「少なくとも私らが想像つく出来事は全部やっているイメージ」

「そ、想像つく?」

「一時期増えてたこともあつたねえ……完全に」「増えるんですか!?!」

「アイツ一人で月に歩いて行つたらしいぜ?」「地続きなんですか?!」「んなわけないだろ

……ないよな?」

「地獄が花で埋まつたらしい」「らしいじゃなくて本当の事よ」「地獄埋めちゃったんですか……」

「昔、魔王とか呼ばれてた侍の頭に花刺してたぞ。『生け花の真髓を教えてやる!!』つつつて」「それって織田の……」

「そう言えばあの方つて子供居るのかしら?」

「子供オ? 養子的な奴なら何人も見た記憶があるが」

「霊夢なんか最新の養子だよな」

「なんか癪に障る言い方ね」

「養子じゃなくて、誰かとの間に授かった子よお」

「……」

「……」

「……」

「萃香、アンタアイツの浮いた話の一つでも聞いてないの？」

「いやあ……アイツ女に構うより花に構ってる奴だろ？無い無い」

「つまり相手は必然的に花。花妖怪。あつ」

「……」

「……」

「……この話は無かった事にしましょう」

「それが良いわね」

Congratulations!!

AllStageCLEAR!!!

And…

ToBeContinued…?

◇

く花風城・玉座の間く

「幽々子から聞いたのだけど」

「はい……」

「貴方、西行妖を睽かせようとしたそうね」

「未遂！未遂だからセーフ!!」

「貴方ならアレを一目見てどんなシロモノかはわかるでしょう？」

「……」

「分かるでしょう？」

「ハイ」

「なんで封印を解こうとしたのかしら？」

「いやああの暴食の悪魔に口八丁手八丁で騙されて」

「それでも一目見てどんなシロモノかはわかるでしょう？」

「……」

「分かるでしょう？」

「ハイ」

「それを睽かせたら幻想郷がどうなるか分からないでもないでしょう？」

「……いやあ、ちよつとくらいなら良いかなーって」

「あゝあゝ？」

「なんでもないです」

「そもそも元はと言えば貴方が自分で植えた花をしつかり管理してないからこうやって面倒な封印をする羽目になってるのわかってる？ わかってないでしょ？ 貴方馬鹿なものね。配下の妖精の方が記憶力良いわよね」

「お前億年生きてると記憶力なんぞガバガバや普通「黙れ」はい」

「理解してるの？ 貴方の所為で幻想郷はいつ爆発するかもわからない不発弾だらけよ？ 幻想郷に限らず近界の各地も似たような状況なの。いい加減に放置するんだったら花植えないでもらえないかしら」

「つまりそれって目の届く幻想郷なら自由に植えていいってお達し！ 「殺すぞ」ワシ号泣」

「大体ねえ、貴方は昔つかからそう言う放任主義な所が……クドクド」

「（助けてえーきつき、今はお前の説教が若干恋し……いや、やっぱ説教はやだなあ。10秒で済む説教にしてくれないかなあ）」

「聞いているの!?!」

「NO!」

「殺す」

「殺されぬ！」

「……」

弾幕決壊若干死寄りの境界特急地獄送り列車

『花枯らしの決戦弾幕結界』

「死ぬう！」

「死ぬ。死ぬ。死ぬ。死ぬ……」

「ああやべえ八雲がついに壊れた。狐ー！狐ー！早く回収してー！！」

（だが断る！！）

「おいゴラア！！城が消し飛ぶだろうがあ！はよ持つてけ！！」

（そんな殺意満々の弾幕の中に入れるか！！）

「大丈夫行ける出来る頑張れ頑張れ気持ちの問題だどうして諦めるんだそこで！！」

（気持ちでどうにかなるか阿呆！！というかなんでよそ見しながら回避できるんだお前は！！）

「は！！」

「気持ちの問題だ！！」

（そんなわけあるか！！？）

「今日という今日は殺してあげる！さあ念仏をあげろ！！」

「俺仏教徒違うし！空飛ぶスパゲツティーモンスターをシバキ倒す教徒だし！」

（なんだそのありがたみがこれっぽっちも感じられない宗教!!）

「ちなみに開祖はルーミアだし！」

（まるで意味がわからんぞ!!）

「殺すツ!!あゝ ツ、ぶっ殺してやるツ!!」

「ぎいーやー！遂に八雲が妖怪面全押し顔にいー!!」

（……もう本当になんなんだお前、随分余裕あるな）



昔話は好きじゃないんだけど、まあ酒の席つてことでb  
y妹紅

冥界の花見大会より十数日経った。

未だに幻想郷中は春真つ盛りで（季節的に正しくはあるのだが）そろそろ春の陽気に当てられた妖怪が一暴れしそうになっている。

既に人里ではあちこちで花見の宴会が開催され、連日連夜飲み騒いでは全員倒れるま  
で続いている。暖かくなったとはいえ、倒れるように外で寝たせいで里の大人たちは風  
邪をひいた。バカは風邪をひかないというが、風邪をひいたのは揃ってバカばかりだっ  
た。

そんな中、至つて健康体であるのに死にそうな顔をしている二人がいた。一人は練り  
歩く薬売りこと鈴仙・優曇華院・因幡、また、人見知り妖怪ともいう。そしてもう一人  
は妖怪歩くもんぺこと藤原妹紅、通称モコモコ。

何故二人がそんな死にそうな顔をしているかというところ、原因はやはり花の王だった。

妹紅は、かぐや姫こと蓬萊山輝夜と競うように異変解決に赴き、何度も死にながらも  
王国を突破するも玉座の間への門で詰み、すごすごと帰る羽目になったからだ。更には

お土産の様に揃って頭に花を刺され、気力という気力を根こそぎ持つてかれ、回復したのがつい先ほど。輝夜に至ってはまだ寝込んでいる。

鈴仙は、そんな輝夜の看病に付きっきりの永琳に代わって薬剤の調合をしているが、そこで里の宴会続き。連日の様に風邪薬と二日酔い治しの薬を大量に調合、人里まで運び、大勢の人間に囲まれ薬を売り捌く。更には薬の原料を採集する為にあちこち飛び回る必要もあり、ここ数日は寝る時間が無く完徹続きだった。てゐにも手伝わせばと考えたが、肝心のてゐはこの春の陽気に当てられたウサギたちの面倒に掛かりきりで、ウサギの異常繁殖を防ぐために同じように完徹続きらしい。

お互い、おのれ花の王とは思うが天に向かつて唾を吐くような真似はしない程度にはまだ理性は残っている。妹紅はストレス解消の為、鈴仙は眠らなくても疲れない薬の効果が抜けるまでの時間潰しの為、夜雀の屋台に向かい、そこでぼったりと出会った。

「あ」

「お」

「……………」

「よう、元氣……じゃなさそうだな」

「そういう貴方もね」

「あ………これからミステリアン所に行くけど、お前は？」

「奇遇ね、私も夜雀の屋台に行くつもりよ」

「そうか……そうか。お前もあれか、この春に苦勞してるクチか」

「ええ……。とりあえず今は一段落したところで、漸く休みらしい休みが取れるところよ」

「お前も大変だな」

「姫様から聞いているわ。貴方も結構大変だったらしいわね」

「大変なんてもんじゃねえよ……。あれほど理不尽な目に遭つたのは久々だよ……」

「溜め込んでるわね……」

「思い出したら腹立ってきた。よし鈴仙、一緒に吞もう」

「いいけど……今日はあの半獣は居ないの？いつも一緒になのに珍しいわね」

「別にいつも慧音と居るわけじゃないんだが……慧音はあれだ、昨日の花見で風邪をひいてね」

「アレもバカの一人だったか……まあいいわ。そういえば貴方と二人で吞むなんて初めてね」

「あー、いつも他に何か居るからな」

二人はえつちらおつちらと歩き出した。暖かな夜にふはふはと風が吹いた。



「春のくままよく桜咲きく誇るのく春はく歌うのく終わらないくうたをく♪

あら、何か珍しい組み合わせね。いらつしやい」

「よう、とりあえず一杯。それとウナギくれ」

「はいはいく」

夜雀の屋台。いつも通り誰も座ってない席に腰を落ち着ける。

「喜べく今日はく花酒あるわよく」

「本当!?今日はついてるわね!」

「はくい、花酒二人前く」

おのれ花の王とは思うが、酒に罪はない。花酒は貴重だが、たまに花の王が大量に市場に流す時があり、比較的簡単に手に入れられる。まあ、すぐに幻想郷の吞兵衛の腹に収まることになるが。そして、花の王が博打でスツた時に良く市場に流れる気もするが、多分関係ないだろう。

花酒はとても素晴らしい。香りは芳醇だというのに飲みやすく、水のように飲める。それでいて誰でも気持ち良く酔えるとあっては、酒好きの誰もが求める納得のシロモノであると言える。

「そう言う訳で今日のお代は全部花の王にツケといて」

「ええ……そんな財布代わりみたいな扱い恐れ多「いいわよ」軽いわね！」

「いいのいいの。どうせアイツ自分がツケにした分なんて細かく覚えちゃいねえって」

「多少ならボツてもばれないわ〜♪」

「ええ……それ……えええ……？」

普段から花の王に對しどういふ扱いなのが見て取れる。

「それに私らがこうしてストレス抱えてる原因はアレだからな。多少仕返してもバチ当たんねえだろ」

「……そ、そうね」

哀れ花の王。幻想郷において比較的まともな方の兎からもそんな感じで扱われるなんて……まさに自業自得。

「例の〜花酒よ〜」

「お、来た来た」

「ん……盃に注いだ瞬間のこの香り……やっぱ良いわね」

「んじゃ、花酒を飲める幸運に」

「乾杯」

「わらしもええ、ふきえこんあことやつてあいおよ。さととおおこあいにあへんあめえみあええうひ……えいえんへいあえのいひあえひもあくあないのお!!」

（私もねえ、好きでこんな事やつてないのよ。里の男達に変な目でみられてるし……永遠亭の行き帰りも楽じゃないのよ!!）

「何言ってるか全然分からん」

「えもわあひはがんあんあいとえいえんへのひよーあんがさあつりやうやああの！おひひよーさがさととおえらいはんにあえあえるなんへゆうへないわ！」

（でも私が頑張らないと永遠亭の評判が下がっちゃうじゃないの！お師匠様が里のお偉いさんに舐められるなんて許せないわ！）

「そんな日もあるわよ」

「らいはいあんなのおはなのおーあ！おひひよーさあおこおろーへふきあんへひよ！さつあおふつふへばああるー!!」

（大体何なの花の王は！お師匠様の事どうせ好きなんでしょ！さつさとくつつけ馬鹿ヤロー!!）

「まるで意味が解らんけど花の王を罵倒してるのは伝わった」

「花の王ね。思えば私が生まれた頃からの付き合いくよ」

「へえ」

「あの時からまるで変っちゃなくいくわ〜」

「だろうねえ……私でもそう思うもん」

「あーおーおひひよーさあおおひひよーさあお！あおアホあふいはあはっはほおひたおへあいいはいーふふひへほほっひやえはいっはっよいっはっよー！」

（あーもうお師匠様もお師匠様よ！あのアホが<sup>ビ</sup>■■■■さっさと<sup>ガガガガガガガガ</sup>■■■■ばいいのに  
ークスリで襲っちゃえば一発よイツパツ！）

「コイツかなり下品な事言ってるね？解らないけど」

「そうね、確かに〜あのヒト結構魅力的だもんね〜」

「え、今の解かったの女将？」

「花の王も男なんだから一発ヤツちまえばコッチのモノよって言ったのよ」

「絶対言ってるねえだろ」

「ふふっ、でもそうね。あのヒト天然のタラシな所あるでしょ？だから意外とコロッと落ちちやう娘は結構いるのよ〜」

「はあ？無い無い。あんな種無しやる気無しがモテる訳無いでしょ」

「あら？その台詞……もしかしてもう花の王に挑戦済み？」

「焼き鳥にしちまうぞ……！」

「うふふふ勘弁〜♪」

「あんあほおく……はっはほふっふいひやえほ……そいはらあきあめらえうのく……」

「!？」

「あらあ〜この娘は少なくともご執心みたいね〜♪」

「……い、いやあ無い無い……だつて……花の王だぞ？アレだぞ……？」

「ふふふ。誰かに傍にいて欲しい時、気が付けばそつと寄り添つてくれる人。勇気が出ない時、背中を強く叩いてくれる人。元気が無い時、ツツコミせざるを得ない人。そんな優しい花の様な魅力のある人だから……」

「……最初二つはともかく、ツツコミせざるを得ないのは魅力かそれ？」

「気が付けば叫ぶ元気が湧いてくるじゃない。好きよう？そういうの」

「……」

「うふふふ、懐かしいわね〜。私が生まれたばかりの頃、よく花の王の背中に乗せられてあちこち巡り歩いたわ〜」

「……」

「あらく？その顔……まるで『自分が父親の様に思っている存在が知らない間に別の子供の面倒を見ていて、好奇心やら嫉妬心やらが渦巻いてよくわからない感情が





ある日、目を覚ますと庭から知らない男の声が聞こえた。この家に知らない人が来るのはとても珍しく、子供ながらにどんな人なのだろうと好奇心をくすぐられ、寝間着のまま庭に飛び出した。

今思えばそのまま二度寝してしまえばよかったと切に思うが……過ぎたことは仕方のない事。人間、過去は変えられない物である。

「つれない事言うなよモコモコ。あの時飛び出て来たクマさん柄のパジャマの女の子がこうなつたって思うと感慨深いんだぜ？」

「回想に出てくんじゃねえよ花の王。つかこの時代にクマさん柄パジャマはねえよ」  
「あれ、そうだったか」

寝間着のまま飛び出した私の目に飛び込んできたのは、冬だというのに草木が生い茂った庭の変わりようだった。色とりどりの花が風に揺らめき、幻想的な光景であった。

「わあ……」

枯れ木に花を咲かせましょう。枯れ木に花を咲かせましょう。

その男は庭の中心で両手を広げ、ゆるりゆるりと回りながら生命の伊吹を振り撒いた。

ピタ。と止まった目線の先には、既に数年前から枯れて咲かなくなった木があった。



「こゝ、小屋?」

私は、お父様とお母様……お父様の妾の間にできてしまった望まれぬ子供だった。そのお父様との関係を隠すように建てられたこの家は、確かに本宅と比べれば小さいかもしれないがそれでも当時の貴族が建てた屋敷。少なくとも小屋など呼ばれることはあり得ない。

だが私は、何を勘違いしたかこの屋敷のことを小屋と呼んだ男はきつと、考え付かないほどの大きな豪邸に普段は住んでいるのだろうと考えた。有る意味正解していた。

「えと……そう……です」

「そうか、騒がせて悪いな。今ちよつと趣味でこの辺に花を咲かせて回ってるんだ」

「そう……なんですか……」

私は、妾の娘とはいえ、貴族の一員として恥ずかしくない程度には教養を叩き込まれていた。その私が圧倒される位に品と存在感を振り撒くその姿に、子供ながらにして畏敬の念をはらった。

「とまあそういうわけでこの辺花まみれにするから。かまわないよな?」

「は、はい!!」

私はまだ子供だった。まだ名乗っていない花の王が差す「この辺」が「この屋敷周辺」ではなく「この都一帯全て」の事だとは露程に思わなかった。だが言い訳させて欲しい。

突然現れて、この辺花まみれにするからつつつて都全体を花で埋め尽くすなんて誰が想像出来るだろうか。

「そうか、じゃ遠慮なく。枯れ木に花を咲かせましょう」

男が蹴りで折れ曲がった木（思えばそこそ大きな木だったが蹴りでへし折るこの女つて一体……）を撫で、目に見えない何かしらを木に送る。するとみるみるうちに花が咲いていくではないか。

木の周辺に。

「……」

「……」

「咲けてんだよ！このポンコツが!!」

メギメギメギ!!

「力付くで蹴り落とした!!!?」

「流石我等が王デース!!!」

◇

木は完全に折れたが、咲きほどまで木があつた場所に新たに木が育つていた。

「輪廻転生、万物流転。死んだ木も新たな生命を全うするだけさ」

「でもさつき蹴り折つたのは……」

「そんな木はなかつたデス。いいデスね？」

「あつはい」

目の前の奇跡の連続に驚き、未だに夢見心地のままにふらふらと縁側に腰を落ち着ける。すると男も私のとなりに座つてきた。

「おい座椅子。喉乾いたからコーラでも持つて来い」

「この時代にコーラは影も形も無いデース!!」

「何とかしろ」

「かしこまりデース!!おいオチビ!ここの台所はどこデース!」

「え、ええ!?!えつと……あつちに曲がつてすぐのところですよ……」

「オツケーデース!!只今お持ち致しますデース!!」

女は私が指した方向へ飛んでいった……飛んでいった!?

「えつ、ええ!?!今……そ、空飛んで……!」

「そりや飛ぶだろ。妖精なんだから」

「妖せ……えええ!?!な、なんで都の真ん中に妖精が!」

当時の都は退治屋崩れや祓屋崩れが多く、超一流以外はソレ一本で食べていく事はできない程には仕事がなかった。そこで都中にお祓いついででの宣伝用の退魔の札をペタペタと張り、自身の名を売るという行為が流行った。

中にはまるで一切効果の無いものもあつたが、ほぼ大半がそこそこの効果を持つていたので都の中に弱小妖怪が入り込む隙などなかつたのである。勿論妖精なんて言わずもがなだ。

今まで都から一度も出たことの無い私は、妖精がどう言ったものかは知識として知つてはいるが、実際に見るのは初めてであつた。

ただし……

「え……なんか思つてたのと違う……」

私がつつていたイメージに何一つとして当てはまらなかつた。

「よ、妖精つてもつと可愛い物だと思つてた!!」

「知らんがな」

私の思う妖精とは子供、もしくははそれよりも小さく、可愛らしい衣服に身を包み、背中には優しさを感じるような羽が生えているものと思つていたのに……

「何デス？その胡乱げな目は」

「お前のような妖精がいるかつてさ」

「失礼なガキデース」

こんな錆色した襪褌布を被って背中から刀を生やしたような不気味な巨女があの妖精だなんて信じない……。

「王様、コーラを錬金してきたデース!!」

「良きにはからへ」

王様と呼ばれた男は妖精? から透明なキラキラした容器に入った黒い液体を受け取る……なんかマズそう……。

「王様、ソレ好きデスねー。そんなに美味しいデスか?」

「別に美味しくは無いけど偶に飲みたくなる」

男はそう言っつて容器の中身を飲む。美味しくないと云っているのに喉を鳴らして飲んでいた。

「……おいオチビ、王様の事をジロジロ見すぎデース。……まさかお前王様に一目惚れデスカ!」

「へえ?!ちちち違うし!!」

「冗談デース。どーせコーラが欲しいだけデス?全く意地汚いガキデース」

「べ、別に欲しくないし!」

「汚い意地を張ってんじゃねーデス」



仕方ないデスねー。と言いながら再度台所に向かって飛んで行った。

「……ねえ、貴方達って何者？」

「ああ？通りすがりの王とその従者」

「普通王って通りすがる物じゃないよ……」

「俺は通りすがるんだよ。そう言うお前は自分が何者か知ってるのか？」

「ええ……そんな事考えたことないよ……」

「自分が何者かも知らんのに人に何者か尋ねるんじゃないやありません」

「なくに訳のわからない事言ってるデスか王様……ほれオチビ、お前にやるデース」

「え……え？」

「早く飲むデース。瓶コーラは冷たいうちが華デース！」

「え……い、頂きます」

私は黒い液体を飲んだ。

口が爆発したかと思った。

「?!?!?!?!」

「以上、初めて炭酸を飲んだガキの反応デース！」

「や っ た ぜ」

「え〃っ、ゴホッ、あ〃っ!?何!?何コレ!」

「コーラだって言ってるデース!お前の耳は詰まってるデースか?」

「ぞっ、そういう〃い〃み〃……はあ……はあ……」

「ほれ、口直しにこれでも噛みな」

「あ、ありがとう……」

口が爆発した。

「ぶぼええ!!」

「なんつー声だすデースか?お前それでも女の子デース?」

「メン ト ス コーラ 大 成 功 !!」b (´ω´) d

ぶん殴ってやる……男の満面の笑みを視界に入れつつ私は気絶した。

それが私と花の王のファーストコンタクトだった。

それからというもの、奴等はかなり頻繁にこの家に入り込んできた。

「何でこの家認識阻害の結界張ってるデス？」

「そうなの？」

「つまりアレだろお前。隠し子（物理）って奴だろ」

「そうなんデスカ？」

「いやそんな訳が……いや……でもお父様だし……」

「お前の中の父親像どーなってるデス……」

何度も何度も、家に入り込んでくるたびに他愛もない話をし……

「今日は何処まで行ってきたの？」

「ちよつくら山の頂までな」

「へえー。なんて山？」

「あー……なんだっけ？」

「モミジさんとかいう高い山デース」

「そうそ……そんな名前だったか？」

「モミジさん？何処よそれ？」

「あー、多分ここからなら……よつと」

「わっわつ!?!と、飛んだ!!」

「ほーれ高い高い……あ、あつた。あれだあれだ」

「ふわあく。高い所からの景色って凄い……て、あれ富士山じゃないの!!」

「おー、そうそうソレソレ。あの山頂にこんなん吐くわバカとかいう神がいてな」

「こんなん吐くわバカなんて名前前の神が居る訳無いでしょ……」

「これからはなやしき姫って名前じゃなかったデス?」

「そうだったか?」

「そんな名所に案内するみたいだな名前……」

「とにかくデスねー。そんな感じの神に出会ったんデスが、まあウザいのなんの。余りにも生意気な態度を我等が王にとるものデスから……ブツ殺「妖精はそんな事言いませんー!!」そんな下品な言葉使いませんー!」お前妖精に幻想持ちすぎデスう……アイドル追っかけてる童貞デスかお前は」

「さらに生意気な事に身内に不死と不変を司る神が居たらしく滅殺出来なかったが、代わりにまあ……全身花塗れにする程度で許してやったぜ」

「神様相手に何してんですか!?!バチ当たりますよ!!というか滅殺って何!?!ソレの変わりが全身花塗れってどういう状態!?!」

「私の美しい顔がー!とかほざいてましたデスが、ボコボコに腫れあがった顔より遙かにマシデース」

「むしろ花こそ至高にして究極の美なのだから泣いて感謝するべき」

「むしろ大泣きデース」

時には普通の人間では体験できないような事を教えてもらい……

「外に行きたいだあ？」

「うん……いつもお母様に連れられて近場に出歩くくらいしか外に出ないの」

「そんなもん好きにでりやーいーじゃないデスカ」

「でもお母様から勝手に外に出るなって言われてるし……」

「なんだそりや。隠し子（物理）だからか？」

「ばかばかしいデース!! 親から出るなって言われたら出たくても出れないデス? なら親に死ねって言われたら死ぬデスカオチビ!」

「そんな事言われたらシヨックで死んじやうよ……」

「かー! 人間って面倒臭いなあ! 俺を見ろよ、天衣無縫自由奔放。どんな言葉でも俺を表現できないほどに好きに生きてるんだぜ?」

「自由すぎて私達従者全員揃っても手綱引けないデスう!!」

「それ自慢げに言う事?」

「親の教えつつーモンも確かに大事だろう。だがよく考えろ。テメーの10年も生きてねえ頭でよくよく考えろ! 本当に大事な事は親の教えをそのまま守ることじゃねえ。テメーが必要だと思ったことを率直にやる決意! 覚悟! それこそがテメーで生きるつ

「て事だろうが！」

「テメーで……生きる……」

「自立ってヤツだ！良い事も、悪い事も、テメーの責任で全てを負うんだ！親に言われたからだとか、誰かからやらされただけだからとかツマンねえ言い訳は要らねえ。やりた  
い事をやる！そうじゃない事はやらない！それで生きろ！それが生命に殉じるって事  
だ！テメーは、テメーの為に生きて死ぬ！」

「……」

「さあ言え！テメーがやりたいことはなんだ！」

「……たい」

「外に出たい！！私を外に連れ出して！！」

「絶対にNO!!!」

「……ん？」

「えつ……ゴメン、ちよつと何言ってるか理解出来なかった。えつと……私を外に連れ  
出して」

「お断りします」

「なんでデスか王様ああ!!その流れ的にこのオチビのお願い事叶える雰囲気だったじゃねーデスかああ!!!?」

「お前はやりたい事をやりたい、俺はやりたくない。ならば当然強い方が意見を通せるのさ。弱肉強食って自然の摂理さ。また一つ賢くなっちゃったなあガキ」

「いやいやいや、なんか良い風に言ってるデスがやってる事クソダセー休日のダメオヤジそのものデスから……ほれ見るデース!オチビが困惑のあまり泣くべきか怒るべきか分からない顔してるデース!!」

「うるせえ。ならお前がつれてけよ座椅子」

「デース!!?何で私?!私が王様から離れたら誰が王様の面倒見るデスか!?!」

「俺一人旅の方が圧倒的に期間長いんだが……お前等居なくてもどうとでもなるわい」

「だ、だめデスだめデス!!折角、卑怯な手を使ってでも勝ち得た王様との旅路のお供の権利を無くすのは嫌デース!!」

「知らんがな。それとも何か?俺の命令が聞けないと?」

「ひう……ふ、ぐううううう……」

「え……えー……えと、そこまで大事になるんだつたら別にいいかなー……て……思っ……たり……とか」

「一度吐いた言葉はもう口には仕舞えない。良かったなガキ、これで更に一つ賢くなっ

たぞ」

「ううえええええん……おーさまの馬鹿ヤロー……朴念仁……種無し……いー  
でいー……粗チンヤロー……」

「ええええええ……ほ、ほら泣かないでよ……これで涙拭いて」

「うううう……ぐずつ……ブー……!!」

「ちよおおおいい!!?涙拭けとは言ったけど鼻かめとまでは言つてなあああ!!!」

「うるせーデス……オチビ!さつさと行くデス!!こうなれば外だろうが外国だろうが  
宇宙だろうが何処にでも連れてってやるデス!!」

「うわ、バツチイ……鼻垂れてるよ……」

「やかましー!いいから行くデス!!空飛んで行けばこんな狭い国なんてあつという間に回  
りきってやるデス!!」

「ええええ!?待つて待つて!せめてお母様に挨拶してからアアアアアアアアアアア  
……………」

時には生き残る力を分けて貰ったり……

「そーいえばオチビ、お前の名前ってなんて言うデスか?」

「……今それ重要な事?」

「ふん、オチビが死ぬ前にせめて名前くらいは聞いておいてやるって善意デス」



「……………言えない」

「はあ？」

「名前……………あるけど……………言えないのよ……………」

「訳分かんねえデース。まあ訳アリなわけデスね」

「うん……………」

「ん……………じゃあ私はオチビの事好きに呼ぶデース。……………そうデスね。もこ……………今日からお前の事をもこと呼ぶデース」

「いや何よその変な名前……………私は犬猫か何か？」

『曖昧模糊』から取ったデス。名前が有るんだか無いんだかわかんねえデスから。文句あるなら聞くデスよ？聞くだけデスが」

「……………いいわよそれで。で、私は貴女の事をなんて呼べばいいの？座椅子でいいの？」

「私の名前は諏訪・メタルイービル・鈍金・ブルーフレイルム・マジックサークル・ラスター・アイアン・魔神殺し・デステニーデストラクトデスフォーチュンマスター・座椅子・参番大隊長・ノーマイ・フォン・マジカル。諏訪でもデス子でも座椅子でも好きに呼ぶデス」

「名前長すぎ……………じゃあノーマイで」

「……………なーんでソレチヨイスするデスカね……………」

「え、いや……なんとなく?」

「……まあいいデース。それより死ぬ覚悟はもう出来たデースか?」

「出来ないよそんなの! 生きる覚悟しかないよ!!」

「オツケー、いい答えデース! ならこいつを食うデース!!」

「……なにこの……なに?」

「そいつは燃え盛る花、ファイアーフラワーデース。本来ガキが食っていいシロモノじゃねーデースが死ぬよりマシデース!」

「そんな物を何? 食えですって?」

「勿論食わなくてもいいデースよ? その場合、救いなんて無く私もこも仲良くあのクソ妖怪にブツこころさされるだけデース! まあ私は妖精なんで一回休みになるだけデースがね」

「食ったら何とか出来んのね?」

「それは分からないデース!」

「ちよ!?! 何よそれ!?!」

「言ったデースよ、本来ガキが食っていいシロモノじゃねーデースと。ソイツは滅茶苦茶な劇薬デース。食ったら運が良くて五体不満足、悪ければ生きながらにして地獄。奇跡が起きて漸くメリットが有るデース!」

「何だその最悪なギャンプル!!」

「生きる覚悟があるデスよね!今手持ちにはロクに使える物が無いデスし、何よりあのクソ妖怪相手に私の力は相性最悪デス!なら最期に運試しと行くデス!!」

「つ……食つたら何とかなるのね!!?」

「何とかなるじゃねーデス!何とかなるデス!でもぶつちやけ、もこがその花食つて五体満足に生き残る奇跡に、更にもこが炎熱の術に対する才能がある奇跡とそれを練習無しのぶつつけ本番で奴を焼き尽くすだけの火力をかませる奇跡が重んなければ全部がパーデス!!」

「ああもー!もう二度と外になんか行かないわチクショー!!!」

「それが賢明デス!!」

「ええい女は度胸よ!奇跡に奇跡と更に追い奇跡!引いてやるわよその確率を!私の生きる覚悟を見てなさいよ!!!」

「あ!それ食うと身体が燃えるように熱くなるデス!」

「それ先に言えああ”あ”あ”あ”ッ!!!」

よく考えたらこの辺花の王と関係無かつたわ。

ま、とにかく花の王と出会ったのは私が幼少の頃。まだ髪も目の色も黒かつた頃よ。

色々あつて家に帰ってきた時にはもう花の王は都からも居なくなつていたわ。都全体に大量の置き土産を残してね。

次に花の王と会つたのは何時か、よく覚えてるよ。私にとって人生の二番目に最悪だつた日の夜さ。

ん？一番目？私が幼くして白髪になつた日だよ。あれはこれ以上語りたくないからいいよね。

とにかく、その日は色々あつて、むしゃくしゃして、どうすればいいのかかんなくなつて、最悪な選択を選んでしまつたんだ。私は死ねないつて事を正しく理解していなかった。いや……花の王と、それからノーミイと別れてから暫く経つて、彼らに教えてもらった事がすっかり風化してたんだ。これが自分がやりたい事だったのか？生きる覚悟を持つていたのか？そんな事がぐるぐると頭の中で渦巻いて、妖怪にいいように玩具にされてた時に再会したんだ。

怒れる大地に。怒れる風に。世界の化身に。

「よおう。なんだか愉快な事になつてるな。ええ？おい」

『あゝあゝ？なんだてめえ……』



「この辺り一帯をシめる鬼の王の部k」

「喋るな。生きるな。地に臥せるな。花が穢れるデス」

「……」

「ほら起きるデスよもこ。王の話を寝ながら聞くななんて不敬デース」

「……」

「ふむ、最後に見た時とはだいぶ姿が変わってるな。イメチェンか？」

「……んな訳無いだろ」

「喋れんのか。てつきり死んだシヨックで喋らないのかと思っただぜ」

「……死なねえよ。死ねねえんだよ」

「なあ、お前に判るのかよ……永遠に死なない苦しみて奴が……もう……私は人間じゃないんだぞ……？ほら……この身体見ろよ……これ全部私の……血……なんだぞ……？死なない……もう死ねないんだぞ……？もう……もう私は此処には居られないよ……何処に行けばいいの……？私は……どうすればいいの……教えて……教えてよ!!!」

「座椅子」「はいデース」

「メントスコーラの刑!!!」

「!!?ぶぼ(ぼ)ぼえ!!?」  
 「!!?」  
 「!!?!?!?」

「まず一つ 話が長い!!不幸自慢か、コノヤロー。死なない死ねないだの……そんなモン今の今までずつと生き続けてる俺にとつて同じだバカヤロー!」

「二つ。お前王の前でそんなきつたねえ恰好してんじやねえ!!とつとと体洗つて来い!!」

「ゴホッ!ゴホッ!り、り、ふじんだ……」

「三つ。お前より永くこの世界に生きる者としての教えを忘れるとは不屈き千万!!以上、三つの罪でお前に刑を処した」

「え、え、え……」

「此処に居られないだの、どうすればいいだの……知るか!テメーで考えろ!不死だからどうか、アルビノだからどうか一旦置いとけ!テメーが本当にやりたい事はなんだ!テメーの生きる覚悟はどうした!」

「う、うう……」

「テメーが生きたためにファイアーフラワーを食った時の覚悟は如何した!その覚悟は死ななくなった程度で消える物なのか!」

「……!ど、どうしてその事を」

「そもそも！」

お前の言う永遠は俺の生きて来た永さより長いのか!？」

「…………え？」

「お前五億年ボタンって都市伝説知ってるか!? 5億年って途方も無く長いぞ!? しかも5億年生きてもたった100万しかももらえないって何の詐欺だ!」

「王様、なんか話ズレてるデース」

「兎に角! お前の考えてる永遠なんて俺にとっちゃ一生分もねえんだよ! んな事で悩むな!」

「で、でも! 永遠…………なんだぞ? 終わりが無いんだぞ!？」

「知るか! そんなモン俺が死んでから言え!!!」

「…………つ!」

「終わりが無い? それが如何した! お前に終わりがなくても周りは変わっていく! 日に日に変わっていく! 変化は続く! その世界の変化についていくのは大変だ。とてつもなく難しい…………」

「だからこそ、この世界は美しく、そして楽しいんだ」

「二度と同じ日は無い。その全てを楽しもうなら永遠の時間があっても足りやしない。それを楽しめない人間や妖怪、神共を不憫に思うぜ。でも大丈夫だ」



「なんてったって、俺がまだこの世界に飽きていないからな!!」

「……」

「ねえ……私にも……永い時間を楽しめるかな……」

「楽しめる、断言してやる。なんせ俺がその楽しみ方を教えるからな。これ以上ないお手本だぜ?」

「永遠なんてモンに絶望するのは早いデース!絶望するのは王様が死んでからで遅くないデース!」

「あ、あは、あははは。何でかな?なんか涙が出てきちゃった。……少しだけ胸貸してくれない?」

ポスッ

「あはは、何か暖か「メントスコーラの刑!!」なんブゴボボ!!」

「おいしいおいしい!!?王様そこ優しく抱いてあやすシーンデース!!お前には優しみがねーデースか!?!」

「五月蠅い。汚い姿で抱きついてくるなよ、不衛生な」

「いや、そりやそうかも知んないデースが言い方と時と場合を考えろデース!!」

「その時と場合は俺の意思を曲げられるほど偉いと?」

「そーじゃねーデースが、ああもういいデース!!ほらもこー!私の胸貸してやるデース!!」

「そんな錆びついた胸じゃあ嫌だろ」

「喧しいデス!!そんなこと言うのはこの胸使ってから言えデス!!それにもこも色合い的には似た者同士デス!!」

「ゲホツゲホツ……ふ、く、ハハハ!いいよノーミイ、涙なんか引つ込んじやつた」

「ああ”っ?もこー!お前も私の胸が錆びた鉄屑だと言ってんデスか!?!ジョートーデース!!お前には胸囲の暴力つてモンを見せてやるデース!!」

「い!?!言つてない!言つてなぶ!?!」

私は、永遠を見くびっていた。今でもこの選択を後悔している。でも大丈夫。永遠に続く道を一緒に歩いてくれる誰かが居る。永い先を示してくれる誰かが居る。後ろから背中を押してくれる誰かが居る。例え共に歩けなくなる時が来ても、それは独りではない。何時までも忘れられない記憶を決意に刻み、永遠を生き続ける。

時が果てるその時まで。

「ウリウリ!!どうデス!!この脅威の胸囲装甲!!只の脂肪と侮るなかれデス!!男を殺す最終兵器デース!!」

「おい、座椅子」

「なんデスカ!?! いまここに豊かさと言うものを知らしめてるデス!! 手短に頼むデース!!」

「そいつ息してない」

「デス!?! お、おーいもこー! お前までなにふざけているデス!! 完全にシリアスの雰囲気なくなつちまうデース!!」

「し、死んでるデス……」

「そうか、なら死んでる内にそいつ洗つとけよ」

「お前には血も涙もねーデスカ!?!?」

「死なせたのお前じゃねえかど阿呆」

不死者で良かった。最後の思考は其処で途切れた。

—

—

—

「グーグー……」

「すやすや」

「話を求めておいてまともに聞いている奴はいないのか!？」

「うふふく冗談よ」

「むにやむにや……」

時は深夜。ぐでんぐでんになっていた鈴仙は薬の効果が抜けたのか眠りこけ、妹紅は話している内に酒がだいぶ進んだのか、顔が赤く染まっていた。ミスティアはいつも通りの笑顔で話を聞いていた。

「でもちよつと違和感く、貴女の雰囲気的にはもつと花の王と甘い関係でも有つたと思っていたのに」

「は、はあ? 何言ってるのよ、私とあいつはそんな関係じゃ無いよ……」

「甘い関係になることを目論んでいたが正しいデース!!」

「だから!! 違うっていつ……てん、で……しよ……」

「昔馴染みの前で法螺話なんて大した度胸デース!! こいつは嘘をついているデース!!」

「はああああ!! ばつ、なんでおま、な、はああ!!」

気がつけば妹紅の隣には180cmは有ろうかという大柄の女性が、花酒を燗して飲んでいた。

「な、お、は、はあ!?! お前何で!?!」

「夜中は異変もお休みデース。お休みの日に何してようが勝手デースよ」

「そうじゃないだろ!？」

「うーん、じゃあこうデースか?もこ、5日ぶりデースね」

「それでもねえだろうが!!な・ん・で!此所に居るんだよ!!」

「別にもこが来たときみたいは何時もある部屋の前に居るわけじゃ無いデース。明日は非番デースから呑みに来ただけデース」

「5ボス当番制かよ!？」

「さらに言えば日によって難易度が変わるデースよ。明日は難易度ルナティックデースからねー」

「な、な、な……つまりなにか?私は、偶々難易度イージーモードの日に挑戦したからスゴスゴと帰るはめになった……てか?」

「むしろイージーモードであそこまで苦戦したことに驚きデース!!お前ら死なないからってナメ過ぎデース!!妥当な結果デース!!」

「ふ、ふ、ふぎげやがって!!ここで燃やし尽くして「店のなかで暴れるのはマナー違反デース!!メントスコーラの刑!!」ガボバゴゴボボ!!」

「すまんデースね女将。騒がしまつて申し訳ないデース」

「いつもの事よく気にしなくていいわ」

「そうそう、この屋台って普段暇な癖に客が来ると途端に騒がしくなるんだ」  
「騒がせる筆頭の貴方がそれ言うか」

「……………え」

みんなが振り向けば、そこには花の王がいつの間にか居た。

「ちやおー」

「ウワアアア花の王!!? お前いつの間に!!?」

「ちよ、王様!? あんた国の宴会場に居るはずじゃあ!？」

「ジャイ子の奴がちよつとうぎくて逃げた」

「グラスティティア!!? お前また逃げられてるじゃねーデスカ!!!」

「ミスティア、ウナギー」

「え、あ、はい!!」

「聞けよ!!! お前いつの間に私の隣に座ってた! 言え!!」

「お前が昔話を始めた辺り」

「……………マジか。マジかー」

「むにや……………あうー、はなのおくらー。んひひ〜いいにおいー」

「なんだこいつ、キャラ崩壊してんぞ」

「原因がなに言ってるのよ……はい、八目鰻」

「これもたまに食べたくなる味だわな」

「美味しくないのにつて？余計なお世話」

「ん？別に美味しくないとは言つてないぞ。むしろミステリアの作る料理は何でも美味

し」

「ふ、ふーん？まあ、長いこと料理作つてたら当然の腕よ」

「分かりやすく照れてるデスう……」

「ん”っ、ん”っ、そ、それよりほら、妹紅さんの昔話よ。嘘つきつてどういうこと」

♪

「う、嘘なんてついてないし」

「あく、嘘はちよつと言い過ぎでしたデース。ただ王様にベタバタくつついていた時の話を意図的に省いてただけの話デース！」

「べ、別に話すほどでも無いって思つただけだ！」

「王様から離れたくないから力尽きるまで背中にしがみついたり、半ば無理矢理一緒に風呂に入り込んだり、裸で同囊しようと「あー！あー！幼い頃の話だから！当時は大量に沸かした湯に浸かるなんて贅沢、貴族でもやらないほどだったから！」

「裸で同囊しようとした件について詳しく「聞くな!!」残念く♪」

「とまあ、もこは昔っからマセたガキだったデス。あれから1000年以上経って少しはマシになったかと思えばコレデスう」

「う、うるせつ!そういうお前は花の王とやったのかよ!」

「ガキが無理して大人ぶってるデスう。というかそういうこと本人の前で聞くデスカ普通?」

「るせつ!いいから答えろ!」

「……ふつ、愚問デス。あれからどれだけ長いこと一緒に居たと思ってるデスカ?」

「……」ゴクリ

「王様あ〜!!私の何が不満なんデスカ〜!!」

「そういうところ」

「何処!?何処デスカ!?胸デスカ!?妖精一の巨包の胸デスカ!?こうなったら削ぎ落としても「止めなさい!!そんな事するくらいなら私に寄越せ!!」離せデス!!お前らに私の気持ちなんてわからないデス!!」

「ああ!!それは喧嘩売ってるってことでいいんだな?!いいんだよな!!」

「うふふ、妖精を捌くのは初めてだけどちゃんと美味しく仕上げてるわ」



「やってみろデース!! お前らなんぞ束になっても私に敵うわけ無いデース!!」

「どこを束ねても勝てないって!?! 贅肉が多いからってイキがん!!」

「余計な脂肪は焼き落としてあげる!!」

「わらひねく、すつごうがんあつらおよ。誉めえー」

「よく頑張った、エライエライ」ナデナテ

「えへー。もつろごほおびちよーらい」

「ご褒美?」

「わらひを持ち帰って……」

「え、要らない……」

「フェニックス再誕!!」

「ブラインドナイトバード!!」

「無駄無駄無駄デース!! 『殺神「降魔返し」の三次元魔法陣』

「弾幕全反射なんて卑怯だろ!?!」

「ちよ!?! 避け……無r」ピチューン

「ミスチイイイ!!」

「どーしたデスカー!! 胸部装甲薄いくせにこの程度の密度でギブアップデスカ?」

「んにやろ……ブツ殺す!! 『火の鳥ー不死伝説ー』」

「私の魔法陣を抜きたきや核でも持つてくるデース! 『製錬「フォーチュンレディ」の開運キーホルダー』」

「ぎゅー」

「邪魔や。ウナギ食べられへん」

「じゃー食べさせてあげりゅー」

「なら良いか」

「はい、あーん」

「お前等イチャついてんじゃねえ(デース)!!」

赤鉄「錆び付いた弾幕工場」紅蓮「不死山大炎上」

「公害ばら撒く火炎弾幕大工場」

「あ、これヤバイタイプのヤツやん」

「えへー? なんかおそらあかるい……もーあさく?」

「言うとする場合か。とりま逃げるんだよおお!」

「逃がすか(デース)!!」

魔神殺しの即席大魔法「灰燼」蒼炎「美しき青い不死鳥」

「大地焼き尽くすインドラの矢」

「公害ばら撒く火炎弾幕大工場」

「終焉導く黒き炎」

「幻想郷消滅するわ馬鹿！『怪奇日食のみずみずしい水草』」

「あゝ。うゝ、んゝ……う、うぶ」

「ちよ!?おま、このタイミングで吐くなよ！吐くなよ!」

「だ、だいじょぶだいじょぶ。ちよつとすつきりするだけだから」

「大丈夫じゃなくない!」

「う、ううゝん?あらく?私撃墜されて……」

「ミステリア!ナイスタイミング!ハイパス!!」ぶおい

「あゝ」

「うえ!?!ちよ、花の王!?!ま、「あゝ目が回……お r r r r r r r r r r」ギャー!!顔に!顔に!!」

「ふふふ、私達というものがあいながら更に他の女に手え出すなんて節操が無い D e a t h ねえ……」

「ねえ花の王。いい加減一人の女に腰を落ち着けたら?具体的に言えば私とかに」

「まるで俺を遊び人の様にお前」

「ふふふ、実際そうデース。王様、いい加減に誰かと添い遂げるデース。そうすれば私達も諦めというものもつくデース。なのにいっまでもフラフラと女の子引つ掛けて……とつとと結婚でも何でもしやがれデース！」

「いやー悪いが俺は「花が恋人ってか？面白い冗句だ、思わず焼き殺したいくらいにな」一言も言ってるええよ」

「じゃあなんデース？王様の女のシユミを言いやがれデース。王様が求めればどんな姿形にでも成り替わるデース」

「私だって。整形手術なんて初めてだけど、花の王が求めるなら何にだって変わってあげるよ」

「……はあ、そりゃご苦労なこと。でもな、俺は見た目で女を選ぶような男じゃねえよ」

「王様……」「花の王……」

「俺はな、今も昔もずっと年上趣味なんだ」

「……………」

「え、ごめん。もう一回言つて」

「だから俺のタイプは年上なんだつて」

「でけえ声で言うんじゃねーデス。え、ちよつと理解できない」

「何度も言わすな恥ずかしい。だから俺は「そう言う意味じゃねーデス。いやそう言う意味デス?」まつて頭が追いつかない」

「まつて、冗談。冗談だよな? 冗談であつてくれ頼むから」

「ふへつ、あの顔は冗談じゃなく本気デース……。変な笑い声でるわ」

「知つてるよんな事。それでもコレが嘘であつてくれ。頼むからマジで」

「残念……! コレが現実……!」

「神は死んだ」

「てかお前より歳上なんてこの世に存在するのによ!」

「いいかモコモコ。理想つてのは存在しないから理想なんだぞ」

「居ないんじゃないか!!」

「存在しない理想の美女より近くの美女デース!!」

「じゃあお前も他の美男に行けよ。森近とか」

「絶対にNOデース!!」

「理不尽」

今日も良い日だ。騒がしく、楽しく、花は美しい。熱爛片手に花が舞う世界を眺める。

「おい、勝手にエンドロールいくな。話終わってねえぞ!!」

風は踊り、空は輝き、大地は歌う。ああ、これこそが永く追い求めた理想其の物であろう。

「億年生きてて年齢を気にするなんて今更デース!!非生産的デース!!」

さあ皆で酒を飲もう。笑い合おう。今日という日に感謝を込めて。明日も良い日が続くことに願いを込めて。

「くっ!こうなったら無理矢理剥いででも……」

「年下の魅力に溺れさすデース!!」

盃を掲げよ。夢に唄えよ。花と共に笑えよ。全てが望めば、明日もきつと良い日であり続けるだろう。

「くそっ!服を掴む事すらままならん!」

「王様はあらゆる武術の達人でもあるデス!! 正攻法じゃ経験値が足りないデスよ!!」  
「なら服ごと燃やし尽くしてやる! 『再臨「不死の神風特攻」』」  
「ええいさつきから鬱陶しい。『偉大なる世界樹の収穫祭』」  
「あっー!」ピピチューン

望む限り、永遠に。

死力を尽くす……なんて、私らしくないわね。by 霊夢

ここ最近の日課である朝の禊と観客の居ない神楽、お札の作成、退魔針一本一本を霊力を込めた布で丁寧につくりと磨きあげる作業を終わらせる。今日も晴れ。風速1メートル。日射しは何時も通り。世界が春を祝福し、あらゆる生命は春のやさしさに包まれ、微睡みと共に今日を生きるのだろう。こんな時でなければ、私も二度寝の魔力に抗えなかっただろう。

そんな中、博麗神社の長い階段を昇ってくる影が見えた。

「やあ霊夢。頼まれていた物を持って来たよ」

「霖之助さん。ありがとう」

「いや……しかしまたどうして今更陰陽玉の強化なんて頼んだんだい？」

「別に……やれることは全部やってるだけよ」

「……霊夢？」

「それよりも霖之助さん。どうして今日コレを持って来たの？」

「どうして……って言われてもね。君が無理矢理なるべく早くって注文をしたんじゃないか。だからこうして……」



「コレを頼んだのは十日も前よ？霖之助さんならもつと早く出来ても可笑しくないでしよ？」

「……あれ、確かにそう言われれば……。でもここ数日は色々店の方も忙しくてね、その所為かちよつと遅れたのかもしれない」

「いつも閑古鳥が鳴いている香霖堂が忙しい……ね」

「霊夢……？さつきからいたい……」

会話の途中突然空間が裂け、中から見知った姿の妖怪が現れた。いつも通りの紫の服に、いつも通りの胡散臭さを身に纏った妖怪が。

「はあい霊夢。あら、店主さんも居るのね」

「……」

「つ……！八雲……紫……！？なんで……」

「霊夢、突然で悪いけどちよつとお使いを頼まれてくれないかしら。花風城まで」

胡散臭い笑顔を浮かべながらスキマの上に腰かけ、ある意味いつも通りの口調でお願い事してきた。私はそれに対する返答をする為に口を開けた所……

「霊夢っ！緊急事態よ！」

二人目の八雲紫が現れた。

「……あら、私……？」

「っ…………!? 私が…………何で…………?」

「八雲紫が…………二人…………?」

「霖之助さん、落ち着いて。あの二人がどういう状態なのかをしつかり観察して」

「あ…………ああ…………」

あまりの出来事に霖之助さんは心此処に非ずといった様な返答をする。

「馬鹿な…………有り得ない…………」

『名称：八雲紫 用途：境界を弄る程度の道具』

『名称：八雲紫 用途：幻想郷を管理する程度の道具』…………僕の目はおかしくなったのか?」

「霖之助さんは正常よ。アレが異常なの」

「あら、あらあら。随分可笑しなことになったわね。私そっくりの偽物が堂々と現れるなんて…………ね」

「くっ…………これも、これも異変の一つだというの…………!」

「くすくす。ねえ貴女知ってる? 自分そっくりのドツペルゲンガーに出会ったらどうなるか」

「…………少なくとも貴女なんかには殺される程ヤワじゃないわよ?」

「じゃあ…………試してみる?」

「じゃあ霖之助さん。後任せたわよ」

「待ってくれ霊夢！こんな状況こそ博麗の巫女の出番じゃないか！」

「そうね。でもこんな事に力を使つてられる余裕なんて無いわ」

「れ、霊夢……？」

「陰陽玉ありがとね、霖之助さん。これ、陰陽玉と今までツケておいた分。ちよつと足りないかもしれないけど許してね」

「霊夢?!?待て、霊夢!!」

私は霖之助さんの声を意図的に無視し、今まで準備していた道具全てを持ち出して本殿の中に入る。本殿の中には厳重な封印式が張つてある大きな箱が鎮座しており、この箱の中に博麗神社で祭っている御神体があるらしい。今まで一度も目にしたことは無いが、花の王が言うには『神の力そのものが入っており、緊急事態以外は触らない方が良い物』だそうだ。

私は手に持つている陰陽玉を投げつけて封印を解く。中々に馬鹿らしい絵面だが、博麗の巫女が代々受け継いだ陰陽玉がこの封印を解く鍵だというのだから笑えない。陰陽玉は、封印に使われていたエネルギーを根こそぎ吸収して床に落ちた。

封印が解かれた箱を開ける。私の予想通り、花が一輪置かれていた。

私は、その花を銜えた。

\* \* \* \* \*

八雲紫同士が戦っている光景を横目に、南へ真つすぐに飛ぶ。日は東。気温は快適。風は追い風。世界全てが心地よく、同時に全てが敵であると認識させられる。時間は無限、私は<sup>有</sup>ゆ<sup>急</sup>つくりと<sup>く</sup>目的<sup>よ</sup>地向かった。

視界には、春の陽気に当てられたのか知らない妖怪達が輪になって踊っている。

視線を動かせば、妖精たちがどこから持って来たのか、瓶に入ったジュースを回し飲みしている。

少し遠くを見れば、人里の住人達が大きな桜の木の下で宴会を開いている。

どこもかしこも平和であり、その世界に生きる者は全て平和を謳歌し、その平和が永遠に続く物であるかのような表情で騒いでいる。

世界は明らかに異常に満ちているというのに、妖怪どころか妖精、毛玉一匹すら普段の攻撃性を何処かに忘れ、楽しそうに歌っていた。

……或いは私が異常なのか。なんて、なんからしくない思考に自分で苦笑いして。

「おーい霊夢ー！」

空を飛んでいる私を呼ぶ、聞き覚えのある声があった。声のする方向を向けば、これまで見覚えのある白黒の魔法使いが箒に跨がって飛んできた。

―至って普通の魔法使い―

霧雨魔理沙

「こんなところで何してんだ霊夢？ さっき神社に行ったら珍しくこーりんの奴が居たし、聞けば霊夢はどっか飛んでたって言うし」

「……何の用？」

「ん？ 紅魔館で宴会するから誘いに来たんだが……どうした霊夢。なんか機嫌悪そうだな？ あの日か？」

「……」

「ねえ魔理沙。私達が初めて花の王と戦った時の事覚えてる？」

「あん？ どうした突然……。あー……まあ、忘れてはないぜ。さて、あれは何時だったかな？ 確か今日みたいな暖かい日だったぜ。あれから……どんくらい経ったかな？ 5年

……10年……そんなもんか」

「あつそ。……ねえあんた」

「あん？さつきから様子がおかしいぞ霊夢」

「相当シユミ悪いわね」

私は退魔針を魔理沙の様なものに向かって投げる。すると吸い込まれる様に額に深々と突き刺さる。

「あ、な……霊、夢？」

「あんたみたいなのに構ってる暇は無いの。さつきと消えて」

「な、ん……」

泣きそうな目をした魔理沙の様なものが筈からずり落ち、地面に叩きつけられる。嫌な音がなり、地面に赤い花を咲かせた。

比喻ではない。本当に赤い花が咲いていた。

「あーあ、本当に殺しやがった。お前姿が友達そっくりな奴殺すとか正気かい？」

「あんたがさつきのを作ったの？」

「いかにも。ちなみになんて偽者だって分かったのか、後学の為に教えてくれよ」

「勘よ。それに私達が初めて花の王と戦ったのは一昨年よ。5年10年なんて誤差がでるなんて、それこそあんたらみたい時間に大雑把な奴等くらいよ」

「……」

「あー……キキキ！そうか、そつちのパターンか!!いやー参った参った！こりやー今度からもつと気を付けないといけないねえ!!」

—太古の花言葉—

地使・ダークガーデン・ホオズキ

「……遺言はそれでいいのかしら？」

「ああ？キキツ！人間風情が何ほざいてんだ、ばーか！テメー如きアタイが相手するまでもねえよ！」

「……」

「大体よー、あのクソジジイもわざわざメンドクセー方法使わねえでもこんなチンケな奴等しかいねー世界なんぞパツパツと侵略も支配も簡単だろーに。キキツ」

「……」

「あー、キキツ！まあどうせ明日には全てが終わるんだ！テメーも今のうちに幸せな夢を見る準備にでも入るんだな。……いや、待てよ？どうせ全員が永遠に寝るんなら一人くらい欠けても問題ないよなあ？キキキ！」

「……」

「決めた決めた！折角なら絶対に取り返しのつかない様な奴にしてやろう！あー、例えば……博麗の巫女とかな!!」

「言いたい事は終わりで良いのね」

「テメーこそジセーの匂つてのを考えたか？あの世に行く準備を終えたか？キキキッ！まあ準備できてなくてもテメーには惨たらしく死んでもらうがな！」

「花の王の所にも美しくないヤツが居るのね、意外だわ」

「……あ？」

「キヒツ、キヒヒツ、キヒヒヤハハハ!!コロスツ!!アッ、ブチコロシテヤルヨ!!無残に！絶望の中で！惨たらしく死ね!!」

目の前の女が自身の髪の毛をブチブチと引き抜きながら狂乱気味に叫ぶ。すると何処からともなく見知った連中が飛んできた。

「あややあ？これはこれは霊夢さん。こんな所で何をしているのです？」

「おおうれいむう。お前も一緒に呑もうよ！」

— 風のパラッチ —

射命丸文

— 花咲く百鬼夜行 —



## 伊吹萃香

「……あんたらもか」

「んう〜？何があ〜？」鬼符「豆粒大の針地獄」「ほらほら霊夢さん。今ですなー、守矢神社で大きな宴会があるんですよ。一緒にどうですか？」岐符「サルタクロス」

まるでそれが当然であるかのような表情でスベルカードを発動させた文モドキと萃香モドキ。本物そっくり……いや、本物以上の弾幕密度で攻撃してくる。……だが、ソレは見たことがある技だ。弾幕の通らない場所にすりと身を置き、それぞれに退魔針とお札を投げる。

退魔針は文モドキの腹部に。お札は萃香モドキの頭部に。それぞれ当たり、当たった所を消し飛ばした。

「あ、や、や……霊、夢さん……これは何の……冗談……で……う？」

「霊夢う……鬼でもコレは死んじやうよ……」

文モドキは口から血を吐きながら、まるで悪い夢を見たかのような表情で。萃香モドキは此方に向けて救いを求めるように手を伸ばしながら。二体は力を失ったように墜ち、地面に叩きつけられて赤い花と化した。

「キヒヒヤハハハハ!!!友殺し！友殺し!!冷血女!!キキヒヤハハ!!!」

耳障りな声をあげるクソ女に向かって陰陽玉を投げる。しかし突如飛来した紅い槍

に弾かれ、手元に戻ってきた。

「こんなにも月も紅いから……なんて言った事もあったわね」

「今はお昼よお姉様」

—春の夜風と紅い月—

レミリア・スカーレット

—悪魔と破壊の花—

フランドール・スカーレット

「ふん。吸血鬼がこんな光合成する身体になって昼も夜も無いわよ」

「そっかー」

日傘も差さずに悠々と飛んできた吸血鬼姉妹モドキ。妙に鉄臭い……まさか。

「あんたら、咲夜はどうした」

「……ああ、アレ？生意気にも主人に反抗してきたから捨てたわ」

「今頃霧の湖のどつかに沈んでんじやない？まあ、あんな人間なんて知った事じゃないけど」

「そんな事よりねえ霊夢、今メイド共を纏める役職が空いてるのよ。貴方メイド長にならない？」

「お仕事は毎日私達の遊び相手。勿論、壊れたらパチュリーが直してあげるわ。いい条

件でしょ?」

「……そう」

只の靈力の弾を放つ。

「あはっ! 早速お仕事だなんて気が早いわね! 大好き!!」

「そんなに乗り気だなんて嬉し「あ、ぎい」い……フラン?」

「い、たい? 痛い痛いイタイイタイイタイイタイ!」

靈力弾は囷。二重結界の要領でお札をフランドールモドキに押し当てる。

「あああ” あ” あ” 苦しいっ! 助けて!」

「なっ!? つく、『天罰「スターオブダビデ」!』」

するりするり。弾幕には掠りもしない。持つてる針をレミアモドキに突き刺す。

「うぎい”!?!」

「ぐ、うう」

一撃でスペルカードをブレイクさせる。既にフランドールモドキは戦意が消えたのか怯えた目をして此方をみている。

「ひ、嫌……」

「……靈夢とはいえ、フランを殺しかけた罪は重いわよ」

「あっそ」

吸血鬼としての力まで再現出来ているのか、風穴が空いた体が再生していく。……仕方ない。なるべく消耗したくはなかったが、少し本気を出す必要があるようだ。普段の自分では考えられない程の霊力は乱流を制御し、技として解き放つ。

「夢想封印」

「っ?! グングニル!!」

「うあ、レーヴァアーンティン!」

紅い槍が、紅い剣が振るわれる。だが、伝説の武器は私の夢想封印を穿つ事なく、逆に消し飛ばされた。その所有者ごと。

「あ、お、おねえさま……?」

「ふ、フフ……流石霊夢ね。特別な武器なんてなくとも吸血鬼を殺すなんて……」

「や、嫌だよお姉様……死んじゃうなんてやだよお……」

「ごめんなさい、フラン……。霊夢も……。私が弱いせいで……。余計な痛みを感じさせたわね……」

「……」

レミリアアモドキは灰となっていく。虚ろと成り行く瞳は私を捉えて離さない。

「れい……む……げんそ、きょうの……うんめ……は……あなたの……て……に……」

「お、お姉さま……お姉さま……?」

レミリアモドキは完全に灰となり、一輪の赤い花と共に風に流されていった。

「嘘よ、うそ、お姉さま……おねえさま!! あ、アアアア!!」

「ア、アハハハ!! そつか! 夢なんだ! これは悪い夢なんだ!! お姉様が死んじゃうなんて夢に決まってるわ!!」

フランドールモドキは哭きながら啜う。

「夢よ! だから……きつと起きたら何時も通り! アは! 早く、ハヤクメヲサマサナクチャ」

フランドールモドキは自身に向かって手を広げ……つて、まさか!?

「止めなさい! アはハハは!!」

バズン

大きな音を立てフランドールモドキは自身を破壊した。

「あは、ハハ……これで……おねえさまに……会え……」

風が吹いた。灰と赤い花が空に舞った。

気がつけばあのクソ女は居なくなっていた。

嗚呼、この感情は何だろう。胸のなかでぐらぐらと煮たっていくこの衝動は。頭の奥で冷えきっていくこの感情は。

……行こう。行かなくては。

\* \* \* \* \*

先ほどまでの平和な世界は何処へ行ったのか。視界に入ってくる人間、妖怪、妖精モドキは此方に向かって一切の敵意を見せずに弾幕を撃つてくる。まるで親しき者に出会ったような笑顔で近づいてきて、挨拶と世間話を交わす様に。初めまして、と挨拶と握手を交わす様に。

私はその全てを撃ち墮とし赤い花を地面に咲かせ続けていた。弾が当たる直前まで笑みを浮かべていた顔が、直後何が起きたか理解出来ないといった様になり、そして信じられないといった顔に変わっていく度に私の中のナニカが減っていく。全く持たなくなったシユミだ。

「貴方は食べても良い人類？なーんて」闇符「デイマーケイション」「……邪魔よ」

「つあ、……え、れえ……む？」

モドキを撃ち落とす。

「驚けー！」傘符「パラソルスターメモリーズ」「……………退きなさい」

「うえ…………、え…………あえ…………？」

モドキを撃ち落とす。

「やつほー霊夢、ちよつとウサギさんと遊んでかない？」借符「大穴傘遅様の薬」「…………」

「…………あ、れ？お腹…………無…………」

モドキを撃ち落とす。

モドキを撃ち落とす。

撃ち落とす。

撃ち落とす。

撃ち落とす。

私の中で減っていったナニカが叫ぶような痛みを訴える。それでも体は動く。動かさなくてはいけない。それが博麗の巫女としての役割であり、私の意志であるのだから。

「霊夢…………」

ふと見上げれば、見知った姿の妖精が居た。私の勘が告げている、アレは本物だと。

「れいむう…………」





「チルノっ!!!」

「来ないでっ! いやっ……キちゃ……ダメ……!」

頭の花は黒から蒼く変わっていく。一刻も早くアレをどうにかしないと……私は荒れ狂う凍気の嵐に突っ込み、腕が凍りついていくのもお構い無しにチルノに手を伸ばす……が。

「キヒヒヤハハハ!!!」

斬ッ!!

忘れもしないフザケた嗤い声と見覚えのある銀髪の少女が邪魔をした。

「ツ………咲夜!」

「……………」

「あー、キキキ! ざあんねんだったなあ!! コイツは主人の乱心のせいでも心もぶっ壊れちまってんだよ!! ソコにアタイの力をゴリツとぶちこんで動かしてんのがこの肉人形だ!! キキキ!」

「お前ツ………!!」

「キヒヒヒヤハハハハ!! さつきみたいに一撃でぶち殺してみればあ? あー、キキキ! あくまでもアタイの力をぶちこんただけで、ガワは本物の人間だから内臓ぶちまけて死に晒すだけだな!! キヒヤハハハ!!!」

何が楽しいのか、空中をくるくる回りながら此方を嘲笑う。ふと咲夜に目を向けると、何時も通りの余裕の微笑みを浮かべながらも、その瞳はなにも写し出していない。そしてよく目を凝らしてみれば後ろ首に髪と同じ色の花が咲いていた。

アレを抜けばもしかしたら……

「あー、キキキ！いいのかなー？アタイばつか構ってる暇は有るのかー？」

「ツ!?!」

しまった！チルノは……

「うああああアアアア!!」

「チルノツ!?!」

目を向けると、自身を割る様に成長を続ける蒼い花と、同じように自身を割る様に成長するチルノの姿があった。卵の殻を破り生まれ出る雛のように。しかしそんな微笑ましい光景とはかけ離れたおぞましさを孕んでいた。

ばき

びきびき

ばりん

チルノという殻を破って生まれたソレは、チルノのようできて全く違うナニカになった。

まず目についたのはその青く、長い髪だった。頭の花に髪を巻き上げられてもなお自身の身長よりも長い髪は氷柱の如く伸びきっている。次に目についたのは顔の右半分を覆う能面の様な氷塊だ。そして氷塊に覆われていない左の目からは血の様にドロリとした液体が流れ出ている。

「キヒヤハハハ!!どーだ?カッコイイだろ?さしずめコイツは氷の魔王って所か?そして魔王に仕える氷のメイドってか?キキヒヤハハ!!」

「……クズね」

「キヒヒヤハハハハ!!異変解決のためなら友達すらブツ殺すハクレイノミコサマには敵わねえよ!!さあ行け愚図共、そのブスを粉々にしちまえ!!」

―時を凍らせる花―

イザヨイサクヤ

―極地の王―

チルノ

「……………」

「ぐっ……痛い……イタイ……」

「…………やるしかないようね」

あのクソ女を狙いたいが、遮るようにして咲夜とチルノが並び立つ。

「……………」幻幽「ジャック・ザ・ルドビレ」「い…………ヤ…………」雪符「ダイヤモンドブリザード」

今までの弾幕と比べて温すぎる弾幕が放たれる。……何が狙いか分からないけどやる事は一つ。あのクソ女を潰す！

「二重夢想結界！」

本気の切り札の一つ。二重結界と夢想封印の重ね技で距離も空間も無視した一撃は容赦なくクソ女を削った。一撃で大妖怪どころか神霊を倒せる程度の威力でも落とせないなんて無駄に永く生きてるだけはあるわね。

「ギイアアアアアツツ!!クソがつ!!一世紀も生きてない人間風情がアアア!!」

「チツ、次こそ仕留めるわ」

「クソツ、クソツ、クソが!!次なんてねえよ!!愚図が!アタイを守りやがれ!!」

「……………」

「うう…………」

停止「絶対零度の世界」

風が、空気が、世界が、止まる。あらゆる生命の一切の活動を許さないゼロの世界。

だが、私を捕らえる事は叶わない。

右に左にひらひらり。凍った時間の中で放たれる弾幕は本来ならば必中とも言える理不尽な不可能弾幕だったのだろう。但しそれは同じ理不尽相手には通用しなかっただけで。あらゆる干渉から飛ぶ今の私には時間すら囚われない。

「……………れ……………い……………嬢……………さ…………………………」

「……………少し休んでなさい」

私は咲夜の後ろ首に生えていた花を引き抜く。時が動き出す前にチルノの頭に結びついている花に一撃叩き込む。時が動き出し、凍える世界が割れた直後に全ての生命は活動を再開した。

咲夜は力なく空から緩やかに落ちていき、チルノは頭の花が砕けて大きくふらついているが、未だに拘束は解けていないようだ。

「…………………………」

「インスタント北極」

チルノを中心として氷の世界が創られる。やはり既にその辺の妖怪以上の力を付けていたか……………だけど私にとってもチルノはチルノね。

私は氷の世界を飛んだ。そしてチルノをその顔に着けている氷塊ごとぶん殴った。

「むぎやうー！」

「…………あ」

殴ってから気付いたが、やってる事花の王と大して変わらないわねコレ……「花の王に似て来たね」とこれ以上言われるのは屈辱だ。

……まあ結果オーライ。チルノの中に深く根差した花の意識を破壊した手ごたえをしっかり感じたからいいでしょ。

「イタタ……うう……れい……む……」

「花に意識を食べられるなんて……ある意味アンタらしいわ」

「うるせーやい」

「クソがつ！使えねえっ!! テメエにブツ刺したヤツはアタイの力をかなりブツ込んだ特別性だっつのに鎧袖一触でやられやがって……このザコ「アンタが弱いのをチルノのせいにしてんじゃないわよ」……は、あ?」

「アンタ、さつきからずっと自分で戦おうともせず誰かに守られてばっかじゃない。自分の実力に自信ないの? それとも弾幕まで美しくないのかしら? ……まさか、両方?」

「……………殺す。殺す殺す殺す殺す殺す殺す!!」

「煽り耐性ゼロね」

「うわあ、すっげえ顔」

チルノの言う通り、クソ女の顔は怒りで歪み切り、妖怪絵巻か何かで見たぬらりひよんのようだ。有体に言つて醜い。チルノも私も思わず顔を顰めるほどに。

「どい、つも……こいつも……アタイの事を……なんだと思つてやがる……ツ!!アタイが長女だぞツツ!!敬えツツ!!媚び諂えツツツ!!!」

虚偽「塗り固められた見栄」

突如空間が割れるように弾幕があふれ出した。しかしただランダムにばら撒くだけの弾幕。飛ぶまでもなく回避できるけど……

「チルノ、アンタうごけんの?」

「ふん!ダテにサイキョー名乗っちゃいないわ!」

「ああ……そう……」

心配して損したわ。

「殺すツ!全員ブチ殺してやるツ!アタイを認めねえクス共は死ぬエ!!」

虚構「偽り続ける正義」

……一枚目のスベカ発動しながら二枚目を切るなんてね。今度はばらばらとレーザーを撃ちだすだけ。子供が感情のままに暴れまわってるのと大差無いわね。惰性で動きながら攻撃を開始する。一撃一撃が普通の弾幕用の攻撃とは桁違いの威力を持つてるが、それでもアイツを落とすに至らず。ただ表面を削っているようにしか見えな

い。

………どんどん硬くなってない？

「クスがッ！カスがッ！ゴミ共がアッ!!!死ねッ！死ねッ！死ねエエッ!!!」

虚飾「黙する嘘つき」

さらにスペカを切った。更に弾幕の密度が濃くなり、速い弾と遅い弾の緩急がついて来た……が、まだこの程度。日常的な弾幕ごっこで使われるような物とパターンは大差無い。チルノもするすると避けている。

「アタイが長女なんだぞッ！偉いんだぞッ!!!だから……アタイを見ろオオオッ!!!」

嘘嘘「餌要らずの釣り」

まだスペカを切る気!?弾幕全てが発狂モードになったのか、密度も速度も段違いになった。そしてそれらすべてがランダム弾であるが故に避け方を間違えなくとも、運が無ければ避けることが出来なくなる所謂詰みになる可能性がある。

というか弾幕の密度が上がり過ぎてアイツの姿が見えない。

「あーもー面倒ね!!こういうのなんて言うんだっけ!?花の王が何時か言ってたわね!」

「クソゲーよ!こんなクソゲーよ!」

「チルノあんたも大概口悪いわよね!」

疑真「素直なブラシーボ」



「まだ密度あがんのか?!」

チルノが叫ぶ。気持ちは分からないでもない。アイツを中心に弾幕が放たれるだけだが、その物量は空から降る雨と変わらない。そして、高速で迫る弾もあれば、雪のように緩やかに迫る弾もあり、はつきり言って面倒極まりない。

「無理よもー！避けらんないわー！」凍符「氷山噴ビーム」

チルノがボムを撃った。自身の体から勢い良くレーザーを放つ。魔理沙のマスパ程ではないが、極太のレーザーが弾幕を凍らし、粉微塵に破壊しながら一直線にアイツに向かつて行く。

直撃した。が、弾幕を凍らせる威力のレーザーはアイツの髪の一部を凍らせる程度に留まった。アイツ硬すぎじゃない？

「つづうううあああ”あ”あ”あ”!!!死ね死ねしねシネシネエ!!『八百万の大嘘吐き』イイイ!!!」

さつきまでの二倍以上の弾幕が押し寄せて来る。避けさせる気は全く無いようね。

弾幕は物量だけで、美しさのセンスは微塵も感じられない。花の王のトコの奴等はほんと……幻想郷の奴等以上にぶっ飛んでる奴等ばかりで疲れるわ……ねっ！霊撃「八方封魔結界」

滝の様な弾幕を押し返し、そのままアイツに直撃した……が、それでもアイツには痣

が残る程度のダメージしか与えられなかった。……………まあ

「あ”あ”あ”あ”あ”あ”あ”!! 『虚偽虚構弾「当たるんなら問題ないわ、というかさつきからしつこ過ぎるのよ! 『輪廻永劫封印玉』!』」

博麗に代々伝わる秘術。陰陽玉を用いた封印術。霖之助さん強化してもらった陰陽玉は私の霊力を余すことなく受け取り、術式を発動させる。

最近はその弹幕補助にしか使ってなかったが、本来の陰陽玉の機能はあらゆる力を混ぜ合わせ、その内に封じて能力の強化を図る万能の封印道具だ。妖力、霊力、魔力、神力、気力等、様々な力を内に封じる事で使用者の霊力と混じり合い強化することが出来る便利な道具だ。まあ今までの私にはそんな強化なんて必要だったんだけど。

ここで重要なのがあらゆる力を混ぜ合わせて封印することが出来る機能だ。目の前のコイツは異様な力を持つているとは言え妖精。ただ倒すだけでは一回休みになるだけですぐにでも復活する。ならば選択肢は限られてくる。

「アンタが復活しない様に封印するか……………」

「な、にを…………アタイに何をする気だ! ヤメロ!」

「復活しても何も出来ない様に力だけ全部奪うか、よ!」

「ふざけるな! 止めろ! アタイが…………人間なんかにつ!」

陰陽玉は二つ。

「止める……止めて……あ……アタイが……」

一つに妖精が持つ自然の力を封じる。

「アタイの……チカラが……」

そしてもう一つには……

「う、うああああ!!!殺す!コロス!絶対に殺し」

「アンタの敗因はただ一つ、ワタシを怒らせた事よ。博麗の巫女舐めんじやないわよ」

「霊夢ー!」

「……チルノ。アンタ結局無事なの?」

「サイキョーなめんな!」

「あ、そ………で、咲夜は……」

「……なんとか生きてるわよ」

地面に降りて咲夜の様子を見る。顔色が悪く、今にも死にそうな目つきだが……ま、大丈夫でしょ。

「ほら、治療用のお札あるから使いなさい」

「……あり………がとう」

かなり強引に花を引っこ抜いた所為で抜いた所から出血している。そこそこ強力な

治療札を使うから痕は残らないでしょ。

……さて、急がないと。

「チルノ。あんた咲夜の様子見てなさい」

「えっ、う、うん……霊夢はどうすんのさ」

「私はこの異変の元凶の所に行くわ」

「……んー？花の王さまの所にか？」

「そうよ」

「なんで？」

いや、なんでって。

「霊夢、ついこの前まで異変なんてどーでもいいみたいな態度だったじゃん」

「……事情が変わったのよ」

「ふーん」

「アタイもついて行っていい？」

……正直言って、今のチルノなら足手纏いにはならないだろう。寧ろ、花の王を倒すにはそれこそ猫の手も借りたい位なまでに絶望的な差が有る。

とはいえ……だ、この状態の咲夜を一人置いていく訳にはいかない。どうするか。チルノを連れていくか、置いてくか。

私は……

\* \* \* \* \*

結局チルノは置いてく事にした。治療札を使ったとはいえ、まだ立ち上がることすら難しい咲夜を一人置いておくわけにもいかないし。

そうしてしばらく飛んで行くと、幻の結界を抜けたのか目の前に世界樹が見えた。相変わらずの巨大さね。花の王が言うには更に成長しているらしいけど、こんな巨大なモノが何を栄養としているのかしら。少なくとも旧地獄より深くに根差してるでしょうしね。

……ん？あれは……幽香？なんでこんな所に。遠目で見ても判る程に殺気立ってるわね。これは近寄らない方が吉……かしら？

なににせよ、私の進行方向の邪魔にならないなら無視するだけか。私は幽香を後目に

飛んで行く。

「王様……どうして私を……置いて……いけないで……」

世界樹の下についた。洞はぽつかりと大口を開けている。まるで一切の逃げ隠れをしない様に。その巨大な穴を潜ればまさに別世界。あらゆる生命力に満ち満ちた世界だ。私がまだ幼い頃に連れてこられた時の空気そのままに存在する世界は悠久の時を経ても変わらない、花の王其の物だった。

その世界の中、はるか遠くには御伽の国から出てきた様な巨大すぎる国が見える。その周りを哨戒している妖精団も。

まともに進んでいたら消耗は避けられないだろう。少し前に魔理沙から聞いた話。正しければあいつ等は大量の「B」を落とすとの事だけど……まあ面倒ね。飛ばして行きましょう。

二重結界！

極限まで遠くに飛ばした結界の外側と結界の内側を繋ぐ。いつもの私なら到底出来ない技の出力だが、世界樹の中という満ちた空間と今の強化された私の力で織り成す業。

結界の内側を通り抜ければ眼前に巨大な門がそびえ立っている。幾ら強化された技といえどもいきなり王国に侵入する事は出来なかつたか……

突如腹に焼けた鉄を突き入れられたかのような痛みと不快感、そして氷柱を背中に入れたような寒気と怖気が私を襲った。

直感に殉じ、横に跳ぶ。刹那の間、鉄塊が落ちて来た。

「また仕留め損ねたか。幻想郷の奴等は随分勤が良い」

「……いきなり大したおもてなしね。」

目の前には巨大な人型。魔理沙の言っていた見越し入道の妖精つてのはこいつの事ね。先程の感覚はこいつの放った殺気の影響だと知る。……滅茶苦茶強いわね。

「……お前、よく見たら何時ぞや王が連れて来た人間の子ではないか」

「何よアンタ。私を知ってるっての？生憎アンタみたいなデカブツは私の記憶にないわよ」

「無理もない。10年程前に王が連れて来たのを遠目で見ただけだからな」

10年も前の事を、しかも遠目で見ただけで思い出せるとかこいつの記憶はどうなってるのよ。

— 朽ち果てない太古の城壁 —

風間・グラウンドドラゴンテイル・ジャイアント・ソーラーナイト・フルプレートアー  
マーキングガード・式番大隊隊長・グラスティティア・ド・パンゲア

「……たとえお前がどんな目的で此処に訪れたとしても、ここから先へは進めない。進ませない。たとえその結末が終焉への片道切符であったとしても」

……こいつ、花の王が何をしようとしているのか解かっている……？

「ちよつとアンタ。花の王が企んでる事が解かるつて言うのかしら？」

「我等が王のお考えを理解する必要はない。指示を遂行し結果を出す機械人形でさえあれば良い」

「その結果アンタが望まない未来が訪れるとしても？」

「我等は等しくあの御方からあらゆるモノを頂いた。命も、記憶も、経験も、幸福も。なればこそ、我等はその全てをもつて受けた恩をお返しする。しなければならぬ。永きに渡り生きて来た王に返す方法などそれしか知らないのだから」

……恩、か。博麗の巫女としての私があるのも、普通の女の子としての私があるのも、



なんだかんだと世話を焼いていた花の王の御蔭ではある。昔は『博麗の巫女』は只のシテムだったらしい。幻想郷のバランスを保つためだけに生かされ続ける無味無色の人生だとか。

……ま、今では考えられないけどね。毎日のように騒がしい奴等が神社に訪れては好き勝手に振る舞って帰る。そんな日常。無味無色とは程遠い、騒がしくも楽しい常日頃。

だからこそ。

「そんな日常幸せを守るために死力を尽くすわ。たとえ花の王が望まなくても」

「……ならば帰れ。明日の朝日を待たずともすべて終わり、お前の望む日常が戻ってくるだろう」

「帰らないし、このまま放置すれば日常は戻りはしないわ」

「……帰れ」

「……明日になってしまえば、アンタの言う日常は戻るんでしょね。でもね、それは私が望んだ日常じゃないのよ」

「?!? 貴様、何故、なにを知っている!?!」

「巫女の勘よ」

「……ふ、ふふ。話には聞いていたが、巫女というのはやはり我々の理外の存在らしい」

「分かった？ならとつと退きなさい」

「拒絶。貴様は危険な存在らしい。ならば全霊をもって貴様を排除せねばなるまい」

巨大な妖精は後ろを振り返り、手にしていた巨大な盾をそれ以上に巨大な門に叩きつける。門全体に広がっていた魔法陣が起動し、尋常じゃない量の魔力を集め始めた。

「一切の加減はしない。一切の容赦もしない。故に一切合切捨てる覚悟で来い」

「この後に花の王をぶつ飛ばさなきゃいけないんだから省エネで行くわよ」

殺気が空気を振るわせるような重圧となつて私を貫く。『絶対殺す』と、その全身で表現しているようだ。勿論死んでやるつもりなんて毛頭ないけど。

地天「大地神の天地創造プレス」

巨大な剣が地面に叩きつけられた。瞬間、地面が割れるのではないかと思う程の大地震が起きた。地震の威力は、空中に飛んでいた私に振動を与える程に強く、まともな飛行など出来ないだろう、私以外は。

『空を飛ぶ』私は地面の影響を受けない。当然の理、アンタが地を支配するなら私は宙に浮くだけ。

大地が裂け、其処から竜が頭を擡げる。爆炎と噴石、火砕流が吐き出される。当然当たるとヤバいので避けるけど。

「ちよつと暑いじゃないの」

「何故ちよつと暑いで済む!？」

結界術は巫女の専売特許よ、なんてね。熱を遮断する守護結界を張っているのに、それでも暑さを感じるなんて滅茶苦茶な熱量ね。

弾幕を回避しながら此方も弾幕を張る。的がデカいからほぼ全弾当たるが手に持っている盾に弾かれ続ける。

「ぐっ?!なんて馬鹿げた威力か……!」

まずあの盾をどうにかする必要があるわね。弾き飛ばすか壊すか……壊すか。

「弾幕ぶつで回避しないなんてツマライでしょ。麗撃『夢想封縛爆鎖』」

一枚の札が二枚に、四枚に、八枚にと増え続け、盾に張り付く。退魔針を投げつけ、盾に傷が入ったのを確認し、札を起爆させる。爆発の威力が外に行かない様に強固な結界をほぼ同時に張れば技は完成する。

なんとという事でしょう、弾幕を弾き続けた鬱陶しい盾が粉々に吹き飛んでいるではありませんか。

「馬鹿なッ!日輪の盾を壊すなど王様にしか不可能な筈!」

「日輪だか七輪だか知らないけど、花の王以外にも壊せるみたいね」

「き、貴様……!」

「弾を弾いてばかりじゃ無粋よ?神力『夢想封印 輝』」

「っ!? そのチカラ……まさか、王様のー!」

ご明察……って、流石にここまであからさまだと判るか。神社の本殿に封印されていたあの花、花の王曰く『神の力そのもの』だ。それを私は銜くわえた。つまり自らに加くわえたのだ。言葉遊びの様だが、言霊は力となり顕現する。ましてや私は博麗はくれいの巫女。博麗神社に封印されていた神の力を其の身に降ろす事は雑作もない。

……なんで花の王が神の力を博麗神社に封印していたのか、そもそも花の王は神だったのか、色々疑問が湧いてくるが、全部ひっくるめてこの異変の終わりにでもぶつけてしまおう。だから今は。

「とつとと終わらせるわよー!」

「ぐはっ……あ、ありえない……世界樹の次に硬いと言わしめる我が鎧を砕くなど……ありえない……在り得ないっ!!」

満開『開闢以来の偉大大陸最硬の花』

『在り得ない、なんて在り得ない』花の王が時々言ってたわね」

神器『陰陽神花玉』

弾幕と弾幕がぶつかり合う。しかしあまりに一方的過ぎた。弾幕同士相殺することなく、一方的に私の弾幕が相手の弾幕を飲み込んでいく。

「……嗚呼……こんな……こんなことが……」

「……」

「……否。否だ！我こそが王国の盾であり、門である！『通すな』と命令されたなら決して通してはならない！」

「たとえその命が尽きてでも!!」

『死なば諸共、咲き散るユグドラシルの華』

背後の門から極光が質量を持つて解き放たれた。弾幕の体を辛うじて成してはいるが、それはもはや一発一発が破壊兵器だった。

光が地面を貫く。地面が融けた。

光が空を裂く。空気が消えた。

光が空間を散らす。光が次元を割る。光が世界を破壊する。

それでも私には届かない。

『夢想天生 深』

地面を融かす暴虐の光も。空気を消す浄化の光も。空間を散らす激烈の光も。次元を割る泡沫の光も。世界を破壊する終極の光も。あらゆる物から浮いた私には届かない。

あらゆる物から浮き、光滅の弾幕を捻じ伏せる。博麗のではない、私の秘術。秘奥義。弾幕を消し飛ばし、ついでに閉ざされていた門をブチ破った。

「……我が全霊……我が矜持……我が命……全てをもつても……届かない……か」  
「……アンタ、花の王とどれだけ長い付き合いか分かんないけど、嫌な事はハッキリ嫌って言った方が良いわよ」

「……ふ、は……まあ……覚えておこう……」

大きな音を立てて地面に倒れた。私はソレを後目に、目の前まで迫った王城に向けて飛んだ。

「それでも貴様は……王に届かない……」

\* \* \* \* \*

城下町……っていうのかしら？ 巨大な門を抜けた先にはこれまた広大な町が広がっ

ていた。空から見ても端が見えない位に広い町は一軒一軒が木材とも石材とも違う材質の何かで出来ており、その街並みも人里とは比べ物にならない位に洗練された美しさを放っていた。

「ようこそ人間。歓迎はしない……けど道案内はしてあげる」

「……ここじゃ人の真後ろからいきなり声かけるのが礼儀作法なのかしら？」

「ああ……まあね。ここ最近のトレンドなんだ……驚かすのが……この町のルール……なの？」

「私に聞くんじゃないわよ」

軽口を叩くが内心でかなり驚いてしまった。まるで気配を感じなかった、こうして話している今も。

後ろのヤツがスルリと私の前に躍り出て来る。こうして目の前にしても変わらず気配が無い。

— 孤独な幻樂團 —

カラオト

「……それで、今度はアンタが私の邪魔をすんのね」

「聞いてた？人の話。道案内してあげるって言ったよね、耳死んでんの？」

「喧嘩売ってるのかしら？言い値で買うわよ」

「高くつくよ。具体的には夜明けまでね」

「どういう事よ」

「いいのかなー、道案内役も無く王城にたどり着くことが出来るかなー。まあ、オツムの足りない人間に懇切丁寧に、優しく、分かり易く説明してあげようか」

「殴り倒していいかしら」

「好きにすれば？でも注意して。貴方が今いるこの街全てが妖精の住居で、仕事場で、遊び場なのね。そう、そんな中に一人迷い込んだ人間なんて例えるならそう……例えるなら……えーと……妖精の森に迷い込んだ人間が永遠に森から出られなくなるようなものよ」

「例えへタか」

「うるさいな。とにかく貴方がどんなに強くてもこの妖精たちに永遠に惑わされ続ける事になるよって言いたいなの」

「あつそ。ならさっさと案内しなさいよ」

「横暴だなあ」

そう言つて前を飛んで行く……妖精……なのだろうか？

「只の妖精じゃないよ。私はゴーストと妖精のハーフ。だから存在感なんて無いし、攻撃なんて通じやしないんだけどね」



「さらりと心読んでんじやないわよ」

「心なんて読んじやいないさ。経験というか勘というか……とにかくそう言う感じなのさ」

「こう見えて私も何万年と生きてるよ、ゴーストだけど。と締めて飛んでゆく。私も後を追った。

「此処に来る前にでっかい鎧女を倒しただろう。アイツは強かったかい？」

「……まあ強かったわね。私ほどじゃなかったけど」

「そう。まあ、アイツは昔っから融通の利かない見た目通りの堅物でね。その上必殺技とかそういうのに憧れるお年頃というか……まあ、相手してて感じ悪かったでしょ」

「……そうかしら？」

「あれえ、そうでもなかった？私アレ嫌いなんだよね」

「ところで、この街並みを見てどう思う？王様が一から作り上げた町なだけどき、きつと世界中どこを探してもこの街並み以上に美しい場所なんてないよ。ヴェネツチアなんて目じやないし、魔都なんて足元にも及ばない」

「ヴェネツチアって何よ」

「知らないの？異界都市ヴェネツチア。山に囲まれてるのに水路だらけで歩きづらいんだ。だから水路を走る水竜が大量に飼われて……」

「……ヴェネツチアって何よ……」

「此処が大通りさ。あそこに見える巨大な塔があるだろ？あそこから眺める街並みは最高さ」

「飛べばいいじゃない」

「わかってないなあ。浮足立った景色より地に足ついた景色の方が良いじゃないか」

「何が変わるつてのよ」

「変わるさ。何故なら今の人間の科学力じゃあの塔よりも高い建築物は作れないんだよ？」

「それがどうしたのよ」

「いやあ、空の飛べない人間じゃあこの高さの景色は見られないんだなあって優越感感じられるじゃん」

「だからどうしたのよ」

「右手をご覧ください」

「観光案内か」

「私の生命線長いでしょ」

「あんたゴーストでしょうが」

「……さあ、正面に見えるのが王様が自分の為だけに建てた巨城。世界樹の外の奴等は『花風城』なんて呼んでるわね」

「……今更だけど、なんでアンタは此処まで道案内してくれたのよ」

「さて、なんでだろうね」

目の前のゴースト、カラオトは曖昧に笑う。

「……本当はね、貴方を此処まで連れて来るつもりは無かったんだよ」

「……」

「どこか適当な所まで連れてって、そこで他の妖精たちと一緒に囲んで始末してお終い……ってつもりだったんだけどね。なんでだろ、貴方が想像以上に強そうだったから尻込みしちゃったかねえ？」

「……」

「……そんな顔で見ないでよ」

「ちよつとだけ、昔話をしようか。まだ、この城の影も無かった頃の話だよ」

「ある所に、一人の男が居ました。その男は世界中のあらゆるものが大好きでした。しかし、男はその大好きなものを覚えておくことが出来ません。何故なら、その好きな『もの』には名前がありませんでした。名前とは区別です。『あらゆるもの』からその『もの』

単体を分けて覚える事が出来なかったのです。故に男は考えました、どうしたら大好きな『もの』を覚えておくことが出来るか。そして思い至ったのです。名前が無いのなら、自分が付けなければいいのだと。そうして、男は世界中のあらゆる『大好きなもの』を覚えるために、『大好きなもの』全てに名前を付けたのです。そうして、男は一番初めに世界から自分を区別しました」

「そう、その男の名前は貴方も良く知ってるでしょう?」

「……花の「田中さんよ」誰よ田中さんって!」

「冗談よ、いっつゴーストジョーク」

「真面目な話、花の王は世界からあらゆる物を区別した。あらゆる物に名前を付けたわ。でもね、名前を付けるって事はソレを世界から区別するだけで済む事じゃないの。……人間の貴方にはちよつと分かりづらい感覚かも知れないけどね」

「……分かるわよ。ちよつとだけけどね」

まだ私が寺子屋に通うような歳だった頃、神社に一匹の犬が住み着いていた。私はその犬に名前を付けて呼んでいた。ある日その犬は冷たくなって横たわっていた。寿命だった。私は泣いたわ、生き物の死を始めてみた訳でもないのに。大粒の涙を流して泣いた。

名前を付けるって事は、他のものと区別するってだけじゃない。ある種の呪いに等しい。名前を付ける事で、そのものを他と区別し、記録し、記憶する。だから心に残る。ソレが亡くなったら、喪失してしまったら、心から離れて逝ってしまったら。失われたものは戻らない、決して。心に空いた穴は塞がらない。大事なもののほど、心を占める大切なものほど、失くしてしまったら。

時間は怪我を癒してくれる。しかし心の穴は塞げない、空いていることに慣れるだけだ。

別の何かが代わりになることは無い。別に心に入り込んでくるだけだ。

もし、永い時間の間に様々なものと出会い、そして亡くしていったのなら。

「人間は、肉体で生きるものだ。大怪我を負えばそのまま死んでしまうこともある。だけど哀しみでは中々死なない。妖怪は、精神で生きるものだ。時に畏れられ、時に崇められる事でそれを糧とし生きる。仮に身体が亡くなくても復活する事もある。だが、大きな哀しみであつさりと死ぬ」

「花の王は人間じゃない。かといつて妖怪でもない。神でも無ければ妖精でもない。この世のあらゆる物の生みの親でもあるけど、この世のあらゆる物と繋がりを持たない」  
でもね、と前置きする。

「花の王はそれでも、心で生きているんだ。肉体で生きているんだ。だから彼は何より

も強く、誰よりも強く、そして、おかしくなってしまうた」

あらゆる物を愛し、あらゆる物に名前を付けた代償はあまりに大きいと言う。

「もう彼の心は原型を留めていない。それでも肉体で生きる彼は永きを生き続ける。心当たりはないかな？彼、最近凄く忘れっぽくなってるんだ」

「……」

心当たりは、ある。

「人間には、『病は気から』なんて諺があるだろう。彼も同じさ。風邪の様な症状は出ないけど、もつと根本の部分から壊れていつてるんだ」

「彼は、人間も、動物も、妖怪も、神すら愛した。でも、その何れも彼より先に亡くなっていった。その何れも彼の心に大きな穴を空けて逝った」

「彼が何をしたいのかは私達でも分からない。ただ、この世界を捨てて何処かに行ってしまうんじゃないかって気がしてならないんだ」

「……馬鹿々々しい話でしょ？」

「変な話かもしれないけどさ、わざわざ、幻想郷から世界樹の、こんな中心部まで来た人間に言う事じゃないかもしれないけどさ。言わなくても良い事かもしれないけど……」

さ……」

「花の王を……止めてください……。私達じゃ駄目なんです……。お願い……。します……。私達の王様で……。友達で……。父親……。なんです……。」

言われるまでも無い。ただ……。そう、一つ。一つ戦う理由が増えただけだ。

私は博麗の巫女。幻想郷を守る役割を持つ者。

そして、『今の幻想郷』には花の王は居なければならぬ存在だから、勝手に何処かに行くのは絶対に許さない。

「頭を上げなさいよ、お姉ちゃん」

「……へっ？お、おねえちゃん？」

「花の王が父親……。なんでしょ？私もよ。だから血は繋がってなくてもお姉ちゃんです……。」

「……そ、そう……。なのかな？」

「そうよ」

「そ、つか。えへへ、なんか照れくさいや。私より後に生まれて来た子は結構いるけど、

誰も私の事『お姉ちゃん』なんて呼ばないし。まあ私も先に生まれた子にお姉ちゃんなんて言わないけど」

「折角だし呼んであげたら？きつと楽しい事になるわよ？」

「……『喜ぶ』じゃなくて『楽しい事』ね……貴方中々に悪い性格してるね」

「親譲りなの」

「……ふふっ」

「……花の王は巨城の最上階、玉座の間に居るわ。でもそこには空を飛んで行くことは出来ないの。唯一の出入り口が天睨の間と呼ばれる大広間にある扉よ。そして、其処には一番厄介な奴が居るわ。ソイツを倒さない限り玉座には辿りつけない」

「分かったわ」

「……ごめんなさいね、本当なら城の中も案内出来れば良かったのだけれど、あの中は迷路になってる上に入るたびに構造が変わるから案内しようがないの」

「……それはまだ、幻想郷でも常識はずれな建物ね」

「ふふっ、この世界の常識は花の王が創ったのよ？」

「そんなアホな……いや、花の王なら……」

時間は迫ってきた。名残惜しいが、それでも行かなければならない。

「……じゃあ、行ってくるわね。お姉ちゃん」



「……頑張つてね。全部……全部終わったら、一緒に呑みましょう？姉妹みんなで」  
「勿論花酒で、ね」

「ふふふ、花の王に沢山用意させないとね」

私は歩きだした、花の王が待つ、玉座の間に向かって。

「全部終わった時……皆がこの世に残っていれば……ね」

\* \* \* \* \*

城の中は迷路なんて生易しいものでは無かった。迷宮と言っても過言ではない。と  
いうか、別世界とでもいうべきなのだろうか。

「世界樹とはいえ、樹の内側に太陽があるのはまあ、まだいいわ。でもなんで建物の中に  
月が浮かんでるのよ！」

いや、叫んだところでどうにもならないけども。

そもそもここは本当に建物の中なのか？上を見れば夜空に満月、前を見れば森林に、

後ろを見れば砂漠、と。出入り口何処に行ったのよ。

時間はもうそれほど残ってはいない。ここまで来たのだ、もう次は無いと思つた方が良さそう。

……これは幻術の類だろうか？ いや、そんな気配は一切感じられなかった。まさかとは思うが、建築技術だけでこのような幻影を見せているとでもいうのだろうか。

……花の王ならやっぱりやりかねないわね。

これ以上無駄に留まっている訳にはいかない。花の王は最上階に居るって言つていた。なら階段を探すべきなのだろうか、いや、花の王なら上に昇るのに階段なんて普通の物を使うだろうか。

実は部屋の中に登り口は存在せず、外に存在している。……有りそうね、でも城に入る時にはそれっぽい物は見えなかったし、私の勘もこの部屋……部屋？にあるっていつてるし。

昇る……と見せかけて降りる階段で進む。……これも有りそうね。

そもそも昇る、降りるなんて考えが違うのかも。

……考えるのが面倒くさくなってきたわ、とりあえずこの辺一带吹き飛ばしたら何か起きるでしょ。

『夢想封印 散』

……  
……

ま、何か起きるとは思ったけど、まさかいきなり別世界に送られるとは思わなかったわ。

「おいおい。折角趣向凝らした謎解き部屋作ったのにお前全部ぶち壊すとかありえねー。脳みそ筋肉マンかよお前」

——忘れ去られた記憶の記録——

ブレイン・シエルフ

「……………つ、アン、タ……………は……………」

長い銀髪、赤と青のツートンカラーの服。余りにも特徴的なその姿は竹林に住む宇宙人、八意永琳を幼くしたような姿をしていた。

「ドーもー、5ボス兼EXボスです。なーんつつて」

「アンタは……………何？」

「んー、なんといつたらいいか。まず私は花の王の記憶の欠片つてとこだな。正確に言えば花の王が忘れていった知識、感情、記憶の妖精だ」

「……………そんな物が妖精に成るものなの？」

「普通、というかまず絶対ありえねー。だが花の王だけは唯一無二の例外だ。なんせ存

在そのものが自然物だからな。この国を探せば花の王の爪の妖精とか髪の毛の妖精とか垢の妖精なんているかもなー」

「そんな馬鹿な事が「嘘だよばーか」……」

「花の王が唯一無二の例外じゃなく私が例外なんだ。正しく言えば花の王の膨大な記憶、感情、知識が、だな。それが一つの有形となったのが私。仮にもしも花の王ほど長生きが居たとしても、そいつじゃきつと私は生まれねー。花の王みたく様々を愛し、育て、失ったからこそ私が生まれたんだろ。多分な」

「……じゃあ何でそんな姿なのよ」

「さあね。これまた多分だけどこの姿が花の王の知識、記憶の象徴なんじゃねーの？ 言ったら、私はあくまでも忘れられた記憶の欠片だ。花の王が覚えてる事は私は知らん。聞きやー良いってか？ メンドー」

「……アンタが、玉座の間の門番って所かしら？」

「そだな、今日はそんな感じだ」

「今日は？」

「ここ最近は城門守ったり街中飛んだりあちこち行ってるからなー。ま、花の王の指示ってやつだ。で？ 通るっつーなら私を倒さなきゃ進めねーよ」

「そ、なら……話は早いわね」

散符『夢想封印 寂』

「ノーノー、そんな欠伸の出るようなぬるい弾幕じゃ掠りもしねーよ」

そう言いながら空を飛ぶこともせず、に独特な足さばきだけで弾幕を回避し続けている。しかしハッキリ言つて奇妙過ぎる。明らかに歩幅と動く速さ、大きさが合っていない。

「花の王が忘却したのは感情や知識だけじゃねー。余りにも永い年月、暇つぶしと称して覚え、鍛え、極めた技術もまたほろりと忘れ去られたのさ。この歩行術もその一つ。そうだなあ、外の世界じゃ『ムーンウォーク』なんて呼ばれてる奴さ。当然、極めて至った場所が違うがな」

「無駄に覚えて、そもそも必要ないから忘れたつて事ね」

「そーいう事。さあ、私もやられたらやられつ放しじゃねーぞ」

右手を、虚空の何かを引くように。左手を、虚空の何かを掴むように。同時に動かし、刹那の間に右手を放した。それはまるで弓を引くかのような……瞬間、動に従い身体が動いた。脇腹がザックリと何かに裂かれた様に血が出る。

「痛つ……！何をしたの……つっ！」

「『不射之射』 つつ……あれだ、エアギターLv. 100みたいな奴だ」

「エアギターでこんな被害出る訳無いでしょー！」

「出来るんだよなあコレが。弓に限らず、刀、槍、鞭、銃、あらゆる武器はその道を極めるとその武器を持たずとも結果だけを引き起こせる。その神髄は詐偽其の物だけだな。武器を振るうとダメージが入る。『世界』を欺き、結果を幻惑させる。相手は『世界』が思う結果を受け、本当に攻撃を受けたかのようにダメージを認識する。本当は何も起こっちゃいないのに。要するに思い込みだ」

「つ……!?思い込みで血を流すってこと!?!」

「そうだ。只の思い込みでも、怪我を負えばそれが『事実』になるし、只の思い込みでも死ねば、死ぬ。無いものを有ると見せるんだ、詐欺其の物だろ?」

意味不明過ぎる。しかもそれが技術だなんて、それこそファンタジー非現実的じゃない。

そして何よりも厄介なのが、攻撃の動作以外に全く気配を感じない事だ。霊力や魔力、妖力、神力の類であれば感じ取る事も出来るのに、あの攻撃にはソレが一切感じられない。アイツの言葉が正しかったらつまり本当に何もしてない訳だから感じられないのも仕方ない……いや、仕方ないで済ませられる問題じゃないわ。

「ま、こんな事態々やるより弾幕一つ飛ばしたほうが威力も自在度も有るんだけどな。私にや霊力も妖力もなーんも持ってねえからこーして技術に頼るほかねーんよ。じゃ、次から本気だすぞ」

その直後、私は勘に従い全力で飛び回った。何が起きたのか一切分からないが、それ

でも留まるのはヤバイと勘は告げる。規則的な動きは死につながると勘は告げる。故に不規則に、荒波にもまれるように、自分の動きで酔いそうになる程に動き、動き、動く。

横目でアイツを見るも、ずっと自然体で立ち続けているだけだ。弓を構えるような動作すらしていない。だと言うのに何故……まさか、まさかまさか!?

「……あ、バレたくさい? そーなんだよねー。ま、この技に名前を付けるとしたら『不射之射』って所か? 武器も、構えも要らない。技術の極致というのに相應しい技だろ? 時代が時代なら一騎当千、いや、一騎当国ってどこか? ウケる」

「ふっ……ざけんじゃないわよ!!」

『夢想天生』

「おっ? お、おー、おっ、おお」

何かを呻きながら今度は回避に専念しだした。流星にこの技なら不射之射を受けないか。

目を瞑り、弾幕を放ちながら考える。あの不射之射は見えないし感じられないが、それだけだ。必中という訳でも無ければ、掠つたら死ぬようなモノでも無い。そこから推測するに、その常識外れな連射速度に目を瞑れば、見えないだけの矢に過ぎないのだろう。ならばきつと結界で矢を弾く事が出来るだろう。

方針を決め、目を開ける。するとそこには……

「ほい、ほいさ。ほほい、ほっ、ほっと。あーらよ」

素手で弾幕やレーザーを弾き、反らし、受け流す非常識な光景が目に見え込んできた。お前それも技術って言うつもりか。

「知らなかったのか？極致とはつまり、理を超える事だ」

「いやそれはおかしい」

「おかしくない奴には極致に至る事は出来ないからな。さあ、次だ。月歩！」

ボンツ！ボンツ！と空中で何かが破裂するような音と、空を飛んでいる私に肉薄してくる少女。というか、空中を走ってない？

「私は空を飛行することは出来ねえ。だけど、空を跳ねる事は出来る！」

「どういう理屈よそれ！」

「極めるとは『出来た』と言うことだ。理屈とはあとから勝手についてくることだ！」

「無茶苦茶するのもいい加減にしなさい！」

「出来ることをすることは無茶苦茶なんて言わねえよ！無間拔手！」

空を飛ぶ私に拔手？

そう疑問を抱くより刹那早く、拔手に私の弾幕が引き寄せられ霞と消えたのを見て、勘に突き動かされて結界を張った。



拔手と結界が一瞬の均衡を見せると同時に二重結界の応用でその場から離れる。

直後、光すら飲み込む闇の星が産まれ、潰えた。

「お前、本当に勘が良いんだな」

「な、な………今のは………」

「空間の特異点、宇宙の落とし穴、超重力、まあいろんな呼び方も有るが、様はただのブラックホールだ」

「ブラックホールを素手で産み出したって言うの!？」

ありえない、常識に当てはまらない。

「重力を発する程に重い一撃、光速に迫るスピード、空間を歪めるほどの握力。従来なら自分の腕ごと相手を屠る技だが私は一步先に行く。空間を歪める握力と同等の放力を同時に發揮し重力に指向性を与え、五指を更に光速で動かすことで超重力を相殺、相手にのみダメージを与える！」

「拔手って何だったっけ」

この際常識についてはもう気にしないことにする。だが、ブラックホールは駄目だ。空を飛ぶ私でも、空を飛ぶ私だからこそ致命に至る。重力に囚われない、あらゆる物から浮かぶ私でも、空間を歪め圧縮し消し飛ばすブラックホールは私に効く。というか効かない生き物など要るのだろうか。

なんにせよ、これでは近づくのは危険。離れていても、感知できない矢が飛んでくる。夢想天生で回避は可能だから近づかれなければ負ける事は無い……筈。しかし油断は出来ない。相手は弾幕を素手で弾くことが出来る。千日手は相手の勝利ね。弾けられない程の物量で攻めれば……

「へいへい、まさか離れてればいつかは勝てると思つてねえだろうな。夢は寝てから見るもんだぜ。音破！」

一步。踏み出した動作がそのまま超加速となり音を置き去りにする速度で迫る。遠距離戦も許して貰えなさそうね。ならば、やられる前にやるだけよ。

防がれるなら、防げなくなるまで撃つ！

『夢想封印』『夢想心珠』『夢想玉翔』『夢想天撃』

『大博麗弾幕陣結界』

「ツ！空隙ツ！翔衝拳ツ！走破脚！烈風蹴撃！拳断雷撃！」

弾幕を反らす、弾く、殴る、蹴る、踏み越える。四肢を十全に活用して不可能弾幕の嵐を駆け抜けた。既に目の前。さっきの技を使うならキルゾーンに入っている。

「くたばれ！無間ぬ き t ー」

しかし既に私の『必殺』は発動し、直撃していた。

『輪廻永劫封印玉』

あらゆるエネルギーを陰陽玉に封印する。運動エネルギーも。重力も。時間すらも。永劫に終わらない技をかけ続けるがいいわ。

突如虚空が裂けるようにして光が差す。どうやらあれが玉座の間に続く扉らしいわね。そこを抜ければ長い異変も遂に終わりね……。

扉に向かって飛ぶ……が、視界が傾く。誰かの攻撃……じゃない、ただ疲れてフラフラになっただけ。

「う……っ、仕方なかった事とはいえ……消耗し過ぎた……わね……」

巫女とはいえ、巫女だからこそ。神の力を長時間使い続けた代償はかなりものだ。しかし休んでいる暇はない。残された時間はあと僅かだろう、勘だけど。

真つすぐに飛ぶことすらままならない状態のまま、私は扉を抜けた。いよいよ最後だと奮起して、残った力を振り絞り飛び続ける。

終わりは近い。

あの頃に戻りたいと思う気持ちは俺にもあるよ。

門を抜けると、長い長い螺旋階段が私を待っていた。げんなりするわ。

螺旋階段を上っている間、妖精が襲ってくるわけでも、罨が襲ってくるわけでもなく、只長い道を上っているだけだった。

「ナントカと煙は高い所に昇るって奴かしらね」

しかし、螺旋階段から見える景色はただただ美しいの一言だった。花の王は私が想像もつかないほど昔からあらゆる美しさを探求しているらしい。

そう、二次元的な美しさだけでなく、三次元的な美しさを極めていると言えるほどに。絵を描かせれば最上。石を削らせれば最高。あらゆる芸術の頂点に存在している花の王は、当然のように弾幕ごっこでも頂点に存在している。

元々弾幕一つともに飛ばせることも出来なかったと言うが、今の姿を見てそれが本当だとは到底思えない。弾幕ごっこ、弾幕決闘法は弾幕の美しさを競うゲームだ。美しさにおいて花の王の右に出るものは無い。あらゆる弾幕は、花の王の弾幕の下位互換とも言えるほどに。花の王に直接鍛えられた私でも、未だにその域には達していない。

そんな花の王の弾幕に勝つ方法は見ないことだなんて、なかなか皮肉じゃないの。

そんな花の王に、弾幕ごっこを挑む。勝ち目なんて無い戦いだが、ソレ以外の勝負はそもそも戦いにならない。それが花の王に育てられた、巫女としての戦い方なのだから。

長かった螺旋階段も終わりが見える。荘厳華麗だった階段からの景色も、目の前の質素な扉で終わり。ここを抜ければ、最後。

呼吸を整える。勝ち目は無くても、勝つ。

意思を、決意に変えて。扉をくぐり抜けた。瞬間、辺りを煙が包み込んだ。

煙というか、湯煙だこれ。

「……」

「……」

宵闇、雲一つ無い空には少し欠けた月が浮かび、カポーン。とでも聞こえてきそうなその空間は水音と暖かい湯煙に包まれていた。

温泉じゃん。

室内の概念どこ行つたのよ。

「……あー、レイム？」

「……」

温泉は透明度が高く、その中心で胡座をかいていた花の王の全身を余すことなく見せつけた。

輝くようなエメラルド色の髪、燃えるようなルビー色の瞳、洗練された男らしさを感じさせる細マッチョな上半身に割れた腹筋。そしてその下の……

「……つはあ!? つ、ふ、服着なさいよ! 何で全裸なのよ?」

「風呂で全裸以外の状態の方がレアでは?」

「いいからさっさと上がりなさい! ごちそうさまです!」

「あ? 何て?」

「とつとと温泉から出ろって言ってるのよ!」

「はあ、いきなり部屋に飛び込んできて凶々しいもんだな」

よつこら、と腰を上げ、ザバアと湯船から出る花の王。当然全裸故に隠す物もなく、当人も隠すつもりも無いのか下のモノがふるんと……

「服を着ろーっ!」

「つぶねえ! おま、いきなりヒトの大事なところに陰陽玉投げんな!」

「大事ならちつたあ隠しなさいよ馬鹿あ!!」

馬鹿だ、馬鹿がいる。仮にも年頃の女の子の前で下の……その……アレを見せつける

奴がいるか。

いやまあ恥ずかしい話、まだ一人でお風呂に入れなかつた頃は一緒にお風呂に入つていたとは言え、昔と今では色々と事情が違うのだ。

恥ずかしくて直視出来ない……。

「隠せばいいんだろ隠せば……」

「何でそんな嫌々なのよ」

「これでいいだろ？」

「最初っからそうしと」

『。パスウェイジョンニードル』

「陰陽玉装備する奴がいるかあつ!!!」

「他に何で隠せと?!」

「ちやんと隠せるモノで隠しなさいよ!!」

見えてる、先がちよつと見えてる！陰陽玉だつてそこそこの大きさだけとちよつとアレでかすぎない!?!他の見たこと無いけど、見たこと無いけど！

『ギャーっ!?!なんか目の前に毛むくじやらキノコおおお!?!』

唐突に何処かで聞いた声が温泉内に響き渡る。

何処かと言うか、今日聞いた声だわ。

「……ああ？なんだホオズキか？陰陽玉フォームとか新しすぎんぞお前」

『ぞっけんなクソじじい！好きでこんななってる訳ねーだろ！てか離れろ！離せ！謎パワーで浮かべんなボケエ！汚い！臭い！気持ち悪い！3K！トリプル役満だくそが！』

「洗ったばっかだし汚くないよ」

『そういう問題じゃねえんだよどカスこの野郎！』

「いいの？離れていいの？」

『離せ！いいから離せ！』

「俺の陰部が全国ネットで拡散されんぞ」

『バツカお前止めろオイ考え直せ身内の恥部とか黒歴史そのものだから！』

「永いこと生きると黒歴史とか気になんなくなるし」

『お前と一緒にすんじゃねえよクソジジイ！！』

「何で唐突に漫才が始まるのよ……いいからさっさと服を着なさいよ」

\* \* \* \* \*



「待たせたな」

「いや、本当にね」

花の王は漸く服を着て陰陽玉を返してきた。思わず受け取ってしまったがものすごくばつちいい気がする。

『あー、キキ……。アタイ汚れちつたよ……。』

マジでやめてほしい。さっきのは記憶の彼方に送りやっってしまったのだから。

「さて、よくもまあここまで来れたな。歓迎するぜ、レイム」

威風堂々と温泉の奥に鎮座していた如何にもな玉座に座る花の王。さっきのがなければ威厳の一つでも感じられたんだけどね。

……思い出してないから。ぶら下げてるモノなんて思い出してないから！

「……ま、こんなトコじゃ話も出来んか」

パチン、と指を弾く。その僅かな間で景色が造りかえられた。湯煙が無くなり、空が無くなり、空間が無くなる。

瞬きの合間で石作りの部屋となり、宝石、絵画、彫刻、様々な嗜好品、芸術品が壁いっぱい埋め尽くしながらも、厭らしさを一切感じさせず美を武器とする花の王らしさに溢れていた。

それでも私にとってどんな美術品も売ったら幾らか程度の興味しか持たないから意味は無い。

「んじゃあまー……答え合わせと行こうかね」

「……」

花の王の唐突に投げかける問の様な、回答の様な、質疑の様な、そんな言葉が嫌いだ。全てを覗いている様で、自分以外を除いている様で。

「……花の王。アンタがなんでこんな異変を起こしたのか、只の暇つぶしじゃあ、無いんでしょ。どこか遠く……もう戻れない程に遠くに行くつもりかしら？」

「45点。ノー、だよレイム。それじゃあ落第点だなあ」

でも何より気に食わない所は……

「アンタが何を目的としているなんてどうでもいいわ。大事なのは結果、でしょ？花の王。アンタは此処から消えると言うのなら、幻想郷から居なくなるというのなら、私は博麗の巫女として止める」

「……ふー、やれやれ。まるで俺が幻想郷の大黒柱みてえな扱いしやがる」

「そうよ」

「言い切ったよ……。こんなワガママに育ちまっただのはダレに似たんだかね」

「いいだろう、レイム。答えが要らないと言うのなら、それも道だろう」

気に食わない。

「私を見ている様で、私じゃない誰かを見ているその目が気に食わないわ」

「……58点。その調子で答えを暴いてみな？」

勝ち目の無い戦いを始めよう。戦ったなら、勝つのが博麗の巫女なのだから。

その戦いに特筆すべきことは何もなかった。連戦、接戦、死戦を何度も繰り広げ消耗していた方と、万全、完全な状態で待ち望んでいた方。順当に戦い、順当な結果になった。

はずだった。

地に付しているのは王と呼ばれた男。膝を屈しつつも、鋭い眼光を携え闘気を発し続

けるは巫女と呼ばれた少女。

少女はまだ何が起きているのかを正しく理解しきれないでいた。故に震える脚を叩き、立ち上がるうとしていた。まだ戦える。まだ負けていないと。

奇しくも、そんな少女が現状を理解できたのは第三者からの声だった。

『嘘だろ……クソジジイが……負け……た……？』

眩く様な細かい声だった。しかし静寂に包まれていた玉座の間に響き渡るには十分な音量だった。

敗北。敗者の裏には勝者有り。少女は漸くその状況を理解できた。万に一つ、億に一つも無い勝利が、気が付けばその手の中に握りしめていた。

勝ち、勝った。勝った？勝ったのだ。少女は勝利を握りしめ、倒れ伏しそうになる身体に鞭打ち最後の気合いを入れる。勝者には、勝鬨を上げる権利が有るのだ。

無意味で、無価値な勝利でも。

「レイム、お前はそう。主人公だから。ゲームにおいて思うがままに動ける特別な存在、

それが主人公」

声が響く。

「昔、一人の少女が居た。その少女は、どこまでも人間で、何よりも強く、誰よりも孤独だった。その少女の名前は、『零無』」

声が響く。

「チカラという点では、零無は強者足りえなかった。技術という点では、零無は達人足りえなかった」

声が響く。

「だが、最強だった。何故なら何度負けても、最後に勝つまでやり直したから」

声が響く。

「その心こそが彼女を最強足らしめたのだ。何度死んでも、何度壊れてもまた、やり直す。相手の弱点を学び、相手の行動を学び、相手の隙を学ぶ。そして、勝つ」

「俺が唯一恋し、求め、そして失った少女だった」

やり直す程度の能力。俺はそう名付けた。

敗北の運命を捻じ曲げ、死の運命を捻じ伏せ、望む未来をその意志が折れぬ限り手に入れ続ける程度の能力。

その能力を持った少女は余りにこの世界の理から離れていた、只の少女だった。

俺がその能力に気が付けたのは偶然であり、ある種の世界の法則であった。この世界に生まれ落ち、幾星霜。この大地の王となつて、幾星霜。永く生きすぎた所為か、大抵の『程度の能力』を感じ、掌握することが出来るようになった。勿論『境界を操る程度の能力』も例外ではない。『運命を操る程度の能力』程度の能力ならば息をするように操作できた。

正しき世界を曲げ、歪め、有らぬ形にするのにも飽き始めた頃の事。その少女に出会った。

世界の調停者と、そう名乗った少女は俺に戦いを挑んだ。いや、戦いというよりは狩りに近いかもしれない。少なくともその少女は俺に勝つつもりだった。

当時の俺は人間を愛していた。しかし同時に人間に飽きてもいた。故にたった一つの命を刈り取る事に躊躇は無かった。果たしてソレは成功した。だが同時に失敗もした。手には確かに命を刈り取った感触が残っている。なのに目の前の少女は生きている。生きていどころか、五体満足に立ち向かってきている。

二度目。その命を刈り取った。だがまだ生きています。その時気が付いた。刈り取った様に思えた感触が無くなっていると。

三度目。確信する。この目の前の少女は何らかのチカラで自身にとって不都合な現在、未来を改変していると。

運命を捻じ曲げる。捻じ曲げた運命ごと消えてなくなり、そして元に戻る。

時空の彼方に送り出す。歪んだ時空が消滅しても、また元に戻る。

破壊の猛毒に犯す。毒を受けた事実ごと元に戻る。

何度も、何度も、何度も。その少女を刈り取る。あらゆる方法を試した。あらゆる技術を試した。どうすれば殺し切れるか、どうすれば奪いきれるか。

しかし、それは少女も同じだった。

少女の命を消す度に、少女は長く対峙し続ける。

10回目の収穫で、3秒。

27回目の収穫で、8秒。

59回目の収穫で、42秒。

1023回目の収穫で、5分。

そして、数えるのも面倒になった頃、その少女は俺と敵対して一時間、立ち続けた。それだけじゃない。ただの人間が、俺に膝を付かせたのだ。

そこで俺は漸くその少女に興味を持った。

「お前、名はなんという」

「……」

「名前がないなら俺が名付けてやろう。お前の名は……」

零無。無表情に、無感動に戦い続ける少女に相応しい。

零無は無表情、無感動に戦い続けるが、心が無いわけではない。恐らく万に達する位の挑戦で、今の自身では勝てないと判断したのか、対話を試みてきた。以来、俺と零無はそこそ一緒に過ごす事になる。零無は、世界を調停するという、俺には理解出来ない仕事をしているようだった。人の集落で暴れる土蜘蛛を無視したと思えば、名も知らないような虫の神を殺したり、妖怪を地底に叩き落としたりと、様々な事をやっていた。その行動規準は未だに分からないが、何らかの目的を持って行動しているようだった。俺はそんな零無を弄り、時に共闘し、時に喧嘩し、時に笑いあった。

そんな長くも、短い間を共に過ごした中で、知らず知らずのうちに俺は零無に惹かれていた。花の蜜を吸う蝶のように、気がつけば常に零無に引き寄せられていた。長く、永く生きてきたがこんなにも誰かを想った事は無かった。この瞬間が永遠に続けばいいと本気で想った。

だが零無が人間で有り続ける故に必然、別れは訪れる。



零無は死んだ。ある日、唐突に。

老いではない。病でもない。呼吸が止まり、心臓が止まり、生命が、止まった。

俺は激怒した。如何なる理由があろうとも俺から許可もなく逃げる事は許されない。偉大なる王からは決して逃げられない。そして、真の王にとって死は永遠の別れ足り得ない。

俺は作った。死魂の行き着く先に、決して逃れられぬ捕魂の花を。

俺は作った。死体すら甦る生命力の塊たる花を。

俺は作った。死魂と死体を繋ぐ狂気と魔力の花を。

そして俺は成し遂げた。死者の完全な蘇生。世界の理を覆す魔法、神業。その日、俺は神となった。

俺は零無に問う。何故に死んだ。

零無は答える。神の意思により死んだ。

曰く、この世界はとある創作物の世界である。

曰く、俺ですら知覚出来ない上位の『神』より産まれ、この世界をあるべき姿に戻すために彼女は動いていた。

曰く、既に手の施しようもなく、あるべき姿からかけ離れた世界を『神』は見放し、その神兵たる彼女を捨てた。故に、この世界では知覚出来ない方法で死んだ。そして、

『神』の手を離れても尚生きた彼女は既にあらゆる法則により世界より弾かれ、苦しみ抜いて死ぬ定めにあるという。

それが、どうした。

俺が、彼女と共に生きると。そう決めた。世界から弾かれるというのなら、俺が手を引つ張つて留まらせてやる。苦しみ抜いて死ぬというのなら、俺が守り救つてやる。世界は美しさに溢れ、永く生きても尚褪せぬ楽しさに満ちている。そんな世界を零無と共に生きたいと、そう、思つたから。

それでも、零無は諦めていた。諦める事を決意した。

もう、疲れた。と。

もう、休みたい。と。

世界に弾かれる存在は死しても尚緩やかな眠りに着くことは許されない。地獄の最下層に送られ、輪廻転生することはなく永劫の責め苦を受け続ける。ならばせめて、魂はこの愛した世界に散らせ、逝きたい。と。

認めない。上位の神がどうか、世界がどうか、知ったことではない。

俺が、そうであれと願つた。理由なんてそれだけで十分だろう。疲れた、休みたいとか、どうでもいい。生きろ。生きてくれ。

だが、零無の決意は変わらなかつた。ならば、そう。意思と意思のぶつかり合い、す

なわち、戦争。初めて零無と出会った時と同じように。初めて零無と出会った時と同じ場所。最期の戦争を始めた。

決着は、僅か一日でついた。何万、何億と続いた一日だった。

幾万、幾億の勝利も、無意味で、無価値だった。

零無は何処までも人間で、何処までも強く、何処でも『主人公』だった。

たった一度、地に伏しただけだった。それだけで俺は恋し求めた全てを失った。

そのまま、何日過ぎただろうか。気がつけば、ただ其処に居るだけの神として崇められ、信仰され、名実共に神と成っていた。すぐそばに小さな、小さな社が建ち、気がつけば其処に一人の少女が居座っていた。

死者の蘇生を成功させて神に成ろうとも、恋した少女一人救えない神など誰か信仰するのか。だが、それでも形だけでも神社があり、形だけの巫女が其処に居るのなら、其処に神は居なくてはならない。故に俺はその場所から逃げ出した。自身の身から神の力だけを切り置き、名付けることで区別した。勝てないが故、恋した少女一人守れなかつた忌み名を刻んで。自身の心から剥がされた大事な名を刻んで。

神の力に『剥零』の名を刻んだ。

「博麗神社の前身は元々は俺の神の力を切り置いた社に過ぎない。故に今のハクレイ神社は俺にとってはまだデカイ零無への墓標。其処になんも価値の有るものは無かった」

むくり、と身体を起こす花の王。花の王の物語はいよいよ佳境に入るようだ。

「無かったはずだった。だが、ある時ふ、と気がついた。零無が意思を通し死んだと言うのなら、零無の意思が形作る前ならば零無を挫く事が出来ると」

「零無が『神』とやらに殺される前に、完全な形で零無を困う。『神』に殺される前の零無はこの世界を訪れた事を心から喜んでいた。つまりこの世界に断ち切れない未練が有る筈だ。『神』に殺される事で生きること諦めると言うのなら、零無が『神』に殺される前に俺が『神』を殺す。そうすれば……」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！零無を救うとか、神を殺すとか、馬鹿なこと言ってるじゃないわよ！零無って人はもうとつくに死んだんでしょ!?博麗神社が建つ前だってんなら骨も魂も残っちゃいないでしょ！そんな過去に戻りでもしなければ助け、よ……う……も……」

「……」

「過去に、戻るって言うの……?」

「漸く、赤点は免れたな。それでも68点つてところだ」

「ふつつつぎけんじやないわよ!!!そんな馬鹿げた事が出来るわけないじやないの!!!」

「王に不可能はない」

「そんな散歩に行つてくる感覚で過去に戻れる訳無いでしょ!?!それこそ世界の理とやらをひっくり返すような荒唐無稽な話よ!」

「誰もそんな気軽に言つてねえだろ。だが、世界の理をひっくり返すのは魔術の領域だ。全世界において魔術の扱いに長けてる奴は俺を置いて他にない。そしてその俺が不可能じゃないというのならそれは可能だという話に過ぎないよ」

「常識外れにも程があるでしょうが……」

「勿論、生半可な魔術じやあ過去への扉に触れることすら出来ないがな。だからこそ、膨大なデータ量をやり取りできるだけの魔法陣が必要になる」

「……そんな、魔法陣がドコに有るつて言うのよ。まさかこの国を囲っている門がソレつて言うんじゃないでしょうね」

「それこそまさかだ。あの程度の大きさで過去に戻れるんだつたら、それこそ何万もの魔法使いが過去に日帰り旅行にいけるさ。アレは只の趣味に過ぎねえよ」

「趣味で作れるサイズかしら……」

「過去に戻る魔法陣、時空を超える極大魔法を発動するにはこの国は勿論、幻想郷、その外の世界、地球上全部丸々使つてもなお足りない」

「……じゃあ何処にそんなモンが」

「あるだろう。誰にでも目に出ることが出来る、世界一巨大なキャンバスが」

そう言つて花の王は上に指をさす。

途端に天井が消え去り、夜空が広がっていた。

「……あら、ここは樹の中じゃなかった？」

「今更だな。世界樹の中でも時間感覚が狂わない様に外の空を魔術紋で映してるだけだ。それと、まだ分からないか？」

花の王が指す先には何処までも広がる夜空があるだけだった。少し欠けた月が輝き、星達が騒ぎ、雲一つない星天だった。

……月がキャンパス？いや、それだったら地球よりも狭いはず。ならば何処に……。

「……ま、そもそも魔法使いでもないお前にや分からないのも無理はないな。誰にでも目に出ることが出来る、世界一巨大なキャンバス。それは……宇宙だ」

「宇宙……？」

「月の発する魔力を使う月魔法ぐらいは聞いた事あるだろう。そして同じく、輝く星一つ一つにも異なる魔力を発している。その星々を繋ぐ星座という見方、人間はこの星座

に様々な伝説、神話を伝承したただけだが、俺にとって全く違う見方となる。人間が伝える星同士の繋ぎ方とはまた別の繋ぎ方を結べば、空に浮かび上がる巨大な二次元魔法陣。星々の物理的な距離を紡ぎ直せば、三次元魔法陣。この二つを膨大な数かけ合わせれば、過去に飛ぶだけの膨大なデータ量をやり取りできる天体魔法が完成する」

……は？

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！何を言ってるのか全然理解できないけど……アンタの言ってる事が本当なら、方法さえ解れば誰にでも過去に飛べるって言うの!？」

「半分正解で、半分不正解。確かに方法が解り、星同士の線で結べるなら誰にでも天体魔法は扱えるだろう。だが、その線を結ぶ事が難しい。何故なら、星座図の様に実際の天体には物理的な線も、魔法的な線も何も繋がっちゃいない。そして星空にただ外見の線を結んだだけでは何の意味も持たない。見た目上の同じ大きさの魔法陣を描く事に何の変わりも無いからだ」

「い、意味がまるで解らないわ……だったら、なんで花の王はそんな事言いだしてるのよ。そんな物机上の空論じゃないの!」

「……もし、空に浮かぶ星一つ一つに、目には見えないけど確かに存在はしている大きな目印があつて、どれだけ離れていてもソレの距離や場所を正確に認識する事が出来るとしたら。その目印同士を自在に線で結ぶ事は容易いとは思わないか？その目印同士が

実際どれだけ離れていても、二次元的に線で結ぶ事はもちろん三次元的に結ぶ事だつて容易な筈だ。勿論、その線は実際の光星間を繋ぐ物理的な線じゃない。あくまでも、自身の中で結ぶだけの話だ」

「な、そ、そりゃあ訓練すれば、頭の中で結ぶ事なんて簡単に出来るんじゃないの?」「ああそうだ。簡単に出来る。お前も自分の家の中の家具類が何処にあるかなんて目を閉じてでも正確に解かるだろう。その延長線に過ぎない。いや、むしろ常に正確に場所を知覚できる分星同士をつなぐ方が楽かもしれない」

何が言いたい……?星に目印をつける?仮に花の王が言った事が出来るとしてもどうやって星に目印なんて刻むのか……

まてよ。

まさか。

本当に目印がついていたのなら?

「やつと察してくれたか。いつもの鋭さは何処に行ったんだよおい」



「そんな……それこそ絶対有り得ないでしょ?!!」

「絶対有り得ないなんて、それこそ俺には絶対有り得ない。なんだ? 知らなかったのか? 王に不可能は無い。空に輝く星一つ一つに目印となる花を咲かせ回る事なんて、いつもやってる事と変わりがないからな。そうだろう? 宇宙空間ですら俺の散歩道。ましてや、何億年生きてると思ってるんだ? そんな俺がずつとこの地球に居たとでも?」

意味が解らない。理解できない。頭が動かない。こんな戯言と切り捨てられたらどれだけ楽だっただろうか。

「あ、アンタ……花の王なんでしょ。大地の支配者なんでしょ? 何でそんな軽く宇宙に行けるのよ……」

「知らないのか? 星は遠くから見れば輝いているが、近くで見れば地に違いない。当然、俺の支配下だ。ま、地球よか幾分殺風景だがな。そしてそれは太陽の様な恒星にも言える事だ。いかに億度で燃えようと俺を融かすには絶対足りない。そして、俺が立つ場所こそが地となる。故に、地には花が咲く」

「ふ、ふぎけてる……」

私は、ある意味で花の王を見くびっていたのかもしれない。非常識でも限界はあると。どんな深淵にも底はがあると。なんだかんだで戦えば勝てる」と。

実際はまるで違う。非常識は何処までも非常識で、どれだけ堕ちても底を照らす事も

叶わず、戦いになると思う事すら誤りだった。

何故。疑問が出る。

「何で……何で態々弾幕ごっこを受けたのよ……。何でわざと負けたのよ……。！何で此処まで綿密な計画を立てたのに台無しにするような真似出来るのよ!!」

何で、なんでなのよ。天体魔法つてのを使えば何時でも過去に行けるんでしよう!?

「答えなさい花の王ツ!!」

「……いくつか勘違いをしているようだ。天体魔法はあくまでも魔法陣となるモノに過ぎない。何時でも発動できるというのは正確ではない。星の動き、向き、時間。無制限のその情報から、星々を更に無制限通りの組み合わせで魔法陣を描くだけだ。当然時間によつては発動すら出来ない魔法だつてある。そして、魔法陣だけでは魔法は発動しない。魔法陣を起動するためには魔力を始めとしたエネルギーや生贄等が必要だ。故に機を待つ必要があった。それが、今日。態々弾幕ごっこを受けた理由は、ソレが必要だったから。過去に飛ぶ為のエネルギーとして、俺以外の霊力や妖力、魔力、神力等々……それが少なからず必要だったからだ。それらを回収するのに弾幕ごっこ程適したモノも無い。わざと負けた……まあ、わざとじゃない。魔法陣を起動するためのエネルギーの方にリソースを殆ど持つてかれたから全力が出せなかつただけだ。そして、綿密

な計画を台無しにっつてとこだが……

この計画を思いついたのは、昨日だ」

……え？

意識に空白が出来るとはこの事か。

つまりなんだ。

偶々魔理沙が異変解決に乗り出して、偶々幻想郷中の人間、妖怪達が異変解決に向かって、偶々私が異変解決に乗り出した日に、偶々過去に戻れる魔法陣を発動できるって事……？

「『ご都合主義』を引き起こす。それが、俺の真骨頂。なんてな」

「つ……。……。……ふうっ。いや、アンタがどんなご都合主義を引っ提げた所で、もう弾幕ごつこの勝負はついてるんだったわ。アンタの話がスケール大きすぎて忘れてた。アンタの野望もこれまでよ」

「……ああ、これまでか」

「なんて言うと思ったかよ」

当然、リトライだ。

「……は？何を言ってるの？」

「何もカニもねえよ。コンティニューだ」

「ふざけてるの……？」

「異変の黒幕側がコンティニューをすることを禁じるルールなんて無い。そうだよなあ？スペルカードルールの原案を作ったのはこの俺で、霊夢は俺と共に話し合いながら作り上げたんだから」

「……本気……？」

「当然。まあ、これが妖怪ならそれこそ『存在意義』に関わる大事だろうがな。残念、俺は妖怪じゃあ、無い」

そして、もう過去に戻る為にリソースを割く必要も無くなった。

「なっ、なん……で……」

「言っただろう？天体魔法は無制限通りの魔法陣を作ることが出来ると。そして『ご都合主義』を引き起こすのが俺の真骨頂だと。『魔力を異世界から無限に引っ張ってくる』魔

法が今完成した所だからな」

「ああ、安心しろ霊夢。時間は既に俺の味方だ。俺は敢えて二つ、嘘を吐いていた。

一つ、今日発動できる魔法陣の効果は正確に言えば『過去に向かう扉を作る魔法陣』を極小サイズで作る魔法陣だ。魔力消費なんて微々も微々たるモノだ。一度その時刻になれば勝手に発動し、後はどれほどの時間が過ぎようとも、条件が整えばゆつくりと魔法陣を起動すればいいだけだからな。無論、この魔法陣をどうにかする事はまあ不可能に近い。なんせ極小。それを世界の何処かにも隠しちまえば誰が見つけられるというのか。

二つ、この魔法で向かう過去に一切の法則は無い。扉を潜れば戻る時は1万年前か、1億年前か、はたまた1秒前か。そして戻る場所も、運が良くてこの地球内部を含めた何処か、悪ければ銀河を幾つも跨いだ先の宇宙の辺境。だが、それもとある条件をクリアすれば簡単に解決できる。即ち、戻りたい時の『座標』と『時間軸』の目印があれば良い。

『座標』は、俺と零無が始めて出会い、最期の別れとなった場所、『博麗神社』。

『時間軸』は、過去、現在で二人しか持ち合わせていない『やり直す程度の能力』。

それらを目印に使えばいい。故に、霊夢。お前が生きてようが死んでようが、主人公

の特権たる『やり直す程度の能力』さえあれば俺は、恋し求める嘗ての時間に戻る事が出来る。

解かるだろう？ 霊夢。つまりこの戦いに『逃走』は有り得ない。『博麗神社』がお前の家で、『やり直す程度の能力』をお前が持ち続ける限りこの戦いは決して終わらない。

わかるだろう？ レイム。つまりこのタタカイはオレとレイムの意志と意志のぶつかり合い。レイムがアキラメタその時、オレのシヨウリが確定する。

わかるだろう？ れいむ。おまえのおもうげんそうきようをまもりたいのなら、おれのいしをへしおるしかない。なあ？」

「ワカルダロウ!？」

さあ、楽しい楽しいゲームの始まりだ。

時間制限は今日が終わるまで。残機は自分の決意の分だけ。ルールはこれだけだ。

「つつつ?!」

布団を蹴り上げ飛び起きる。つい先程までの感覚は既に無くなっているが、記憶は確かに残っていた。

思わず首を擦る。まるで先程の光景が夢であったかのように脳裏に鮮烈に焼き付いている。

私の首を持ち上げ、押し折るようにゆっくりと力を込めていく花の王の、歪に曲がった笑顔が。

「つー……スウー。ハアー。スウー。ハアー」

よつぽどさつききの光景がショックだったのか、まともに動かない肺をゆっくり動かす。心がすごく痛い。育ての親に明確な殺意を向けられることがここまで辛い事だとは想像もしなかった。

今日は、このまま布団に戻って籠りたい気分だった。

「霊、霊夢ー！霊夢ー!!! 起きろオ!!!」

魔里沙が突然私の自室に飛び込んできた。

……はて、この時間に魔里沙が飛び込んできたのは今までの『今日』では一回も無かったはずだけど。

「つていうかなんであんたそんなビショビショなのよ。外そんな大雨だったの?」

「お、お前、こそ。なんでそんな、呑気に、いられるんだよ!」

ぜえぜえと肩で息をしている魔里沙は外を指差し、

「げ、幻想郷がつ、幻想郷が!!」

と必死に訴える。仕方なく私は寝巻きのまま外に出て、辺りの様子をうかがう。

天気は晴れ。風速1メートル。日射しはいつも通りで……

「……………えっ?」

眼下の景色は海に沈んでいた。

『東方偉世界〜Paradise in The Ocean.』

博麗神社。冥界。妖怪の山。天界。それ以外は全て海の底に沈んでいた。遠くに見



える巨木に目を向けると、名もなき妖怪達が必死に木にしがみついていた。「朝起きたら家どころか魔法の森が水の底だ！まだ夢の中かと思つたぜ！」

—水も滴る普通の魔法使い—

霧雨魔里沙

「この水……しよっぱいわ。多分海水よこれ」

—七曜の水中脱出マジシャンガール—

パチユリー・ノーレッジ

「ううくん。海水はめちやくちや機械に悪いんだよな」

—河童の海流れ—

河城にとり

「だいぶ生きて来たけどこんな状況は流石に初めてだ」

—燃えない不死鳥—

藤原妹紅

「とうかなんでアンタ等うちに来てるのよ」

—見る影もない楽園の巫女—

博麗霊夢

博麗神社には5人の人、妖怪、魔女が顔を突き合わせている。三人寄れば文殊の知恵

というが、こんな奴等じゃあ何人寄ってもダメそうだ。

「何が問題かって、一切の予兆無しに突如この海水が幻想郷中に満たされた事よ。普通これだけの水を何処からか持つてくるにしても、造り出すにしてもまず少しづつ水位を上げていく物じゃない？」

「私、昨日はずっと機械作りに熱中してて寝てないけど、本当に気が付いたら海の底に居たんだよ」

「迷いの竹林も似たようなモンよ。しかもどうにもこの海の上は空を飛びにくいと思ったらありやしないわ」

「……里の人間達は大丈夫かな……」

「そもそもこんな一大事にスキマ妖怪は何をしているのかしら」

「誰がこんな事仕出かしたのかわかんないけど、塩水とか絶対植物に悪いわね」

「花畑とか壊滅不可避……あっ（察し）」

「この異変が解決されるのも時間の問題かな」

違う、むしろ主犯は花の王だ。と声に出して言いたい。だが証拠も無ければ、花の王がやったと言えるだけの状況でもない。ありえないのだ。花の王がやったと思うことも。花の王がこんな状況にする事も。

幻想郷のほぼ全てを海に沈める。そんな事をすれば必然花の王が大事にしている花

だって海に沈むのだから、そんな事をする訳が無い。そんな事をすると思われはすもない。むしろこの状況を解決する側だと、誰もが考える。

何とかして花の王の居る場所に向かわないと……だが、どうやって。この海の上を飛ぶ事は難しく、常に『何か』が纏わりついてくるような感覚らしい。そして、この海の中には見たことも無いような生物がうようよ居る。泳いでいくのも現実的ではない。

「紅魔館の連中はどうしたんだパチュリー」

「……私以外は全員地下に籠ってるわ。妹様を閉じ込めていた結界が、全員を守るシエルターになるなんて皮肉よね」

「吸血鬼は流水に弱いんだったか。永遠亭の奴等は何処に行つたんだか、私が溺れ死にながら向かったんだが誰も居なくなつてたよ」

「山の天狗達はこの海を飛べないみたいだけどなんかずつと騒がしかったよ」

「……此処に居ない奴らも無事だと良いんだけどな」

あーだこーだと話し合う四人。すると何処からともなく歌声が聞こえて来た。歌声と言えばミステイア・ローレイ……だが、聞こえてくる声はどこか中性的で、ミステイアの声とは全く違う。

「……なんだこの声？」

「あ、アレ見てよ！」

「ん……う？ありや……舟か？」

この広い海の上を、いつの間にか小舟が揺蕩っていた。いや、揺蕩っていたというより、ゆつくりとこつちに向かっている。

小舟の上には黒い襦袢切れを着た人？のようなモノが乗っていた。一本の竿を使い、ゆつくりと、ゆつくりと神社に向かって来る。

ギイ

ギイ

「ラララ……ラララ……。やあ、どおも」

「お、おう」

「……貴方、何者？魔力……のようで魔力じゃない。かといって霊力でも無ければ妖力でもないわね、その纏ってる力は何？」

「ふうむ、纏っている力ねえ。それは分からないなあ。興味もないし。強いて言うなら……原初の力？まあどおでも。僕は渡守。遙か昔に陸から陸へ繋げた役割を持った。よおろしく」

「渡守……?」

「そおき。昔々の話なんだけど、超でっかい大陸があつてね。僕はそこそれ以外の小島を行き来してたのさ」

「なつ、つまりアンタも花の王並の長生きさんか!？」

「花の……? ああ、あの。まあそおとも言えるし違うともいえる。僕は人が自力で海に繰り出した時に存在意義を無くし、そして死んだ。何の因果かこおしてまた復活して、渡守をやつてる。不思議だねえ」

「……アンタは、何者なんだ？」

「……ラララ。僕は渡守。ただ、まあ君達的に言えば僕は妖怪みたいな、神様みたいなモノかな」

「妖怪」

「神様」

「そう、僕は遙か昔にあらゆる陸の生き物の『海に出たい』という信仰とも言える心から生まれ、希われた。そおして生まれたのが僕さ。ラララ」

「……成程ね。つまり海への畏れ、海への信仰がアナタを形作つたと。だとしても分からないわ。何故そんな貴方が魔力の様でそうでない力を持つてるの？」

「ラララ……。それは僕があらゆる陸の生き物の心から生まれたからさ。今の妖怪や神

様は主に人間だけの信仰、畏れで形を成しているからある意味で純粹だけど、僕達の時代ではもつと混沌としていたのさ。この力は願いの力。想いを、夢を、成し遂げる。そんな曖昧な力さ。魔力や、妖力、霊力の様に色々な事は出来ない。でも、たった一つの事だけを成し得られるそんな力。原初の力さ」

「じゃ、じゃあアンタならこの海を超えられるのか？」

「勿論、僕は渡守だからね」

「なら乗せてってほしい所があるんだけど」

「……霊夢？」

「この海の上では飛べない。舟ならある。つまり、そういう事でしょ花の王。」

「世界樹まで乗せてきなさい」

「ラララ……お安い御用さ」



「二人乗るのがやつとの舟が一気にデカくなった……」

「魔法っぽいけど、魔力反応は一切感じなかったわね」

「ラララ……それが願いの力、原初の力さ。海に出たいと願うなら、この舟は何人でも乗

せられるよ」

「はあー。そりやすげえ」

ぎい

ぎい

「ねえ、この舟分解してみている？」

「おい止めろ。現状唯一の移動手段壊そうとすんじゃないやねえ」

「えー。でも河童にかかればどんな海でもぶっ飛んでいく高速船とか簡単だよ？」

「ラララ……それはよしといた方がよいよ。何故ならこの海は原初の海なんだからね」

「原初の海……って何よ？」

ぎい

ぎい

「今より遙か昔、世界は超大陸パンゲアとそれ以外の海って分けられてた。もちろん、僕が主に行き来していた小島も海って扱いだったよ」

「だからなんだってのよ」

「ラララ……。希われて僕が生まれるくらいなんだ。当時生きていた知的生命体以外にも海を目指し、海に出た生き物は幾らでもいた。だがそんな彼等は全て海に喰われた」

「海に……!？」

「喰われた……!?!」

「おいおい……流石に比喻だろ?」

「いいや、海に喰われたのさ。確かに当時の海は、其処に住まう生物もとても凶暴だったけども、それ以上に凶暴だったのは海そのものさ。なにせ海を泳ぐ陸上生物を飲み込み、空を飛ぶ鳥をも飲み込むくらいだ。故に原初の海では飛べないし泳げない。そういう畏れが生まれたのさ。まあ現代の君達にとつては飛びづらい、泳ぎ辛い程度だろうけど、それでもこの海と海上は危険地帯なのさ、僕の舟以外はね」

ぎい

ぎい

「あー、つまりアレか?この舟に乗っていけば安心安全つて事か?」

「ラララ……まさか。当時の海の生き物も海に負けず劣らず凶暴さ。自分以外は全て食料と思つてるような奴等さ。この舟なんか一飲みだよ」

「何い!?!そういう事は舟を出す前に言え!!」

「ラララ……」

「歌つてごまかしてんじやないよ!!」

「……ちよつと、騒いでる暇なんて無いわよ。舟の下見てごらんささい」

パチュリーの言葉に従つて舟の下を覗いてみる。魚ではない、何かが此方を窺つてい



るのが解かる。

「どうやら奴等私達の事をゴハンだと思ってるようね」

「呑気な事言ってる場合かよ!？」

「……ま、私最悪死んでも復活するし」

「う、うおおチクシヨウ!?!河童の科学がこんな原始生物なんぞに負けるかア!？」

「ラララ……僕の役割は舟で運ぶだけ。荒事は専門外だよ。それにこの舟も見た目通りの耐久力しかないから壊れたら御終いさ」

「オイ!?!もうちよつと何とかならないのか原初の力つて奴で!?!」

「無理だよ。言っただろお? 願いの力は万能じゃないのさ」

ぎい

ぎい

「……何にせよ、この舟を守る為にはアイツ等を撃退する必要がある訳ね」

「だったら話は早いわ。この舟から一旦降りて、海の中で奴等を叩きのめす。一番手っ取り早い方法ね」

「ラララ……僕は舟の上から応援してるよ」

「……わりいな、私もパスで」

「お前も働くんだけ不死人」

「馬鹿言え！炎属性の私が海でなんかできる訳無いだろいい加減にしろ！」

「この舟の代わりに食べられて囹にでもなれよ」

「この魔女辛辣なんですけど!？」

「何でもいいわよ。とりあえず水中でも呼吸できるようにはしてあげるわ」

「お、サンキューパチュリー」

「貴方も魔女ならこれくらい自分でしなさいよ……」

ぎい

ぎい

「あらかじめ言っておくけど、海の中じゃあいつもの調子で弾幕を張るなんて到底無理よ。それにこの舟を守らなきゃいけないんだから、調子乗って弾幕張ったらこの舟に当たった……なんてことにならないようにね」

「はっ、そんなアホな事する奴なんて居る訳無いぜ！」

「アンタに行ってるのよ魔理沙」「んなあ!？」

「いや、夫婦漫才はいいから」「誰が夫婦よ（だぜ）!」「ひゅい!？」

「アンタ達呑気で良いわね」

「霊夢に言われたらおしまいだ」

「ああん?」

「そこ！喧嘩しない！この海のと真ん中に投げ出されたら相当拙いわよ！」

「解かってるよ！さあ、今日は海産物パーティーだ！」

「いや、アンタ海の中じゃ炎使えないでしょ……」

「不死人って大変だね」

ぎい

ぎい

ぎぼん ぎぼん

ぎい

ぎい

ぎぼあ

「ラララ……お帰り。戦果は如何程かな？」

「ん……まあ思ったよりは弱かったが……な」

「目、目がしみる……」

「口の中が超しょっぱいぜ……」

「海の中で弾幕宣言するなんて馬鹿じゃないの？」

「うるせつ」

「げほっ、ゲホッ、ぐっ、ゴボッ、ゲボッ！」

「一人死に掛けてるじゃないか……」

ぎい

ぎい

「おや、アレは船……かな？ 僕の知っている物とはずいぶん違うけど」

「うん、ありやあ……いっぞやの宝船じゃないか」

「なによ、空飛べてるじゃない」

「……でもアレ前に見た時より遥かに遅いみたいだな」

「空飛ぶ船かあ、分解したらどんな構造かな？」 「お前そればっかだぜ」

「あら、よく見たらあの船に沢山の人間が乗ってるみたい。まるでノアの箱舟かしら？」

「あ！ 慧音!! 無事だったか!!」

「あの先生がいるって事はアレに乗ってるのは盟友達らしいね。良かった〜」

「ラララ……アレは危ないね。海の良い餌食だ」

「え？ それって……」

ぎい

ぎい

ぎいちやぶん

ぎいちやぶん

「ラララ……さあ来るぞ。海が本格的に動き出した」

「な、何が始まるんだよ……!」

「ラララ……海は貪欲に、強欲に、そして無欲に全てを欲つした。そして全てを飲み干した。その身を武器として」

「おい、だから何が始まるんだよ!」

「ラララ……海の怒り、すなわち……津波。勿論、君らの知る規模ではない。宇宙との境界線まで届く高波だ。さあ、船に掴まって。死にたくなければね」

ちやぶん

ちやぶん

ぎいぶん

ぎいぶん

ぎいぶん

「な、何が起きてるんだ!?!」

「木が伸びて……? いや、まさか、水位が下がっていつている……?」

「ひゅ?!う、おお……!?海が、干上がっ!」

「……嘘でしょ、地平線が……埋まってる……?」

「ラララ……ラララ……原初の海は嘗て最も大きな『生命体』だった。名前だけなら聞いた事あるんじゃないかな。原初の海は嘗て其の名は無かった。ある時一人の男が名前を付け、海となり、『生命体』となった。ラララ……その最も巨大な命の名。ラララ……」

『レヴィアタン』

「れ、レヴィアタン……!?」

「知っているのかパチュリー!」

「逆になんで貴方が知らないのよ!レヴィアタンって言ったら聖書に出てくる怪物でしようが!水魔法を極めていけば必然的に知る悪魔の1柱でもあるわ!強力な水の魔法を構築する時にはまず使われる悪魔よ!って言うか魔理沙貴方が盗んでいった『海魔深淵の書』に記載されていたでしょう!何で知らないのよ!」

「二回も言わなくていいだろ!?いやだって……先に光魔法の方解読したかったし……」

「あーもうこれだから人間はあ!!」

「ラララ……言いつらいけど、魔女。君の知っているレヴィアタンとあの『レヴィアタン』は違う……と言っておか、オリジンと言っておか。あの『レヴィアタン』は嘗ての昔、人間と呼ばれる知的生命が海に出て、海を制した時と同時に死んだ。ラララ……。程なく







ちやぷん

「ラララ……。やあ、津波は過ぎ去ったよおだよ」

「……」

「……」

「……生きてる」

「……生きてるぜ」

「……あ、た、宝船は!？」

「……無い。何処にも……見当たらない」

「……おい、それどころか……妖怪の山は何処行った……?」

「……山どころか……陸一つ何も見えないわ」

「……目に見えるのは、太陽と、海……だけ。は、ははっ……こりやなんかの夢かねえ?」  
「う、嘘……だろ……? 慧音は……何処に行った……慧音……?」

「ラララ……言っただろお? 海に喰われたって」

「ふ、ふざけんな!! ぶざけんじゃねえ!! こんな、こんなことあつてたまるか!!」 「ぐっ

……」

「落ち着きなさい不死人！渡守に掴みかかってもしようがない事でしょう!？」

「だけど!!でも!だって……!コイツが……もつと早く……慧音え……」

「……渡守はあの津波から私達を守ってくれた。それで良いでしょう……?」

「つ……どうしてっ!何で私が生き残ってっ!慧音が死ななきやいけないんだっ!畜生

!ちくしょう……!」

「……少しは気が晴れたかい?ならこの手を放して欲しいんだが」

「……」

ぎい

ぎい

「……落ち着いたかしら。なら先を急ぐわよ」

「……おい霊夢、流石にそれは冷たすぎやしねえか。目の前で、すぐそこで、人が死んだんだぞ……!」

「……盟友」

「馬鹿ね。津波に飲み込まれた……ように見えただけよ。そうでしょ?紫!」

だいせいかくい。さすが霊夢ねー。

「っ！スキマの!?!どういう事だよ!」

「……成程。見ないと思つたら」

「っ！ビックリさせんじやねえぜ紫！お前、さつさと出てこい!」

はいはい、ちよつと待ってなさい。

そう言っつていつも通りの光景。スキマからぬらりと出て来たゆか……紫？

「はい呼ばれて飛び出てゆかりちゃん♪ゆかりんでーす!」

「何この頭のおかしいナマモノ」

「四季異変はとつくに解決されてるわよ」

「可哀想に。賢者様の頭の中が腐っちゃったんだね」

「お前……どうしたんだ」

「……」

「ラララ……」

「異体同心の目が痛いッ！何なのアンタ等気が合い過ぎじゃないかしらッ!」

「なんで貴方生きてるの?」

「ものすごい暴言に聞こえるんですけど!?」

ぎい

ぎい

「ちよつとー! 幻想郷壊滅の危機を救った紫さんを褒めたたえてくれる人はいないのかしらー!?」

「ヤバいぜ。なんかこの紫いつもの胡散臭さが消えて精神退行してやがるぜ」

「あーもーつくかくれくた〜!! 何なのよ意味わかんないんだけど! 起きたら急に幻想郷全域が海に沈んでるし、結界ほぼ壊れかけてるし、人里壊滅してるし! 何とか人間一纏めにして命蓮寺に突っ込んだと思ったら今度は何よあの津波は! 死ぬわ! 幻想郷が死ぬわ! 仕方ないから船に変化した命蓮寺ごと天界に突っ込んだいたわよ!」

「天界に突っ込んだって……それ平気なのか?」

「じゃあ……じゃあ慧音は生きてるのか!?」

「な、何よ急に。生きてるわよ……むしろ死んでたらこつちが困るわ」

「そうか……! そう……か……。良かった……よかったよお……」

「え、ええ……なんかいきなり泣き出したんですけど、情緒不安定?」

「え、それお前言う?」

ぎい

きい

「で？この舟は何処に向かつてるのかしら？」

「ああ、今世界樹に向かつてる……らしい」

「らしい？」

「何でか盟友が世界樹に向かえって言ったんだよ。花の王に救けでも求めに行くのかな？」

「……はゝあ。バカねえ河童は」「何だと!？」

「花の王がこの異変を起こしたって、そう考えたんでしょ？霊夢」

「そうよ」

「……ハア?!いや無い無い!それは無いって!だって考えても見てよ!こんな海に花が沈んじゃったたら塩害で絶対枯れちゃうよ!」

「まあ、そうね。でも少なくとも幻想郷を一瞬で海に沈めることが出来る奴が居るとしたら、それは花の王しか居ないでしょ？」

「いや、そうかもしれないけどさ……でも、花の王がこんな大異変起こす理由がないでしょ!」

「理由が無くても思いつきで起こしたとかでしょ絶対」

「……紫お前、花の王に何か恨みでもあんのか？」

「……逆に無いとでも?」

「ええ……」

「ラララ……皆さん、間もなく世界樹に着きますよ」

「うつを、いつの間に……」

「ラララ……僕にとつて海上は何処も同じ距離です故に。それでは皆さん頑張つてらっしゃい」

「……しつかしあれだな。よく考えたら世界樹の中への入り口つてこの海の下にあるんだよな。どうやってそこまで行くか」

「なあ渡守、この舟で下まで潜れないのかい?」

「ラララ……僕は渡守。陸と陸を結ぶのが仕事であつて海の底に沈むのは仕事じゃないね」

「ちえ」

「あら、こういう時こそ紫ちゃんの出番じゃない?

お、漸くわたしの出番ね!任せなさい!

いよつ待つてましたゆかりちゃん!」

「……アンタ……」

「……何も言わないで霊夢。お願いだから……」

「そつとしておこう。しぬほどつかれてるんだ」

紫が世界樹の幹に扇子をすり当てる。すると其処が裂け、大きな入り口が出来上がった。

「さあ、ガンガン行くわよ！あのクソジジイの横つ面ぶん殴つてやるんだから！」

幻想郷を壊滅させるような大異変を起こしておいて、横つ面をぶん殴るだけで済ませる紫は、やはりなんだかんだで花の王を信頼しているのだろうか。花の王が無意味にこんなことをする訳が無いと。こんな事をしなければならぬ理由があると。そう、思っているのだろうか。

私は、そんな紫を直視できなくて、目を背けた。

背けた先、混ざり物の無い海の底に、見覚えのある緑色の髪が見えた。

「……幽香？」

「霊夢ー！なにしてんだー！置いていくぞー！」

「……まあ、いいわ」

花の王に。本気の、花の王に勝たなければ、私の、幻想郷の未来は無いのだから。

気が付けば、天を仰いでいた。

一瞬。そう、一瞬だった。

紫が、道中が面倒だからと、スキマを使つて直接玉座の間への道を作り、其処に全員で飛びこんだ。

着地。直後鮮血に染まる視界。

舞う妹紅の髪、何が起きたのか全く理解できない魔理沙、にとり、パチュリー。

刹那で反応出来た紫は、退くと同時に融けた。

にとりが手元のスイッチを押す。なんのスイッチなのかは分からないが、何か緊急用だったのだろう。

しかし機械が起動する前に、飛んできた水を浴びて凍り付いた。

パチュリーと魔理沙が同時に魔法を唱える。

最初の一言。その初めの発音を発する前に二人とも喉を潰され、両腕を折られた。

空を飛ぶ。そう意識した瞬間、視界が揺らぎ、顎の骨が砕けた。蹴られた……のだからか。

そうして、天を仰いでいた。

揺らぐ視界の隅で妹紅が水の球に囚われ、透明だった水が見る間に赤く、紅く染まっ  
ていく。



ヒユツ、ヒユウと聞こえる音は、魔理沙かパチュリーが何かを話そうとしているのだろうか。

にとりと、紫の気配が一切感じられない。にとりは、まるで今にも迎撃せんと言わんばかりの迫力を持った氷像となり、紫に至つては何処に居るのかすらも全く分からぬ。空間に融けてしまった。

コツ。コツ。靴が床にぶつかる音がする。

コツ。コツ。

「霊夢、これで二回目だ。さて、俺の前で10秒立ってられるのは、何回目の収穫になるかな？」

最期の視界には、揺れるサファイア色の髪が映っていた。

ぐしやり

「ゲームオーバー。だが当然、リトライするだろうか？」

\* \* \* \* \*

「つつつ!!」

布団を蹴り上げ飛び起きる。つい先程までの感覚は既に無くなっているが、記憶は確かに残っていた。

思わず額を擦る。まるで先程の光景が夢であったかのように脳裏に鮮烈に焼き付いている。

私の頭を踏みつけ、踏みつぶす様にゆつくりと力を込めていく花の王の、歪に曲がった笑顔が。

「はっ、ハッ、はあっ、ハアッ、ふうっ、ふうー、ふうー。……ふうー」

「……生きてる」

痛い。踏みつけられた頭も痛い、それ以上に心が痛い。挫けてしまいそうだが、それでも戦わなければ、生き抜かなければ、花の王を、倒さなければ。

「……倒して、どうするのよ……」

倒しても、倒しても。花の王の心が折れて無ければまた、立ち上がる。強靱で、頑強

な花の王の心をどうやったら折ることが出来るのか、勝つ事が、出来るのだろうか。今まで勝ち続けてきた博麗の巫女が、花の王に勝てるのか。

「……ふっ、ふうっ、っ、グズツ」

涙が溢れ出てくる。痛い。痛いのは嫌だ。花の王に殺意を向けられるのは嫌だ。花の王に痛めつけられるのは嫌だ。

「うう、うううう、う、えええん」

嫌だ。嫌だ。嫌だ。

でも、それ以上に。

花の王に会えなくなるのは、もつと嫌だ。

「う、うううううう」

もう、一人っきりの布団でぼろぼろと泣くのは嫌だ。

もう、一人っきりの食卓でぼろぼろと泣くのは嫌だ。

もう、一人っきりの神社でぼろぼろと泣くのは嫌だ。

目を擦る。袖はグシヨグシヨになったが、大丈夫。私は、大丈夫。

自室を飛び出て洗面台に向かう。ざばざばと顔を洗い、水を拭き取り、鏡を見れば、博麗霊夢。

そこに、泣き虫の少女は居ない。

「勝つ」

ぼそりと。

「勝つ」

ぼつりと。

「勝つー！」

はつきりと。

「勝つわー！」

しっかりと。

「博麗霊夢は、花の王に勝つわ!!」

宣言する。勝つ。そこに道理も、理屈も、理由も要らない。勝つから勝つ。

胸に決意を抱いて、まだ暗いうちに朝餉を食べて気合いを入れる事にした。

まだ、暗い……？

おかしい、いつも起きる時間はほぼ一定だと言うのに、『前回』と『前々回』は起きる時間がほぼ一緒だったというのに？

おかしい、そもそも普段から起きる時間なんてそうそう変わる物でもない。なのに今日だけ何でまだ暗いうちに起きた？

おかしい、体内時計は『いつも通り』の時間を刻んでいる。つまりこの時間こそ、いつも通り。おかしいのは、太陽の、光？

そこまで考えて、外に転がる様に飛び出た。『前回』の様に眼下に海が広がる訳でも、『前々回』の様に紫と偽物の紫が弾幕ごっこを繰り広げるでもない。平和な境内。いつも通りの生ぬるい緩やかな風。そして……

空を見上げれば、天界が落ちてきていた。

「嘘でしょ……」

ゲームはつづく。

『東方偉世界く Falling down The Upper region.』

さて問題です。今日、何回目？

天界が、墜ちてきた。

「封印された鬼の天手力を發揮する時っ！……って勇義！もつと力を入れろー！」

「ふ、ぎ、け、る、な、ああああああ！！これで全力だあああ！お前こそ全力だせえええ！！」

「ば、か、い、う、な、ああああ！！全力以上を出してる、らああああ！！紫イ！！早く何とかしやがれえええ！！」

「無茶苦茶言わないで！もう結界で何とかできる領域超えてるわ！今天狗達が来るからなんとか凌ぎなさいー！」

「遅くなりました！！」

「遅えぞブン屋あ！幻想郷最速は、伊達かあ!?」

「山の妖怪総動員でいま天界を支えています！河童更に今河童のロケットで引き上げている所ですー！」

『むむむ無理だよ文あ！最大出力でも高度が上げられない！エンジンがイカれちゃう

!!  
』

「泣き言は聞きたくないねえ！ぶっ壊れるまで全力だしな！幻想郷が滅びるぞ！」  
「霊夢う！早く解決してくれえ!!」

「はっ、はっ、っ、ゴボツ、ゲホツ」

「う、ぐ、う」

「あ……、あ」

「ひゅっ、ひゅうっ。ヒュルツ」

「Game Over、You dead。」

「はっ、はっ、あ、諦め、ない、から。っ」

「そうか。ならお前が諦める、その時を期待しよう」

バズンツ

「この世界は、好きだ。だけど、どうせ全てが無意味になるのならどうだっていい。だろ  
う？」

『東方偉世界く Falling down The Upper region.』



## 少女祈祷中…

\* \* \* \* \*

地底が、浮上した。

「ななな何が起きてるんですが一体!？」

「覚妖怪っ!また貴様のペットの仕業か!？」

「馬鹿なこと言わないでください!こんなことができる妖怪なんてこの世に存在するわけないでしょうが!」

「マズイマズイよさとり様!灼熱地獄まで地上に出ちゃったら、地上全部が焦土になっちゃうよ!？」

「だからあんな花を咲かせるなって言ったのよ!花の王の馬鹿ア!!」

「畜生っ!こうなったら地底ごと地面を潰すしかない!」

「ふ、ふざけたことを言うんじゃないよ!そうしたら地下の妖怪達の居場所はどくなる!？」

「バカ野郎！こんなことをほっといたらそれこそ幻想郷が終わっちゃうぞ！」

「だったら地下の妖怪が犠牲になってもいいって言うのか!」「そうは言っていないだろ！」

「喧嘩している場合?!とにかく何とかして灼熱地獄が出てくる前に地底の浮上を食い止めるのよ！」

「どうやって止めるっつーんだよ！こんな事態を！」

「ちくしょう！やってやる!!」

「……」

「……」

「……」

シャンハイイ ホラーイ

「さしずめ、今の霊夢は運命の操り人形にすぎない。糸の切れた可哀想なマリオネット。繰り手の居ない木偶人形は果たして、まだ戦うと言うのかね」

「……」

「何億と生きた俺は気の長い方だから、お前の意思が朽ちる前に諦めることはありえな

い。安心して何度もかかってこい」

『東方偉世界〜Rising Subterranean Flower Field』

少女祈祷中……

\* \* \* \* \*

太古の生き物が、蘇った。

「なっ、なにこのトカゲは!？」

「うわっ!?!こいつめちやくちや硬い!?!弾幕が全然通用しないよ!?!」

「マスタースパーク!!」

「魔理沙!!」

「くそっ、私の本気でも怯むだけか……お前ら!早く逃げろ!」

「にっ、逃げろって……こんなの何処に逃げればいいのよ!」

「パーフェクトフリーズ！」

「チルノちゃん！」

「ここはあたいと魔理沙で止める！皆、紅魔館にいつて！」

「でも！」

「デモも鴨もないわ！皆はめーりんを呼んでほしいの！きつとめーりんならこんなトカゲ一発よ！」

「でも、でも……チルノちゃんが……！」「大丈夫!!」

「あたい、最強だから！」

「……！行くよ大ちゃん！」

「っ！チルノちゃん！絶対勝手に居なくなったりしたらやだよ！」

「っへ、お前いつの間にかこんな頼りになる様になったんだ？」

「ふんだ、あたいは昔っからサイキョーだもん」

「へへっ、なら背中には任せてやるぜ」

「あら？別に魔理沙が居なくてもあたいは大丈夫だけど？」

「ほぎきやがれ、お前以上の大活躍を見せてやる！」

「知らなかったの魔理沙、トカゲは寒さに弱いのよ！」

「ああ、あ、あ、ああ、」

「ヒツ、ヒヒツ、ヒキ、ヒ、」

「あー、」

「うっ、おええっ！ゲホッ！ゲホッ！なにつ、が……」

「精神崩壊。波長を狂わせるなんてものでは済まない、精神そのものが壊れた状態。妖怪も、神も、幽霊も。心の在りかたが容を成す者はコレに弱い。霊夢、お前は特別丈夫だった様だな。まあ、一度も二度も一緒だ」

「ま、待つ」

あ、ああああああああああ

「心無き者は俺に勝てない。身体無き者は俺に勝てない。そして、心も身体も兼ね備えている奴も、俺には勝てない。その全てを破壊する術を持っているのだから」

『東方偉世界々太古の都の支配者達』

少女祈祷中……

\* \* \* \* \*

世界が、浮かび上がった。

「……まるでマンガみたいな光景ね」

「気流が乱れに乱れて、私以外の天狗はまともに空も飛べず巢に籠っちやいましたよ」

「上を見れば蒼い空。下を見ても蒼い空。どーなってるのよ」

「どうもこうも……どうやら幻想郷の主要個所一帯だけがこうして空高く『浮いて』いる様で……」

「しかもパチエが言うには一切の魔力的要素も無く浮いてるってんだからふざけた話よねえ」

「ところで紅魔館の門番さんはこの強風の中何時まで外に居るつもりなんでしょうかね？」

「……咲夜」「此処に」

「美鈴に『飛ばされないうちにフランの遊び相手でもやってなさい』って言うてきなさい」

「御意」

「なんでこう……ウチのメンツは自我の強いヤツばつかなのかしら。はあ、雲一つ無い  
天気は気が滅入るわね……」

（「レミリアさんもそれなりだと思っただけですがね。何時まで頭の花を取らないつもりな  
んでしよう」）

「天狗、なんか言ったかしら？」「いえなにも」

「う、ああああああああ!!!」

「がああああああああ!!!」

「やああああああああ!!!」

「っ待ちなs「四肢裂破」パァン！

「あ、があああああッ!!」

「ぎいああああ!!!?」

「痛い痛いイタイイタイイツイツ!!?」

「……っ!」

「痛い、痛いよなあ。辛いよなあ。でも、死ねないよなあ。苦しいのなんて、早く終わつ  
てほしいのになあ。終わらないんだよなあ。なあ? 霊夢。何時までお前の決意に他人  
を巻き込むんだ?」

「っ！ならアンタが諦めなさいよ！」

「……それは、出来ない。願った物がもう目の前まで見えているのだから。お前は、どうだ？」

「お前の求めているものは遥か遠い先。霞んで見えない程遠い所にあるものに手を伸ばすなんて疲れるだろう？諦めたほうが早いだろうに」

『東方偉世界くThe Vanity of Xanadu.』

少女祈祷中……

\* \* \* \* \*

死者が、蘇った。

「何なのよこいつら！殺しても殺しても完全に復活するじゃない！」

「流石にお腹いっぱいなのかあ……」



「怖いわー、人間怖いわー。溢れかえるなんて表現が似合うほどに怖いわー」  
「どうなってるんだ一体!?!」

「人里を守るためにあたしら弱小妖怪総動員で戦うなんて世も末よね!」

「こんなの実際世の末うさ!?!」

「違うないわね!!」

「こんな靈力も持っていないような雑魚人間共に負けたら妖怪の名折れ! 殺しても死なないのなら……死ぬまで殺すだけよ!」

「」

「」

「なっ……何故止まった世界で動けるの!?!」

「ヒュー、ヒュー」

「驕るな人間風情が。たとえ時間を止めようと、時間を遡ろうとも、時間を消し飛ばそうとも。俺は常に同じ時を刻み続ける。俺を止めることは不可能と知れ」

「っ! 幻符『ザ・ワー』」そして時は俺の手中に有る」っあああああっ!!!」

「花の王っ! なんて私を殺さないのよ!!」

「それじゃあ無意味なのだよ霊夢」

「人の意思を、心を、決意を折るには、自分ではどうしようもない犠牲を見せつけてやる。守れなかった己を悔み、巻き込んだ己を恨み、どうしようもない理不尽さを叩きつけ、挫く」

「どうしようもない。何も出来ない。手が届くのに、守れない。どうにもならない事を抱えて人は諦める事を覚えるのだよ」

ゴキツ

『東方偉世界〜Deadman Walking』

少女祈祷中……

\* \* \* \* \*

世界が、闇に包まれた。

「ライト！フラッシュユー！ルーモス！！クツソ!?何なんだよこの暗闇は!!」

「魔理沙!? 其処に居るの!？」

「アリスか!? お前無事だったか!」

「ええ、偶々ね。この闇、自然的な火じゃないと祓えないみたいね」

「そうなのか! そういえばお前んち、暖炉があつたな」

「……でも、完全に祓える訳でもないわ。」

「……ん? うおつ!? 人形に火を持たせてたのか?!」

「……と、まあ結局ある程度離れちやうと闇に包まれるのよ」

「マジか……。つたく、アレか? ついにルーミアが本気だったのかあ?」

「流石にそれは無いでしょ……無いわよね?」

「そんな訳無いのかああああ!!!」

「どああ!!? る、ルーミア!? お前居たんなら言え!!」

「私の全盛期でもこんな、幻想郷中を包むような闇なんで出来ないのかあ!!」

「……貴方に全盛期とかあつたのね」

「ムカア! お前私舐めんじゃねー! このリボンさえ無ければお前等なんて指一本だからなーリボンさえ無ければー」

「二回言う程なんてよっほどだぜ……」

「というか貴方闇の妖怪ならこんな闇でこそ力を発揮出来そうだけど」

「バーカバーカ!!」

「コイツ精神退行激しいぜ」

「私は見えそうで見渡せない暗闇の中に何かいるかも知れないって畏れから生まれた妖怪だぞ! こんな何も見えない感じない漆黑に世界が包まれちゃったら私のレゾンデールは決して満たされないんだああ!!」

「なんかルーミアの癖にむつかしい事言ってるのは分かった」

「要するに、この闇はルーミアの仕業じゃないって事でいいのね」

「あ・た・り・ま・え……………なのかああ!!」

「と言うかお前エライテンション高いな」

「私だけじゃないのかああ!! もう幻想郷の殆どの妖怪は畏れとレゾンデールを失って消滅しちゃったのかああ!! 人間もこの暗黒に適應する事は出来ないのかああ!! 間もなくこの世界は終焉を迎えるツツツ!!」

「言ってる事はシャレにならないが、如何せんテンションで台無し感が凄いい……………」

「世界が終わるって……………そんな事、誰が「決まってるのかああ!!」

「こんな大事件起こせるヤツは花の王以外絶対無理なのかああああああああ!!」

「ハアツ、ハアツ」

「つ……、くつ……」

「うぐ……」

「ぐ、ま、だ……ま、だ……」

「亡霊、神、不死者。まあ、揃えた方だな。だが、俺を倒すには、程遠いんだよねえ！」

「は、花の王……お前、こんな事して、世界が……どうなると思ってる……！」

「世界がどうか知った事じゃないね。昔も言っただろ八坂。『俺が世界だ』」

「なんて……傲慢……」

「傲慢？馬鹿々々しい。皮膚についた微生物一個一個を意識する奴が何処に居る？」

「……はっ！私らはお前にとって微生物だったか？嘘も大概にしとけよ！」

「ふふっ……。皮膚についた微生物に話しかける人がそれこそ何処に居るのかしら？それ

れも、一緒に酒を呑みたがるなんて……ね」

「……成程。やはり女性に口で戦うのはよした方が良いな。だが、変わらない。今のお前達、ひいては、今のこの世界に何の価値も無い。見いだせない。見る必要も無い」

「なんだと……！」

「……いささか話過ぎたようだ。さて、このタイムラインはもう終わりとしよう」

「待ちなさい……！さつきから貴方は何を言っているの……！」

「くそつ、動けつ！神が畏れるなどあつてはならぬ事なのにつ！！」

「花の王っ……！！お前つ、おまえはあつ！！」

「真の闇は黒。黒はあらゆる色を呑み干し、虚無にする。招来せよ『黒塵星』」

「過去に戻り、零無を取り戻した時。再びこの時間でまた盃を交わそう」

『東方偉世界くDark One.』

少女祈祷中……

まさかお前、何度も死ねばその内イージーモードになる……なんて思っ  
てねえだろうな。

馬鹿らしい。ある訳ねえだろ。そんなご都合主義が、お前に。

これは確かにゲームだ。だが、ゲーム初心者用にサポートプレイやステージスキップ機能なんて用意しちやいねえよ。

むしろ逆だ。お前が幾らやり直すそうと、パターンを構築しようとして、それは俺も同じだ。

お前がやり直す度、俺は進化する。お前がやり直す度、俺は成長する。お前がやり直す度、俺はお前に対応できる。

分らないか？

そうか。じゃあ、まずは……

幻想郷を飛び出してみようか？

---

世界が、歪み、曲がり、途切れ、変わり、繋がる。

「……ん？魔理沙か。久しぶりじゃないか？」

「み、魅魔様!?! どうしてこんな所に!?!」

「……はあ？ いやいや、靈魔殿まで態々来ておいてこんな所はないだろ？」

「何言ってるんだ!?! ここは幻想郷の魔法の森だぜ!?!」

「いや、私は靈魔殿から出た記憶がないんだが……ああ、なんだ？ この辺りの地形こんなだったか？」

「だあからここは魔法の森なんだってば！」

「あれえ？ ちよつとくるみ？ ここ何処よ？」

「知らないわよ。私達何でこんな所にいるのよ？」

「ちよつと夢月！ アンタまた変な事したでしょ！ 何処よココ!!」

「し、知らないよ!?! そんな事言われても……」

「あつ」

「お姉ちゃん！ あいつ等だよ！ きつとあいつ等が私達の世界をどうにかしちやつたんだ！」

「あゝん!?! テメエら幽香が居ない癖に調子乗ってんじゃねえのかあゴラアゝアゝ!!」

「エエエエエ（。D。）エエエエエ」



「に、逃げるわよエリー！」

「言われずともツ!!」

「あ!主犯が逃げちゃうよお姉ちゃん!

「待てやアアアアアアア!!!」

「……ここ何処?」

「氷雪世界では無いことは確かだね」

「……え、暑っ」

「神綺様……まーたアリスに会うために世界門を……」

「わ、私じゃないわ!本当よ!信じて!!」

「(ジー)」

「本当だってばあ!!」

「……あたい、遂に寝ぼけすぎて幻想郷と三途の川を繋いじまったかねえ……」

「おつかしいわね。私いつの間に寝てるのかしら……。ん?てか、なんで幻想郷にウチの学校があんのよ……?」

「……蓮子?」

「……貴方誰?」

「呼んだメリー?」

「「……………」」

「え、ちよ…………お祖母ちゃん!？」

「お、お祖母ちゃん?!?!」

「月、地球、異界、どこるか時空も亜空もゼーンぶごつちやごつちや。こんな事すんのはあの耄碌バカしか居ないわよねえ」

「あのジジイが上に居る限り私の秘神としての立場も、賢者としての立場も全然ないのよね」

「なんなのよあの男…………『格が違うんだよ』とか言つてあたしに全然貢がないし!デカイ城持つてるくせに!」

「そもそも憑りつけないし…………不幸にならないし…………なんなのあのヒト…………」

「…………マジかこの姉妹」

「どんな世界にもあの耄碌に惚れる奴は居るもんなのねえ」

「まさか…………月にも…………?」

「いや、月は知らないわん。ただ、純狐がね…………」

「…………はあー。これがあれか。あのジジイが時々言うアレか」

「……はあくあ」

「「つらみ。」」

「へっ……へっへ、へ。この究極<sup>わ</sup>反則<sup>た</sup>生命<sup>し</sup>体に……ッハアツ……とつてテメエ……ハアツ……程度の攻撃なんざ……余裕のよつちやんなん……ッハアツ……だよ！」

「はっ、はあっ！はあっ！っはあー！」

「おい……ハアツ……おい……。まさか……ッハアツ……博麗の巫女様とあろうモンがッゲホツゲホツ……もう立てないなんて……言うな……よ……？」

「っ……！馬鹿っ……言わないで……！天邪鬼……！程度に……！体力で……！負ける訳……無いでしょっ！」

「へっへっ……それでこそ巫女サマよお……ハアツ……」

「はあっ、はあっ、こんなのと……肩を……並べるなんて……思いもしなかった……わ……」

「素晴らしいッ！お見事ッ！まさかこの俺がここまで追い詰められるとはッ！称賛に値するッ！」

なあーんて言葉でもかけられるとも思ったかあい？NONONO！お遊び弾幕を打ち破った程度で息切れしてるお前等が、全力の俺相手に戦いになると思ってるのが笑

えるぜ？」

「はっ！強がり言ってられるのも今の内だ！お前如きアイテム使うまでも無くボコしてやんよ！」

「クケケツ！天邪鬼ちやあん？てめえの正直なクチがあとどれだけ回るのが楽しみだぜえ？なあ、霊夢う！お前も大した奴だよなあ！一日足らずでテメエで対応出来ない力に対して対抗策を練ることが出来るとはなあ！残念だなあオイ！テメエが普段からもつともつと真面目に修行してりやあ多少は楽だったろうによお！」

「はあつ、はあつ、何よ。『今日は』嫌にテンション高めじゃないの……！」

「……カツ！んなこたあどーでも良い。だが実際褒めてはいるんだぜ？俺の超スピードを封じるために数多もの呪いを掛けたり、俺の技術に対抗するために数多もの神を降ろしたり。こうして俺から弾幕勝負を引き出したのは見事と言ってやろう！」

「だがあ？分かってんだろお？俺の本気は、こんなもんじゃねえつてのは。なあ？」

「言ってる、この花馬鹿ヤロウ！テメエの本気なんて屁でもないわ！」

「ふん、天邪鬼と同意見なのが癪に障るわ」「何だお前この野郎！」

「カツカツカツ！良く言ったア！なら俺が弾幕ごっこの神髓を魅せようか！」

『王命令個―幻想郷の賢者―』『王命令個―花の王国の絶対君臨王―』『王命令個―億の名付け親―』『王命令個―妖精の統率者―』『王命令個―空と宙と天を握る者―』『王命令個



346 さて問題です。今日、何回目？

少女  
祈  
禱  
中  
⋮  
⋮  
⋮

## 決意の果てに

火山が噴火した。

大竜巻が襲った。

隕石が降り注いだ。

太陽が増えた。

大地震で世界が割れた。

蜃気楼に包まれた。

巨大な塔が建った。

雷が降り注いだ。

津波に呑まれた。

剛炎に包まれた。

世界が逆転した。

外の世界と融合した。

悪魔が満ち溢れた。

天が落ちた。

地獄が壊れた。

時間が不規則に揺れ動いた。

氷の世界に閉ざされた。

バケモノが大量に現れた。

何度も、何度も負け、やり直した。共に解決に向かう仲間を幾度と変え、あらゆる手段を試みた。

だが、届かない。

花の王の背中に向かって何度も手を伸ばすが、花の王は私以上の速さで駆け抜けていく。何度も叩きのめされ、私の心は限界に近付いていた。

花の王に傷ひとつつけられず、常に踏みにじられる。そこに希望も光も無い。やり直しを選択する手が重くなっていくのが感じられる。

私は、『終わった今日』と『やり直す今日』の狭間で一人、立ち尽くしていた。本来なら存在しない須臾の空間。そこで揺蕩うように、居た。

なんで、私はここまでして戦うのだろう。絶対に敵わない。絶対に叶わない相手に。もし、私が諦めたのなら、きつと笑顔で誉めてくれるに違いない。よく頑張った、偉いぞ。と。



そんな有りもしない幻想を見ていると、突然声があった。あの憎たらしく、忌々しい女の声だ。

「あー、キキキ！よおハクレイノミコ様！ご機嫌いかがかな？」

「あんた……なんでここに……」

「あー、キキツ！さあて、なんでだろーねー？」

「……」

「おーおー、睨むな睨むな。アタイ自身、なんでこんなところに居るのかわつかんねえんだからよ。あの陰陽玉に封印されたからってことはまず間違いないなあ。ま、あの頭おかしい性能の陰陽玉を作った奴に感謝するんだな。時空を超えてアタイを封印し続けるイカレ具合だ、頭ん中も相当イカレてるに違いない」

「……何しに来たの」

「あー、キキツ！何度も何度も、花の王に叩き潰されてるバカを嘲笑いに来たつつたらどうすんだ？」

「……好きにしたらいいわ」

「ああ〜？」

「もう、ほつといてちようだい。私は、疲れたのよ！」

「な〜くに言っただけ？まだたった四桁回数も挑戦してねえじゃねえか。もつと気張れ

や」

「……うるさい」

「嘗てあの女は何万、何億も花の王に向かつていったぞ？ ただのパンヒーが出来てハクレイノミコ様が出来ないなんて事はねえよなあ？」

「うるさい」

「自他共に認める天賦の才能！ 『主人公』足り得る實力！ どっちもあの女が持ち得なかった力だ！ そんなお前がたった三桁回負けただけで諦めるってか？」

「うるさい！！ あんたに何が理解出来るっていうのよ！」

「出来るよ」

「……っ！」

「出来るんだよ。あたいが、花の王の娘やって何万年経つてると思ってたんだ。あたいが、何度花の王に置いてかれたと思ってたんだ。手の届く距離にいるのに、何度手を伸ばしてものらりくらりと避けられる。何度付いていっても気がつけば居なくなってる。そのたびにあたいは空虚な気持ちに曝される。今だってそうだ。永く待てば、何時かまた花の王に手を引かれ隣を歩けると思っていたのに、その何時かは永遠に来なくなるって言うんだ。笑えるよな」

「……」

「何度も、何度も手を伸ばして、何度も、何度も諦めた。キキツ！あたいは諦めた回数なら世界一だろうよ。そんな諦めることのプロが、お前にアドバイスしてやるよ。お前が諦めるのは、まだ早い。今が正念場だぞ、気張れよ」

「……」

「あんた、ただのサイコパスクソ女じゃなかったのね」

「ぶっ殺すぞ」

「……お前みたいなの出来で不器用な妹を持つとな、姉は気苦労が耐えねえんだよ」

「ふん、あんたみたいなのクソ女を姉に持った覚えなんて無いわ」

「キキツ！お前になくてもあたいにやあるんだよ。お前の何百回の失敗、お前の何百回もの死は滑稽だった」

「……言ってくれるじゃない」

「滑稽だった……が、あたいの同情心を見事引き出した訳だ。大したもんだ」

「……ふん」

「よく、頑張ったな。霊夢」

「っ！」

「お前はよく頑張った。何度も、何度も花の王に立ち向かったお前は、偉い奴だ」

気がつけば、目の前の女に抱き締められていた。

「『次があるさ』と何度も諦めたあたいにとって、お前の頑張りはとても、眩しかった」  
誰にも見せなかった。博麗の巫女ではない、『一人の少女』博麗 霊夢としての涙が出てくる。

「何度も友達と共に闘いを挑んでも、お前は真の意味で孤独だった。何度も目の前で友達が殺され、汚され、朽ち果てて。辛かったろう。苦しかったろう」

嗚咽が、止まらない。

「今だけでいい。今だけでいいから、その辛さを吐き出してくれ……」

嗚咽は、慟哭に変わっていく。

「大丈夫。今は、あたいが味方だから」

「う、あああ、つ、あああ、」

止めどなく、思いが口から溢れでてしまう。

「うああああ!! あああああ!! ま、魔理沙があ、紫があ、皆があ……!! 何度も……何度もお  
!!」

「うん……うん……」

「うっ、ひっぐ、もう、もうやだよお……。幻想郷が、何度も、何度も壊されるの……」  
自分の内から涙と共に、誰にも見せなかった弱さがこぼれてくる。

須臾の空間の中、延々と涙と辛さを吐き出し続けた……。

「……恥ずかしい所を見せたわね」

「あー、キキツ！どーしたー？もつとねーちゃんのおっぱいに抱き着いていいんだぞー？」

「っ！誰が！」

「お？それともアレか？ねーちゃんじゃなくてかーちゃんおっぱいの方が良かったかあ？」

「ブツ殺すわよ!!」

「キヒャーハハハ!!可愛かったぜえ？『はなのおうがこわいよー』ってかあ!」

「死ね」

拳を付き出す。クソ姉の顔面に深々と突き刺さった。

「ま、前が見えねえ……」

「っち、殺しきれなかったか」

「殺意高過ぎやしませんかね」

「……で、どうするつもりだ？」

「どうする?」

「諦めるのか?それともまた無策で花の王に突撃するのか?」

「あたいはなあ、別に諦めちまってもいいと思うぞ。さつきはああ言ったがな、お前は前だ。たとえばお前が一騎当千の強さを持つていても、花の王は一騎で世界に匹敵する強さだつてのは分かつてるだろ?それでもまだ戦うのか?」

「……決まつてるじゃない」

「私より弱かつた零無つて奴は花の王に一度勝てたんでしょ?だったら私に出来ない筈が無いわ。それに……」

「それに?」

「私は、独りじゃない。たとえばやりなおした記憶が無くても、私には魔理沙や、紫、萃香、レミリアに文、早苗、霖之助さん、他にも数え切れない位の友達がいるわ。そいつらも一騎当千なら、花の王を倒せる確率も高いでしょ?」

「……花の王を倒しても、終わりとは限らないんだぞ?」

「終わるまで、何度も倒すだけよ」

「数を揃えただけじゃ、カカシと変わんねえぞ」

「私の友達は、カカシじゃないわ。皆強いもの」

「結果お前の友達が死ぬ事になつてもか?」

「死なせはしないわ。博麗の巫女は、守る事で本領を發揮するんだから」

「……そうかい、ならもう止めはしない。キキキ、さあ行つてきな霊夢。また挫けそうになつたらココでまた胸を貸してやるよ」

「何言つてるのよ。あんたも来るのよ」

「……は？」

「あんたも、花の王並に永く生きてて強いんでしょ？それに、花の王に手が届く位置に行くんだから、また手を伸ばしなさいよ。手の届かない所に行かれる前に、その手をしっかりと繋ぎなさいよ。それが出来るのは誰でもない、あんただけなんだから」

「……キ」

「キキ、キヒヒ、キヒヒヤハハハ!!キヒイ〜ヒヤハハハハ!!キキヤハハハハハ!!キヒヤハハハハハハハ!!」

「そうか!ええおい!?何度も、何度も諦めたあたいに!また挑めつてかあ!？」

「そうよ。手を貸しなさい、お姉ちゃん」

「キヒ!キヒヒ!クキキヤハハハハ!!これは良い!!傑作だ!あたいを封じておいてなんと都合のいい言葉を吐くんだお前は!キヒヤハハハハハ!!」

「返事は？」

「キヒヒ!良いだろう!ああ!愉快だなあ!なんて愉快なんだろうなあ!!ああ、気が変

わった！気が変わっちゃまったよおい！もう傍観者じゃあいられない！良いだろう！イイダロウ！！アタイのゼンリヨクを持ってオマエをサポートしてヤルヨ！！」

「……あんたも永く生きてるだけあって気が触れてるのね」

「アタリマエダロウ!?だが、今日は良い日だ！なんて良い日なのだろうか！妹に頼られることがこんなにも嬉しいとは大発見だなア!!」

「……ま、大丈夫ならいいわ。さあ、『リスタート』よ！」

「キヒヒヒヤハハハハ!!」

「アタイが花の王にマケズ劣らずに理不尽でアル所ヲ魅せてやるよオ!!!」

\* \* \* \* \*

布団から抜け出る。すぐさまいつも通り巫女服に着替え、外に出ればいつも通り異常な幻想郷が……



「よう霊夢」

「漸く起きたのね霊夢」

「遅いですよ!」

「さあさあ!早く花の王をシバキ倒しに行きましょう!」

「魔理沙!?!咲夜、妖夢、早苗まで!」

広がっておらず、何故か4人がそこに居た。辺りを見渡せば、月が輝き、星が煌めいている夜空が広がって……って夜!?

「キヒイヒヤハハハハ!!」

突如陰陽玉から突き破る様にサイコパス女が飛び出て来た。

「っ!あんだ、一体何をしたの!」

「ああ?キキキ!決いまってんだろオ?『今日を嘘にした』ツ!!アタイにかかりやあ世界を欺くなんざ片手で出来んだよ!キヒヒヤハハハ!!」

「んな……馬鹿げたことが花の王以外にも出来るっての……?」

「伊達に億年生きちやいねえよ!億分の一日程度どうってことねえ!」

「待ったその理屈は流石におかしいぜ」

「そもそも、なんでそんな……『今日』を嘘にしたってのよ」

「キキキツ!さああてなんでだろうねええ。もしかしたらその奴等が教えてくれるか

もねえ」

「……………どうなのよ？」

「あー……………その、ですね……………」

「霊夢、その……………アレだ。なんというか……………スマン！」

「……………なによ突然」

「霊夢さん。貴方が幻想郷の為に何度も今日を繰り返して、花の王に立ち向かっていった事を先程見せられました」

「私達だけじゃないわ。幻想郷の全員が……………何度も、何度もこの幻想郷が花の王によって壊されていく様を……………」

「言葉にし辛いですが、なんというかふ、と突然夢を見たように体感したというか……………知識としては知っているみたいな感じですけど……………」

「私らはなんというか、『今までの今日』を記憶してなかったからあんまり実感わかないけどさ。霊夢は全部、覚えていながら……………戦ってたんだろ？色んな、色んなコトをされても、挫けずに、諦めずに。さ……………。あのな霊夢……………あの、あー……………えっと……………。その、なんだ？あー……………さつきまで滅茶苦茶言いたい事があつただけど全部吹っ飛んじまつたぜ……………。れ、霊夢！」

前置きも無く魔理沙が抱き着いてきた。思わず踏鞴を踏んだが何とか支えきる。

「な、なんなのよ一体……」

「霊夢！お前、辛かったらもつと私達を頼ってくれよ……！」

「……は」

「友達だろ!?確かに私らには『やり直した今日』の記憶は無いけどっ！それでも、辛かったらこうして一緒にいられるからっ！」

抱きしめるその両腕に力が入っていく。

「寂しいじゃないか……！全部、独りで何とかする必要なんてないんだぜ……」

「ちよ、魔理沙……痛い……」

「そうですよ霊夢さん、私達友達じゃないですか。辛い事も、悲しい事も。ちよつとでもいいから分け合いましようよ」

「霊夢、貴方が博麗の巫女である事は、貴方だけが無理をしなければならぬ理由にはならないわ」

「霊夢さん、私達だつてこの幻想郷が好きなんです。少しでもいいからそのお手伝い、させてくれませんか？」

「っ……ばか、力……入れ過ぎ……なのよ……。痛くて……涙……でるじゃない……」

「はっ……何泣いてんだぜ……。お前は昔つから……泣き虫……だな……」

「そういう……魔理沙こそ……」

馬鹿ね。

「……おいお前等、いつまでイチヤついてんだダアホが。今日を嘘にしたつつつても時間は無限にある訳じゃねえんだよ、さつきと花の王んとこ行ってボコしに行くぞ。それともアレかあ？ここで百合の花でも咲かせていきますか？キキキツ！」

「は、ハア!?イチヤついてないし!ふざけたこと言うのも大概にしておきなさいよクソ女!」

「キキツ!なんだあ?これからもお姉ちゃんって呼んでもいいんだぜえ?」

「うっさいクソ女!」

「霊夢、貴方って涙腺が弱い上にお姉ちゃんっ子なのね。意外だわ」

「あー、ですよねえ。なんかイメージとだいぶ違いますよねー」

「異変の事となると鬼神の如き強さですけど、内面はやっぱりちゃんと女の子なんです  
ね」

「……あ?」

待て。こいつ等は何を言っている?

「……魔理沙?」

「あ、あのおく、えつと……だな。そのく、なんだ?さつき、今までの今日の出来事を見

せられたって言うってたる？それとな……もう一つオマケを見たって言うか、見せられたって言うか……」

「……ハッキリ言いなさい」

「あゝ、アレだ。その、あれだ。

幻想郷中に、何もない空間でその女と霊夢とのやり取りが配信されてた……的なの？」

……え？

「……どこから？」

「『あんた……何でここに……』 って所から」

「どこまで……？」

「『さあ、リスタートよ！』 ってどこまで……」

「……」

「……全部。全部かあ……。ふ、ふふ。ふふふふふふふふ」

「だ、大丈夫だ霊夢！大体の奴が鬼の目にも涙的な見方をしてたし！」

「そ、そうですよ！心臓に毛どころか内臓全部に毛が生えてそんな霊夢さんが意外にも泣くことがあるん」

「おいクソ女。これは一体どういう事かにやーん？」

「おかしいですね、瞬きすらしてないのに気が付いたら音もなく魔理沙さんと早苗さんが地面に沈んでいます」

「パーフェクトメイドたるこの私すら気が付けずに殺つたというの……？」

「それ以上にヤベーのは明らかに口調と表情が合つてな g g g g」

「霊夢!?ちよ、首！首折れるわよ!?!」

「折るのよ」

「折るのは拙いのでは!?!」

「そうね、潰さないかね」

「そういう事じゃないでしょああ白目向いて泡吹いて」

「ゴシヤア！」

「わあ真つ赤な雨え……」

「すごいヒトつて指の力だけで骨を潰せるんですねー……」



「まあ死んでもすぐに復活するんですけどねー！キキキツ！」

「私の許可なく復活するんじゃないわよ頭が高い」

「巫女にする言動じゃないですね……」

「いや、死んで即座に復活するコレも妖精としてはかなりおかしいわよ？」

「オラ、魔理沙も早苗も何時まで寝てんのよきつきと花の王のトコ行くわよ」

「霊夢さああん!? 思いつきり蹴り起こすのは止めて差し上げてええ!?」

「言っておくけど花の王ボコした後はアンタ等の記憶が無くなるまでボコすから」

「ちよつとおお!?!」

「なんでこの巫女わざわざ敵増やすような事言うのかしら……」

「キキツ！無駄無駄ア！記憶を無くしてもアタイがまた植え付けてやるからなア!!」

「アンタは私に何の恨みがあるって言うのよ！」

霊符「夢想封印」

「キヒヒヤハハハ!!」

嗤いながら夢想封印を掴み、そのまま握りつぶした。いやああんたそれは無いわ。

「キヒ！ヒヤハハ!!『何の恨みがある』だア!?アタイは忘れてねえぞオ……!アタイの事

を美しくないと言った事をよオ……!」

「んな……」

「しょーもない事を。と続けようとしたが、きつとソレがホオズキの譲れない所なのだろう。ため息を吐く。口に出した言葉は戻せない。これくらいの怒りならば甘んじて受けるしかないか。」

「ああもう、悪かったわよ。でも言っておくけど、私もあの時は結構キてたのよ?」

「キキツ、アタイをボコボコにしてチャラだろ?」

「調子いい事言っちゃって……」

「……やっぱりお姉ちゃんっ子なんですなえ」

「妖夢、貴方もこうなりたくなければ口を噤む事ね」

「ぐ、お……お……お……」

「うあはあく……おほしさまがいきいらきらあく……」

「ほら、あんた達なにぼさつと突っ立ってんのよ! さつさと行くわよ!」

「調子いいのはどつちなんだか……」

「なんて!?!」

「何でもないわ。さあ行きましよう世界樹に行きましよう」

「………咲夜さん………」



向かうは南。偽りの今日を征く一行は未だに明けぬ夜の中を飛んでいた。

「結局、『今日を嘘にした』ってどういう事なんだぜ？」

「キキッツ！アタイの『嘘』は本物以上のクオリティを持つ！霊夢が今日をやり直すタイミングで一日を嘘にした！するとどうなる？」

「……どうなるんです？」

「キキッツ！アタイの嘘は世界をも欺く！それはつまり、花の王も欺けるって訳だ！時を止めようが戻そうが常に同じ時間を生きるアイツは今頃、虚構の今日で幻想郷を攻撃してるだろうよ！……だが、虚構の今日で幻想郷を壊した時、アタイの嘘に気が付くだろう。だからそれまでに戦力を集め、一気に叩く」

「……あの、今更ですけど、妖精一匹が世界を欺くなんてそんな……大それたことが出来るのですか？」

「キキッツ！現人神、オマエントコの神は確か乾と坤を司るんだったか？成程そりやあ凄い。大した神格だ」

「えっ、はあ。ありがとうございます？」

「キキッツ！偉い神は世界に対して何らかの影響を与えることが出来る。だが、忘れる

なよ？妖精は世界そのものだ。オマエら神が幾ら世界を変えたつもりになろうとも、その本質だけは絶対に変えられない。だが、妖精が世界の本質を変えるのは簡単だ。それこそ髪を三つ編みにするくらいにはな。キキキツ！だが、オツムの足りねえザコ妖精共にやあそれすらも難しい。自身と世界が同一にして異なる存在である事を理解できねえからな」

「同一にして異なる……何言ってるんです貴方」

「……キキツ。オツムの足りないザコ妖精にやあ分からない事だからなあ？」

「それ言外に妖精並の頭だつて言ってるんですか買いますよ喧嘩なら」

「馬鹿な事やってんじゃないぜ。それよりまだ質問の答えが足りてねーぞ。何で私達が

『今までの今日』を知ることになったんだよ」

「キキツ！そんな事なら至つてシンプル！花の王を欺いたと同時にこの幻想郷も欺いた！霊夢が何度もやり直した『今日』は、霊夢にとつては過去の事。だが、世界にとつては訪れなかつた未来、起こり得ない可能性、実らなかつた現うつ、つまり、嘘。キキツ！嘘はアタイのテリトリーさ。嘘を真にするのもアタイにとつちやあ爪切り程度の難しさ。ましてや本物以上のクオリティでお前等の脳内にダイレクト運送することなんざゴミ出し程度の手間よ」

「さつきから例えが主婦染みてるわね……」

「キキツ！こう見えて経産婦だぞアタイは」  
 「「「?!」」」

時の止まった夜を征くのはいつぶりだろうか。あの時は紫が夜空を止めたけど、今はホオズキが止めている。

制限時間は……勘だが、あまり残っていない気がする。何度もやり直した今までの経験から、虚構の私はそろそろ花風城にたどり着いている頃だろう。花の王の所までにたどり着くのに少し時間が掛かるとはいえ、私が戦えなくなるのは大抵一瞬だ。急いだ方が良さそうだ。

そう、思った矢先。忌々しくも荘厳に、壮麗に、雄大に構える世界樹が見えた。世界樹の中と外を結ぶ洞。その前に、多くの妖が私達を待っていた。

\* \* \* \* \*

「よお〜シスコン霊夢う〜元気い〜?」

「霊夢さん！幻想郷中に意外な一面を知られた事に対して一言お願いします!」

「オイオイオイ」

「死ぬわアイツ等」

「とか言ってる間に無言で地面に沈みましたよ」

「オカシイ人を亡くしたわ……」

「人じゃねえぜ」

「次その事に触れたらその首扼いであげるから」

「巫女の外道化と人外化が凄まじいのですがその辺どう思います萃香様」

「いやあ、霊夢は元からこんなんじゃないかな?」

「……」

「あの、霊夢さん? 無言で地面に埋め続けるの止めてくれませんか? もう身体半分沈んでるんですけど」

「霊夢う、私なんか首まで埋まってるんだけどお?」

「……」

「すみません、先の事は謝りますんで、ほんと。頭を押さないでください。地面に沈めないでください」

「霊夢ー!?! 私もう頭まで沈んでるんだけどー!?!」

「……見せしめに■すか」

「霊夢さん!? 今不吉な言葉を吐きませんでしたか!？」

「ちよつと霊夢!? 結界使つて固められたら出られないんだけど!？」

「霊夢、何時まで馬鹿やつてるのよ」

「……紫」

「紫ー! 助けてくれー!」

「あやや、紫さあん!」

「こんなんに使う時間は無いわ。それにそんなんでも貴重な戦力なんだからさつさと解放してあげなさい」

「……」

「流石呼ばれて飛び出てゆかりちゃん!」

「情緒不安定さに定評のある紫さん流石です!」

「地獄巡りスキマツアー」

「忘れなさい。いいわね?」

「紫……」

「霊夢が同類を見つけて安心した猫みたいな目してるぜ」

「黒歴史を持つ者同士で傷の舐めあいって訳ね」

「何時まで茶番を続けるつもり? いい加減さつさと花の王を倒しに行くわよ」

「と言うか私的にはそのクソ妖精に用があるんだけど？」

「あく？キキキツ！ぼつと出の吸血鬼風情がなアんの用だつて？」

「こんな纏まり具合で花の王を倒せるウサカねえ……」

「ぼやいたつてしようがないでしょよてゐ。私達だけじゃあ花の王の足元にも及ばないんだから」

「師匠がそこまで言う程の相手なんですか……」

「イナバ、ハツキリ言つてアレは間違いなく最強よ。全ての頂点にして異なる位、王を名乗るだけの事はあるわ」

「……ああ、この空間に厄が溜まつてきたわあ」

「何でもいいですがソレ、こつちに伝染させないでくださいね」

「あくあ、河童代表なんぞにならなきや花の王相手に喧嘩売る事も無かつたんだけどなー」

「……さつきまで花の王に冷凍保存された恨みをどうのとか言つてませんでした？」

「さ、さーて、装備の最終チェックしなきゃな。前みたいに使う前に死ぬとかシャレにならないし」

「つたく、地震は私の専売特許だつていうのに。博麗神社の要石引っこ抜こうかしら」

「止めてください。これ以上場を引っこ掻き回すのは」

「分かってるわよ。つたく……ま、なにせよ花の王を倒さないと明日が来ないってんならやるしかないでしょ」

「うう……花の王怖い……花の王嫌い……」

「お姉ちゃん……無理だったらお家帰る？ね？」

「さとり様、吸血鬼より日光に弱いんですから無理しない方が……」

「そう言う訳にもいかないわ……花の王に一発入れるって決めてたんだから……」

「うにゅ……さとり様の貧弱体力じゃ無理なんじゃ」

「お空？」

「……壮観ですね」

「これだけの妖怪達が宴会以外の目的で集まるなんてそうそう無いでしょうに」

「それだけ幻想郷が愛されてるって事よ。よかったわねえ紫」

「……ええ。だからこそ、これ以上幻想郷を傷つける事は許さないわ。相手が、花の王で

も」

「……花の王は、本当にこの世界を壊すつもりなのでしょうか」

「藍、花の王の目的がどうであれ、手段として幻想郷を壊すというのなら止めなければならぬわ」

「……はい」

「にしても妬けちやうわねえ、こんなにも狂おしい程に花の王から求められるなんて。その零無って子はどんな人なのかしら？」

「……さあね、遙か昔の事だし、零無も特徴らしい特徴なんて無かったから忘れちゃったわ」

パンツ、と拍手を一打ち。それだけでザワザワと続いてた話を打ち切った。数多もの視線が私を貫く。

「さて、あんた達。この場に居るって事は、全員が花の王に戦いを挑むって考えで合ってるわね？一応言っておくけど、花の王は幻想郷でも随一の理不尽な強さを持つてるわ。私や、紫でさえ瞬殺される程のね」

「戦えば、まず死ぬわ。それでも、私と一緒に戦ってくれる？」  
返答は、叫び声だった。

「あつたりまえでしょ！あの糞ヤローに一発ブチかましてキュってしてドカーンじゃ済まさないんだから！」

「フラン、口悪いわよ。でも私も同じ気持ちよ、霊夢」

「永い付き合いだけどいい加減お灸を据えようと思つてたところよ」

「花壇にされた恨みは忘れちゃいないわよ」



「いや、姫様貴女師匠に押し付けたんじゃ……」

「天狗代表として花の王には一度話を付けないといけませんからね」

「援護は任せろ権！」

「お前も前で戦うんだよにとり！」

「私の緋想の剣でぶった切ってやるわ！」

「いやそれ総領娘様のじゃ……もういいです」

「やややややってやるわよ！」

「お姉ちゃん大丈夫？ぼんぼん痛くない？」

「覚妖怪がトラウマ持ってちや世話ないぜ」

「アンタ等……」

「ふふつ、霊夢。全員をまとめ上げる事出来そうかしら？」

「まとめる必要なんて無いわ。それぞれが好き勝手にやるのがきつと一番いい方法だから」

「……そうね」

「紫、死ぬんじゃないわよ」

「当たり前よ」

覚悟を一つ決めると、夜が明けて太陽が昇り出した。

「つち。花の王がいよいよ本格始動した訳だ。てめえ等、もうこっから先はいつ死んでも可笑しくないぞ。気合い入れろよ」

「アンタが仕切るんじゃないわよクソ妖精」

「あゝ あ？」

「やめい」

「……本当にまとめる必要はないかしら？」

「……ま、何とかなるでしょ。ほらあんた達！花の王が襲ってこないうちに城に襲撃掛けるわよ！」

「巫女の言動じゃねえよなあ」

ふ、と辺りを一瞥してみた。いつもなら世界樹の周辺をウロウロしていた緑色の髪は見えなかった。

「霊夢、行こう」

「……ええ」

きつとコレが、最期。これで勝てなければもう勝つ事は出来ないだろう。不退転の決意を抱いて、世界樹の洞を潜った。

さあ、今日が始まる。

# お前等ちったあ協力プレイしろや・・・

世界樹の中へ入った途端、完全武装した妖精たちの群れが盛大に出迎えてくれた。

「はっ！ 魔理沙サマの新必殺技のお披露目タイムの様だな!!」

「何言ってるのよ！ ここはあたいに任せなさい!!」

「妖精風情は引っ込んでなさい。今宵のグングニルは血に飢えているわ」

「まだ朝よお姉様。馬鹿なの？」

「う、うるさい！」

「お嬢様、あまり激しく動かれますと世界樹の太陽に焼かれてしまいます」

「わ、わかっているわよそれくらい！」

「もう不安になってきたわ……」

「あんたら、誰でもいいからさっさとやるならやりなさい！」

「う、わかっているぜ！ ええいお前達どけどけえ！」

「あたいに指図すんな！」

「あなた達邪魔よ！」

星命「ソウル・オブ・サテライトスパーク」

極符「アトミックフリーザー」

偽槍「シャドウグングニル」

魔理沙からは広範囲を薙ぎ払うようなマスターズパークの亜種が。

チルノからは絶対零度の高拡散レーザーが。

レミリアからは無数のグングニルの槍が。

それぞれかなりの威力を持って妖精たちの群れに突き進む……が、

互いの技が打ち消し合って妖精一匹倒してない。

「……」

「……」

「……」

「ふざけんな！ここは私が一気に薙ぎ払う場面だろうが！」

「バツカじゃないの!?!サイキョーのあたが出ないで誰が出るつてのよ！」

「貴方達、このレミリアに恥をかかせて五体満足に生きていられるとも思ってるのか

ん？？」

「見ろよあの妖精共のビミョーな顔！なんかどう反応すればいいのか分かんない顔

してるぜー！」

「アンタ等ジャマだから帰りなさいよもう！」

「……ふっ。アレ等を何とかする前にまず貴方達を消した方が良さそうね」

「上等だぜ。その喧嘩高値で買ってやる」

「ここで氷像になっちゃえ！」

天激「怒りの夢想封印」

弾幕で妖精の群れの半分くらいを撃ち落とした。

魔理沙達も一緒に。

「あつぶねええええええ!! 霊夢テメエいきなり何しやがる！」

「あたい融けたかと思ったじゃん! どーしてくれんのよ!」

「霊夢? いい加減にしないと怒るわよ?」

「あゝ?」

「「ごめんなさい」」

「次下らない事で喧嘩したら粉々に砕いてあげるから」

「怖っ」

「霊夢、説教は後にしなさい。まだまだ湧いて出てきてるわよ?」

「ツチ、まるで油虫みたいにガンガン出てくるわね」

「よし、なら私が一発!」「あたいがブチかましてあげるわ!」「このグングニルが貫いてあげる」

「「……………ああ?」」

ああ、この感情は何だろう。思わず頬が上がっていくこの感情は。

「……………ひつ、れ、霊夢……………」

「れ、霊夢……………あの……………」

「霊夢?なんか今まで見たことも無い笑顔なんだけど?」

「いいのよ?どうぞ続けなさい?」

「ピョッ」

「こ、ここここはサイキョーのアタイがマリサに譲ってあげるわ!感謝しなさい!」

「そそそそうね、私は寛大だからここは魔理沙に譲ろうじゃないの」

「お、おーし私に任せろ!こんな奴等一発だぜ!」

（（ 霊夢超怖ええええ!!! ）（ ）

最初っからそうしなさいっての。

「……………霊夢が成長して何よりだわ」

「紫様、何処を向いて言っておられるのですか……………」

「ぶっ飛ばしていくぜ!魔砲『弾けるマスターパーク』」

魔理沙のマスタースパークが妖精の群れに突き刺さった、と同時にマスタースパークが群れの中心で派手に弾けた。

完全武装した妖精でもこれは堪った物じゃないのか、光に飲み込まれてほとんどが消滅した。

「ま、魔理沙……アンタいつの間になんか事出来るようになったのよ……」

「はっはあ！どうだアリス！私なりにこの世界樹の生命力を利用した魔法は！」

「いや、凄いは凄いいけど……」

「なんかエグイわね」

「そうそれ」

「な、なんだよアリスもパチュリーも……そんなエグイかなあ」

「いきなり随分好き勝手にしてくれるじゃあないか」

「っ、この声は……」

「幾人かは見た顔だな……だからといって手加減はしないがな」

グラグラと地震を起こしながら地面を砕くように現れたのは余りにも巨大な鎧に身を包んだ妖精だった。

—雄大で偉大な妖精大隊長—

風間・グラウンドドラゴンテイル・ジャイアント・ソーラーナイト・フルプレートアー



マーキングガード・式番大隊隊長・グラスティティア・ド・パンゲア

「「名前クソなげえ!!」」

「ああ、うん……前の私と同じリアクションだぜ……」

「キキキツ！ようデカ女！今日も元気にクソジジイの御機嫌取りですかア？」

「……貴様、花の王に対する暴言癖は治つてないようだな。ここで侵入者共と散るか？」

「キキツ！テメエにあたいが殺せるかあ？無理だよなあ!?出来たらもつと前にブツ殺してるもんなあ？」

「チツ、貴様の様な奴が姉とは思いたくないな」

「……さて、貴様等。ここに選択肢が二つある。一つ目はそのまま帰りいつも通りの日常を過ごす。そして二つ目は……」

「二つ目は？」

「我が手にかかり跡形も無くこの世から消え去るか。さあ、選べ」

「……は、面白い事言うじゃないかデカブツ。お前に鬼の四天王であるこの力の勇儀を倒せるってか？」

「ちよいと待ちなよ勇儀。アタシを差し置いてこんなデカイ奴とやろうってなあ道理が通らないだろ？」

「……じゃ、ここは鬼二人に任せて先に進んじやいましょう」

「おいおいスキマ。いいのかい？あんなでかいの相手に、鬼とは言えたった二人だけで構いませんわ。むしろさっさと先に進むのは私達の為でもあるのですから」

「？」

「全力の鬼の戦闘に巻き込まれて踏みつぶされるなんて冗談にもなりませんわ」

「私を無視して先に行くのはちよつと早いんじゃないか？ましてや今日は一切の手加減をするなどのお達しだ。貴様等全員でかかって来い！」

天蓋まで届く大噴火

「大地の怒りを其の身に受けよ!!」

大地が爆発し、そこから溶岩が大量に流れ出て、噴煙が立ち上り、噴石が乱れ飛ぶ。弾幕というカタゴリーを遥かに超える殺意の込められた攻撃が私達に向かって来る……が、

超重超密プラズマ

「ハッ！この程度の熱じゃあ灼けるどころか火傷するかも怪しいモンだな!!」

萃香が溶岩噴煙噴石まとめてその右手に萃め、潰していく。こちらまで一切の熱風すら届かせないその力に改めて鬼の本気を見た。

「な、なんだと!?!」

「お前等ア！さっさと先に行きなア！アタシらはコイツブツ倒したらすぐに追いつくか

らー！」

「さあ行った行った！こんな奴すぐに倒してやるよ！」

「……任せたわよ萃香、星熊童子。皆行くわよ！」

「くそつ、待て……」

「待つのはお前さ！『怪力乱神の右ストレート』」

ドゴオオオン！と巨大な爆弾でも炸裂したのではないかと思う程の爆音が鳴り響く。  
鬼二人が戦っている場面を後目に花風城へ飛んだ。

「つち、ほとんど逃がしてしまったか」

「おいおい、余裕だな。お前は自分の命の心配をした方が良くんじゃないか？」

「つは、馬鹿々々しい。自分より弱い奴と戦って何故命の心配をしなければならぬんだ？」

「ああ？」

「言ってくれるじゃないか。『弱い』なんて言われたのは何時振りだ？」

「成程、確かに貴様等『鬼』とは強者の類なのだろう。だが、それが如何した？貴様等より私の方が強い。只、それだけだ」

「ツクハ、言ったな？ 私達鬼は嘘が大嫌いなんだ。どうかその言葉を嘘にしてくれるなよっ。」

「ジャブ程度の一撃を弾いただけで良い気になってんじやないよ。そのうつとおしそんな鎧をぶつ壊されないうちに降参するなら半殺し程度に済ませてやるよ」

「この日輪の鎧を壊すだど？ ふ、ふふふ、ふははははは!! やってみるがいい！ 世界で最も硬い花であるこの日輪の鎧を壊せるものならな！」

\* \* \* \* \*

「うにゆ……ユウギ、大丈夫かな……」

「……大丈夫さお空！ 勇儀の姐さんが、デカイとはいえ妖精程度に負けるなんて想像つかないしー！」

「でも……」

「お空、鬼なんて殺しても死なない様な奴等ばつかだから心配するだけ無駄よ」

「さとり様がそういうなら……」

「なんだかすごい言われようですね」

「まあ、アレだからねえ。よく分かるわ」

若干暗い顔をしている地霊殿組と緊張感の欠片も無い天界組が談話している。

前を見れば未だに沸き続ける武装妖精を薙ぎ払いつつ飛行する魔里沙、チルノ、レミリア。時々互いの弾幕が干渉しあっているが、先程に比べれば遥かにましにはなっている。

「そろそろ例の巨大な門が見えるぜ」

「歪で巨大な魔方陣の門……ねえ。そんなものが本当に有るのかしら？」

「なんだよ、まだ疑ってるのか？」

「魔方陣っていうのは完全な円でこそ最大限の力を最高効率で発揮するものよ。そこに歪みが生じれば大したことない魔法しか起動出来ないわ。それが如何に巨大だろうとね」

「パチュリーの言いたいことも分かるけどあの花の王だぜ？」

「花の王だとしても魔方陣の基礎の法則を変えるなんて無理よ」

「ほんとかなあ」

「あつ！見えたわよでっかい門！」

「でっかい門……ああ、うん……デカいわね……」

「デカいって言うか……何なのかしら、紅魔館何個入るかしら？」

「アレ門って言うの？壁の間違いでしょ？」

「あの門の門番は嫌だなあ」

紅魔館勢が巨大な門に対して気の抜けた感想を口に出す。

「白玉楼の門もあれくらい大きければ花の王も門を蹴り破れないわねえ」

「嫌ですよあんな大きな門。門前の掃除が何時まで経っても終わらないじゃないですか」

「そういう問題か？あんな大きな門を一々開けるのにどんな手間がかかるか想像もつかん」

「あら、門なんて使わないでスキマで直接出入りすればいいじゃない？」

「紫様はちやんと玄関を使ってください」

冥界勢は冥界勢で意味の無い感想を口に出す。

「未だに全体像が見えないウサ」

「あの門が全部開く事って有るのですかね」

「なんでこう……実用性に欠ける物を造りたがるのかしら？」

「あら、いいじゃない。実用性が無い物こそ美の本質なのよ？」

永遠亭勢は矢や弾丸で撃ち漏らしの妖精共を落としながら話し合っている。

他にも、ザワザワと騒ぎながら一行は突き進んでいく。

つまり、ある意味いつも通りだった。

ふと、武装妖精が見えなくなった。

「お？もう出尽くしたか？」

「みたいね、つまらないわ」

「ふふーん。あたいに恐れおののいたのかしら！」

「ちよ、何よ……これ……」

パリュリーが絞り出す様に声を上げた。

「どうしたのよパチュリー……、あ……あ……」

アリスも続くように霞んだ声を上げた。

既にその巨大な門は目と鼻の先にある。嘗ての今日ではここから破壊兵器と同等以上の弾幕が放たれたんだっただけか。

「これ……これが……魔法陣だって言うの……？」

「なー？言った通りだろ？」

「なんて、歪……でもそれ以上に……美しい構成ね……」

「魔法陣を構成する線一つ一つが小さい魔法陣。その小さい魔法陣を構成する線もまた、魔法陣……。なんて、細やかな造形……」

「四大元素説、五行思想の魔術基礎だけじゃない……数秘術、占星術、神術……数え切れない要素を含んでいて、それら全てを最大限に活用している」

「これは……何? いや、これは何なのかは理解できる。でも、その本質を見抜くことが出来ない。平仮名しか読めない子供が、アルファベットの羅列を見てそれが文字である事は理解できるけどそれが何を意味するのかが分からないように。ソレが魔法陣を構成する要素であるのは分かるのに、私の知る魔術の枠ではソレが何を意味する要素なのか分からない」

「あらゆる学問、あらゆる技術が詰め込まれて作り上げられた、混沌とした御業。まさしく、魔の法則」

「これが、魔法。その深淵の、底。」

「。理解。出来る、その意味を。掌握できる、」

「深い、深い、魔術の、その奥の、底の、光る、見える、何が見える、——  
「理解、理解、理解、理、解。解、解。解、解。解、解」

「見える。何が見える、宇宙、宇宙が見える。銀河が見える、」

「ちよ、パチエ!?!大丈夫なの!?!」

「おいアリス!?!正気に戻れ!」

「鈴仙、治してきなさい」



「は、はい師匠！」

「……はあ、魔法に対してそこそこ程度に造詣のある者にS A Nトラップ掛けるんじゃないわよ」

「おい聞こえてるぞ永琳！そりゃ私がそこそこ程度すら造詣も無いって言ってるのか！」

「……ま、大した害も無いんならさっさと行くわよ」

「おいおい。あの魔女二人の症状見て言ってるんなら大した肝っ玉だなー」

「あんなの、叩けば治るでしょ」

「お前、発狂状態を何だと思ってるの？」

「ちよつと」

「なんにせよ、先を急ぐわよ。さっさとこんな門開けちやいませよ」

「だけどどーやって開けるつもりだ？こんなデケー門、相応に重いだろーが」

「ちよつと霊夢」

「そんなもんブチ壊せばいいでしょ？」

「おいおい。この門はかなり頑丈にできてんだぞー？そんな簡単にブチ壊すとか言わないでほしーなーもー」

「霊夢！」

「五月蠅いわね紫。なによ?」

「貴方の横のソイツ……誰よ……?」

その言葉で、ふと横を見る。そこにはまるで空気の如く気配を同化させた、かつての今日での強敵だった長い銀髪の幼女が佇んでいた。

飛ぶより速く、心臓が動くよりも疾く、その場から転げるように避ける。

刹那、音も、空間も。全てを断ち切る見えない斬撃が虚空を走る。

「ありや、避けられた」

「つアンタ……何で此処に!」

「なんで? そりや花の王に門番やれって言われたからだよ」

「霊夢!」

「しっかしまー、こんな沢山の御来客なんて初めてだーね」

「え、え!? 師匠!? え、でもこっちにも師匠……!? 増えた!?」

「増えないわよワカメじやあるまいし……」

「でででもアレどう見ても師匠じやないですか!? ちっさいけど!」

「ちっさいゆるなウサギっ子。すぐ大きくなるわい」

「キキツ、こりやあ……ヤバめかもな」

「あんた達、全員逃げなさい。コイツ、強いわよ」

「……靈夢がそこまで言うなんて珍しいわね。でも残念、偉大なる吸血鬼に逃走は無いわ」

「あは。私よりもちいさい子つて初めて見たかも」

「妹様も出るのなら私も出ませんと」

「見えない斬撃……弾幕じゃない、純粹な技術……。もし私にも出来るようになれば、更に一步一人前に近づくかも……！」

「どんなに早くても、須臾の前には霞んで見えるわね」

「んんん。厄を感じるわねー！」

「……あんだ達」

「靈夢、貴方は先に行きなさい」

「ここなら本気出しても大丈夫よねお姉様？」

「妖夢く、見えない斬撃、後で見せてねく」

「勿論です！」

「……姫様」

「任せときなさいよ。私もそこそこ強いなのよ？」

「雛、あんま大暴れしないでよ？」

「大丈夫よ！」

「はっ、いちにいさんしーごーろく……これだけ？おいおい。せめて10倍……いや、100倍は連れてこいよー。私が弱そうに見えるって？残念でしたー、私は技術の化身。歴史に残されなかった御業の集合体。一騎当国の人を超えし超人。王国最強はここに在り。それでもいいのか？」

「あら、私はスカーレットデビル。国を相手にしても一步も譲らなかつた悪魔の中の悪魔よ？むしろそれくらいで丁度良いわ」

「『技術』なんて弱き人間の力よ。圧倒的な破壊を前にどこまでもつか楽しみね！」

「ちよ、妹様。そんな事言われたら私、立つ瀬がないんですけどー……」

「御託は結構です。強い、弱い。そんな言葉に何も意味はありません。……斬れば、分かる」

「あら、私だって国を傾けることぐらい訳無いわ？」

「ふふ、知ってる？どんな英雄も、石に躓く程度の厄であつさり死ぬものよ？」

辺りに戦意が満ちていくのが分かる。

「フラン。ついでにあの大きな門、壊しちやいなさい」

「はいはい。キュツとしてー……」

「っ、皆、離れて！」

「ドツカーン！！」

爆散。

巨大な門が大きな音を立てながら崩壊していく。当然その巨大さから瓦礫の量も膨大だ。それが高くから降りそそぐ。

恋符「マスターズパーク」

「フリアーン！お前あぶねえだろ!!」

「あ、ゴツメーン☆」

極太レーザーが瓦礫を焼き払い、こちらにまで被害は及ばなかった。ちよつと肝が冷えたわ……。

まあ、なんにせよ道が出来た。なら進むだけよ。

「あーりやりや。門が壊れちまつたら流石に怒られる……かな？ま、一人も通さなければ一緒だよおっ!」

「貴方の相手は私達です!」

「須臾を察知できるなんて貴方……変態ね」

「誰が変態だコノヤロー!」

「姫様……あんな汚い言葉を使うなんて後でお説教ですよ……」

「はいはい、さっさと行くわよ」

\* \* \* \* \*

壊れた門を超え突き進んでいくと、小さな、ほんの小さな違和感を覚えた。王国の城下町、人里とは比べ物にならない程に計算され尽した美しさを持つ街並みに、見るたび新たな発見をする。

前はそう、ここでカラオトお姉ちゃんと出会ったのだ。

「……レイム、なんかヤな予感する」

「チルノちゃんも感じる？」

「なーんかヤバイ気がするんだよねー」

「でもスターの能力に引つかからないんでしょ？」

「そうなのよね。だからこそ嫌な予感というか……」

「お前等妖精共でも分かんねえのか？」

「世界樹の中なんて自然エネルギーが充満して、妖精が活性しそうなもんなのにね」

「活性自体はしてるよね。でも元々が世界樹生まれじゃないから環境の違いからあんまり強化されてる訳でも無いようよ」

「まあなんにせよ、あんまのんびりしてる時間は無いでしょ？ならさっさとあの城まで行くわよ！」

「……ちよつと待ちなさい。あんたドコ向かうつもり？」

「はあ？ドコつて……あそこに見えてるデカイ城でしょ？」

そう言つて天子は指を差す。何も無い方向にむかつて。

「おいおい天子、お前ボケたか？そつちにや何も無いぜ？城はアツチだろ？」

そう言つて何も無い方向にむかつて指をさす魔理沙。

「貴方達どうしたのよ？城はこの道真つすぐ行つたところにあるじゃないの」

咲夜が何も無い方向にむかつて指をさす。

これは……まさか……。

「そのまさかさ」

「っ!？」

また、真後ろから唐突に現れる。一切の気配もなく。

そのままぬるりと私を通り抜けるように前に出て行く。

「ようこそ人間達。妖怪達。それに、外の妖精達。盛大に歓迎してあげる……」

「あ、アンタ誰よ！」

「目の前に居るのに気配を感じないわ……!？」

「なんだアイツ！透けてる!？」

「幽霊……じゃ、無いわね。靈魂そのものに近いわ」

「だけど妖精っぽい羽も生えてるよ？」

「じゃ、合いの子なんでしょ」

「正解。まあ別に正解しても何かある訳じゃないんだけどね」

「ふわりふわりと、人魂のように宙を舞うカラオト。その無感情な目が私を捕らえ、喜びにあふれたような、悲しみに濡れたような、そんな色が見えた気がした。」

「では改めて、ようこそ王国の城下町へ。盛大な歓迎会を始めたいと思うけど、いいかな？」

「歓迎会？そりやいいぜ。当然酒は出してくれんだろうな？」

「はは、残念だけど酒は一滴も出ないなあ。これより始まるは王国一の楽団による演奏会。アルコールは無粋、聴衆は黙って心を振るわせればいいんだ」

「あら？私達の演奏会はむしろお酒と共に楽しむ事の方が多いわよ？」

「王国一の楽団……ねえ？幻想郷一の楽団とどっちが凄いか比べてみない？」

「音の美しさなら私達も負けない……」

「はは、世界中を回って鍛えた音色の力に適うと思ってるのかな？」

そう言つて、何処からともなく大量の楽器が出てきた。



「楽器は多ければ良いってモノじゃないわ」

「そうそう。如何に相手に届けるかなんだから」

「大事なものは、心に響かせる事。聴いてくれる人を下に見る奴なんか……負けな  
い。プリズムリバー楽団が、カラオト程ではないが多くの楽器を出した。

「う、歌なら負けないもん！」

「いや、ここは引つ込む所でしょ？」

「えー？面白そうだしいいんじゃない？」

三妖精<sup>3バカ</sup>が何処からともなくスタンドマイクを持って来た。

いや、アンタ等は引つ込んでなさいよ。

「さて、孤独な演奏会によるこそ。憂世を憐む幻影の音色に心も魂も融かし尽くせ」  
「憐むのもいいけどどうせなら楽しんで方がマシよ？」

「心も魂も奮い立たせる幻想の音色はいかが？」

「私達の演奏で音楽の楽しさを思い出させてあげる」

カラオトが指揮棒を振るう。大量の楽器がその指揮に合わせ宙に浮き、整然と並ぶ。

ルナサがヴァイオリンを構える。それに続きメルランがトランペットを、リリカが  
キーボードを構える。

「ちよっとー！私達だっているんだからー！」

サニーミルクが両手を振り上げながら空に飛びあがる。

「ちよつとサニー！コレ忘れてるわよ！」

「しょうがないわね」

他の二匹も続いて飛びあがる。

「ここは任せて早く進みましょう。」

「進むつたつてどつちに進めばいいんだぜ？」

「恐らく妖精達が迷わせているようね……。大妖怪すら欺くなんて大したものね」

「だったらその道の専門に頼んだらいいわ。でしょ？」

そう言つてホオズキを見る。

「あー、キキツ！『嘘』ならあたいの出番だなあ！惑わせ、狂わせ。時間稼ぎのつもりだろうが残念！あたいの前に嘘も真も意味を成さねえよ！」

両手を地面に突き刺し、力を流し込み、呪文を口にする。

「嘘が真。真が嘘。虚偽虚構の中にある真実。真実に隠された虚言。歪め歪め現の幻。

曲れ曲れ現の幻」

ビキリ。と世界が歪んでいくように幻視した。

「嘘を超えた嘘を此処に表せ」

バキリ。と何か音が立てて壊れたような気がした。

つかの間、気が付けば目の前に花風城がそびえ立っていた。

「……は？」

「キキキッ！これなら流石に迷いようも無いよなア？」

後ろでとんでもない物を見たかのように固まるカラオト、プリズムリバー楽団、その他妖怪勢。

いや、何してんのよ。

「キキッ！偽の花風城を創った！だが本物と完全にリンクしている偽物だ、お前等が此処に入ってからこの偽物を消せば、本物にお前等が残るって訳だ！」

「あんた何言ってるの？」

「言ってる意味が全然理解出来ないわ」

「そんな事出来るんなら最初っからやりなさいよ」

「あー？色々あんだよコツチには。それよりいいのか？さっさと入らねえと消しちゃうぞっ。」

色々言いたい事はあるが、一切合切後回しだ。既に日も傾き始める時間になっている。余計な事をしている時間は無い。さっさと行くわよ。

「ああもー訳分かんねえ事ばっかだぜ!!」

「幻想郷の常識でも測れないわ……」

「！つまり世界樹の中でも常識に囚われてはいけななのですぬ！」

「その顔止めなさい」

そうして次々に城門を潜り抜けていく。

「くっ、ホオズキめ……。妖精包囲網が意味を成さないじゃないか」

「……貴方、口角が上がってるわよ？」

「……はは、見間違いだろ？それよりチューニングは済ませたか？」

「お生憎、こちとら何時でも花の王とセツシヨン出来るように常にチューニングは完璧にしてるわ」

「……そう」

「……何？怒ってるの？」

「怒ってない」

「怒ってるじゃん」

「怒ってない」

\* \* \* \* \*

嘗ての今日では花風城の中は別世界と言うに相応しい内装だったが、今は普通の板張りの廊下、そして襖、天井は木材で支えられている、至つて普通の建築様式だ。

「お、おい。この部屋、どうなつてゐるんだ？壁に階段？天井に扉？頭がこんがらがつてくるぜ」

「こつちの部屋は全てが鏡で出来てるわ。……なんで鏡の中の自分と常に目が合うのかしらっ。」

「こつちは何も無い！壁も、床も、天井も！」

「……ここは、発条だらけね。こいし、触つちやダメよ」

「この部屋は全部が球体で出来てる。変なのー」

普通じゃなかった。何を考えてこんなモノ作ったのよ。

それよりも、どうしたらここから先に進めるのかしら？

「キキツ、こりやあノーミイの奴だな。アイツはこういった意味分からねえ謎解きが大好きなんだ」

「あんたでもどうにもならないの？」

「ならないなア。アイツは嘘も本当もコロコロ変えるヤツだからな。あたいの能力たちと相性が悪い」

「……嘘も本当も変える?」

「ほれ、来たぞ」

突然、廊下中に大量の魔法陣が現れ、そこから何かが這いずる様に出てきた。

この何かは……何かとしか表現が出来ない。形も、色も、気配も何もかも分からない。鵜の正体不明とも違う、ソレを正しく認識する事を頭が拒絶しているかのようだ。

『よく来たデスね。お帰りはあちらデース!』

何か一つ一つから声が聞こえる。

「その声は……お前、ノーミイ……か?」

『もこ、昨日ぶりデスね。今日はお仲間が大勢デスがお生憎、イージーモードで苦戦しまくったのにルナティックモードが突破出来る訳やねーデース!』

「ハッ、そりやどうかかな? イージーモードとは言え、ある程度パターンは掴めたんだ。ならルナティックも突破してやるよ!」

『ほうほう? 中々大した自信じゃないデスカ。ならば突破してみるが良いデース……この魔神の罠を!!』

叫ぶと同時に、何か飛びかかってきた。皆は一斉に弾幕を張って叩き落とそうとするが、何かは次から次へと魔法陣から現れ、時間が経つにつれ飛びかかる動きもより複雑な動作となり、弾幕を回避していく。

「うあっ!？」

「リグルっ!?!っ、しまっ」

「きやあっ!?!」

「ミスチー!ルーミア!」

「くっ、コイツらどんどん速く……あっ!?!」

「橙!」

何かに当たった者はどんどん姿を消していく。恐らく何処かにテレポートさせられたのだろうか……

「総領嬢様!危ないっ!」

「っ!衣玖っ!」

「さとり様っ!」

「うにゅっ!」

「きやっ!?!お憐っ!お空!」

どんどん速く動く何かに捕まり、何処かに連れ去られるのをただ見てることしか出来ない事に動揺が広がっていく。

「くっそ!恋符『マスタースパーク』!!」

「騎士『ドールオブラウンドテーブル』」

「ゴホツ、火金符『セントエルモピラー』」

スペルが舞い、合切を吹き飛ばす。かと思いきや、何かが集まり出し、何かガスの様な物を噴き出した。

何か何かって分かりづらいわね……

『生半可な魔法なんて通用しないデース！塵にして餌にしてやるデース！』

ガスの様な物が弾幕に触れたかと思えば、弾幕が全て輝く塵と化し、何かはその塵を吸収した。

「うええ!?そんな馬鹿な!?!」

「魔法がかき消された!?!いや、魔力が分解されたのかしら?」

「考察している時間は……ケホツ、ゴホツ!」

「そうこうしているうちに更に何かが湧き出て……しまった!?!」

『多人数相手の定石は、散らして各個撃破デース!』

身体に何かが取りつき、まるで臍から引っ張られるような感覚で何処かに連れてかれた。

『さあ、残った者同士で死闘でも繰り広げようじゃないデースか!』

「くそつ、霊夢!」

「紫様つ!紫様は何処につ!?!」



『王様の所には簡単に近づけさせねーデスよ！さあかかって来いデス！』

「…………ノーマイ、お前…………泣いてるのか？」

『!?ば、馬鹿な事を言うんじゃねーデスよもこ。私が泣いてる訳やねーデス！』

「…………そうか、勘違いか。ならいい…………」

\* \* \* \* \*

「…………(い)は」

何かに引き寄せられ、飛ばされた場所は長い長い螺旋階段の下だった。記憶にある、玉座の間へと続く螺旋階段だ。どうしてここに…………。

いや、考えるのは後だ。今は先に進まなければ。

「…………私以外誰も居ない…………か」

嘗ての今日の如く、一人きりで螺旋階段を上る。外の景色はあいも変わらず美しく、見る者を魅了する。

しかし、嘗ての今日と違う所、それは私の後ろには友達が居るということ。今は誰も

居なくても、きつとすぐに私に追いついてくる。追いついてきてくれる。その事実が私の背中を支え、押ししてくれる。

私は、独りじゃない。

「……………着いた」

絢爛豪華だった景色に比べ、目の前の扉はなんと質素な事か。だが、この質素な扉を抜ければそこが終点。

覚悟を一つ。決意を抱いて扉を開ける。

そこには……………

「ヒュ、カ、ハツ……………」

「う……………ぐう……………」

正邪と針妙丸の二人が力なく横たわっており、

「……………来たか、霊夢」

輝くエメラルド色の髪に燃えるルビー色の瞳。花をあしらった着流し、王座に座りこちらを見下している姿はどこまでも傲岸不遜であり、どこまでもいつも通りであった。

「正邪！針妙丸！あんたらいつの間にな！」

「打ち出の小槌の力を使ってまで態々俺に会いに来たようだ。小槌の力で直接俺をどう

にかしようとしたようだが……所詮は鬼の小道具、俺に通用する訳も無い。嘗ての異変のように、強者と弱者をひっくり返そうともしたが、残念。俺はあらゆるヒエラルキーの頂点でありながら、外に居る者。即ち、王。常に最強であり最上である」

「……今日は嫌に喋るじゃないの。いつもみたいに瞬殺してこないのかしら？」

「霊夢。俺は褒めてるんだ、お前達の足掻きを。もつと早くお前達を迎えに行きたかったが、こいつ等が先に来てな。偽の今日を用意したのも素晴らしいアイデアだ。俺の心を見事に乱した、素晴らしい。だからこれはただのご褒美。ゲームトロフィー程度のご褒美だ。嬉しいだろう？」

「あんたが諦めてくれんなら、両手をあげて喜んであげるわよ」

「諦めさせるといふのなら、それはお前の手でやるべきだ。なあ、霊夢。お前、今日は何をした？」

「……」

「オトモダチを集め、難攻不落の居城を攻める。単純で良い手だ。だがそれで？面倒事は誰かに押し付けて、自分は最後まで何もしない？馬鹿な。お前は『主人公』だ。なら、最期はお前が手を下すべきだ。違うか？」

「……」

「ずっと」

「うん？」

「ずっと、言いたかったことがあるわ。花の王」

「聞いてやろう」

「あんたは、あんたの言う『主人公』ってやつに拘ってる様だけど。私はそんなモンでも良いのよ。確かに私のこの、『やり直す程度の能力』は他の能力とは正に別次元の力だとは思わ。でも、それが何？私だって弾幕ごっこで負ける事なんて何度もあるわよ。『最後に勝つのが主人公の特権』？馬鹿々々しいわ。最後に勝つのは、私が博麗の巫女だからよ。『思うがままに動ける特別な存在』？アホらしいわ。確かに誰もが誰も、自分がやりたい事そのままに動けるような事は無いでしょうよ。でもね、ソレを含めたって自分の意志なの。だったら究極的な話、誰もが自分の思うがままに動ける存在でしょ？この世界の誰もが『主人公』で、誰もが『登場人物』で、誰もが『名前の無いモブ』なのよ」

「見えない物に拘って、見える物を疎かにしたあんたにあえて言っただけよ。そこで倒れてる正邪は、『正邪自身の物語の主人公』なのよ。針妙丸も、『針妙丸自身の物語の主人公』なのよ。誰も、自分自身の物語の主人公なのよ。それをゲームだのなんだの軽んじて、寝惚けるのもいい加減にしなさい」

「……」

花の王は俯いて、その表情を窺い知ることは出来ない。だが、少なくともいい気分ではなさそうだ。

突如、遠くで爆音のような、破壊音のような、空間を割くような巨大な音が聞こえた。玉座の間の窓から覗いている偽物の太陽が明滅する。外を見れば、偽物の太陽の光とは別の光が見えた。

更に続く爆音。それに続いて、バキバキと、メキメキと。音が聞こえるにつれ、偽物の太陽の光とは別の光が大きくなっていく。

そう、その音は、一つの世界を壊す音だった。

バキリバキリと。いや、もはや表現できない異音を出して世界は壊れていく。

既に偽物の太陽の光は完全に消失した。だがそれでも明るく照らすのは、世界樹の外から本物の太陽が照らすから。

そう、傷を付けることすら不可能に近い世界樹は何者かの手によつて大穴を開けられ、倒木と化して行く。

倒れ行く世界樹を内側から見続ける花の王の目には、僅かな驚きと深い悲しみ、そして自身の罪を見るような色をしていた。

私は、開けられた大穴に入り込むエメラルド色の髪にルビー色の瞳を持った少女を幻視した。

## 彼女の花言葉。

そこからは正にあつという間の出来事だった。世界樹が完全に倒れるまでの間にあちこちで閃光が何回か放たれ、玉座の間の窓が吹き飛んだと同時に花の王も吹き飛んだ。

いや、何が起きたのよ……？

「間に会った……ようね」

「紫っ!？」

花風城の中で突然いなくなったと思ったら、空間を割き突然現れた。

「可笑しいとは思っていたのよ。あの幽香が唯々手を拱いているだけだなんてね。花の王がこれほどまでに大々的に動いておきながら、どうして幽香はずっと世界樹の周りをウロウロしていたのかしら？ 違うわね、幽香はずっと『世界樹の中に侵入しようとしていた』。しかし何らかの理由で幽香は世界樹に入る事が出来なかつたのよ。その理由とは何か？ 相手は花の王、どんな荒唐無稽な可能性でも花の王というだけで実現が可能。可能性を一つ一つ潰していくのは骨が折れたわ」

「……それで、その『理由』ってのは何だったのよ」

「シンプルな事だった。余りにもシンプルだからこそ、花の王にしか出来なかつた事よ」  
「勿体ぶらないで教えなさいよ」

「力の分割……花の王的に言えば、『區別』をしたのよ。『幽香本来の力』と『風見幽香』を」

「っ!？」

それはつまり、博麗神社にある『花の王の神力』と同じ……？

「そうして力を削いだ後、幽香をあの場合に封印したのよ。恐らく、魔術的な封印を」

「……例の、天体魔法ってやつかしら」

「その封印でもちよこちよこ動けてた幽香に驚愕を禁じ得ないけど……恐らくそうよ。

現に『今日』は幽香の封印のタイミングがズレたのか、いつもの場所に居なかつた」

「……待ちなさい、仮に今の幽香が『本来の力』の幽香だつてんなら、世界樹を薙ぎ倒し

た事に説明がつかないわよ」

「……いいえ、説明が付くのよ。簡単な話、『アレが今の幽香の実力』なのよ」

「……は」

思考が停止した。そんな馬鹿な……

「霊夢、幽香は真の意味で花の王と同類なのよ」

「なんか納得したわ」

「私が納得しない説明ね」

ふわり、と幽香が優雅に降りてきた。

「風見幽香お父様私は花の王様の娘。家族ではあるけど、同類ではないわ」

「……はあ？何よその話、初耳なんだけど」

「隠してはいないわ。話そうとも思ってたけど」

「紫！あんたは知ってたの!？」

「勿論じゃないの。私が花の王の事について知らないことなんて無いわ」

「断言した!？」

「ああ……八雲紫。お前もまた、俺の古き友だったな……」

ぞわり、と。

ただ声が聞こえただけだというのにこの悪寒はなんだ。

まるで、心臓を握られている様な感覚。

まるで、魂を直接握られているような感覚。

ちらりと紫を見れば、いつも通りを装ってはいるが指先が振るえているのが見える。幽香を見れば、優雅さを忘れ、殺意を目に込めて今にも射殺さんと睨み付けていた。



「『現在』は、楽しい。常に変わり続ける世界を全力で駆け回っても、未だに新しい発見をする。実に、楽しい」

「だが、ふ……と頭によぎる。亡き友にもこの世界を見せたかったと」

「今の妖怪の山の長、『天魔』が二代目である事を知っている者は少ない。初代天魔、汪鳥おうがらすは無二の親友だった。闇よりも深い色をした翼が美しく、当人もそれをよく自慢していた。ヤツ自身は争い事が嫌いなくせに、何かと騒動に巻き込まれる奴だった。そんな事が続いて、色々あつて山一つ統べる事になったと聞いた時は大笑いした事をよく覚えている。ヤツが一から育てた天狗に山の長をひっそりと譲った時は、二人で盛大に酒盛りをした物だ。『漸く堅苦しい役割から解放される』『漸くまた世界中を飛び回れる』つてな」

「そんな宴が終わり、僅か三日後だった。ヤツは、大勢の妖怪と共に月に戦争しにいった」

「つ……」

「争い事が嫌いなアイツが、自分から戦争に参加する訳が無い。どうせいつも通り、騒動に巻き込まれてなんだかんだと参加する羽目になったんだらう。だが、その真相はもう分からない。アイツ自身表に出る性格じゃない上、俺以外の友が居るかどうかも分から

ない根暗野郎だ。ひっそりと山の長を譲つたのだから、元々顔を知られてないから始めっから今の天魔が山を統べていた事にする為だったからな。真相を知っている奴は全員月に消えてった」

「なんとなく、ヤツが死んだ事は気が付いていた。せめて墓の一つでも作ってやろうと月に行つても、そこには何もなかった。何も、何も。アイツの自慢だった美しい翼も、骸の欠片すら。中に何も入っていない墓に何の意味がある。だから俺は、何の変哲もない、どんな場所でも育つ花を植えるだけにした」

「誰にも語られない最強の鬼が居た事を知っている者は少ない。『魂こん瓔よう姫』は俺の喧嘩友達だった。会う度に殺し合いの様な喧嘩を繰り広げたもんだ。だが、俺に次いで花を愛するヤツだった。アイツの造る花飾りは今も昔も、誰にも真似できない程に緻密な芸術品だった。ある日の喧嘩じゃあ、ついで大地に巨大な穴を開けた。そんな穴の中でまで喧嘩を繰り広げた結果広がった穴は、今じゃ『旧地獄』なんて呼ばれるなんて夢にも思わなかったさ」

「毎日のように喧嘩をして、同じ数だけ酒を酌み交わした。だがある日を境にして、全く姿を見なくなつた。毎日のように顔を突き合わせていた相手が急に顔を見せなくなつたんだ。そりゃあ不安になつた。俺はヤツを探し、探し、探して、十年掛けて漸く見つけた。嘗ての喧嘩で開けた大穴に、ご丁寧にも俺が近づけないように消せない業火で空

間を焼き尽くし隠れ潜んでたんだ」

「その姿を見た時は驚いたよ。十年前は女盛りと言える見た目だったつーのに、その僅か十年で骨と皮ばかりのしわくちゃのクソババアに変わっていったんだからな。鬼つーのは不思議なもので、ある一定の時期までは非常にゆっくりと成長していくが、その後一気に老化していくらしい。今まで看取ってきた鬼全員がそういう老化をしていったから間違いはないだろう。だが、当時の俺はその事は知らなかった」

「アイツは、こんな年老いた姿を見られたくないから隠れた、とかほぎきやがる。知った事かよ。今更お前の見た目が大きく変わった程度で扱いが変わるか。そう言ったら、女心の分からないヤツね。だつてよ。似たような事ならずつと妖精達から言われてんだよこちとらよ、だが直さねえ。俺は俺だからな。そうして、俺と魂璽姫は最期の喧嘩をした。何度も、何度も喧嘩をしたつていうのに、その終わりは本当にあつけない物だった。虚しい勝利だった。アイツは死ぬ直前、せめて美しく派手に逝きたいと言った。俺は、その最期の願いを叶える事にした。辺りで燃え盛る業火に更に火をくべ、爆炎を咲かせ、極熱の閃光を咲かせ、空間を紅く燃やし尽くした。鬼の骨すら焼き尽くす炎で、燃やし尽くした。全部、全部」

『丞僧』。ヤツは只の人間でありながら、我流で剣術を極めた。見たことも無いその太刀筋に見惚れてしまったのを覚えている」

『貫珠神』<sup>かんしゆのかみ</sup>。魚石と呼ばれる珍しい石を沢山コレクションしていた神だ。空間を彩る技術はコイツに教わった」

「……皆、かけがえのない友だった。だが、死んだ。病で死んだ。戦争で死んだ。信仰が途絶え死んだ。畏れを無くし死んだ。寿命で死んだ。自然が消え、死んだ。皆、死んだ」

「八雲、紫。お前も、きつといつか死ぬ。霊夢、お前も死ぬ。此処には居ない、永琳や妹紅や輝夜も、不死人だつていつかは滅びる。妖精も、いつかは消える。何故なら俺が殺せるから。今までの『今日』で何度も殺せたから。殺せるなら、死ぬ。俺を残して勝手に死んでいく」

「ああ、死ぬなら、永遠に保存できるようになればいいのに。だが、この世に永遠は存在しない。俺の一生より永い時間なんて存在しない。常にあらゆる物が変わりゆくこの世界で、唯一俺だけが取り残される。ああ、ならば永遠にこの記録が残せればいいのに。もう、俺は汪鳥の翼の色を思い出せない。もう、俺は魂環姫の緻密な花飾りを思い出せない。丞僧の刀の煌きも、貫珠神が磨き上げた魚石も、思い出せない。ただ、目を奪われた事実しか、ただ、美しかったという記憶しか、もう思い出せない」

「ああ、『現在』は確かに楽しいよ。常に新しい世界が俺を迎えてくれる。だが、億年も生きると『現在』に似た『何時か』がフラッシュバックする。そうしたらもう、駄目だ。新しい世界は、途端に陳腐なモノに見えてくる。『現在』は、新鮮なモノでなくなる。『何

億年分の一に過ぎないんだ」

「『現在』は楽しい。でも、それ以上に『過去』は美しい」

どろりとした、粘っこい憧憬が。燃え盛る狂気が。凍える決意が。

言葉に出来ない感情の発露が。

全て、全てがそのルビー色の瞳から零れ出していた。

『もう彼の心は原型を留めていない。それでも肉体で生きる彼は永きを生き続ける。心当たりはないかな？彼、最近凄く忘れっぽくなってるんだ』

『人間には、『病は気から』なんて諺があるだろう。彼も同じさ。風邪の様な症状は出ないけど、もっと根本の部分から壊れていつてるんだ』

ああ、そうか。きつと花の王はもうどうしようもないくらいに壊れてしまっているの  
だろう。

「ああ、零無。レイム。何でお前だけが特別なんだ。どうしてお前だけが俺の心を掴んでいくんだ。せめて、お前が最期に俺の心を放していったのならこんなにも苦しくなることは無かったのに」

「レイム、レイム。俺は強欲だから、全部全部を手に入れるよ。過去も、現在も。ああレ

イム、過去を手に入れたら、紹介したい友がいるんだ。レイム」

ぼた、ぼた、あらゆる感情をごちゃごちゃに混ぜた液体が滲んだルビーの瞳から顔を伝い、地面に落ちていく。誰かを見ている様で、誰も見てない。

「……親しき仲の者が死ぬなんて、生きていけば良くある事よ。でも、失ったモノは戻らない。空っぽになった心は、別の何かで代用して生きていくしかない。私達はその別の何かに花の王が居てくれる。でも、花の王には……」

「……だから、何だつてのよ」

花の王が、この世界を捨てて過去に行くというエゴを突きとおすのなら。

私は、花の王を無理矢理にでもこの世界に引き留めたいってエゴを突きとおすだけよ。

「……見て、られないわ」

幽香が、そう独り言ちたと同時に姿が掻き消える。直後、爆音が耳に届いた。

「レイム、零無。ああ零無！お前が神とやらに殺されるなら俺が神を殺してやる！俺がお前を守ってやる！だから生きる事を諦めないでくれ！」

「つ……！私はっ！零無じゃない！貴方の娘の風見幽香よっ!!」

目をやると、地面に叩き伏せられている幽香に、さらに追撃を掛けようと拳を振り上

げている花の王の姿が見えた。

「ああ零無！楽しいなあ!!お前との殺し合いは血沸き肉躍る!!」

「だからっ！私は零無じゃないっ!!零無は死んだのよ!!」

まるで追えない速度で拳劇を繰り広げる幽香と花の王。速過ぎてよく分からないが、幽香の方が不利……だと思ふ。

「零無！ああ零無！死んでも、死んだ事実ごと巻き戻る力を見せてくれ！」

「私はっ零無じゃ!?!」

ごしやり、と肉と骨が潰れる音が聞こえた。そして、私の足元に向かって幽香が転がり跳んできた。

「ゆ、幽香!?!」

「ぐ、ギギギイ……」

顔の半分が潰された蛙のように轢き潰れていた。が、幽香が片手で潰れた部位を抑えると瞬時に復元された。

その様子を見ていた花の王は、まるで熱が冷めるように。まるで夢から覚めたように。喜面から無、そして怒へと変わっていく。

「零無……じゃ、ない。お前は、ああ。なんだ。お前は、風見か」

「え、えっ……貴方の娘の風見幽香よ。貴方が、死んだ零無に会いたくて、会いたくて、

どうしようもなく焦がれて造った零無のレプリカ」

「お前が、レプリカ？馬鹿言えよ。お前は出来損ないだ。零無のレプリカですら無い」

「それは、どうかしらね？過去に貴方に勝てたのが零無だけならば、私が貴方に勝てば零無の代わりに成らないかしら？」

「俺に、勝つ？『主人公』ですら無いお前がか？」

「あら、『悪逆の限りを尽くす王』の娘なんて、今時なら主人公役にぴったりじゃないかしら？」

「滅らさず口を……いいだろう、ならその口ごと叩き潰してやる」

「ふふ……やつと、やつとワタシを見てくれるのね！」

「霊夢！一旦退くわよっ！」

「っ！」

紫に首を掴まれスキマに押し込められる。その直前に見えた光景は、一瞬にして崩壊していく玉座の間だった。



過去、未来、或いは別の世界線のお話  
メイドやめますか？人間やめますか？

なんかさつきまでですっごいシリアスに戦ってたような気がするがそんな事は無かつたぜ！

ここは平和な博麗神社。縁側に寝ころびながら花の王は煎餅と熱々の茶を嗜んでいた。

世界崩壊シナリオとかそんな事は起こってない。起こってないから。

「ごきげんよう、花の王」

「あー？紅魔館のチビじゃん。何しに来たん？」

「誰がチビよ！500歳も生きている立派なレディよ！」

「500才児（笑）」

「殺してあげましょうか？」

だからだと過ごしていた花の王の前に、永遠に幼き紅い月『レミリア・スカーレット』が現れる。

「誰が永遠に幼いよ！ちゃんと成長してるから！」

「まだタンポポの方が成長してるな」

「黙ってなさい花の王!」

改めて……花の王の前に永遠に紅い幼き月『レミリア・スカーレット』が現れる。普段ならばその傍らには従者が常に居る筈のだが、今日はその姿は見えない。

「どうした?と花の王が聞けば、レミリアは今日は休ませている。と返答した。」

「最近ずつと咲夜の様子がおかしいのよ」

「あそー」

「ちよつとは興味を示しなさいよ。仮にも花友達とやらの一人でしょうが」

「くあ……あ……ふあ、あ?なんて?」

「ねえ、私にもちよつとは示して興味」

湯呑を片手に大あくびをする花の王に怒りを向けるレミリア。しかしその程度で怯みもしないどころか意識の欠片も向けない所に格の違いを見せつける。

「んなしよもないところで見せつけるんじゃないわよ……」

「んで?俺にどうしろって?」

「はあ……マイペースさがパチエに感染<sup>うつ</sup>っててイライラしてきたわ……貴方の所のメイド、何匹か貸してほしいのよ」

「おー、なんで?」

「今日咲夜は休みって言ったでしょ？なのにあの子ずつと朝から掃除ばかり……んな事は妖精メイドとかに任せてればいいのよ。だから今無理矢理部屋に閉じ込めてるわ」

「それアレじゃん。『自分が休むと仕事が回らない』って思いこむ症候群じゃん。俺じゃなくエーリンに診てもらえ。自分の娘なら本気で診るだろ」

「え？なんで？咲夜を診てくれるんじゃないの？」

「え？エーリンだつて自分の娘を真面目に診るくらいの良識は持つてるだろ？」

「え？」

「え？」

この話はいったん止めにしよう。はいいやめやめ。

「まあとにかく要するに俺世んトコ界の超優秀メイド妖精を借りて、瀟洒な従者が居なくても一日くらい屋敷が回ると言いたいって事か？」

「おおむねそんな感じよ。前行った時に貴方の妖精メイドのレベルが随分高く見えたからね。ま、咲夜には劣るけど！」

「従者のレベルが高くても主人のレベルが低いからなあ」

「死にたいようね」

神槍「スピア・ザ・グングニル」

神すら貫く槍が超速を持って花の王の心臓に向けて投げられる。しかし花の王は

持っていた食べ掛けの煎餅で神を貫く勝利の槍を受け止めた。

「ほれ見たことか」

「ぐぬぬ……やっぱアンタ規格外過ぎよ!」

受け止めた槍を、ハナクソを飛ばす様に指ではじく。それだけで先程と同等以上の速度をもってレミリアに返される。レミリアは冷汗を流しながら辛うじて槍をつかみ取った。

「あ、危ないじゃないの!」

「あ、ワリ」

「軽いつ!アンタもうちよつと優しさを持ちなさいよ!」

「お前がそこで紅い鮮血の花を咲かせれば優しくしてやるよ」

「ちよつと辛辣過ぎない!」

レミリアがぎやあぎやあと縁側で騒いでいると神社の奥から巫女服を着た少女が現れる。

「朝からうるさいわね。静かにしないとその顎外すわよ?」

「怖つ!?!神が神なら巫女も巫女よね本当に!」

「ホントにうるせえな。日傘ごと太陽光で燃やすぞ?」

「ごめんなさい!」

しゅん、と高速でカリスマガードを披露するレミリア。もはや威厳なぞ何処にもなかったがなにもおかしくはないな。

「……ま、いいよ。その願いしかと聞き届けた」

「ほんと!？」

「ああ。この俺、『剥零神』が叶えてしんぜよう……飽きた。頼み事聞いてやるからほれ、信仰の形を寄越せ」

「せめて最後まで神っぽく振る舞いなさいよ!」

「黙りなさいカス妖怪が。花の王が神だと言えば神なのよ、其処に貴方風情が口を挟むなんて畏れ多いわ殺すわよ」

「ちよつと巫女!?!巫女がしていい言動じゃないでしょ!?!」

巫女服を着た少女が何処からともなく日傘を突きつけ、視線で『次なにか話したら殺す』と告げる。レミリアは両手で自身の口を抑え、涙目でふるふる震えることしか出来なかった。

「おい、お前ちよつと引つ込んでろ。話が進まないだろうが」

「……チツ、命拾いしたわね。花の王、買い出しに行つてくるわ」

「いつてらつしやい」

そう言つて日傘を下ろし、一瞬で巫女服からチェック柄の普段着に着替えた緑髪の少

女はひまわりの様な笑顔で花の王に話しかける。

「今日の晩御飯は何が良いかしら? お肉? お魚? それともわ・た・し?」

「お前以外なら普通に食べられる物でいいよ」

「じゃあ不死人の焼き鳥ソテーなんてどうかしら?」

「普通に食えないから。じゃ魚で」

「人魚の天ぷらね?」

「なんで普通に食えるモノをチョイスしないんだお前は」

そんなやり取りをしつつ靴に履き替えた少女は上機嫌に人里へ飛んで行った。

「……アレが風見幽香だなんて今でも信じられないわ」

「料理は美味いんだが時々俺に人肉や妖怪肉を食わせようとするのはなあ」

「いや、そういう事じゃなくてね? ……まあいいわ。ほら、アンタの言う『信仰の形』よ」

そう言ってレミリアはポケットから幾枚かのコインを花の王に放り投げる。

「全く、お金が信仰の形なんて大した神よね」

「賽銭と言え。妖怪や悪魔が熱心に神に祈るよりマシな絵面だろうが」

「……ま、それもそうね」

レミリアは踵を返し空に浮く。どうやら紅魔館に帰るようだ。

「じゃあ頼んだわよ花の王」

「おー。お前が帰る頃には優秀なメイドがもう仕事終えてるだろ」  
「速過ぎるでしょ!？」

レミリアのその言葉に、花の王は大あくびで返す。どうやらもう興味は無いようだ。  
「ふん、これで帰ってまだ掃除でもしてようものなら只じやおかないわ！」

レミリアはぷりぷり怒りながら高速で飛んで帰った。素晴らしいフラグ建築だ感心するな。

そして紅魔館に帰宅したレミリアが目にした光景は……

「おかえりなさいませレミリア嬢」

「血のように紅い紅茶のご準備ができておりますわ」

「クツキーも間もなく焼き上がりしますのでどうぞこちらに」

「お嬢様ー！なんか急に見たこと無い妖精メイドがー！」

「めーりんがやられましたー！」

「妹様が懐柔されましたー！」

「パチュリー様がまた引きこもりましたー！」

「(屋敷が乗っ取られた!?)」

なんだ、何時もの事か。

\* \* \* \* \*

「私は……メイドに向いていないのかしらね」

紅魔館内部、十六夜咲夜の自室。高価であり上品なベッドの上で膝を抱えて寝転ぶ部屋の主が一人そこにいた。

普段こそ瀟洒で完璧を体現し、自負している彼女はその完璧のドレスを脱いで、年相応の少女のように思える姿を晒していた。

その彼女の悩みの始まりは、過去に起きた異変と言うにはあまりにも規模が大ききな、戦争とも呼べるような規模の異変を起こした一人の男の思いが原因だった。

彼は、毎日が違い毎日が同じ日を繰り返し永遠生きてきた。その結果として、世界を巻き戻す大異変を起こしたのだ。

彼の慟哭に似た咆哮は幻想郷全土に響き渡り、彼の足元にも及ばぬ年月しか生きていない少女の胸を打つほど。だが、それでも幻想郷は彼が今を生きることを願った。幻想郷の思いは、彼を打ち砕くほどに強かった。

その彼は、持っていた力の殆どを失い、今は博麗神社に住んでいる。しかしそれも良



かつたと同時に納得しているようだ。

……私は、どうなのだろうか。

お嬢様に仕えることは私のレゾンデールであり、誰にも代わることは出来ない私自身  
の存在証明である。

本当にそれで良いのだろうか。自分の中のダレカが囁く。

私は、どこまで行っても人間だ。お嬢様が私を拾ったとき、そう運命付けた。なればこそ、私は死ぬまでその運命に縛られるだけ。死ぬまで、お嬢様の剣となり盾となり鎧であり続ける人間だ。死ぬまで、お嬢様に仕え続ける人間だ。

本当にそれで良いのだろうか。自分の中のダレカが囁く。

なぜ、お嬢様は私を人間であり続ける運命に縛り付けたのか。なぜ、お嬢様は私を同じ吸血鬼として支配しないのか。なぜ……

なぜ、お嬢様は定められた別れを享受するのか。

お嬢様は吸血鬼。私は人間。そこに種族として決定的な違いが、種族として埋まり様の無い溝があつた。

私は、お嬢様が滅びる前に必ず死ぬ。

それが寿命か、あるいは怪我や病が原因か。それ自体はどうでも良い。

お嬢様と共に死ぬ事が出来ない。それだけで従者として失格なのではないか。

もし此の身が、お嬢様と同じ血が流れる吸血奴隷ならば、お嬢様が滅びると共に此の身も滅ぶというのに。

もし此の身が、魔を求め真理を解明する魔導師ならば、お嬢様と同じ時を生きる事が出来るというのに。

もし此の身が、世界の理を捨て自分だけの理を造り出す神ならば、お嬢様の望みをただ一身に受けるというのに。

なんて、ありもしないもしもに思いを馳せても、何も変わりはないというのに。

「(……どこかに出かけようかしら)」

自室だと言うのに、この部屋の中にいる時間より外にいる時間の方が遥かに長く、ただ睡眠をとる為の部屋としか認識していないのかこの部屋でじっとしているよりか何処か……そう、人里や博麗神社にでも出かけたほうが安らぐのではないだろうか。

瀟洒で完璧を誇るが、こうしてお嬢様が態々休みを伝えるくらいだ。何処か綻びが出来てしまったのだろうか。ならば少しでも早く完璧に戻る様に心をリセットする必要がある。

こうしてベッドの上でうずくまり続けるのも気が滅入る。ならばさっさと外に出る準備を

「あっ」

カランカランと銀のナイフが音を立てて床に落ちる。

ベッドから起き上がろうと動かし手が無意識に放り出していたナイフの柄に当たってしまったようだ。普段なら例え眠つていようともこんな些細なミスなんて起こさないのに……と自分が思つたよりも憔悴してゐるのではないかと心配した。

ナイフを床に放置したままにはしておけない。ひよいとベッドの上から顔を出す、ナイフは見当たらない。ベッドの下に転がり込んだのかなとそのままベッドの下を覗き込んだ。

「ハアイジジョージイ！」

「ぴいゆ」

\* \* \* \* \*

ベッドの下に発生した謎空間に引きずり込まれた十六夜咲夜は、気が付いたら人里の中にある甘味処『甘木』の一席に座っていた。

「……………うえ?」

ふと自分の身体に意識を向ければ普段なら絶対着ない様な、花柄の落ち着いた和服を身に纏っていた。頭に違和感を感じて、その両手で触って確認してみればそれこそ普段は絶対にしない様な、髪を後頭部で一纏めに括っているいわゆるポニーテールと呼ばれる髪型になっていた。と言うか髪伸びてるし……

あんまりにも唐突過ぎて現状の把握に精一杯だった十六夜咲夜は、前の席に腰を掛ける男に話しかけられるまでその存在に気が付かなかった。

「やあジョージィ!銀のナイフは見つかったかい!」

「貴方まだそのキャラ続ける気!」

思わず柄にもないツツコミを演じる羽目になった十六夜咲夜。太もものナイフホルダーから銀のナイフを投げつけようと手を伸ばした所で、ナイフホルダーごと武器の類が無いことに気が付いた。それどころか身体の何処を探しても武器も無ければ美鈴仕込みの気の一つも感じられない。その事実になんか……いやかなりの焦りを感じるが、そんな焦燥感もお構いなしに目の前の男は認識することの出来ない方法でナニカを突き

出した。その事に反応する間も無く十六夜咲夜は突き出されたナニカを喰らってしまつた。

「むぎゅっ!?!」

文字通り、喰らつてしまつた。

「あ、あうあいあないお!?! (危ないじゃないの)」

「食いながら喋るなよ行儀悪いなあ」

「(こ、コイツ……!)」

殺す……! そう決意した十六夜咲夜だつた。

まずは口内のダングゴと思わしき物体から始末して……

「(……美味しい)」

久しく食べていなかった和菓子のほんのりとした甘みが口の中に広がる。原料のもち米本来の味を引き出しつつも甘くてしよっぱい味付けはみたらしだらうか?

ただ静かに団子を味わつて、ゆつくりと飲み込めば絶妙なタイミングで差し出された熱い緑茶を啜る。その時には目の前の男に対する殺意は忘却の彼方へと消え去つていた。いや、それだけじゃない。今まで大切に思つていた物すら記憶の海に沈んでしまつた。

そして、その事に意識を向けることも出来ない。ただ今この時だけを認識することし

か出来ない事に違和感を持ってなくなっていた。

「美味いだろ? ココの団子は俺の記憶の中でも五指に入るほど上等モンだ。嫌な事も何もかもぶっ飛ばすじまう」

「……ええ、そのようね。それで、どうして私をこんな所まで連れ出したの?」

「連れ出したなんて人間き悪い事言うなよ、ただのデートのお誘いじゃねえか。ま、多少強引だったことは認めるがな」

「デート? ただの町娘の一人に過ぎない私と、アナタが?」

「嫌か? まあ、嫌ならしゃーねえさ、そのまま席を立つて外に出りゃいい。そうすればお前はまたいつも通りに戻るさ。支払いも気にすんな」

「……そう、ね」

彼の不思議な言い方にはもう慣れたものだ。だが、そんな掴み処の無い彼が何を思っ  
てか私をデートに誘うと言うのだ。何を企んでいるのか、と警戒する私がいる。同時  
に、彼と共にすごせる事を純粋に喜ぶ私がいる。矛盾する様でいて、その二人の私は結  
局同じ私に過ぎないのだ、と彼の眼は包み込むように語りかける。

彼の言葉に、私の返答は……

「当然、私を楽しませてくれるんでしょ?」

「勿論、忘れられない日にしてやるよ」

彼の手を握つて答えた。

◇

彼に手を引かれながら、人里を歩き回つた。

途中で雑貨屋に寄つてかんざしを試しに着けたり、鍛冶屋に寄つて犬をモチーフとした鉄細工の根付を買つて貰つたり、貸本屋に寄つて本を眺めたり、まるで普通の女の子の様に過ごした……なんて、元から普通の女の子だというのに。

太陽が赤く色づき始め、そろそろ帰らなければと思い始める。《何処に?》

「ねえ、今日は貴方の所に泊まつてもいいかしら?」

なんて、自分でもどうかと思う誘い文句だ。

「おいおい、未婚の女の子が言うセリフかそれ?」

「結婚してる子だったらもつと問題じゃない?」

「ははあ、違くない」

彼にとって、自分は正に子供なのだろう。だからこそ彼に、自分は乙女なのだを意識

してほしかった。彼を恋している一人の女性なのだ。

彼は『最後に寄る所がある』と言って、私をその両腕で抱きかかえた。

「ひやつ!?!ちよ、ちよつと!?!」

「暴れんなよ?」

それだけ言つて、彼と、彼の両腕に抱きかかえられた私は重力から解放された。

急に感じる、空に浮く感覚に身を竦め、強くまぶたを閉じた。空を飛ぶ感覚なんてこれそただの町娘でしか無かつた私にとって初めての感覚だった。《本当に?》

背中と脚に感じる彼の両腕の力強さと、半身に触れる彼の暖かさが無ければ今にも気を失つてしまふそうさ。目を閉じている間にも彼と私はぐんぐんと空高く昇っている。

「ほら、目え開けてみる」

「……っ」

「絶対落としやしねえから、な?」

彼のその言葉に、自分のその恐怖を何とか押し殺しまぶたを開ける。するとそこには、緋色に染まる幻想郷が見えた。

「わあ……」

重力に縛られる事の無い者だけが見る事の出来る景色。沈んでいく太陽は、消えるその時まで大地を照らし世界を光で満たす。その光景は、正に幻想の者にしか見る事が出



来ない夢幻のモノだった。

一秒一秒、時を刻むごとに色は、世界は変わってゆく。《まるで時計が時を刻むように。》

空を見上げればいつも以上に雲が近く、星も月も手が届くように近かった。だが、それは同時に妖の時間が近い事を意味していた。《その時こそが私の生きる時。》

太陽はもうじきその身全てを燃やし尽くし、大地に隠れるだろう。しかし何時かまた太陽は大地から現れ、世界全てを光で満たすのだ。人間は穏やかに眠りその時を待つのだ。《闇こそ私が生きる場所。》

日が沈むか沈まないか。そんな曖昧な時に彼との遊覧飛行は終わりを迎えた。場所は博麗神社。妖怪神社として名高く、同時に彼が神として居付く今最も参拝客の多い神社だ。参拝客が多いと言えども、今の時間は流星に誰も居ないようだ。境内のど真ん中に彼と、彼に抱きかかえられた私は降りる。

「どうだ、忘れられない日だっただろ？」

「ええ、悔しいけどアナタの言った通りだわ。私は今日一日を忘れられないでしょう」彼の力強い腕の感覚と暖かな体温が名残惜しいけど、それもここまで。私は再び両足で地面に立つ。

「それで、どうする？ 今日泊まってくか？」

彼はニヤニヤと意地の悪い子供の様な笑顔を浮かべる。解かっている、彼は私の返答を。

「……ごめんなさい。私には帰る家があるの」

そう言つて、私はおもむろに着ていた和服を脱ぎ捨てた。一糸まとわぬ姿に彼も動揺……すらないか。流石に女として少し……否、かなり腹立たしいが今はいい。何処からともなく現れたいつも通りのメイド服を着て、ナイフホルダーを左太腿に装着する。

「ほらよ、落としたナイフだ」

「あら、ありがとう」

太陽は沈み、空には紅い月が光を放つ。例え雲が世界を覆い隠そうとも、雲の上に存在している月はそれでも輝き続けるだろう。

太陽の当たる世界は私にとって眩しすぎる。何故なら私は夜の従者なのだから。

「お前が休みたいならいつでも歓迎しよう。それこそ、月が昇つてもな」

「ありがとう、でもお生憎ね。こんな事はもうこれつきりよ」

「そりや残念」

美人とデート出来て楽しかったんだがな、とそう言つた彼の言葉は夜の闇に溶けていった。

迷い、惑い、違った道はされど、私に改めて本道を見せた。ならば今度は私の道を進

むだけ。もう、迷わない。

結局、私はただ不安だったのだ。

お嬢様に愛されているかどうか。

お嬢様を愛しているかどうか。

だから別の生き様が無かったか、なんて未練が出来たのだ。

私は死ぬその時まで、お嬢様の剣となり盾となり鎧であり続ける人間だ。死ぬその時まで、お嬢様に仕え続ける人間だ。

紅い月輝く夜闇でしか生きられない人間だ。何故なら、そこにお嬢様が居るのだから。

もう、日の当たる世界を羨むことは無い。私には、月があるのだから。

いつか死ぬ未来は、その時が訪れるまで私に輝き続ける事が出来ると言っている。

いつか訪れる未来は、その時を笑顔で迎え入れられると信じている。

別れは寂しいですが、貴女がそう定めたのだから許してください……なんてね。

「もう行くのか？」

「ええ。お嬢様がきつと待ってるわ」

とん、と地面を蹴り出し宙に浮く。それだけで重力と共に私の未練から解放された。

空へ飛ぶ。眼下には闇に包まれた世界が広がっている。

空へ飛ぶ。天には妖しく輝く満月がある。  
空へ飛ぶ。カチカチと時を刻む銀時計の音だけが聞こえる。

紅く光る満月に手を伸ばす。そして……

\* \* \* \* \*

ゴォーン、ゴォーン。と響き渡る時計塔の鐘の音で起きる。そこは、眠る為だけに使っている自室のベッドの上だった。

いつの間に寝ていたのかしら……と起き上がる。時計を見れば、既に深夜。吸血鬼としてなら既に活動を始めるべき時間ではあるのだが、最近のお嬢様は早寝早起きと言って昼に活動している。故にこの時間は私もただ寝ている時間なのだが……。

突然、部屋の扉がノックされる。それも、コンコンといった音では無く、ドンドンと部屋の主を叩き起こす様な音で。

「メイド長ー! 助けてくださいー!! このままじゃ変な奴等に紅魔館が乗っ取られちゃ

うー!!」

声の主は妖精メイドの中でも使える方の一匹だった。本来なら彼女たちもこの時間は眠ってる筈だが、そこは余り重要じゃあないだろう。重要なのはその発言の内容だ。

その言葉を聞き、頭の中にあるスイッチを切りかえる。さあ、お仕事の時間だ。銀時計を取り、能力を発動させる。

カチリ。世界の時が止まる。私だけの世界。

この世界で動ける物は私以外には常に同じ時を刻む、特製の銀時計だけ……だったはずだが、平然と時間の止まった世界を動き回るバケモノを思い出す。

クローゼットからメイド服を取り出し、着ていたパジャマから着替える。その際に懐からこぼれ落ちた犬のモチーフの根付を手取る。

私は、その根付を鍵付きキャビネットの奥にしまいこんだ。

自室の扉を開け、扉を叩いている姿勢のまま止まっている妖精メイドの脇を抜けてお嬢様の下へ向かう。メイドの勘が、お嬢様が何処に居るかを知らせている。

月睨の間。紅霧異変と呼ばれた異変にてお嬢様が博麗の巫女を迎え撃った場所。止まった世界でそこに向かう。

重厚な扉を開ければ、其処には……

「よう、さつきぶりだな」

「……何やってるのよ貴方」

止まった世界の中でも平然と動くバケモノ、もとい『剥零神』花の王が紅魔館の支配者が座る筈の椅子に堂々と足を組み腰かけていた、

……お嬢様を踏みつけて。

「いや本当に何やってるのよ貴方」

挨拶代わりに銀のナイフを投げつける。光の速さを持ってナイフは花の王に刺さるかと思いきや、ナイフの鍔を指先で受け止めてそのまま指の力だけで投げ返した。

ナイフは私の心臓に向かって飛んできたが、これを二本目のナイフで撃ち落とす。

やはり私一人では花の王の相手は荷が勝ちすぎる。

私の気を知ってか知らずか、花の王は優雅にカップの紅茶を飲む。傍らにはメイド服を着た妖精が三匹。いずれも紅魔館のメイド妖精では無い。

「何しに来たの?」

「勧誘」

カチャリ、とソーサーにカップを置く。その仕草一つ一つが今まで見た誰よりも洗練された美しさを魅せる。

「俺はお前が欲しい」

その言葉は、まるで悪魔の囁きの様で。

「お前のその美しい技術が欲しい」

その言葉は、まるで魅了チャームの魔法の様で。

「お前のその気高き魂が欲しい」

その言葉は、まるで禁忌に誘惑する様で。

「俺の支配下に入れ」

花の王と私との間にはかなりの距離があると言うのに、まるで耳元で囁かれたかのようひびくに私の脳を痺れさせる。

跪ひざまずきたくなる。全てを捧げたくなる。

だが、私の主はただ一人だけだ。

返事は大量のナイフで答える。

私が首を垂れるその先は常に一人だけだ。

投げたナイフと共に止まった世界を駆ける。

忠誠を誓う相手は後にも先にもただ一人だけだ。

花の王に肉薄し、両腕をしならせてナイフを振るう。

「つれねえなあ、おい」

指を打ち鳴らす。それだけで投げた銀のナイフが、振るった銀のナイフが、

全て舞い散る花卉に変わった。

同時に世界の時が動き出す。

カチリ。

「しゃくやー!しゃくやあ〜!助けてええ〜!!」

「見てみるよ、こんな情けなく泣き叫ぶ主にまだ仕えたいってのか?」

「例え情けなく泣き叫ぼうとも、みつともなく小便をまき散らそうとも私の使える主は

レミリア・スカーレット様ただ一人よ」

「ほんとに小便撒き散らしても仕えるのか?」

「しゃくやあああ〜!」

「……………ええ」

「凄い葛藤してない?大丈夫?」



「しやくやああああ!!」

「大丈夫ですわお嬢様。例えお嬢様がクソザコ吸血鬼でも、未だにおねしよ瘵が治らなくても、私はこの身朽ちるまでずっとお嬢様の傍に居りますから」

「しやくやあ!!別におねしよしてる訳じゃないからね!!」

「嘘だろお前、500歳でおねしよとか引くわ……」

「してねえってんだろ!!いい加減にしなさい!!」

「花の王、誤解をしないでください。お嬢様はただ紅茶を飲み過ぎた次の朝、シーツに世界地図を描くだけですわ」

「だからしてねえってんだろ!!」

「……」スツ……

「おおおい!!そつと離れないで!!カーペットに靴擦りつけないで!!周りの妖精メイドも一歩離れないで!!冤罪!冤罪よお!!」

「ん……えつと……レミリア様、いつか治るよ!」

「意味深に前向きな言葉を掛けるな!」

「レミリア嬢、寝る前に塩を一舐めすると良いらしい」

「要らんアドバイスするな!」

「今度メイドにばれないシーツの洗い方をお教えいたしますわ」

「……後でこつそり教えて」

「お前それでいいのか」

「うるさいー!」

ぎやあぎやあとお嬢様が騒ぐ。普段では想像つかない程の痴態を……いや、よく考えたら花の王が関われば割と日常の光景の様な気がする。

だからと言う訳ではないが、そんなお嬢様だからこそ愛おしく、仕えたいと心から思うのだろう。

それは陳腐な運命だと称されるかもしれない。

だが、それは私にとって、何よりも大切な運命なのだ。

私は私に殉じる。私の思うがままに、お嬢様にお仕えする。この身朽ちるまで。

「……まあ、このおねしょ吸血鬼に愛想が尽きたらウチに來な。お前なら大歓迎してやるよ」

「おねしょしてないってば!!」

「お言葉ですが、お嬢様が何度おねしょしても、私はこの身体が動く限りお嬢様の衣服とシーツを洗うつもりですわ」

「ねえ咲夜、私してないよ? 咲夜がウチに來てからは一度もしてないもん!」

優しい目。

「止めろおおおお！私をそんな目で見つめるなあああ!!!」

「……しよーがねえ、今回は諦めてやるよ。おい、帰るぞ」

「お供します、どこまでも」

「それでは失礼いたします」

「またいつか会いましょう」

空間が裂け、奥から光が零れ出る。どうやら直接世界樹に繋いだようだ。

花の王が裂けた空間をくぐり抜け、後に続いて三匹の妖精メイドが続いていく。

「咲夜あ！塩撒きなさい塩！」

「むしろ私達が撒かれる側では……？」

裂けた空間が閉じていき、零れ出る光もまた比例して小さくなっていく。

空間が完全に閉じる、その直前。

カチリ。

え、と思考が止まる。世界も止まる。私は能力を使ってないのに……そう、思考した直後。

「お前が死んだ後、<sup>なかみ</sup>魂は俺が貰う」

耳元でそう、囁かれる。

振り返ろうにも身体はまるで時間が止まったかの様に動かない。否、肉体の時間が止まっているのだ。

「お前はその身が朽ちるまでレミリアに仕えるといい。肉体はそいつにやるよ」  
脳が痺れる。何も考えられなくなる。

「俺はもう二度と、諦める事はしない。欲しいと思ったモノは必ず手に入れる」  
魂から何かがあふれだす。抵抗すら許されない。

「だから早く死んでくれ。十六夜咲夜」

あふれ出す何かの名前を私は想起しない。してはいけない。

ソレをしてしまうのは、お嬢様に対する背信行為に他ならないから。

「俺は待っている。それこそ、永遠にな」

カチリ。

身体が動き出すと同時に振り向く。そこには誰も居ない。裂けた空間が元通りに戻った。

「は、はは……」

「咲夜?」

へにやり、と。腰から地面に崩れ落ちる。完全に瀟洒な従者の姿は何処にもなかった。ただ年相応の少女が其処に居た。

ふ、と。掌に違和感を持ち、確認する。

「あ……」

「……何コレ。犬?」

鍵付きキャビネットの奥にしまいこんだ筈の犬のモチーフの鉄細工がそこに在った。

「は、は……」

「咲夜? 咲夜?!」

ガチガチと歯が震える。この震えはきつと恐怖だ、そうに違いない。

花の王という余りにも強大すぎる存在に目をつげられたから、身体の震えが止まらないのだ。怖くて、怖くて堪らないから震えが止まらないのだ。そうに違いない。そうであってほしい。

「あは、あはは……」

「咲夜ー!? 咲夜が壊れちゃった!?! ちよ、パチエー!! めーりん!! フーラソン!! 誰かあああゝ!!?」

私は、私は死ぬその時までお嬢様の剣となり盾となり鎧であり続ける人間だ。死ぬその時まで、お嬢様に仕え続ける人間だ。

……死んだ後は?

人間である限り、否、人間でなくとも。必ず何時かは訪れるその時の更に先。決して逃れられない運命がそこにあった。

……そこに、出来てしまった。

ほろりほろりと涙が出てくる。魂の奥底から溢れだす何かがそのまま瞳から出てしまう様に。

身体は未だに震え続ける。両手を合わせ、祈る様に額につける。それでも、決して犬の根付だけは離さなかった。

幻想郷に住むのなら

一度はおいで博麗神社。

嘗ては誰も居ないけど

今は花の王が住む。

どんな願いも聞き届け

どんな望みも叶えよう。  
貴方が真摯に祈るなら  
偉大な神は応えよう。  
貴方が誰かを思うなら  
偉大な神は応えよう。  
花を愛する者ならば  
愛を持って応えよう。  
幻想郷で一番の  
偉大な神さ花の王。

# もう歌しかうたえない

♪ ♪

鼻歌を歌いながら八目鰻を焼くミスティア。いつになく上機嫌なのは自分の対面席に座る存在のせいだ。

「花の王と二人きり♪」

「そんなに喜ぶことか」

「もちろん♪」

ミスティアにとって花の王は親代わりである。彼女が夜雀として生まれたとき、彼女は彼女の傍に居た。偶々といつてしまえばそれまでだが、彼は彼女を育てる気まぐれを起こしたのだ。

しかし当時の彼は常に何処かを彷徨き、特定の住み処を持たない暮らしをしていた。ミスティアが妖怪として一人前になるまではその終わりなき旅を共にしていたが、妖怪として一人前になった時にあっさり別れを告げ、何処かへ行ってしまったのだ。

もちろん、ミスティアは花の王に追い縋った。だがそれでも花の王はミスティアを置いて消えてしまったのだ。



「来る日も来る日も貴方を追いかけ、幻想郷に流れ着いた。そこで漸く貴方に会えて、私  
がどんな気持ちだったか解ってるの〜?」

「生憎俺は手を伸ばしても届かなかった気持ちは理解してるが、伸ばしても届かなかつ  
た手を掴まれる気持ちは解らん」

「でしようね〜。貴方はそんな人だもの〜。この前の異変の顛末だつて〜そんな貴方だ  
から〜そあんな結果になったのよ〜」

「俺の毛先ほども生きてない妖怪が言いおるわ」

「あら、貴方の娘歴は貴方より長いわよ〜?」

「つまりそれは分身と性転換を同時にやれつて挑発か?」

「何でそうなるのよ……」

「分身はともかく性転換はタグにTSが付いてないから無理だな」

「言ってる意味が解らないわ〜♪」

「コトツ、と熱燭を出すミスティア。ふわふわと漂う花酒の香りはどんな上質な日本酒  
でも出せない、気品のある香り。」

「はい、まずは一献傾けましょう」

「おう」

トトトト……と優しく杯に注ぎ入れる。

「変わり行く世界に」

「変わらぬ父娘の絆に」

「乾杯」

\* \* \* \* \*

昔々、今で言う四国辺りの何処かの山奥で花の王はいつものように花を咲かせ回っていた。

当時のどの言語にも当てはまらない奇怪な歌を、その美声に乗せて歌いながら道なき道を花の道に変えて行く。

チツ、チツ、チツ。

何処からともなく、鳥の鳴き声のようなものが聴こえてくる。同時に、花の王の視界にはただでさえ薄暗い山奥が、更に暗くなっていく。

夜雀の仕業か。そう思った。

永く旅を続けていると時偶、この様に力の差も解らない妖怪や人間、木つ端神に襲わ

れる事がある。そのたびに襲撃者をぶちのめし、その頭部に花を咲かせていた花の王。今回もそうなるか、と思えば花の王はとある呪文を口にした。

チツチツチと鳴く鳥は、シナギの棒が恋しいか、恋しくばパンと一撃ち

夜雀の伝承が残る地域では有名な呪文であろう。夜雀を追い払う呪文だ。地域によつて多少の差異はあれど、効果は同じ。

世界中あちこち旅する花の王も、当然この呪文は知っていた。

知つてはいたのだが……忘れていた。

だから花の王が口にする呪文はそれではなかった。

「……焼き鳥」

チピッ!?

「……唐揚げ、つくね、鍋もいいな」

ピッ、チチッ!?

「炊き込み……鳥刺し……なあ」

どう喰われない?

「びよ〜!!」

バササササ!!

空へ逃げる名も無い夜雀だが、花の王の前には如何なる鳥妖も哀れな弱者チケンでしかない。

とん、と一足で宙を舞い、稲光のごとき速さで夜雀を撃ち落とす。

その衝撃で全ての羽をもがれた夜雀はもはや逃げることも戦うことも出来ず、自分が死ぬそのときまで絶対的な捕食者に届かぬ歌声を歌い続けるだけ。

まな板の上の鯉、串に刺さったうなぎ、鍋の中のつくね。せめて美味しく頂かれるように祈りと願いをその断末魔に乗せた。



「またやつちまつたんだぜ」

今で言う四国辺りの何処かの山奥。否、現状を見る限りもはやそこは山奥等と呼べない、不自然に広がった荒れ地のど真ん中に花の王は立っていた。

花の王はつい先程起きた現象を振り返る。

「確か、焼き鳥食うために火をおこしたのは覚えてるんだよ」

花の王が言う通り、夜雀を仕留めた花の王は焼いて食おうと、魔法で焚き火を作り、インスタントキャンプファイアーしようとした。インスタントキャンプファイアーってなんだよ。

「そこに夜雀の死骸突っ込んで……」

既に羽は全て取られているから、一見間違えはないかのように思えるがこの男、内蔵の処理など一切していない。焼いて食べる分ライオンよりかマシ程度であろう。

「火力調節に太陽熱を使ったんだよな」

はいそこも可笑しい。

現代にはソーラークッカーと呼ばれる、太陽光を一点に集めて調理する、火の使わないう熱調理器具がある。だがこの男、太陽光ではなく太陽そのものを召喚したのだ。阿呆である。

その上、よりにもよって太陽の中心核の一部を召喚した物だから花の王の周囲一帯は中心核による放射熱1500万℃と、超質量による重力波の影響により辺り一帯は焦土と化した。むしろよく焦土で済んだものだと感心する。普通一帯焦土どころか世界全土が消滅する。当然夜雀の死骸は焼失した。仕留めた獲物を食べることが出来る分ライオンの方がマシだった。

花の王が「あつ、やべ」と太陽の中心核を咄嗟に握りつぶしたお陰でこの程度の被害で済んだといえよう。そもその原因が花の王にある事はこの際気にしてはいけない。辺り一帯が焦土と化し中心部は融解した地がガラス状に変質していたが、花の王が大地に活を入れ、不毛の大地に再度命を戻したのだ。あと2〜3日すればこれも元通りになるだろう。

……その後約一週間ほどで魔境と呼ばれる地にまで成長するとは誰も思わなかった。その荒れ地の中心部にあつた焚き火に突つ込まれた夜雀の死骸は極熱に融けて既に影も形も無いが、花の王が大地に入れた活の影響を受けて輪廻転生を果たした。地獄の裁判官も真つ青の速さである。

ち、ちつ……ちん……ち……ち……

生まれたばかりで未だ鳴き方も知らない小さな、小さな雛鳥。それでも本能が生きる事を求めてその声を上げる。小さな、小さなその声は、大地の生命力に押され育つ草花が未だに残る焦熱に炙られて発せられる靄に隠されても、確かに花の王に届いた。

その声に気が付いた花の王は、音の発生源に近づく。

ち、ちん……ち、ち……

焦熱に焼かれても喉を震わせ生を求めその歌声に惹かれた花の王は、そつと両手でその雛鳥を救い上げた。

「お前の名は……ミステリアだ」

花の王は、焦熱に焼かれ靄煙る世界の中で生まれた雛に名前を付けた。それが花の王と、後にミステリア・F・ローレイと呼ばれる彼女との出会いだった。

それから、花の王はミステリアを連れて世界中を旅した。彼の歌声を揺り籠にしたミステリアは妖怪としてすくすく成長し、あつという間に人化することが出来た。そんな彼女が人化して初めて覚えたことはチツチツと鳴く以外の歌声……では無く、料理だった。

「漸く自分で食べたいものが食べられるわ!」

「そんなに俺の料理は不満か?」

「それせめて料理完遂出来るようになってから言ってくれないかしら!」

花の王が火を起こせば、嘗ての焦土化の再現が行われ。

花の王が包丁を振るえば、地層ごと食材を斬り飛ばし。

花の王が水と小麦粉を捏ねれば、原子レベルで融合を果たし。

花の王が料理に関して出来る事はただ皿の上に調理済みの食材を盛り付けるだけだった。無論美しく盛る事に関しては彼の右に出る者は居ないが。

「とにかく貴方はもう料理をしようなんて考えないで頂戴……命がいくつあっても足り

ないわ……」

「そんなお前人をメシマズ嫁みたいな言い方しやがって」

『『食べられる』』という点では貴方よりマシでしょうね」

「ちよつとミスつただけだろお前心狭いな。もつとゆとりを持ってほら」

「ちよつとミスつただけで何度も死にかけてたんですけど？」

「俺死なないどころか怪我一つ無いし」

「ちくしょう殺したい」

ざく、ざく、と手に持った包丁で野菜を手際よくきざみ、ちらりと横目で火にかけた鍋の様子を見る。その手際の良さは主婦歴数十年と言ったところ。

「誰が新妻よ失礼しちゃうわ！」

「誰もんな事言つてねえな」

「で、でも花の王のお嫁さんなら別になつても……いいんだからねっ！」

「ツンデレつてめんどいよね」

「待つて凄いい傷つく」

鍋に切った野菜を投入し一煮立ち。くつくつと中が煮えた鍋に更に具材を投入する。

「やっぱ冬のこの時期は鍋に限るな」

「……だからつてどうしてこんな山の上で鍋なのかしら。と言うかこの魚、どこから



持って来たのよ」

「寒ブリだな。そりやちよつとそこまで」

「……この脚がいつぱいあるのは？」

「蟹だな。見た事無いのか？」

「貴方はずつとついてきたけど見たことないわよ」

ちなみに今花の王とミスティアが居る場所は標高8611メートル、後にK2と名付けられる山の頂上に居た。聡明な方ならお分かりいただけるだろうが、ちよつとそこまで行く距離にブリや蟹が棲息するような海は無い。

そもそも現在でも冬季に登頂が達成されていない山である。そんな場所には当然人が居る筈もなく、人の畏れを受けて生きる妖怪も居る筈も無かった。そんな場所でミスティアは若干ひもじい思いをしているというのに呑気に鍋をつつき始める花の王。馬鹿かな？

「ん、美味美味。絶好の景色だし何もいう事無しだわな」

花の王の言う通り、真冬の山頂はどこまでも見通せるかの様に空気が澄んでいて、空中に漂う塵一つとしてそこに存在しない。何者にも邪魔されない絶景を見る事が出来る。

雲を見下ろす高さから、目に見える山々の岩肌と降り積もった雪の白とのコントラストにただ圧倒される。カンバスに描かれた2色にどこまでも澄み渡る空の青が加わっ

て、さらに見上げれば煌々と輝く太陽がその手に掴めそうなほどに近くて。それでも届かない空に自分のちっぽけさを思い知って。

「……ミステリア、食わないのか？」

「……あ」

既に鍋の中身が三分の一は減っている。見たことの無い食材が入っているとはいえ、自分の手で作った美味しそうな料理を食べることが出来ないなんて馬鹿げている。ましてや待ち望んだ魚料理だ。態々花の王が「絶対美味しいヤツ持って来た」と言うくらいなのだ。

鍋の前に座り込んで中身をつつき始めた。

今までミステリアは、花の王の背中から覗ける景色しか知らなかった。いくら花の王が世界中を旅するとしても、それは余りにも狭い世界だった。

だが何処までも透き通る青い空は、自身の知る世界より遥かに広く続いていた。どこまでも、どこまでも。空を飛ぶ鳥は、空の広さを漸く知ったのだ。

鍋の中身も無くなり、ゆったりとした雰囲気の中刻々と変わっていく世界を眺める。カンバスに塗られた青は次第に朱く染まり、紫を連れてきた。

「……もう、夜になるのね」

「そうだな」

花の王は何処から取り出したのか、『夢弦の笛』と呼ばれるハーブの様な弦楽器でもあり、トランペットの様な吹奏楽器でもある自作の楽器を手に持っていた。

あの楽器は音を鳴らすだけでも難しいが、それだけに複雑な音色を出す事が出来るのだと言う。ミステリアは一度試しに吹いてみたが、どうしたらあんな綺麗な音になるのかが全く理解出来なかった。砂漠を渡る、キャラバンと呼ばれる人間の一人の中に居た自称音楽の天才が「コレを吹きこなすのに1000年、引きこなすのに1000年、両方を同時にこなすのに1000年は必要だ」と言う程。よく分からないがとにかく難しい事だけは分かった。

他にも花の王は『打国の弓』と呼ばれる打楽器と弦楽器を融合したような物や『万雷の音』と呼ばれる何だかよくわからない楽器と全く理解出来ない楽器を融合した物とか色々持っているようだ。

花の王は夢弦の笛を手に持ち、ミステリアに視線を送る。ただそれだけで理解し合える。

ミステリアは自身の喉を震わせて、花の王は手に持つ夢弦の笛をかき鳴らして。

どこまでも続いていく世界に美しい音色を刻み込む。

その音色は山を超え、空を超え、世界を超えて、月の向こうにまで届いていた。

地上の何処かで誰かが言った。『天使の歌声が聞こえる』と。

地底の何処かで誰かが言った。『天上の音楽が聞こえる』と。

月面の何処かで誰かが言った。『穢れ無き神々の合奏だ』と。

世界の何処かで誰もが讚えた。『最も美しき王の音色だ』と。

空飛ぶ鳥は空の広さを知り、王の力を借りて囀る声を響かせた。

鳥として生まれ育った誰しもが羨むだろう偉業。快挙。

空にその声を届かせた彼女こそ、全ての鳥の王に君臨したのだ。

だが、始まりがあれば終わりがあるのは必然。

世界中を巻き込んだ二人だけの演奏会はフィナーレを終えたのだ。

演奏終わりの余韻も無くなった頃。朱が連れてきた紫は既に消え、既に月と星々が輝

いていた。

嘗てカンバスに描かれた2色も、もう元の色すら分からない。

夜は妖の時間だというのに、ミスティアの胸の中にあるこの不安は何だというのか。

そんなミスティアの不安を知ってか知らずか、すつと立ち上がった花の王はミスティア

アに「じゃあな」と言つて空に飛び立った。

え？と思つた時には既に花の王は手の届かない位置まで飛んでいた。

「ま、待つて！」

ミスティアは花の王を追いかけ空に飛びあがる。だがここは標高8611メートル。

如何に妖怪とはいえ、上昇気流も無く自力で飛ぶにしても限度があった。

それでもミステリアは花の王に追い縋る。既に高度は10キロメートルを超えた。自身を縛る重力が、妖怪としての概念が鬱陶しく感じる。

「置いてかないで!!」

妖怪としての本能がこれ以上人間が居る場所から離れるなど叫ぶ。重力がそれ以上行くことは許さないと自分の脚を掴む。

知った事か。空に、其処に貴方が居るのだから。だからこの身よ。もつと高く、もつと高く飛翔とんでくれ。

高度20キロメートルに届こうかという時。彼女の鼻に入り込んでくる生臭いような刺激臭。オゾンだ。

一呼吸ごとに肺に入り込み、身体を内側から腐らせていく。

一呼吸ごとに血ヘッドを吐き、自身の羽根をもがれていく。

それでも、花の王に追いつけない。

「二人にしないで!!!」

高度30キロメートル。既に身体はボロボロと朽ち始めている。妖怪としての限界を既に超えていた。

それでもミステリアは飛ぶ。

その手を伸ばす。

しかし届かない。もう、届かない。

彼女の腕は、この空にとって余りにも短すぎた。

彼女の身体は、この空にとって余りにも小さすぎた。

この世界は、彼女にとって余りにも広すぎた。

この世界は、彼女にとって余りにも高すぎた。

「■■■■ツツ〜!!」

喉はオゾンによって壊されても、それでも彼女は歌った。

音にならない歌声をあげた。

空の一部に成れども、宙にはその声は届かなかった。

井の中の蛙大海を知らず、されど空の青さを知った。

空飛ぶ鳥は空の広さを知り、それでも宙に届かぬ歌声を響かせた。

歌声が枯れ、重力に抗う力も無くなり、視界が無念に滲む。それでも彼女は最後まで

彼を見続けた。

彼は、最後まで振り返らずにこの星から居なくなつた。

風に吹き飛ばされ、大地に叩きつけられた彼女は気が付けば見知らぬ地に一人であった。

花の王と共に世界中を旅したが、こんな場所は初めてだった。それも当然だ。世界中旅したと言つても世界中を一切の漏れ無く移動したわけではないのだから。

彼女はその地にあつた、見晴らしの良い岩山に佇み、その歌声を披露した。動くのも億劫な程に身体の内側から腐りかけ、外側はぐしゃぐしゃに壊れている。

彼女は異国の地にて歌を歌い続けた。

歌い続けて、どれだけ経つただろうか。

ぐしゃぐしゃだった身体は完全にくつついて元通り。

身体の内側も前より丈夫になつたくらいだ。

妖怪としての畏れも、この岩山で歌い続けてからどんどん受け続けて妖怪としての格がさらに上がっている。

そしてその所為か、昼間は鳥達の王として君臨しているが、夜は羽虫の王としても君臨している。

今日もまた、歌声に惑わされた人間が岩山の下にある流れの速い川の渦に飲み込まれ

ていった。

……それでも、この歌声は本当に届いてほしい人には届かない。

時が流れ、岩山に住む怪異を祓うため編成された討伐隊を撃退した時、人間は彼女の事を『ローレライ』と呼び、更に畏れられた。

そうして彼女は『ミスティア・ローレライ』となった。

……さらに時は流れ、ローレライを討伐するためにキリスト教の騎士団の一隊が派遣され、命からがら逃げだしても彼女は歌い続けた。

喉に矢を射られても、歌うことは止めなかった。この歌はけして消えないから。羽をもがれても、歌うことは止めなかった。歌声だけでも空に届かせるから。

歌えなくなってしまうたら、私じやなくなってしまうなら、その時は……

……そして更に時は流れ、海を超えた彼女は立つ事すらままならなくなっても、歌声を空に響かせ続けた。

もう此処が何処だかも分からない。あれからどれ程の月日が巡り巡ったのかも分からない。

半ばから斬られ、根本から折れた翼は彼女がもう飛べない事を示していた。

深く裂かれ、ヒューヒューと音が漏れる喉は彼女がもう歌えない事を示していた。

地に這いつくばり、このまま朽ちてしまうのなら……力尽きる寸前の行動は、最期に



再びあの空を睨もうとうつ伏せから仰向けに転がる事だった。

どこまでも高く、遠い空を睨む。満月が憎々しげに嗤う。星々が苛々と瞬く。

こんな最期も悪くないな、だなんて……

思うはずが無いだろうが。

「■■■■ツ——!!!」

この歌は未だ宙に届いてはいない。

この身は未だ宙に届いてはいない。

ならば生きなければいけない。

ならば歌叫ぶうだけだ。

これが最期だと言うのなら。この身に残る全てをこの歌に乗せよう。

これが最期だというのなら。この身に残る全てをこの声に乗せよう。

歌え。

響け。

届け。

あの空へ。

歌え。

響け。

届け。

あの宙へ。

「■■■■ツツツ——!!!」

空が暗くなる。いや、自分の視界が昏くなっていく。何時かのように、自分の魂が、重  
力に引つ張られるように身体から抜け出るような感覚。

何も見えない。

まるで夜盲症。

私の歌声は空に届いたかな。

私の歌声は宙に届いたかな。

私の歌声は……

あなたに届いたかな。

「ああ。しつかりとな」

ふ、と……気が付けば身体全体を貫く痛みは消え失せていた。

斬り落とされた翼も、根元から折れ曲がった翼も、元通り。

深く裂けた喉も、また美声を響かせる事が出来るように戻っている。

滲んだ視界いつぱいに、きらきらと輝くエメラルドの様な美しい緑髪と引き込まれそうなルビーの様な瞳が見える。

これは、今際の夢だろうか。否、現実だ。間違はなく、現実。

彼の両腕に抱きかかえられ、惜しみなく生命力を注ぎ込まれて全身が目覚める。



「獅子舞？」

「死ねえあああああ!!!」

「おつとあぶねえ」

ヴァアアアツ!!と怒りに任せて暴れるミスティア。

弾幕を放ちながらその鋭い爪で花の王を切り裂かんと攻撃するが、花の王は上体を一切動かすことなく、足さばきだけで弾幕とミスティアの肉弾戦を回避しきる。

花の王が背負っている赤子もキヤイキヤイと喜んでいる。

花の王は更に、何処からともなく取り出したがらを両手に持つて情熱的に踊り出す。

「さあ、情熱のリズムに踊るがいいー！」

「あーぶつ!!」

「馬鹿にしているのかしら!?!」

そこからは更にアクロバティックに動き出す花の王。時にくるくると、時にひらひらと、風に舞う花弁のように踊り続ける。

ミスティアが苛烈な弾幕で攻めれば、花の王はステップを踏んで華麗に避ける。

ミスティアが果敢に爪で切り裂こうとすれば、花の王は持つてながら受けて止め、受け流す。まるで二人でタンゴを踊るが如く。

いつの間にか地面は柔らかい土ではなく、鉄板のような強度の結界が敷かれていた。二人の靴が結界に当たれば、カツ、コツ、と音をたてる。弾幕が結界に当たれば、まるで弦楽器を打ち鳴らすかのような音が出る。

「……嘘でしょ?」

ミスティアの問いかけに、獰猛な笑顔で返す花の王。

直後、一切の比喩無しに弾幕の雨が降り注いだ。

「情熱を奏でる旋律に踊り狂え!!」

「うだー!!」

子供って残酷だ。ミスティアはそう思いながら幻想郷の洗礼を受けた。

ピチューン

\* \* \* \* \*

ああ、懐かしい。何度も歌い、幾度と歌い続け、いつまでも歌って漸く、あの空の彼

方に届いたかつての記憶。

今日のこの空も、かつての記憶の中の空と同じように澄みわたり、何処までも、何処までも高く遠く広がっていた。

そつ、と。花酒を煽る花の王に目配せをする。

花の王はその視線に気がつき、何処からともなく夢弦の笛を取り出した。

あの日、あの時のように。違う点は此処が音が響き渡る山頂ではないことと、ミスティアから合図を送ったこと。しかしそれも些細な違いだ。

再び、ここに全世界を巻き込む二人だけの音楽会が開催した。

ミスティアは自身の喉を震わせて、花の王は手に持つ夢弦の笛をかき鳴らして。

どこまでも続いていく世界に美しい音色を刻み込む。

その音色は山を超え、空を超え、世界を超えて、月の向こうにまで届いていた。

地上の何処かで誰かが言った。『天使の歌声が聞こえる』と。

地底の何処かで誰かが言った。『天上の音楽が聞こえる』と。

月面の何処かで誰かが言った。『穢れ無き神々の合奏だ』と。

世界の何処かで誰もが讚えた。『最も美しき王の音色だ』と。

「ねえ、花の王」

「なんだ？」

「私の名前、ミスティア・F・ローレイのFってなあに？」

「決まってるだろ」

「宇宙の果てまで届くテメエの歌声の強さに『フォルティッシモ』の名をやったんだよ」

「始まりがあれば終わりはあるのは必然。しかしかつてと違うのは、彼女の歌声はもう、一人でも空の向こうに届く事。」

演奏会が終わっても、二人は向かい合わせで呑み続けた。



みんなー！花の王式クリスマス、はじまるよー！

「メリークリスマス!!」

手に持っているパイを霊夢の顔面にシユウウウ!!

超エキサイティン!!

『花の王 殺す方法』

「その願いは私の力を超えている」

「朝からテンション高いなお前ら」

特に前触れも無くパイを魔理沙の顔面にシユウウウ!!

「あつぶねっ!?!」

生意気にも避けやがりますので『避けた』という事実をねじ曲げる。

世界線は収束したっ！

『花の王 消す方法』

「その願いは私の力を超えている」

「役に立たない神ね」

「ははっ、新参の巫女に役目全部持ってかれたヤツがなんか言ってる」

「お陰ですつとのんびり出来るから別に構わないわ」

さて、あまりにも突然に始まったクリスマスパーティー（参加者三名）に驚きを隠せない者も居るだろう。だが何のことはない。花の王のいつもの発作（気まぐれ）だ。

顔面白いクリームまみれの少女二人に青年（見た目だけ）一人。どう見ても事案です本当にありがとうございました。

その光景を見ていた妖精三匹が何処かに飛んでいったが、どこからともなく出現したパイを顔面に受けて墜落した。

「……で、なんなのよ急に」

「や、なに。レミリアのヤツがクリスマスパーティーやるつつつて招待状を送ってきたんだよ」

「待て、お前ら顔にクリームつけたまま普通に会話しだすんじゃないぜ」

パイを魔理沙にシュウウウ!!

「二度目は無いぜこの野郎!」

魔理沙はダイナミックにエビ反りを決めて回避しようとするが、そんなことお構いなしに服にパイを叩きつける。

エビ反りしながら、魔理沙の目がチベットスナギツネのように乾いていく。

「んで、吸血鬼のやるクリスマススパークティーなんぞ何をやるか分かったもんじやないからこうして色々試してんだよ」

「それでパイを投げる発想に至るアンタはマジモンの馬鹿よ」

「ハロウィンで魔理沙に菓子強請ったらカボチャパイを投げつけられたからその延長線上でな」

「げ、まだ根にもってやがったのかよ」

「アンタのせいだ魔理沙」

「トリック オン トリートとか言われたらそうするしかなかったんだぜ……」

「意味が分からないわ」

### 閑話休題

「そんなわけで俺がサタンとやらの代わりにプレゼントと言う名の絶望を送りつけてやるうとな」

「サタンじゃなくてサンタだぜ……いや、なんか一周回って合ってる気がしてきた」

「クリスマスってそんな行事だったかしら」

「どんな行事なんて関係ない。ただ俺がやりたいようにやるだけだ」

「それクリスマスにかこつけて暴れたいだけだろ」

「よく分かったな。正解者に景品をやるろう」

亜空間から招来されたパイが魔理沙の頭部に降り注ぐ。パイのあまりの多さに、魔理沙は押しつぶされた。

「ぐええ……」

「こんな大量にどうしたのよ……」

「作った」

間。

「作ったあああ!!?」

身体中に付着したクリームが消し飛ぶ程度に驚く二人はその勢いのままに花の王に掴みかかる。

直前、遙か空高く舞う二人。花の王は幻想郷最強格の人間二人を同時に、一切触れることなく投げ飛ばしたのだ。

気がついたら空高く舞い上がっており、訳もわからない状態の中、重力に惹かれるがままに落ちた先には巨大なパイがスタンバっていた。

少女湯浴み中…

「で、だ……。花の王、お前いつの間に料理ができるようになったんだ？」

全身白いぬるぬるべたべたまみれになった二人は神社の風呂で汚れを落とし、なんとか信じがたい事実を受け入れようとしている。

「料理ができるようになったというか、過程をすり替えた」

「は？」

料理ができるようになったのではなく、過程をすり替えたと言う言葉の真意を聞こうとした瞬間、霊夢の足元から花が一輪咲いた。

「……何よこれ」

「パイの花」

「……は？」

「ば、パイの花？」

その花の見た目は、一見すると至って普通の花のようにも見えるが……

「こいつが成長すると肉厚のパイになる」

「前から意味が分からないと思ってたけど何時にも増して意味が分からないわ」

「マジで何でもありか」

「その肉厚のパイが枯れると『パイの実』になる」

「『パイの実』になるのか……」

「二個セットになる」

「しかも二個セットになるのね……」

閑話休題

「なんにせよクリスマスパーティーにパイ投げは意味不明すぎるわ」

「ダメか」

「ダメだろ」

ならば何なら良いのか、少し思案する花の王。

「いや、普通にプレゼント配れよ」

「普通にプレゼント配ることの何が面白いんだよ」

「プレゼント配りに面白さを求めるんじゃないわよ」

「じゃあ面白い事と面白くない事ならどっちやりたい？」

「面白い事だぜ」

「面倒じゃない方ね」

「じゃあ面白くて面倒くさくない事は普通の事なのか？」

「うーん」

「人生何でも楽しんでみるもんさ」

「アンタが言うと言説力が違うわね」

そういう事で面白いプレゼント配りを考える事になった。  
そうして、夜。ところ変わって紅魔館。

「メリークリスマスマス！」

「「メリークリスマスマス!!」」

レミリアの掛け声に合わせてかちちゃん、と杯を鳴らす音が聞こえる。

「なんでまた唐突にクリスマスパーティーなんて始めたんだ？」

「よく分かんないけど、変な外来人がレミィに吹き込んだらしいわよ」

「まあ私は呑めれば何でもいいけど」

不死鳥、動かない魔女、鬼の四天王という異色のトリオが顔を突き合わせて呑んでい  
る。

「……」ムツスウウウ

「……」ニコニコニコ

「……お前等、私の近くでにらみ合いをするな。酒が不味くなる」

閻魔、花妖怪、スキマ妖怪の式の三名が一つのテーブルについてちびりちびりと呑んで  
いる。この三名は『花の王ガチ勢』の異名を持っているが今はどうでも良いな。

「それで霊夢はちゃん和生活出来ているのか?」

「馬鹿にしないでよ慧音、私を何だと思ってるの?」

「隙さえあればだらける妹的な存在かな」

「私く知ってるわく♪霊夢くは炊事掃除洗濯全部く幽香任せだつて事く♪」

「ちよつとアンタ黙つてなさい」

「ほう……霊夢?」

「な、なによ……言つておくけど私がやろうとしたら既に終わつてたつてだけよ?」

半妖怪、巫女、夜雀の三名は呑むより食べる方に若干力を入れながら会話をしている。

この三名は『花の王の娘ガチ幻想郷勢』とも呼ばれているが若干語呂悪いな。

「それでクリスマスって何なの?」

「偉そうな人が生まれた事を祝う日らしいよ?」

「え?誕生日って事?」

「誕生日じゃなくて誕生した事を祝う日」

「? ? ?」

「まあ何かにこじ付けて騒ぐ日よ」

「なるほど!」

悪魔の妹、地底の薔薇(ハイビスカス)、騒霊三姉妹の五名はわつちやわつちやと楽器



を鳴らしながら談話する。この五名は『花の王の妹ガチ勢』と呼ばれていたと思っ  
ている。

他にも様々な妖、霊、神等が紅魔館の（無駄に拡張された）イベントホールに集つて  
いる。

しかし、その中に花の王の姿は見えなかった。

「……で？ 肝心のアイツは何処に居るのよ咲夜」

「博麗神社に居た事は確かなのですが……」

「あはは……また訳のわからない企み事ですかね。訳の……わからない……」

「美鈴、そのぬとねの区別がつかなさそうな顔止めなさい」

「咲夜さん……私こう見えても30年近く花壇造り頑張ったんですよ……それを……花  
の王は一瞬で……一瞬で……」

「一瞬で美鈴の30年を上回る花壇に造りかえられたものね」

「あの手際は見事だったわ」

「もう私の美意識が信じられない」

「そう言うな。お前さんの花壇も大したもんだぜ？ 俺に比べるまでも無いがな！」

「……ハっ!? 花の王、貴様いつの間……」

「俺は常に何処にも居て何処にも居ない。つまりそういう事だ」

レミリアの真後ろに気配無く立っていた花の王は、普段身に纏っている衣服とは遙かに違う真つ黒な服に身を包み、大きな白い袋を担いでいた。

「Merry Christmas!」

「まって今とんでもねえ副音声<sup>か</sup>が聞こえたのだけれども」

「<sup>貴様は悪い子のようだな</sup>HOHOHO!」

「ちよ、ちよつと待つて!?待ちなさい花の王!その大きな袋を振りかぶるのを止めなさい!」

「Wish you a Merry Christmas!」

「待つ、待つ、ちよ!」

花の王が白い袋を振り抜いた。瞬間、レミリアはその場から消失した。

「……えーと、主催者が消えちまったんだけど」

「レミリアさんは何処に行ったんでしようねえ……」

「……ヤバイよ神奈子、早苗。あの黒サンタ明らかにこっち見てる!」

刹那、守谷の三柱の後ろに回り込んだ花の王。

「Merry Christmas!」

「ひい」

「は、花の王安タ、いきなり何する気だい!」

「貴様等も悪い子のようだな  
H O H O H O !」

「ちよつと!私達が何をしたつて言うの!」

「神奈子は今年一年ずつと神社で偉そうにふんぞり返つてただけでした!」

「なつ!誼訪子だつて日がな一日ゲームばつかやつてるじゃない!」

「お、お二人ともちよつとは落ち着いてください」

「W i s h y o u a M e r r y C h r i s t m a s !」

「待て花の王おちつ」

花の王が白い袋を二回振り抜く。守谷神社の天を司る神と地を司る神が消えた。僅かにも満たない、瞬間の出来事だった。

「あ、あわわ……」

「H O H O H O !」

「へあ!た、楽しんでます……よ?」

「それは良かった。良い子にはプレゼントをやるう」

そう言つて、いつの間にか膨らんでいた白い袋の中から丁寧なラッピングされた箱を取り出す。当然のように生花で彩られていた。

「ありがとうございます……?」

「じゃあ俺は次の所に行くから。M e r r y C h r i s t m a s !」

「あ、はい」

「Merry Christmas!」

「うひゃあビックリしたあ!」

「……」

花の王から貰ったプレゼントに困惑する早苗。その大きさは自身の掌に乗る程度のサイズで、重量も大したことはなく、むしろ箱と生花の重さを除いたら中に何も入っていないのではないかと感じるほどに軽かった。

早苗は、つい好奇心に負けてその場でプレゼントを開けてしまった。理性は、そのプレゼントが危険物なのではないかと警告していたのにも関わらず……。

「これは……ブレスレット……?」

プレゼントの中身は草木で編まれたブレスレットだった。持ってみれば、まるでそれが自分の一部であったかのような馴染み具合で更に困惑する。

デザインは緻密で繊細、されど嫌味さの無い上品な作りであり、着用者を選ばない気品のある存在感を放っている。

「綺麗……」

こと美しさにおいて花の王の右に出るものはない、そういった事は知ってはいたが、

このような手芸品にまで及ぶとは思ひもしなかった。

早苗はそのまま、ブレスレットを自分の左腕に装着した。

「……………」

触れた感覚からして早々壊れるものでは無いだろうが、花の王がヤワな作りのモノを作る筈もないが。

「大事にしよう……………」

心の底から、そう思った早苗であった。

視界の端で次から次へと消えていく人妖神の存在はこの際見なかった事にした。

## 十六夜月が沈むころに

人間の命は、とても短い。長くても100年とちよつと。

そのくせ、短い時間で灼けつく様に私に傷を残していく。

決して消えない。決して癒えない傷を残していく。その傷が愛おしく、またとても憎らしい。

ある巫女は言った。博麗の巫女が幻想郷で大罪犯すのもマズいでしょ。

ある魔女は言った。私は死ぬまで霧雨魔理沙だぜ。

ある風祝は言った。後は子供達がうまくやってくれますから。

ちがう、そうじゃないでしょう。なんで、貴方達は どうして、なんで。

「……で？随分ひでえ顔していつまで人ん家でつつ立つてるつもりだ600歳児」  
「だれが600歳児よ」

ああ、また、まただ。気が付けば花の王の前に来てしまった。

私にはコイツに用は無はずなのに。

「クソ情けない姿をテメエの従者に見せたくないから家にも帰らずほつつき歩いてるんですかねえ？」

「……黙れ」

「『咲夜、お前はお前が望むように生きればいいのよ』ってか？それとも『お前の生き様を奪った私に出来る精一杯の償いだ』ってか？馬鹿かよ。テメエがやりたい様にやればいいんだなもんはよ」

「黙れ」

「人間と永久の別れを演出する私カワイソーってか？ずっと癒えない傷を抱えて生きていく私カワイソーってか？アホくさ。花生えるわ」

「黙れッッ!!」

花の王に掴みかかる。鋭く尖った爪が花の王の肉に食い込んでいく。

「貴様に何が解るッ!!霊夢や魔理沙が死んだときは違うんだよッッ!!」

ギリ、ギリ、と歯を食いしばる。奥歯が砕けた様な感覚だ。

「違うのよ……咲夜は……」

咲夜とは長い、長い付き合いなのだ。永くを生きる吸血鬼の、その半分にも満たないような僅かな時間でも。それでも濃密な時間だったのだ。

「咲夜は……私の娘なのよ……お腹を痛めて産んだ訳じゃないけど、大事な娘なのよ……」

今でも覚えている。運命に導かれて出会った、まだ生まれて間もない赤ん坊だった咲夜を。

今でも覚えている。初めて咲夜が立った時の感動を。

今でも覚えている。咲夜が初めて淹れた紅茶の拙さを。

今でも、覚えている。

「あの咲夜が……死んじゃうのよ……？冷静でいられるわけないじゃない……」

「知るか。死なせたくなければなら幾らでも方法はあろうが。それこそ俺に縋らずとも、テメエんとこの魔女が出張れば何通りも出来るだろう」

「咲夜はそんな事を望まないっ!!」

「それこそ知るか。自分は死にたい。だが自分の主はテメエに死んで欲しくない。なら従者だっつーなら自分の意志殺してでも生き続ければいいだろうが。それを押し付けろよ主人なら」

「貴様の所の無能従者と一緒にするなッ!!」

咲夜は違う。咲夜は違うんだ。咲夜はただの従者じゃない。私の娘でもあるんだ。

「何故……何故貴様は分からない……私と同じ『運命を操る力』を持っているんでしょう



「……?」

「ふん、お生憎。運命を見る『目』はとづくに捨てた。そんなモノが無くても俺は望むままに生きていく。俺は俺の定めたルールでしか縛れない。例えそれが運命だなんて曖昧で確定的なモノでもな」

今度こそ、奥歯が砕けた。

「誰もが貴様のように強く生きられない!!」

顕現するは勝利をもたらず槍。

「誰もが下らない『運命』に縛られて生きるしかない!!」

顕現するは厄災の枝。

「私が出来る事は、揺蕩う『流れ』を見て、引き寄せることしか出来ない……のに!!」

顕現するは、混沌そのもの魔。

「貴様は、貴様はアツ!!」

「そうやって永琳にも当たったのか?まるで子供の癩癩だな」

ふっ……と。指を向けられただけで。

あらゆる不吉を孕んだ混沌そのもの魔が消し飛んだ。

「なぜ……その事を……」

「『剥零神』なめんな。少なくともこの幻想郷ハコニワで起きた事なら何でも知ってるわボケ」

よつこら、とここでようやく博麗神社の縁側から立ち上がり私を見下した。

「『咲夜を人間のまま生き永らえさせなさい』ねえ。仮に出来たとしてもソレは本当に

『人間』かあ？」

「黙れッ!!」

「黙るかよ根性無しのチビナスアンポンタンクソザコ生活力皆無ヴァンパイア」

「なんでそこまで言った!?!なんでそこまで言った!?!」

罵倒一つにこの返し、正に花の王クオリティ。だが今はシリアスシーンなのだから少し自重しろ。

「テメエが勝手にシリアスぶってるだけだろうが。俺を巻き込むな迷惑だ」

「ちよつとは言葉を選びなさい馬鹿野郎!」

「テメエこそ言葉は選べよ? テメエが何しに此処に訪れたかをよく思い出せ。テメエが何を求めに来たのかをよく思い出せこの徘徊ロリ」

「最後の罵倒要らなくない!?!」

フルツシャアアア!!と殺気立った猫の如く威嚇する。だが何処吹く風、花の王は何の気にもとめずにそのまま空へと飛んで行く。

「ちよ、待ちなさい! 何処に行くのよ!」

「咲夜のとき」

そう言いながらゆっくりと紅魔館方面に移動していく。その姿になにか、言いようのない恐ろしいナニカを幻視した。

「な、なんで急に……」

「咲夜は死ぬぞ」

俺が咲夜のところに着いた、その瞬間に。

そう花の王は言った。

自身の血が凍ったかと思った。

刹那、思考が高速に回り出す。

結論に至る前に既に花の王に攻撃していた。

「あぶねえな」

鋭く尖った爪が花の王の喉に突き刺さる直前、ガラスのように透明な何かが爪を阻む。

瞬時に生成した槍で花の王の腕を突き刺す。しかしそれは虚偽フェイク、本命は足で振るう厄災レイウツァイの枝。果たしてその奇策は功を奏したのか、花の王の左袖を斬り落とすのに成功した。

その事に、純粹に驚いた表情を浮かべる花の王。

「いや、はや。まさかレミアなんぞに傷を付けられるとは思ひもしなかった」

「血の一滴も流さずによく言うわ」

「褒めてやつてるといふのに、素直じゃねえ奴だな」

「その言い方で喜べる奴なんて幻想郷どこ探しても居やしないわよ」

厄災<sup>レイヴァー</sup>の枝を蹴り投げる。花の王が腕を振るって撃ち落とした。その刹那の隙に運命を捻じ込んで切り拓く。今度は右袖が落ちた。

「男のストリップとか誰が得するんだ」

「そこそこ需要はあるんじゃない？ 私には無いけど」

ぱつと思いつくだけで両手指が簡単に埋まるほどと考えたが、どうでもよい事だった。それよりも重要な事がある。

「……老いたわね、花の王」

「ン億歳相手に今更じゃね？ 何言ってるんだお前」

先程の攻防もそう。嘗て煎餅片手に勝利<sup>グ</sup>をもたらす槍<sup>ニ</sup>を完全に防いだ彼はもう居ない。腕を振るう程の動作をしなければならぬ程に遅く、弱くなっている。

……だがそれは、私が花の王に勝てる事を意味していない。

「大海からコップ一杯程度の海水を掬ったところで海は海。間違ひなくコップ一杯程度減ったはずだが、海を干上がらせるにはまだ足りない。なあ？」

「ヒトの心を読むんじゃないわよ、鬱陶しい」

花の王にはまだ勝てない。だが、だからと言って何もせずただこの状況を指を咥えて眺めていられるほど、私は賢くはなかった。

「俺が咲夜のところに着いたら咲夜は死ぬ。これは避けようのない事実であり、必然めいた偶然。これを運命と呼ばない事はご存知の通りだ。つまり……」

『運命を操る程度の私』の殻を破ってみせろと言うのね」

「成長は人間だけの特権じゃない。可能性は妖怪も神にも平等だ。ただ自分で勝手に薄めていくだけにすぎない。今、ここで超えてみせろ。因果を捻じまげてみせろ。輪廻応報をぶち壊してみせろ」

運命を操る。

それは、予め定められた大きな流れの中から数ある選択肢を選ぶ行為。

『運命を操る程度の能力』は、その流れの先を見通すことが出来る程度でしかない。その程度でしかなかった。

予め用意された選択肢の先を見る事が出来る事で満足していた。

だが、もうそれではいけない。選択肢の先を捻じ曲げなければいけない。新たな選択肢を作らなければいけない。

「俺が紅魔館の咲夜の私室に着いた時、咲夜は死ぬ。早ければ今日の夜明けにもな」

「させないわ。貴方に咲夜の所へはたどり着かせない」

「出来るか？お前に。仮に一度俺を撃退したところで、再度俺は進行するだけだ。何度も俺を撃退したところで、何度も俺は進行するだけだ。俺を永遠に撃退し続けると？」

「何度も撃退する必要は無いわ。ただ一度、貴方を殺せばそれで良いのだから」

その時、花の王の口が裂けるかのように歪んだ。

「やってみろ幼き吸血鬼。それもまた選択肢の内の一つしかないという事を身をもって知るがいい！」

「下らない運命に縛られるのはもう沢山よ。私は今、ここで『強く』なる」

自身の内側にあつた、下らない運命を『破壊』する。そして……

「……妖怪つてのは歪なモンだ。退屈なんてモノに悩まされる癖に、頭の凝り固まったジジババ共よりも変化を恐れる。それも長く生きれば顕著になる。知ってたか？八雲紫はここ1000年妖怪としての成長はほとんど無いことによ」

「どうでもいいわ、あんなヤツの事は」

先程までと違って、見える景色が少しばかり変わった。景色が変わったというより、目線が高くなったと言うべきだろうか。

「そんな事言ってくれるな。ぶっちゃけると今のお前、八雲紫より強いぞ」

「あらそう、なら今度また異変でも起こしてみようかしら。解決に向かう者の居ない異変を」

「そりゃ相手の居ないボードゲームと何が違うんだ？」

「それもそうね」

今まで見下していた花の王の目線が上がる。私の視線と混じり合う。

「それで？『妖怪』という括りから逸脱した気分は如何かなミストレス」

「少なくとも、貴方に見下される事が無くなって良い気分なのは確かだね」

『吸血鬼』に拘ることは捨てた。此処に居るのは一体の種族モンスターの無き怪物。

何者にも属されず単一にして、紅魔の女王クイーン、『レミアア・スカーレット』がここに君臨した。

「ええとても、とても良い気分だわ」

過程を破壊する。

「それは良かった。俺も、漸く足元程度に届く存在が現れて意外と良い気分だぜ」

花の王の左腕が鮮血に染まった。

「あら、貴方にも紅い血が流れているなんてね」

「俺の中にヘモグロビンがあるのは不思議か？」

「ええ。てつきりクロロフィルでも詰まってるんじゃないかと思ってたわ」

「人をピツコロみたいに思いやがってお前」

花の王が軽く左腕を振るえば、まるでなにも起きなかつたかのように左腕の裂傷と血液の痕跡が消えた。

「再生力はどっこいじゃないの」

「黙つとれ。回復技なんて使うのは初めてだ」

「あら、貴方の『初めて』を貰えたようで何よりだわ。ついでに貴方の命も頂戴？」  
過程を破壊する。

「二度同じ手を喰らう趣味はねえんで」

結果を破壊された。

「一筋縄ではいかないわね、知ってたけど」

「俺以外なら今ので決着だったなあ。俺以外なら」

「なら貴方に通用する手を創るだけよ」

クイーン・オブ・レッド

紅い空が堕ちてくる。

「通用する手を創る前に俺が咲夜のところにたどり着かなきゃいいがな」  
命生『グリーングラスバトルフィールド』

大地が隆盛する。



どちらも比喩だ。比喩だが、片や空を埋め尽くすほどの紅き剛槍。片や大地を埋め尽くすほどの碧き閃光。力無き者がその場に居れば、世界の終焉を幻視するだろう。

弾幕が弾幕を撃ち落とす。僅か逸れた弾幕が世界を破壊する。

大地に刺さった剛槍を中心に周囲が焼失する。

天に届いた閃光が無を墮とす。

片や世界の理を捻じ曲げ、我が儘を世に押し付ける為に。

片や自身の理を貫き通し、気まぐれに楽しむために。

月はいずれ沈むだろう。だが、夜はまだ始まったばかりだった。

弓張月、片翼がもがれる。新しく生えた翼は疎ましく美しく輝く七色の翼だった。

居待月、腹部に風穴が開く。美味しいモノを食べられなくなったらどうしてくれるのか。

臥待月、ヤツの小指を斬り落とす。代償に右半身が闇に埋もれ塵となった。

待宵の月、目を灼いた。

既朔、左足の封印に成功した。

時間も、空間も、何もかもがちぐはぐで非統一的な流れは終焉を迎える。

望月、光が堕ちる——

\* \* \* \* \*

長く、永く。だが短く。戦いは終わりを告げた。

花の王は何も言わず、何処かに去っていく。去っていく姿をただ見ている事しか出来なかった。

十六夜月は沈み、太陽がまた顔をだす。世界の理から外れようと、大事なものは手から零れていってしまった。

「パチエ、私はどうするべきだったのかしらね。咲夜を無理矢理にでも不老不死にさせるべきだったのかしら」

「……」

「……お嬢様。わ、私が……力及ばないばかりに……」

「美鈴、貴女はよくやってくれたわ。貴方のお陰でアイツの余裕の表情を崩せたんだもの」

「……レミイ」

「ふふつ。主人がこうしてポロポロになっているというのに呑気に寝てるようで、ちよつと可笑しいわね」

「……お嬢様」

「レミイ」

「大丈夫……大丈夫だから……私は大丈夫よ。そう願われたもの……意地でも泣いてなんかあげないわ」

完全に伏せる前に、貴女が言った願い。私は貴方の主人だから、可愛い従者の願ひなんて叶えるに決まつてるじゃない。

だからそう、また……またいつか私に紅茶を淹れなさい。どれだけ時間を掛けてもいいから、私の為に紅茶とクツキーを用意しなさい。

命令よ。

かしこまりました、  
お嬢様。

## 花の王に学ぶモテ男の作り方

『人と人が石器で殺し合っていたような時代を見てきた身としては、魔力も使わずにこんなゴテゴテしたモンだけでよくもまあ遠くに声が届くモンだと感心するわけだが』  
『花の王！もう放送始まってるとば！』

『おっといけねえ。ってなわけで始まったラジオ番組《花の王に学ぶモテ男の作り方》の進行役こと皆さん御存知、花の王だ。よろ』

『同じく進行役のルーミアなのかー。よろ』

『二人とももうちよつとさあ……』

『それとカンペ役のクソ河童こと人間のケツ追っかけまわすのが大好きウーマンの三人でお送りするぜ』『言い方ア！』

『河童、初の担当番組だからってはしやぎスギなのかー』

『裏方がしやしやり出てくるのが許されるのは巨漢のオカマが出る番組だけだぞ』

『この野郎……言わせておけば……！』

『はいはい、後にするのかー。新番組始まって早々番組を潰す気なのかー？』

『ぶっちゃけ言って広告収入も何も無いラジオ番組なんて放送する意味あんの?』

『あるわ馬鹿! 何のために私ら河童が態々人里全部の家にラジオ機器を設置したと思っ  
てんだ!』

『それなんだがな、河童。この前結構な数のラジオが博麗神社に持ち込まれて「河童が急に  
訳の分からん機械を置いてった。不気味だから何とかしてくれ」って頼まれてな』  
『はあ!!?』

『んで、霊雅……あ、今代の博麗の巫女な? そいつが「無くても困らないんらぶつ壊し  
ときましょ」ってな感じで夢想封印したわ』『何してんのアイツ!!?』

『残念ながら当たり前の対応なのか。何の説明もなくいきなり自分の家によくわから  
ない物置かれたらそりゃ捨てるのかー』

『と言うか花の王お前その場面見てたなら止めろよな!?! お前外の世界とか行ったり来た  
りしてんならラジオくらい見た事あるでしょ!?!』

『なんで?』

『なんでって……少なくとも人里にラジオ設置する前から花の王にラジオパーソナリ  
ティの話持ち込んでたでしょ!?!』

『だからなんだよ。ソレとコレは全く違う話だろ。そもそもお前等河童共が事前の説明  
もなくいきなり人里家にラジオ機器設置するのが悪い上お前ら河童製の機械なんて家

に置いておくもんじゃねえだろ。いつ爆発するか分かったもんじゃねえし』  
『ふぐう』

『むしろ夢想封印された残骸から組み立て直せる分だけ直した上、電波感度や音質とかその他諸々向上させて幻想郷各地でも使えるようにチューンアップした物を上は天界から下は地底まで届けて、問題の人里にもキチンと機械の説明をしてから設置してやつたんだからお前等河童は俺に泣いて土下座するべきでは？』

『うわ、珍しく花の王がガチ有能な働きなのか』

『ぐ、ぐひゅう……』

『ま、そんな訳でこの番組は人里に住むモテない男子から妖怪の山の陰気天狗、地底に住むダメ鬼、天界の無能天人、果ては魔界のヒ魔人共に向けたバラエティ番組だ。よろしくな』

『よろしくなのか』

『さて、前置きが長くなつたな。いい加減番組を進行しよう、つー訳で……おい河童、いい加減落ち込んでねえでカンペ出せ』

『ぐう……』

『ガチ凹みなのか』

『どれどれ……記念すべき最初のコーナーは、《花の王に学ぶオシャレ男子の作り方》い

えー』

『どんどんばふばふー』

『もつと真面目にやって……』

『カンペに書いてある事そのまま読んだだけなんだが』

『河童ってそういうところセンスないのかー』『ぐっ……』

『そもそもオシヤレ男子の作り方って言われてもな……』

『これには流石の花の王も苦笑いなのかー』

『俺に流行りのファツション誌の内容読み上げさせるつもりか?』

『い、いやー、そこはさ、ほら……ダンナの幻想郷一モテる男としてのテクニク? 的な

モンをさ……』

『おつそろしい程に揉み手が似合うな河童。ぶっちゃけて言うところの幻想郷でモテた

きゃ強くなれ。以上、閉廷』

『番組が終わったのかー』

『ちよ、花の王おおお!! 勝手に終わらせないで!! つかそんなミもフタも無い言い方し

ないでくれよお!』

『じゃあ聞くがお前等妖怪が仮に番うとして、自分より弱い男に靡くか?』

『うーん……ハッキリ言ってムリなのかー』



『んー……やっぱドラマチックな出会いとかじゃないと……』

『そこそこ長く生きてスレている幻想郷の妖怪共が求めるドラマチックって何だよ。そういう事だ』

『前提からして番組が成り立たなかったのだー』

『ちよ、ちよーつとまったあ！あくまでも、あくまでもこの番組は人間用だから！人間向けのアドヴァイスとか無いかなあ!?!』

『そここそ好みなんて十人十色だろ。俺に何を言わせたいんだよ』

『そりやそうだけれども！でも私や知ってるんだぞ！花の王安タが人里歩きたび人間の女衆はキヤーキヤキ騒いでる事を！そのモテテクをご教授しやがれください!!』

『なんでお前が必死なのかー?』

『はぁーん?ンなもん俺が美を極めた男だからだろう』

『花の王も花の王でまるでオカマみたいな言葉なのかー』

『俺は男の中の男だ。そうじゃねえ、話は極めて単純だ』

『その単純を教えろってんだよ馬鹿野郎!』

『あ?』

ヒュポッ

『妖怪が殴られたとは思えない音なのかー……』

『話を戻すぞ。要点は単純明快、《自分が有象無象にならない事》だ』

『うぞーむぞー』

『おう。例えるとだな……ルーミア、お前が一番印象に残っている博麗の巫女って誰だ？』

『えー？そりやー霊夢でしょー？今何歳だっけかー？』

『あの身体だともう200……また話がずれたな。じゃあ次の質問だが、霊夢の次の代の博麗の巫女は好きか？』

『ええ〜？そんな前の事覚えてないのかー』

『そういう事だ』

『……???どういふことなのかー？』

『好きの反対は無関心とは良く言ったもんだわな。そもそも印象も何も残らない、そんなヤツが好かれるなんて無理なんだよ。まあ、アイツの場合は幽香が気張った所為もあるんだが、結果だけ見りゃ同じ事。霊夢の事はしっかり覚えててもその次の博麗の巫女はハツキリ思い出せない。思い出せもしない奴を好きか嫌いか聞かれても困るって訳だな』

『つまり印象に残せるほどにド派手な格好すればモテモテなのかー？』

『そこまで単純じゃねえよ。お前仮に服が常にピカピカ光って髪がトウモロコシの様に

逆立つてる人間が居たらどう思うよ』

『そこが人里の外なら良い人間だなーって思うのかー』

『人食い妖怪に聞いた俺が馬鹿だったわ。じゃありグルがそんな恰好していたらどう思うよ』

『距離置くね』

『即答とはたまげたなあ。まあそういう訳だな、いくら印象に残ろうともそんな明らかにヤバイ見た目の奴には近づきたくもない。ならどうすればいいと思う？』

『えー？印象に残るけど良い見た目にする？』

『そうだな。総括すると《有象無象に埋もれないように目立つ格好、かつ悪い印象を持たれない恰好》である事がモテる事の大前提な訳よ』

『なるほどねー。私も昔だったらともかく、最近の小汚い恰好の人間は食べないなー』

『そもそもお前人間食べなくても生きていけるだろ』

『そりゃーねー。でもたまに食べたくなるのだー』

『人間食べる食べないは置いといて話進めて……』

『うお、河童お前まだ生きてたのかー？』

『あー……まあ、よーするに汎個性な見た目は避けて身綺麗にまとめる事がオシヤレの第一歩って事だ。そういう意味じゃこの幻想郷はオシヤレな奴が多いよな』

『そーなのカー?』

『人里はそうでもないが、それ以外はオシヤレ気にしてる奴が多い印象だ』

『それ単純に人間以外がオシヤレ気にしてるだけじゃないのカー?』

『ところがどっこい、霊夢や魔理沙、早苗に咲夜は全員生前からオシヤレを気にしてたぞ。ただ人里つて環境がオシヤレに鈍感かと思いきやワーハクタクは態々ツノにオシヤレリボン付けてるし』

『そーいやツノにリボン付けてる鬼もいたな』

『人と違う事をする、それもオシヤレと言えばそうなんだが、それで見える人を不快にさせてりや逆効果だ。……あー、身綺麗な纏め方は外来のファツション誌や里の理容室を利用した方が手っ取り早い。ファツション誌なんぞ、と思ってる奴はよっぽどのハイセンスか自己評価も碌に出来ない奴のどっちかだ。さらに、髪はボサついてるだけでマイナス印象になる。うまく纏める自信が無い奴はバツサリ切るか良い感じに纏めるプロに頼め』

『ハイセンスな奴は非モテじゃないと思うのカー』

『つまりモテたいと思うならさっさとファツション誌買いに行け。……ん? 何処に売ってるか? 貸本屋か香霖堂だろ』

『ついでにモテない妖怪共に朗報だー。中有の道に腕のいい髪結師が店を構えてる

ぞー。私もそこで時々髪を切ってるのだー』

『気が向いたら俺もカットぐらいいは出来る。博麗神社に来る度胸があつて、運が良けりや髪ぐらい切つてやるよ。無論賽銭は寄越せよ』

『運が悪かつたら?』

『靈雅に夢想封印されるだけだろ』

『おう』

『……さて、一応このコーナーはこんなもんでいいか?』

『まー今日は初回だしねー。あくまでも基礎編つてことなのか』

『……ん、えー、花の王に聞きたいアレやコレ、募集してます。お便りは《河童出張所：人里支部》もしくは《玄武の沢の妖怪ポスト》へどうぞ……なんぞこれ』

『やー、ラジオといったらやつぱコレでしょ、ハガキ職人』

『そーなのか?』

『多分違うと思うんだが。俺に何を聞くつてんだ?』

『それなー。大抵の事は聞けば普通に答えてくれるぞー?』

『明日の天気から星のでき方まで何でも答えてしんぜよう』

『えー? コーナーとして成り立たなくなるじゃんか』

『それこそ知るかよ。お前のカンペ次第だったじゃねえか』

『あ、じゃあ折角だし聞きたいんだけど花の王ってぶっちゃけ経験人数何人?』

『河童お前それ幻想郷全土に放送されてる質問って自覚してんのか!?!』

『やー、深夜枠ってやっぱこういうのブツ込んだかないとき?で、ほら。どうなのよソッチの方はさ』

『経験人数って言われてもなあ。それ頭に花咲かせたのってカウントする?』

『カウントする訳ねえだろ!?!アレとアレがドッキングした回数答えるよお!』

『何この河童怖いのかー』

『アレとアレって、要するに交尾と言うかセックスの事だろ?』

『……な、なんか花の王の口からセックスとか聞くと生々しいなあ。そうだよ』

『生殖行為と言う意味なら数え切れない程だがセックスなら経験人数は一人だな』

『……』

『……あー。どういうことなのか?』

『まー、俺は全にして一、基本的に生殖行為自体不必要なモンなわけよ。これは《一人一種族》と呼ばれる妖怪共の括りと同じだ。繁殖する必要が無いから性機能が一部オミットされてる訳だわな。具体的に言えば性欲が無い。だが俺には何人もの子供が居るだろ?』

『あー、いるねー』

『大体はいわゆる養子関係な訳だが、残りはいわゆる実子なんだよ。実際に《血を分けた》訳じゃないがな。妖精達は実子の方が多いな』

『……ん？ちよつと待って、意味が解らなくなってきた。え、花の王って増えるの!?!』  
『なんでそうなる……や、増えるけども。そうじゃねえよ、俺は花を創るだろ？その際に大地に種を植えればいわゆる普通の花になる』

『大半が《普通》じゃないのかー』

『話の腰を折るな。なら大地に植えず他の所に植えたらどうなる？そう、例えば人間の女だったら』

『……え、エグイ』

『花の王、ちよつとヒクのかー……』

『豊かな想像してるところ悪いが違うからな？正解は《母体の生命力を受けた妖精が生まれる》だ。プレデターのな生まれ方はしないから安心しろ』

『でも胎に種を捻じ込むんでしょ？』

『違う。種をお守りの様に身に着けてるだけだ。つーかルーミアお前心当たりあるだろ』

『……あー、アレかあ』

『え、なになに？まさかルーミアあんだその見た目で経産婦!?!』

『《その見た目》は余計なのかー』

『（経産婦は否定しないんか）』

『ともかく、俺が意図するしないに関わらず種を身に着けたり、或いは食べたりの奴から生まれたのも元はと言えば俺な訳だから俺とその母体の子と言う訳。つまり生殖行為は数え切れない程って訳だ。わかったか？』

『ん〜……まあ、なんとなく？』

『花の王が不思議生命体してんのはいまにはじまったことじゃないしねー。で？私としては花の王とセックスした一人が誰か気になる訳なのかー』

『それはもう察しついでるだろお前』

『花の王の口からききたいのかー』

『はあ、なら黙秘権を行使しようか』

『なあ!?!ずるいぞー!』

『別にラジオだからって全部赤裸々に話す必要もないだろ。そもそも話した所で今の幻想郷勢は大体が《誰?》ってなるだろうが』

『ぬう、それもそうなのかー。まあ、花の王の王が使える事が知れただけよしとするかー』

『や、だから俺は性欲がオミットされてるんだって言ってるだろうに』



『でも使えるのかー』

『必要だったから使っただけだ。それ以外に排尿以外の用途なんてねえよ』

『必要になる場面って何だよ……』

『永く生きてればそういう場面もある』

『ええー……』

『つと、もういい時間なのかー』

『おい、なんかシモイ話しかしてない気がするんだが』

『別に構わないのかー。ていうか、この番組が続こうが終わろうかどーでも良いのかー』

『ちよ!?!』

『ま、それもそうだな』『おい!?!』

『てなわけで、ここまで聞いてくれたリスナーの皆さん、ありがとーなのかー』

『こつちの手元の機械で視聴率見る事が出来るんだが……ああ、うん』

『えっ!?!何その機能私知らないんだけど!?!ちよつと見せて!?!』

『えー……やだ』『なんで!?!』

『最後までぐだぐだだったけど別にいいのかー。それでは皆さんさよーならー』

『待って!待って!!まだ終わらせないで!?!』

『えー?』

『いま丁度いいタイミングだったろ』

『コーナーらしいコーナー二つしかやってねえじゃん!?ここで!視聴者の皆様にご報告!花の王、及びルーミアにやってほしい事大募集!面白ければレギュラーコーナー化もあるかもよ!それ以外にも面白そうなコーナー案も募集しちゃうよ!』

『清々しいまでに他力本願。番組運営やめたら?』

『うるせえ!お便りは前も言ったけど《河童出張所・人里支部》もしくは《玄武の沢の妖怪ポスト》へどうぞ!盟友の面白いお便り、待ってるぜ!』

『もうお前がメインキャスト張れば?』

『やかましゃ!あんた等が自由すぎるほどに場を引つ掻き回すからだろ!』

『人の所為にするのは良くないのか』

『《河童がうっとおしいので降板して》って便りでもいいぞ。それなら博麗神社でも受け付けてやる』『ちよ、酷くない!』

『はいはい、てなわけで今度こそさよならなのか』

『良い子は夜更かしすんなよ』

『悪い子は里の外で待ってるのかー♪』

『完全に食う気である』

『あ、妖怪は来なくて大丈夫なのかー』

『いや、さっさと終われよ!』

『……河童、放送終了のスイッチはそっちにあるぞ』

『え? あ、やっべ』

「この放送は、幻想郷に産業革命を、守矢神社の提供でお送りいたしました。

「……いや、なにこの放送!?! また花の王か!」

「紫様、珍しく起きてると思えば急に騒ぎだして……ついにボケましたか?」

「ボケてないわよ!?!」